

東九州自動車道建設(志布志 I C ~鹿屋串良 J C T)に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

(7)

町田堀遺跡

第一分冊

まち だ ぼり い せき
町田堀遺跡

(鹿屋市串良町)

第1分冊

二〇一六年三月

公益財団法人鹿児島県文化振興財団
埋蔵文化財調査センター

2016年3月

鹿児島県教育委員会
公益財団法人鹿児島県文化振興財団
埋蔵文化財調査センター



鹿児島県



①調査区 2・3 ②調査区 1 ③町田堀遺跡遠景 (東から)



①



②

① 2号竖穴住居跡 ② 2号竖穴住居跡出土石刀



埋設土器集合



① 1号石斧集積遺構 ②石斧集合



60号地下式横穴墓



異形鐵器集合

序 文

近年増加しております東九州自動車道建設等国事業に係る埋蔵文化財発掘調査に円滑に対応するため、平成25年4月1日、公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センターが発足しました。

当センターの役割は、従来鹿児島県立埋蔵文化財調査センターが実施してきた埋蔵文化財調査のうち国事業に係るもの調査を引き継ぎ、また、新規の国事業に係る埋蔵文化財調査を実施することあります。このため、東九州自動車道建設関係の発掘調査は当センターが担当することとなりました。

町田堀遺跡は平成25年度に株式会社埋蔵文化財サポートシステムへ発掘調査支援業務・平成26年度には整理作業の支援業務を委託した。また、平成27年度には国際文化財株式会社へ整理作業及び報告書作成の支援業務を委託し、業務の更なる効率化を果たしております。

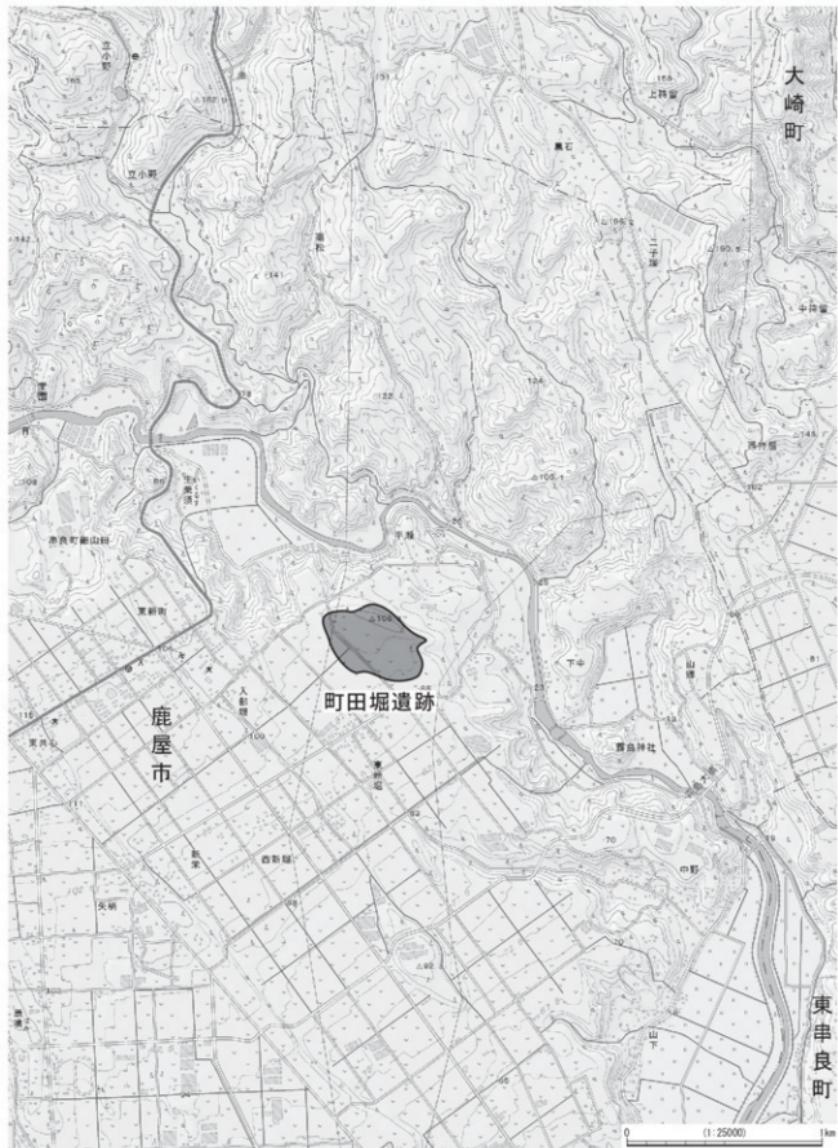
町田堀遺跡では、縄文時代後期から古代までの遺構や遺物が発見されております。縄文時代後期の調査では竪穴住居跡や埋設土器・ヒスイ製の垂飾や、石刀が見つかっており広範な交流が窺われます。古墳時代では、南九州特有の地下式横穴墓と呼ばれる墓が88基も発見され、それに伴う人骨や鉄器等多くの資料が得られています。これらの調査成果は本県をはじめ南九州の歴史を考える上で貴重なもので、本報告書が今後の研究に資する事を祈念しております。

最後になりましたが、本県の埋蔵文化財保護のために御協力いただきました国土交通省、鹿児島県教育庁文化財課、鹿児島県立埋蔵文化財センター、調査中に御指導いただいた先生方、株式会社埋蔵文化財サポートシステム、国際文化財株式会社、発掘作業員、整理作業員、その他関係者のみなさまに厚く御礼申し上げます。

平成28年3月

公益財団法人 鹿児島県文化振興財団
埋蔵文化財調査センター長 堂込秀人

報 告 書 抄 錄



町田堀遺跡位置図 (1 / 25,000)

例 言

- 1 本書は、東九州自動車道建設（志布志IC～鹿屋串良JCT間）に伴う町田堀遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 本遺跡は、鹿児島県鹿屋市串良町細山田に所在する。
- 3 発掘調査は、平成25年度、国土交通省九州地方整備局から鹿児島県教育委員会が受託し、公益財団法人鹿児島県文化振興財團埋蔵文化財調査センターが実施した。
- 4 整理・報告書作成事業は、平成26年度・平成27年度に公益財団法人鹿児島県文化振興財團埋蔵文化財調査センターが実施した。
- 5 掲載遺物の番号は通し番号であり、本文・挿図・表及び図版の遺物番号は一致する。
- 6 検出された竪穴住居跡は縄文時代3軒、弥生時代3軒であるが、発掘調査時の番号を1号→1号、2号→4号、3号→5号、4号→2号、5号→6号、6号→3号と変更して記載する。
- 7 地下式横穴墓は88基検出されたが、発掘調査時は、発見された順に番号を付したが、グループ分けしたため番号を付し直すこととし、旧番号は地下式横穴墓計測表に記すこととした。
- 8 挿図の縮尺は、挿図ごとに示した。土器は1/3を基本とするが、大型の埋設土器・二重口縁壺等は1/4とした。石器は小型の石鐵等は原寸、石斧等は1/3、大型の石皿等は1/4とする。
- 9 本書用いたレベル数値は海拔絶対高である。
- 10 遺物注記で用いた遺跡記号は「マチ」である。
- 11 本書で用いた方位は全て磁北である。
- 12 発掘作業における写真撮影は調査担当者が行った。また、空中写真撮影は株式会社ふじたに委託した。
- 13 平成25年度及び平成26年度の発掘調査・整理作業は、株式会社埋蔵文化財サポートシステムに支援業務を委託し、平成27年度の整理作業・報告書作成作業は国際文化財株式会社に支援業務を委託した。
- 14 遺構の実測図作成・遺物分布図作成及びデジタルトレースは、株式会社埋蔵文化財サポートシステムが行った。
- 15 出土遺物の実測・拓本・トレースは、株式会社埋蔵文化財サポートシステム及び国際文化財株式会社が行った。
- 16 出土遺物の写真撮影は埋蔵文化財調査センターの写真班が行った。
- 17 金属製品（鉄器）の大半は保存処理、実測・トレースを公益財団法人元興寺文化財研究所に委託し、一部は株式会社埋蔵文化財サポートシステムが行った。
- 18 本報告書に係る自然科学分析は、鉄器に係る樹種同

定、塗膜分析、微少部観察、織維種同定、石刀の塗膜分析を公益財団法人元興寺文化財研究所。鉄器に係る材質同定を株式会社パレオ・ラボ。炭化物の放射性炭素年代測定・樹種同定及び植物珪酸体分析・花粉分析は株式会社古環境研究所。火山灰分析はパリノ・サー・ヴェイ株式会社に委託した。また、各分析結果は第4章を参照されたい。

- 19 本書の編集には、国際文化財株式会社の協力を得て中村が行った。執筆担当は以下のとおりである。

第1章	中村
第2章	中村・松崎
第3章 第1節・第2節	中村
第3節-1	鶴久森
-2・4	中村
-3	中村・新屋敷
第4章-1	竹中正巳
-2	下野真理子
-3	中村幸一郎
-4	武安雅之
-5	公益財団法人元興寺文化財研究所
-6	株式会社古環境研究所
-7	公益財団法人元興寺文化財研究所
-8	株式会社パレオ・ラボ
-9	パリノ・サー・ヴェイ株式会社

第5章 中村

- 20 縄文時代の土器分類については、第3章第3節-1（縄文時代の小結）の土器分類表（第27表）において示した。

- 21 出土遺物及び実測図・写真等の記録は鹿児島県立埋蔵文化財センターで保管し、展示・活用を図る予定である。

凡 例

赤色顔料：	
煤付着：	
石皿使用面：	
漆：	

遺構の略号

竪穴住居跡：S I	埋設土器：S J
石斧集積遺構：S U	集石遺構：S Q
落とし穴：S T P	土坑：S K
ピット：P	円形周溝墓：S Z a
弧状遺構：S Z b	溝状遺構：S D
地下式横穴墓：S T	土坑墓：S K T
焼土跡：S L	古道：S F

総　　目　　次

第1分冊

卷頭図版

序文

報告書抄録

例言

凡例

第1章 発掘調査の経過.....	1
第1節 調査に至るまでの経緯.....	1
第2節 県内遺跡事前調査.....	1
第3節 本調査の経過.....	2
第4節 平成26年度の整理作業・報告書作成業務.....	2
第5節 平成27年度の整理作業・報告書作成業務.....	3
第2章 遺跡の位置と環境.....	5
第1節 地理的環境.....	5
第2節 歴史的環境(周辺の遺跡を中心).....	5
第3節 東九州自動車道関連遺跡.....	6
第3章 発掘調査の方法と成果.....	12
第1節 発掘調査の方法.....	12
第2節 層序について.....	12
第3節 調査の成果.....	17
1 縄文時代後期・晩期の調査.....	17
2 弥生時代の調査.....	158

第2分冊

3 古墳時代の調査.....	1
4 古代の調査.....	211

第3分冊

第4章 自然科学分析.....	1
第5章 総括.....	83
写真図版(遺構).....	85
写真図版(遺物).....	115

第1分冊目次

巻頭図版

序文

報告書抄録

例言

凡例

第1章 発掘調査の経過	1
第1節 調査に至るまでの経緯	1
第2節 県内遺跡事前調査	1
第3節 本調査の経過	2
第4節 平成26年度の整理作業・報告書 作成業務	2
第5節 平成27年度の整理作業・報告書 作成業務	3
第2章 遺跡の位置と環境	5
第1節 地理的環境	5
第2節 歴史的環境（周辺の遺跡を中心に）	5
第3節 東九州自動車道関連遺跡	6
第3章 発掘調査の方法と成果	12
第1節 発掘調査の方法	12
第2節 層序について	12
第3節 調査の成果	17
1 縄文時代後期・晚期の調査	17
(1) 調査の概要	17
(2) 遺構	23
ア 積穴住居跡	23
イ 埋設土器	34
ウ 石斧集積遺構	41
エ 集石遺構	44
オ 落とし穴	54
カ 土坑	54
キ ピット	68
(3) 縄文時代後期の遺物	72
ア 土器	72
イ 土製品	90
ウ 石器	92
エ 装飾品	112
(4) 縄文時代晩期の土器	118
(5) 遺物観察表	127
(6) 小結	148
2 弥生時代の調査	158
(1) 調査の概要	158
(2) 遺構	158
ア 積穴住居跡	159
(3) 遺物	162
ア 土器	162
(4) 遺物観察表	165
(5) 小結	166

挿図目次

第1図 周辺遺跡位置図	7
第2図 志布志IC～鹿屋串良JC-T間の遺跡位置図	11
第3図 グリッド配置図・土層断面位置図	13
第4図 土層断面図①②③	14
第5図 土層断面図④⑤⑥	15
第6図 土層断面図7-8	16
第7図 縄文時代後期遺構配置図（1）	17
第8図 縄文時代後期遺構配置図（2）	18
第9図 縄文時代後期遺物出土状況（1）	19
第10図 縄文時代後期遺物出土状況（2）	20
第11図 縄文時代晚期遺物出土状況（1）	21
第12図 縄文時代晚期遺物出土状況（2）	22
第13図 1号積穴住居跡	23
第14図 1号積穴住居跡出土土器（1）	24
第15図 1号積穴住居跡出土土器（2）	25
第16図 1号積穴住居跡出土土器（3）	26
第17図 1号積穴住居跡出土土器（4）・土製品	27
第18図 1号積穴住居跡出土石器（1）	28
第19図 1号積穴住居跡出土石器（2）	29
第20図 2号積穴住居跡	30
第21図 2号積穴住居跡出土土器・石器（1）	31
第22図 2号積穴住居跡出土石器（2）	32
第23図 3号積穴住居跡・出土土器・石器	33
第24図 1号・2号・3号・4号・5号埋設土器	34
第25図 6号・7号・8号・9号・10号・11号・ 12号埋設土器	35
第26図 1号・2号埋設土器出土遺物	36
第27図 3号・4号・5号埋設土器出土遺物	37
第28図 6号・7号・8号埋設土器出土遺物	38
第29図 9号・10号埋設土器出土遺物	39
第30図 11号・12号埋設土器出土遺物	40
第31図 1号石斧集積遺構・出土石器（1）	41
第32図 1号石斧集積遺構出土石器（2）	42
第33図 1号石斧集積遺構出土石器（3）	43
第34図 2号石斧集積遺構・出土石器	44
第35図 1号・2号・3号・10号集石遺構	45
第36図 1号集石遺構出土土器	46
第37図 1号集石遺構出土石器	47
第38図 2号・3号・10号集石遺構出土土器・石器	48
第39図 8号・9号集石遺構	49
第40図 8号・9号集石遺構出土焼成粘土塊・石器	50
第41図 4号・6号・7号-A・B集石遺構	51
第42図 5号集石遺構	52
第43図 4号・5号・6号集石遺構出土土器	52
第44図 7号-A・B集石遺構出土石器	53
第45図 1号・2号落とし穴	54
第46図 1号・2号・3号土坑	55

第47図	1号・2号土坑出土石器	56
第48図	4号・5号・6号・7号・8号・9号土坑	57
第49図	6号・9号土坑出土石器・石器	58
第50図	10号・11号・12号・13号・14号・15号・ 16号・17号・18号・19号土坑	59
第51図	20号・21号・22号・23号・24号・25号・ 26号・27号土坑	60
第52図	19号・21号・22号・23号土坑出土土器・石器	61
第53図	24号土坑出土土器・石器	62
第54図	26号土坑出土石器	63
第55図	27号土坑出土土器	64
第56図	28号土坑・出土土器(1)	65
第57図	28号土坑出土土器(2)	66
第58図	28号土坑出土石器	67
第59図	ピット	69
第60図	ピット出土土器・石器(1)	70
第61図	ピット出土石器(2)	71
第62図	縄文時代後期の土器(1)	72
第63図	縄文時代後期の土器(2)	73
第64図	縄文時代後期の土器(3)	74
第65図	縄文時代後期の土器(4)	75
第66図	縄文時代後期の土器(5)	76
第67図	縄文時代後期の土器(6)	77
第68図	縄文時代後期の土器(7)	78
第69図	縄文時代後期の土器(8)	79
第70図	縄文時代後期の土器(9)	80
第71図	縄文時代後期の土器(10)	81
第72図	縄文時代後期の土器(11)	82
第73図	縄文時代後期の土器(12)	83
第74図	縄文時代後期の土器(13)	84
第75図	縄文時代後期の土器(14)	85
第76図	縄文時代後期の土器(15)	86
第77図	縄文時代後期の土器(16)	87
第78図	縄文時代後期の土器(17)	88
第79図	縄文時代後期の土器(18)	89
第80図	縄文時代後期の土器(19)	90
第81図	縄文時代後期の土製品(1)	91
第82図	縄文時代後期の土製品(2)	92
第83図	縄文時代後期の石器(1)	93
第84図	縄文時代後期の石器(2)	94
第85図	縄文時代後期の石器(3)	95
第86図	縄文時代後期の石器(4)	96
第87図	縄文時代後期の石器(5)	97
第88図	縄文時代後期の石器(6)	98
第89図	縄文時代後期の石器(7)	99
第90図	縄文時代後期の石器(8)	100
第91図	縄文時代後期の石器(9)	101
第92図	縄文時代後期の石器(10)	102
第93図	縄文時代後期の石器(11)	103
第94図	縄文時代後期の石器(12)	104
第95図	縄文時代後期の石器(13)	105
第96図	縄文時代後期の石器(14)	106
第97図	縄文時代後期の石器(15)	107
第98図	縄文時代後期の石器(16)	108
第99図	縄文時代後期の石器(17)	109
第100図	縄文時代後期の石器(18)	110
第101図	縄文時代後期の石器(19)	111
第102図	縄文時代後期の石器(20)	112
第103図	縄文時代後期の石器(21)	113
第104図	縄文時代後期の石器(22)	114
第105図	縄文時代後期の石器(23)	115
第106図	縄文時代後期の石器(24)	116
第107図	縄文時代後期の石器(25)・装飾品	117
第108図	縄文時代後期の土器	118
第109図	縄文時代晩期末から弥生時代初頭の土器(1)	119
第110図	縄文時代晩期末から弥生時代初頭の土器(2)	120
第111図	縄文時代晩期末から弥生時代初頭の土器(3)	121
第112図	縄文時代晩期末から弥生時代初頭の土器(4)	122
第113図	縄文時代晩期末から弥生時代初頭の土器(5)	123
第114図	縄文時代晩期末から弥生時代初頭の土器(6)	124
第115図	縄文時代晩期末から弥生時代初頭の土器(7)	125
第116図	縄文時代晩期末から弥生時代初頭の土器(8)	126
第117図	鹿児島県内出土石刀・石棒(1)(東2001改変)	155
第118図	鹿児島県内出土石刀・石棒(2)(東2001改変)	156
第119図	弥生時代遺構配図	158
第120図	4号堅穴住居跡	159
第121図	5号堅穴住居跡・出土土器	160
第122図	6号堅穴住居跡・出土土器	161
第123図	弥生時代の土器(1)	162
第124図	弥生時代の土器(2)	163
第125図	弥生時代の土器(3)	164
第126図	5号堅穴住居跡出土土器・須久式土器比較	166

表目次

第1表	周辺遺跡一覧表	8
第2表	志布志1C~鹿屋串良JCT間の調査済及び 調査中遺跡概要(1)	9
第3表	志布志1C~鹿屋串良JCT間の調査済及び 調査中遺跡概要(2)	10
第4表	ピット計測値一覧表	68
第5表	縄文時代後期・晩期土器観察表(1)	127
第6表	縄文時代後期・晩期土器観察表(2)	128
第7表	縄文時代後期・晩期土器観察表(3)	129
第8表	縄文時代後期・晩期土器観察表(4)	130
第9表	縄文時代後期・晩期土器観察表(5)	131
第10表	縄文時代後期・晩期土器観察表(6)	132

第11表	縄文時代後期・晩期土器観察表（7）	133	第24表	縄文時代後期石器観察表（5）	146
第12表	縄文時代後期・晩期土器観察表（8）	134	第25表	縄文時代後期石器観察表（6）	147
第13表	縄文時代後期・晩期土器観察表（9）	135	第26表	縄文時代後期装飾品観察表	147
第14表	縄文時代後期・晩期土器観察表（10）	136	第27表	縄文時代土器分類表	149
第15表	縄文時代後期・晩期土器観察表（11）	137	第28表	中居Ⅱ式土器の胎土（金雲母・輝石・角閃石）	150
第16表	縄文時代後期・晩期土器観察表（12）	138	第29表	劍目突帶文土器の胎土（金雲母・輝石・角閃石）	150
第17表	縄文時代後期・晩期土器観察表（13）	139	第30表	縄文時代石器分類表	152
第18表	縄文時代後期土製品観察表（1）	140	第31表	石器組成	153
第19表	縄文時代後期土製品観察表（2）	141	第32表	石礫分類集計一覧表	153
第20表	縄文時代後期石器観察表（1）	142	第33表	打製石斧分類集計一覧表	154
第21表	縄文時代後期石器観察表（2）	143	第34表	天附型石刀出土地一覧表	157
第22表	縄文時代後期石器観察表（3）	144	第35表	弥生時代土器観察表（1）	165
第23表	縄文時代後期石器観察表（4）	145	第36表	弥生時代土器観察表（2）	166

第1章 発掘調査の経過

第1節 調査に至るまでの経緯

鹿児島県教育委員会は、文化財の保護・活用を図るために、各開発関係機関との間で、事業区域内における文化財の有無及びその取り扱いについて協議し、諸開発との調整を図ってきた。

この事前協議制に基づき、日本道路公団九州支社鹿児島工事事務所（現西日本高速道路株式会社）は東九州自動車道（志布志IC～末吉財部IC）建設を計画し、当該事業区間ににおける埋蔵文化財の有無について鹿児島県教育委員会に照会を行った。

これを受けて、鹿児島県教育庁文化財課（以下、「文化財課」という。）は平成12年2月志布志IC～鹿屋串良JCT間の埋蔵文化財分布調査を実施したところ、50箇所の遺跡（854,100m²）の存在が判明した。この分布調査の結果をもとに、事業区内の埋蔵文化財の取り扱いについて、日本道路公団九州支社鹿児島工事事務所、鹿児島県土木部道路建設課高速道対策室、文化財課、県立埋蔵文化財センター（以下、「埋文センター」という。）の4者で協議を重ね対応を検討してきた。

その後、日本道路公団民営化の政府方針が提起され、事業計画の見直しと建設コストの削減も検討することになった。このような社会情勢の変化や、道路建設工事計画に伴い、遺跡についてもより綿密な把握が求められることとなり、埋蔵文化財の詳細分布調査と試掘調査及び確認調査が実施されることとなった。なお、志布志IC～鹿屋串良JCTについては、平成14年4月に再度分布調査を実施し、遺跡面積を289,000m²と報告した。

その後、日本道路公団民営化の閣議決定と新直轄方式に基づく道路建設の確定、平成16年3月に国土交通省九州地方整備局長、日本道路公団九州支社長、鹿児島県知事の間で新直轄方式施工に伴う確認書が締結された。工事は日本道路公団が国土交通省から受託し、発掘調査は日本道路公団が鹿児島県へ再委託することとなり、これまでの確認書、協定書はそのまま生きるということになった。また、日本道路公団からの再委託は曾於弥五郎ICまで終了し、曾於弥五郎ICからの先線部は国土交通省からの受託事業となった。

なお、平成21年度までの当該区間の確認調査は、事業の円滑な推進を図る観点から本発掘調査の手順の中で国土交通省の事業費により行ってきたが、平成23年度からは文化庁の国庫補助事業を受けて、鹿児島県教

育委員会が県内遺跡事前調査事業として実施することとした。

平成24年度の県内遺跡事前調査事業として、東九州自動車建設に係る確認調査を町田堀遺跡の他に3遺跡が実施された。町田堀遺跡では縄文時代・弥生時代・古墳時代の遺物包含層が確認され、弥生時代の住居跡や古墳時代の地下式横穴墓等の遺構も確認されている。

近年、東九州自動車等の国道路建設事業等の増加に伴い、埋蔵文化財調査の事業量も増大することが見込まれ、その対応が困難な状況となりつつあった。そこで、公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター（以下「埋文調査センター」という。）を平成25年に設立し、国関係の事業に係る発掘調査をより円滑かつ効率的に実施することとなった。

また、事業の効率化を図るために平成24年度から民間調査組織へ発掘調査の支援業務を委託することとなり、平成25年度から埋文調査センターが発足するにあたり「埋蔵文化財発掘調査支援業務の委託実施要項」を策定し、それに基づき、株式会社埋蔵文化財サポートシステムへ発掘調査の委託を行った。

平成26年度には、株式会社埋蔵文化財サポートシステムへ整理作業支援業務を委託した。平成27年度には、国際文化財株式会社へ整理作業及び報告書作成作業支援業務を委託した。

第2節 県内遺跡事前調査

期間 平成24年8月1日～平成24年11月28日

調査体制

調査主体 鹿児島県教育委員会

企画・調整 鹿児島県教育庁文化財課

調査総括 鹿児島県立埋蔵文化財センター

所長 寺田 仁志

調査企画 鹿児島県立埋蔵文化財センター

次長兼総務課長 新小田 譲

次長 井ノ上 秀文

調査第一課長 堂込 秀人

調査第一課第二調査係長 大久保 浩二

調査担当 鹿児島県立埋蔵文化財センター

文化財主事 吉岡 康弘

文化財研究員 今村 結記

事務担当 鹿児島県立埋蔵文化財センター

主査 下堂蘭 晴美

第3節 本調査の経過

本調査は、平成25年6月10日～平成26年1月28日の期間実施した。調査組織については、以下のとおりである。

1 調査体制

事業主体	国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所
調査主体	鹿児島県教育委員会
調査総括	(公財)埋蔵文化財調査センター センター長 富田 逸郎
調査企画	(公財)埋蔵文化財調査センター 総務課長兼係長 山方 直幸 調査課長 鶴田 静彦 調査第一係長 八木澤 一郎
調査担当	(公財)埋蔵文化財調査センター 文化財専門員 大岩本 博之 " 中村 耕治
事務担当	(公財)埋蔵文化財調査センター 主査 岡村 信吾
現地指導	鹿児島大学総合研究博物館 准教授 橋本 達也 鹿児島女子短期大学教授 竹中 正己 鹿児島国際大学教授 大西 智和
遺物指導	國學院大學名誉教授 小林 達夫 國學院大學橋本短期大学教授 小林 青樹
調査の委託	株式会社埋蔵文化財サポートシステム 主任調査支援員 島内 浩輔 調査支援員 松崎 拓郎 調査支援員(10月まで) 上高原 啓 調査支援員 立神 勇志 調査支援員(11月から) 堤 浩一郎 調査支援員 沖野 沙和美 調査支援員 柏木 数馬
委託期間	平成25年4月23日～平成26年3月14日
委託内容	記録保存調査業務 測量業務 土坑業務
検査	中間検査 平成25年10月22日 完成検査 平成26年2月26日 平成26年3月4日

2 調査の経過

調査を実施するにあたり、遺跡全体を道路や畦畔により区分し、西から調査区1・調査区2・調査区3・調査区4とした。

調査の経過については、日誌抄を月ごとに集約して記した。

平成25年6月

調査区1, 表土剥ぎ・II層掘り下げ。調査区4, 表土

剥ぎ・II層掘り下げ。

平成25年7月

調査区1, II層掘り下げ、調査区2, 表土剥ぎ、地下式横穴墓の堅坑検出掘り下げ。調査区4, II層掘り下げ、III層上面遺構検出。III・IV層掘削、V層上面遺構検出。

平成25年8月

調査区1, II層掘り下げ、調査区2, 表土剥ぎ、地下式横穴墓の調査。調査区3, 表土剥ぎ、II層掘り下げ。調査区4, II層掘り下げ、III層上面遺構検出。III・IV層掘削、V層上面遺構検出。

平成25年9月

調査区1, III層上面遺構検出、住居跡調査。調査区2, 地下式横穴墓の調査。調査区3, II層掘り下げ、地下式横穴墓の調査。調査区4, 下層確認調査。

平成25年10月

調査区1, II層掘り下げ、地下式横穴墓の調査。III層遺構掘り下げ。V層遺構検出。下層確認調査。調査区2, 地下式横穴墓の調査。調査区3, II層掘り下げ、地下式横穴墓の調査。空中写真撮影。現地説明会開催。中間検査。

平成25年11月

調査区1, II層掘り下げ、III層遺構掘り下げ、III・IV層掘り下げ、V層上面遺構検出。調査区2, 地下式横穴墓の調査。II層掘り下げ、III層上面遺構掘り下げ。調査区3, III層上面遺構掘り下げ。III・IV層掘り下げ、V層上面遺構検出。調査区4, II層掘り下げ、III層遺構掘り下げ。III・IV層掘り下げ、V層上面遺構検出。

平成25年12月

調査区1, II層掘り下げ、III層上面遺構掘り下げ。V層上面遺構検出。調査区2, 地下式横穴墓の調査。III層上面遺構掘り下げ。調査区3, II層掘り下げ、V層上面遺構検出。

平成26年1月

調査区1, III層上面遺構掘り下げ。III・IV層掘り下げ、V層上面遺構検出・掘り下げ。調査区2, II層掘り下げ、III層上面遺構検出・掘り下げ。III層・IV層掘り下げ、V層上面遺構検出・掘り下げ。調査区3, III層上面遺構検出・掘り下げ、III・IV層掘り下げ、V層上面遺構検出・掘り下げ。

記録保存調査を終了する。

第4節 平成26年度の整理作業・報告書作成業務

平成26年度本報告書作成に伴う整理・報告書作成作業は、県文化財課から委託を受けた埋文調査センターが実施することとなり、平成26年度には、株式会社埋蔵文化財サポートシステムへ整理作業・報告書作成の支援業務を委託した。その期間は埋文調査センターの第二整理作業所で行った。

1 調査体制

事業主体 國土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所

調査主体 鹿児島県教育委員会

調査総括 (公財)埋蔵文化財調査センター

センター長 堂込 秀人

調査企画 (公財)埋蔵文化財調査センター

総務課長兼係長 山方 直幸

調査課長 八木澤 一郎

調査第一係長 中村 和美

整理担当 (公財)埋蔵文化財調査センター

文化財専門員 切通 雅子

事務担当 (公財)埋蔵文化財調査センター

主査 岡村 信吾

整理の委託

委託先 株式会社埋蔵文化財サポートシステム

主任調査支援員 松崎 卓郎

調査支援員 立神 勇志

調査支援員 坂井 靖奈

委託期間 平成26年4月11日～平成27年3月12日

検査 中間検査 平成26年10月22日

完成検査 平成27年2月26日

平成27年3月4日

2 調査の経過

平成26年5月

遺物水洗、土壤フローテーション、遺物選別・分類、デジタルトレース。

平成26年6月

遺物水洗、土壤フローテーション及び選別、遺物選別・分類、遺物注記・実測、デジタルトレース。

平成26年7月

遺物水洗、土壤フローテーション及び選別、遺物選別・分類、遺物注記・実測、石斧接合、デジタルトレース。

平成26年8月

土壤フローテーション及び選別、遺物選別・分類、遺物注記・実測、土器接合、デジタルトレース、原稿執筆。平成26年9月

台帳整理及びデータ入力、実測候補遺物選別・分類、土器接合・復元、石器実測、デジタルトレース、原稿執筆、地下式横穴墓原図修正。

平成26年10月

台帳整理及びデータ入力、実測候補遺物選別・分類、土器接合・復元、土器実測、石器実測、デジタルトレース、自然科学分析、地下式横穴墓原図修正、原稿執筆。

平成26年11月

台帳整理及びデータ入力、実測候補遺物選別・分類、土器接合・復元、土器実測、石器実測、鉄器実測、デジタルトレース、自然科学分析、原稿執筆。

平成26年12月

土器実測、石器実測、鉄器実測、土器復元、デジタルトレース、自然科学分析、地下式横穴墓法量計測、土器拓本、遺物観察表作成、原稿執筆。

平成27年1月

土器実測、石器実測、鉄器実測、土器復元、土器拓本、デジタルトレース、遺物観察表作成、地下式横穴墓法量計測、原稿執筆、遺物整理。

平成27年2月

土器実測、石器実測、鉄器実測、土器復元、土器拓本、デジタルトレース、遺物観察表作成、地下式横穴墓法量計測、原稿執筆、台帳整理及びデータ入力、遺物整理。

第5節 平成27年度の整理作業・報告書作成業務

平成27年度本報告書作成に伴う整理・報告書作成作業及び平成26年度に本調査が行われた出土遺物についての水洗・注記・接合作業は、県文化財課から委託を受けた理文調査センターが実施することとなり、平成27年度は、国際文化財株式会社へ整理作業・報告書作成の支援業務を委託した。その期間は理文調査センターの第二整理作業所で行った。

1 調査体制

事業主体 國土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所

調査主体 鹿児島県教育委員会

調査総括 (公財)埋蔵文化財調査センター

センター長 堂込 秀人

調査企画 (公財)埋蔵文化財調査センター

総務課長兼係長 有村 直

調査課長 八木澤 一郎

調査第一係長 中村 和美

整理担当 (公財)埋蔵文化財調査センター

文化財専門員 中村 耕治

事務担当 (公財)埋蔵文化財調査センター

主査 荒瀬 勝巳

遺物指導 鹿児島大学総合研究博物館

准教授 橋本 達也

整理の委託

委託先 国際文化財株式会社

主任調査支援員 薩久森 彰

調査支援員 萩澤 太郎

調査支援員 島崎 直行

委託期間 平成27年4月13日～平成28年3月11日

委託内容 整理作業

検査 中間検査 平成27年10月22日

完成検査 平成28年2月26日

平成28年3月4日

2 整理・報告書作成作業の経過

整理・報告書作成作業については、日誌抄を月ごとに集約して記した。

平成27年5月

土器破片実測(縄文後期～古代)。石器トレース図スキャン及び画像処理。遺構図版レイアウト。

序文・報告書抄録・第1章第1節～3節データ編集。遺構(地下式横穴墓)図版データ編集。

平成27年6月

土器(完形・破片)実測。土器(縄文)拓本。土器トレース。石器実測・トレース。遺物観察表作成。遺構(縄文～古代)図版レイアウト・データ編集。現場写真選択・スキャン。鉄器写真図版レイアウト。

平成27年7月

土器(縄文)拓本。土器(縄文～古代)トレース。遺物観察表作成(縄文～古代)。遺構図版データ編集。現場写真選択・スキャン。石器図版レイアウト。原稿執筆(縄文・弥生・古代)。土器復元。

平成26年度調査分の土器水洗・注記。

平成27年8月

縄文土器拓本画像処理及び合成。土器トレース画像処理。土器観察表作成。遺構(縄文・古墳)図版データ編集。縄文後期及び古墳原稿執筆。土器(縄文後期・古墳)

復元。土器写真レイアウト。鉄器写真撮影。

平成26年度調査分の土器水洗・注記。

平成27年9月

縄文後期土器拓本画像処理及び合成。遺構(縄文・古墳)図版データ編集。縄文後期・晚期・古墳原稿執筆。土器(縄文後期・古墳)復元。

平成26年度調査分の土器水洗・注記。

平成27年10月

基本土層・縄文後期～古代の遺構・遺物図版データ編集。縄文後期・晚期・古墳原稿執筆。土器(古墳)復元。石器写真撮影。

平成26年度調査分の土器水洗・注記・接合。

平成27年11月

遺構・遺物データ編集。土器写真撮影。埋設土器及び異形鉄器集合写真撮影。

縄文・弥生・古墳・古代それぞれの小結原稿執筆。最終編集及び目次の確認。

平成26年度調査分の土器接合

平成27年12月

原稿執筆。原稿入稿・校正。

平成26年度調査分接合。

平成25年度調査分(報告書掲載遺物も含む)収納。

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

鹿屋市串良町は、大隅半島東南部のほぼ中央に位置し、東には東串良町、南には肝属川を隔てて肝付町、西には鹿屋市東原町、旭原町、笠之原町、北東は立小野台地を隔てて曾於郡大崎町と接している。平成18年1月1日に旧鹿屋市と合併するまでは広大な笠野原台地を二分していた。

串良町が位置する大隅半島は、九州山地の延長をなす東西の山地、その間の丘陵、台地及び低地等の低地帯から構成され、地質は大部分がシラス、ボラ等の火山灰土壌となっている。

東側の山地は、志布志湾北部から宮崎県に突出した形で北から南へ延びている鶴塚山地である。主峰は宮崎県内の鶴塚山(1,119 m)で中生層の地質からなっている。

西側の山地は北部の霧島火山の分脈から渕奥に形成された姶良カルデラのカルデラ壁を含み南部の高隈山地へと連なっている。高隈山地は、北部の白鹿岳・荒磯岳等500 ~ 600 m級の山々と、南部の大慶柄岳(1,236.8 m)を主峰に横岳・御岳等1,000 m級の山から成る山地で山容は急峻で深い森林に覆われている。

東西の山地は、ともに九州山地の延長をなし、それらの間は低地帯となり丘陵や台地及び低地となっている。これらの山間地を埋めるような形で、洪積世の火山活動による火碎流が堆積し、丘陵や台地が広く分布したシラス地形となっている。この火碎流は南西部の鹿児島湾口に形成された阿多カルデラの火碎流や渕奥に形成された姶良カルデラの入戸火碎流である。これらの火碎流をはじめとする噴出物が堆積後から現在に至るまで大小多くの河川で開削され、断片的な台地を残すだけの丘陵状地形や原面はほとんど没食されず残った広大な台地となっている。

一方、低地は、高隈山地や鶴塚山地等を水源とする大小の河川が走り、志布志湾、鹿児島湾等に注いでいる。この河川は、上・中流域で狭い谷底平野を形成し、また、何段かの河岸段丘も認められる。

この大隅半島に位置する串良町の地形は、東西に6.5 km、南北に13 kmの狭長で北部の山地中央部の台地、南部の低地に大別されるが、大部分において山地は少なく、笠野原台地と呼ばれる平坦なシラス台地から成っている。台地は「クロボク」と呼ばれる黒色火山灰土壌に覆われており、広大な畑地帯が形成されている。南部及び東部は肝属川とその支流の串良川が流れ、それによる沖積地が広がり、約695haの水田地帯を形成している。また、北部には低い丘陵性の山地が存在するが、町域に占める割合は少ない。

町田堀遺跡は、この串良町の北東部に位置し、笠野原台地の縁辺部に位置する。当遺跡の北及び東側を串良川が蛇行しながら南流する。

第2節 歴史的環境（周辺の遺跡を中心に）

町田堀遺跡周辺の主要な遺跡について時代別に紹介する。また、東九州自動車道関連遺跡については、第3節において記すことにする。

1 旧石器時代

旧石器時代の遺跡は本遺跡周辺の二子塚A遺跡において旧石器時代の可能性がある剥片が数点出土している他、本遺跡からやや離れるが鹿屋バイパス建設に伴って発掘調査が行われた西丸尾遺跡・複巻A遺跡・複巻B遺跡でナイフ形石器文化期～細石刃文化期の遺構・遺物が確認されている。

2 繩文時代

早期の遺跡としては益烟遺跡・下堀遺跡・古園遺跡・石縄遺跡・十三塚遺跡等があげられる。当遺跡より東に2 km離れた益烟遺跡では早期の住居跡2件、連穴土坑16基、集石遺構85基、土坑160基が検出されている。住居埋土に桜島起源の軽石(P13)がレンズ状に堆積していることから霧島市上野原遺跡とほぼ同様の状況が窺える。下堀遺跡では集石遺構13基が検出され、前平式土器・手向山式土器・寒ノ神式土器等が出土している。古園遺跡では、早期の石板式土器に比定される山形波状口縁をもつ貝殻条痕の円筒土器が確認されている。石縄遺跡では遺構は繩文時代早期の集石遺構・土坑が検出された。また、隣接する十三塚遺跡では繩文時代早期の石板式土器等が出土している。

後晩期の遺跡としては釜ヶ宇都遺跡・二子塚B遺跡・ホンドガマ遺跡・十三塚遺跡・柿木段遺跡等があげられる。ホンドガマ遺跡では、後期の市来式土器に比定できる土器・石匙、打製石斧等の遺物が確認されており、十三塚遺跡では凹線文土器・市来式土器・三万田式土器や晩期の黒川式土器が出土している。柿木段遺跡では晩期の落とし穴・土坑の他、石斧埋納遺構が検出されている。

3 弥生時代

弥生時代前期の遺跡は、当遺跡から東に約10 km離れた大崎町沢目遺跡等があげられる他、わずかしか確認されていない。中期以降の遺跡は吉ヶ崎遺跡・西ノ丸遺跡・下堀遺跡・王子遺跡・十三塚遺跡・益烟遺跡等があげられる。吉ヶ崎遺跡では、中期の堅穴住居跡が3軒確

認されている。特に、1号住居跡はベッド状遺構をもち、床面の焼土や炭化物が多く見られ、焼失家屋と思われる。そのためか、甕形土器・壺形土器の完形品が各4点と磨製石鎌・磨製石斧等が住居跡の床面から発見されている。下堀遺跡では竪穴住居跡7軒が検出され、土製勾玉も出土している。石縄遺跡では弥生時代の遺構は確認されていないが山ノ口式土器等が出土している。十三塚遺跡では、弥生時代中期の竪穴住居跡が8軒検出されており、方形・花卉形等に分類されている。また、掘立柱建物跡が3棟・土坑7基が検出されている。遺物は、弥生時代前中期～中期の土器・石器の他、土製勾玉や鐵鏃等も出土している。

4 古墳時代

大隅半島、特に志布志湾沿岸部は古くから唐仁古墳群・塙崎古墳群・横瀬古墳をはじめとする多くの古墳が存在することが知られている。また、南九州特有の地下式横穴墓も多く分布する地域である。

町田堀遺跡の周辺には、立小野堀遺跡・上小原古墳群・下堀遺跡・岡崎古墳群等が存在する。上小原古墳群では、前方後円墳1基・円墳20基及び地下式横穴墓が確認されている。地下式横穴墓では赤彩された輕石製石棺をもつものや、大型で玄室床面に粘土床をもつものが確認されている。岡崎古墳群は、18基の高塚墳と数基の地下式横穴墓が確認されている。また、同じ台地に高塚墳と地下式横穴墓が存在し、4号墳・16号墳・17号墳・18号墳では高塚墳の周溝内に竪坑を掘って造られた地下式横穴墓が複数基確認されている。岡崎18号墳の2号地下式横穴墓で確認された須恵器は、愛媛県伊予市の市場南組窯産と考えられるものである。また、鉄鏡・U字型鍛錬先・鑑子状鉄製品等の朝鮮半島系遺物、琉球列島産イモガイ製貝鏡等により広域交流を積極的に行っていと考えられている。下堀遺跡では須恵器が出土した竪穴住居や溝状遺構等の他、地下式横穴墓5基が確認されており、地下式横穴墓2号からは大隅半島では初見となる異形鉄器が出土している。また地下式横穴墓周辺で高环や埠が意図的に置かれたような状態で発見され、祭祀遺構の可能性が考えられる。

5 古代・中世以降

稻村城跡・下堀遺跡・柿木段遺跡・十三塚遺跡があげられる。岡崎古墳群と甫木川を挟んだ西側の丘陵上に位置する稻村城跡は、16基の近世墓のほか、土師器・青白磁・染付・備前焼・東播焼等が確認されている。下堀遺跡では土坑墓・戸跡・溝状遺構の他、多くの柱穴・土坑や近世の可能性が高いかも検出されている。柿木段遺跡では古代のカマド跡・溝状遺構・古道、中世～近世の溝状遺構・道路跡・土坑が検出された。十三塚遺跡では古道跡が8条検出されており陶磁器片の出土から近世以降の可能性が考えられている。

第3節 東九州自動車道関連遺跡

東九州自動車道については、平成26年に鹿串申良JCTまで開通している。現在志布志ICから鹿串申良JCTまでの間で、工事や埋蔵文化財の発掘調査が行われている。

埋蔵文化財の調査は、平成20年から石縄遺跡・十三塚遺跡が開始され、別表にあるように27年度までに16遺跡の調査が行われている。

旧石器時代は、荒園遺跡・永吉天神段遺跡と牧山遺跡の3遺跡であるが、荒園遺跡では、細石器文化期の細石刃・畦原型細石核が出土している。永吉天神段遺跡ではナイフ型石器や尖頭器が出土している。大半の遺跡では石坂式・塞ノ神式等早期中葉から後葉の時代のものが多く、前平式土器等早期前半の遺物が出土する遺跡は数少ない。繩文時代早期では住居跡・連穴土坑・集積遺構・落とし穴・石器製作跡等集落として認められる田原迫ノ上遺跡をはじめ12遺跡が確認されている。大隅半島ではアカホヤ火山灰の堆積が厚く、その下位にある繩文時代早期の遺物は保存状態がよいものが多く復元可能な個体も多く出土している。繩文時代前期・中期・後期の遺跡は少ないが、牧山遺跡で轟式土器の埋設遺構が検出されている。京の塚遺跡では中期前半の深浦式土器が多量出土し、近畿系・瀬戸内系の土器が見られる。また、土坑も数多く検出されている。田原迫ノ上遺跡では、池田輕石層直上に曾畠式土器が出土している。繩文時代後期では町田堀遺跡で後期後半の中岳II式が出土し、住居跡3軒も検出されている。1軒の住居からは石刀も出土している。牧山遺跡からは西平式土器・市來式土器・丸尾式土器。田原迫ノ上遺跡からは指宿式土器・市來式土器。京の塚遺跡からは辛川式土器・丸尾式土器・西平式土器・中岳II式土器がそれぞれ出土している。繩文時代晚期では、黒川式土器が十三塚遺跡・立小野堀遺跡・田原迫ノ上遺跡・川久保遺跡・京の塚遺跡等から出土している。

弥生時代では多くの遺跡で弥生時代中期の山ノ口式土器が出土し、石縄遺跡・田原迫ノ上遺跡・永吉天神段遺跡で竪穴住居跡が多く検出され集落を形成している。永吉天神段遺跡では円形周溝墓を中心とした土坑墓群も発見されている。土坑墓には鐵鏡を副葬する墓もある。また、数は少ないが町田堀遺跡・川久保遺跡・荒園遺跡でも竪穴住居跡が検出されている。

古墳時代では立小野堀遺跡・町田堀遺跡で多くの地下式横穴墓が発見され副葬品も鉄器をはじめ豊富である。竪穴住居跡は川久保遺跡・荒園遺跡・春日堀遺跡で検出されている。川久保遺跡では鍛冶工房跡が発見され、それに伴う遺物も出土している。荒園遺跡では焼失家屋も検出されている。

古代・中世は数少ないが、永吉天神段遺跡で中世の土坑墓が検出され銅鏡や滑石製石鍋も出土している。川久保遺跡では中世の掘立柱建物跡が検出されている。



第1図 周辺遺跡位置図

第1表 周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	所在地	地形	時代	備考
1	町田堀遺跡	串良町細山田アタゴ山	台地	弥生, 古墳	本報告書
2	遠見ヶ丘遺跡	大崎町野方立小野	台地	中世	
3	立小野A・B遺跡	串良町細山田立小野	台地	縄文	
4	立小野遺跡	串良町細山田立小野	台地	縄文(後), 弥生	
5	高松遺跡	串良町細山田高松	台地	弥生	
6	二子塚A遺跡	大崎町野方二子塚	台地	旧石器, 縄文(早・晚), 弥生, 古墳	平成11年度本調査
7	二子塚B遺跡	大崎町持留二子塚	台地	縄文, 弥生	
8	二子塚C遺跡	大崎町持留二子塚	台地	弥生(中・後)	
9	大佐土原遺跡	大崎町野方大佐土原	山腹緩斜面	弥生(中)	
10	佐土原遺跡	大崎町野方4715-2	台地	縄文, 古墳	
11	柄山城跡	大崎町持留	台地	弥生, 古墳, 中世	別称「山ノ城」, 城跡の正確な所在は不明・推定
12	川上神社遺跡	大崎町持留中持留	扇状地	縄文(後)	
13	持留牧遺跡	大崎町持留牧・東尾ノ鼻	台地	縄文, 古墳	平成9年農政分布調査
14	茶木遺跡	大崎町持留1406-2	台地	古墳	
15	京の塚遺跡	大崎町持留下原 串良町下中京の塚	台地	縄文(早~晩)	
16	細山田段遺跡	大崎町持留下原 串良町下中京の塚	台地	縄文(後・晩), 弥生(前), 古墳	平成8年農政分布調査, 平成11年度農政分布調査で拡大
17	京の塚古墳	串良町細山田下中京の塚	台地	古墳	
18	益畠遺跡	串良町細山田益畠	台地	縄文, 弥生	
19	ホンドガマ遺跡	串良町細山田下中	洞窟	縄文	シラス洞窟で崩壊しつつある
20	霧島城跡	串良町細山田下中	丘陵	中世	
21	小牧遺跡	串良町細山田小牧	台地	弥生, 歴史	
22	川久保遺跡	串良町細山田川久保	台地	弥生	平成26年度調査
23	北原古墳群	串良町細山田北原	台地	古墳	
24	北原墓地逆修古石塔群	串良町細山田北原	台地	中世(鎌倉末)	
25	北原城跡	串良町細山田生栗須	丘陵	中世(南北朝)	
26	細山田城跡	串良町細山田生栗須	丘陵	中世	
27	生来果遺跡	串良町細山田生栗須	台地	弥生	
28	牧山遺跡	串良町細山田牧山	台地	弥生, 古墳	平成11年度分布調査, 平成12年試掘調査, 平成25, 26年度本調査
29	入部堀遺跡	串良町細山田入部堀	台地	弥生, 古墳	
30	新堀遺跡	串良町細山田新堀	台地	縄文	
31	是ヶ迫遺跡	串良町細山田是ヶ迫	台地	縄文, 弥生	
32	瓜々良時遺跡	串良町有里瓜々良時	台地	弥生	平成12年度本調査
33	熊ヶ鼻遺跡	串良町有里熊ヶ鼻	台地	縄文, 弥生	
34	柳場遺跡	串良町有里柳場	台地	弥生	
35	永田堀遺跡	串良町有里永田堀	台地	弥生, 古墳	
36	宮留古墳群	串良町有里	台地	古墳	
37	石塚遺跡	串良町有里石塚	台地	弥生	
38	石塚古墳	串良町有里石塚2169	台地	古墳	
39	牧内古墳	東串良町岩弘	台地	古墳	
40	下原遺跡	大崎町持留	台地	縄文(後), 弥生, 古墳	
41	岩弘上古石塔	東串良町岩弘上共同墓地	台地	中世	
42	上市ノ園古墳群	東串良町岩弘	台地	古墳	

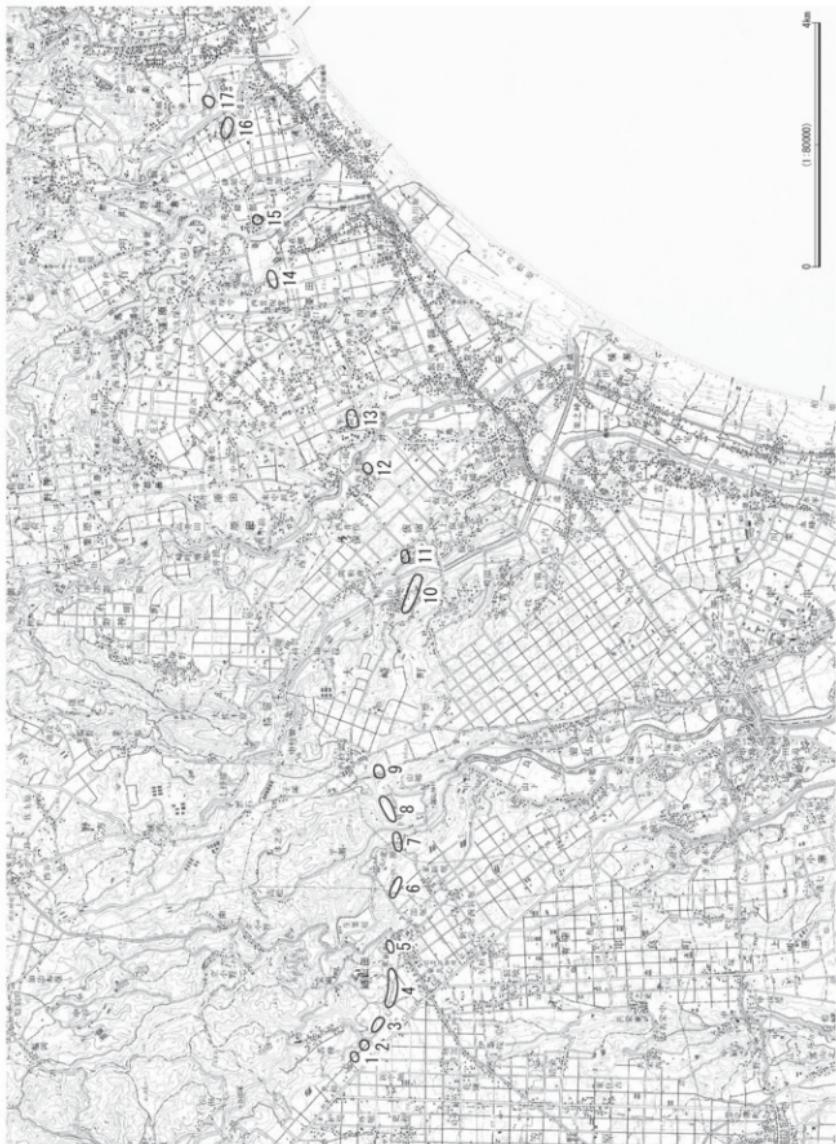
第2表 志布志IC～鹿屋串良JCT間の調査済及び調査中遺跡概要（1）

番	遺跡名	所 在 地	遺 跡 の 概 要	
1	石縄 H20～H21	鹿屋市串良町 標高140mの台地縁辺	縄文早期 弥生中期	集石遺構・岩本式・前平式・志風頭式・石坂式土器・平梅式 須玖式・山ノ口式
2	十三塚 H20～H21	鹿屋市串良町 標高140mの台地縁辺	縄文早期 縄文後期 縄文晩期 弥生中期	石坂式 四線文・市来式・三万田式 黒川式 豎穴住居跡・掘立柱建物跡・土坑・山ノ口式・勾玉・鉄鎌
3	立小野堀 H22～	鹿屋市串良町 標高125mの台地縁辺	縄文前期 縄文後期 縄文晩期 古墳	深浦式 市来式 黒川式 地下式横穴墓（190基）・土坑墓・溝状遺構・鉄器・青銅製鏡・初期須恵器
4	田原迫ノ上 H22～	鹿屋市串良町 標高120mの台地縁辺	縄文早期 縄文後期 縄文晩期 弥生中期	豎穴住居跡・鍾穴土坑・集石遺構・落とし穴・石器製作跡・前平式・吉田式・石坂式・塞ノ神式 落とし穴・指宿式・市来式 黒川式 豎穴住居跡・大型建物・掘立柱建物跡・円形周溝・方形周溝・山ノ口式・土製勾玉・鉄器
5	牧山 H25～	鹿屋市串良町 標高110mの台地縁辺	旧石器 縄文早期 縄文前期 縄文後期 縄文晩期 弥生中期 中世	剥片 集石遺構・石器製作跡・吉田式・石坂式 埋設土器（轟式） 土坑・西平式・市来式・丸尾式・中岳II式 入佐式 山ノ口式 青磁
6	町田堀 H25～	鹿屋市串良町 標高90mの台地縁辺	縄文早期 縄文後期 縄文晩期 弥生前期 弥生中期 古墳	集石遺構・下剥峯式・平梅式 豎穴住居跡・埋設土器・落とし穴・土坑・石斧集積遺構・ 石刀・ヒスイ製垂飾・小玉・勾玉・管玉・中岳II式 刻目突帯文 高橋式 豎穴住居跡・山ノ口式 豎穴住居跡（中津野式）・地下式横穴墓（88基・円形周溝墓等も含む）・溝状遺構・鉄器
7	川久保 H26～	鹿屋市串良町 標高30mの台地縁辺	縄文前期 縄文晩期 弥生中期 古墳 古代 中世	轟式・曾煙式 黒川式・刻目突帯文 豎穴住居跡・下条式 豎穴住居跡・鍛冶工房跡・笪貫式・鞆羽口・高环脚転用鞆羽口・铁滓・勾玉・管玉 掘立柱建物跡・須恵器・土師器 掘立柱建物跡・青磁・白磁・瓦器檜(楠葉型)

第3表 志布志IC～鹿屋串良JCT間の調査済及び調査中遺跡概要（2）

番	遺跡名	所在地	遺跡の概要	
8	小牧 H27～	鹿屋市串良町 標高60mの台地	縄文早期 縄文後期 縄文晩期 古墳	方形土坑・前平式・桑ノ丸式・下剥峯式 集積遺構・土坑・竪穴住居跡・埋設土器・指宿式・市来式・門線文土器 黒川式・刻目突帶文土器 竪穴住居跡・勾玉・鉄鏃
9	京の塚 H25～H27	曾於郡大崎町 標高90m～100mの 緩傾斜台地	縄文早期 縄文前期 縄文中期 縄文後期 縄文晩期	集石遺構・中原式・石坂式・下剥峯式・手向山式・押型文・平桿式・塞ノ神式 曾畠式 土坑群(約150基)・深浦式・近畿系の大歳山式・鷹島式・瀬戸内系の船元式・块状耳飾り 辛川式・丸尾式・西平式・中岳II式 入佐式・黒川式
10	永吉天神段 H24～	曾於郡大崎町 標高30mの河岸段丘と 標高50mの台地縁辺	旧石器 縄文早期 縄文晩期 弥生中期 古墳 古代 中世	石器製作跡・礫群・尖頭器・ナイフ形石器 集石遺構・埋設土器 竪穴住居跡・落とし穴・土坑 竪穴住居跡・円形周溝墓を中心とした土坑墓群・掘立柱建物跡・土坑・人來式・山ノ口式・鐵鏃 竪穴住居跡・土坑・埋設土器・成川式 掘立柱建物跡・土坑・須恵器・土師器 掘立柱建物跡・土坑墓・大型土坑・火葬土坑・青磁・白磁・東播系須恵器・滑石世石鍋・銅鏡
11	荒岡 H24～	曾於郡大崎町 標高30mの河岸段丘と 標高50mの台地縁辺	旧石器 縄文早期 縄文中期 古墳 古代以前	畦原型細石核・細石刃・水晶剣片 集石遺構・チップ集中区・前平式・下剥峯式・苦浜式・平桿式・塞ノ神式 竪穴住居跡・吉ヶ崎式・山ノ口式 竪穴住居跡(焼失家屋1軒含む)・箇貫式 埋土中に紫コラ(開聞岳起源AC874年)を含む片葉研磨
12	宮脇 H27～	曾於郡大崎町 標高50mの台地	縄文早期	集石遺構・加栗山式・吉田式・下剥峯式・桑ノ丸式・平桿式・塞ノ神式
13	平良上C H26～H27	曾於郡大崎町 標高40mの台地縁辺	縄文早期	竪穴住居跡・連穴土坑・集石遺構・吉田式・石坂式・下剥峯式・平桿式・塞ノ神式
14	春日堀 H26～	志布志市有明町 標高27mの台地縁辺	縄文早期 古墳 古代	竪穴住居跡・集石遺構・連穴土坑・石坂式 竪穴住居跡・溝状遺構・須恵器 竪穴建物・掘立柱建物跡・溝状遺構・須恵器
15	木森 H26～	志布志市有明町 標高50mの台地縁辺	縄文早期	集石遺構
16	次五 H26～	志布志市志布志町	旧石器 縄文早期	平桿式
17	小牧古墳群 H27～	志布志市志布志町 標高95mの台地	縄文早期 弥生中期	押型文土器・塞ノ神式・集石遺構

※平成27年度現在



第2図 志布志IC～鹿屋串良JCT間の遺跡位置図

第3章 発掘調査の方法と成果

第1節 発掘調査の方法

1 発掘調査の方法

平成25年度の町田堀遺跡の調査は、11,600m²を対象に実施した。調査区は道路や畦畔により調査区1～調査区4まで区分した。

グリッドは座標値(X=-172350, Y=-6460)を起点として磁北に合わせて設定した。また、10m単位で北からA・B・C……、西から1・2・3……とした。

発掘調査は、調査区1及び調査区4から開始した。表土剥ぎは重機（バックホー）により行ったが、掘削深度については、平成24年度の確認調査の結果を基にした。その後、遺物包含層については人力による掘削を行い、遺物や遺構の検出に努めた。

遺物の取り上げ及び、古道・溝状遺構についてはトータルステーションを用いた。また、遺構やまとまった土器については、手測り実測を行った。地形測量は、II層上面とIII層上面で精査を行って実施した。

堅穴住居跡については、中央に十字の土層観察用ベルトを残し掘り下げ、遺物はトータルステーションによる点上げと手測り実測を併用した。

地下式横穴墓については、土層断面の実測を行なながら、堅坑の1/4掘り下げ、1/2掘り下げを行った後発掘した。玄室については、流入土や天井落盤土のある墓は土層の主軸断面を実測後慎重に土砂除去を実施した。

V層（アカホヤ層）下位については、各調査区と共にトレチを設定し下層確認調査を行ったが、遺物・遺構は確認されなかった。

2 整理作業の方法

整理作業は平成25年度発掘調査と平行して、現場で水洗い、注記、接合、分類まで行った。また一部遺構につくてもデジタルトレースまで行った。

平成26年度は、株式会社埋蔵文化財サポートシステムに整理作業支援業務を委託した。当初、未洗い遺物の水洗い、注記を行った。その後、接合・復元作業を行った後に土器・石器の実測・トレースを行った。また、鉄器については公益財団法人 元興寺文化財研究所へ実測と科学分析を委託した。また、炭化材についての放射性炭素年代測定及び樹種同定を株式会社古環境研究所、開聞岳起源と思われる火山灰の分析についてはパリノ・サーヴェイ株式会社に委託した。

地下式横穴墓等の遺構については、デジタルトレースを実施した。

縄文時代及び弥生時代の堅穴住居跡からサンプリング

した土壌について、ウォーターフローテーションを行った。

平成27年度は、国際文化財株式会社に整理・報告書作成作業支援業務を委託した。未実測分の土器・石器の実測・トレースから作業を開始、随時、レイアウト、写真撮影、原稿執筆を行った。

3 出土遺物の分類について

（1）土器類についての分類

出土した遺物については、遺物包含層のII層から新旧混在した状況で出土しているため、層位ごとの分類は困難であった。水洗いが終わった段階で時代・型式等を分類した。

（2）石器類についての分類

石器については、ほとんどが縄文時代に属するものであるが、縄文時代の遺構・遺物は後期の中岳II式土器が大半を占めるため縄文後期として記載した。

第2節 層序について

調査区2～4は起伏が少なく、傾斜も弱いものであるが調査区2から調査区1へかけては急傾斜で下がって行く。また調査区1も西側へ向かって下がっていく地形である。一部圃場整備により上層が削平されている部分があるが、遺跡全体ではほぼ同様の層位である。

I層：灰黒色土（耕作土）、白色軽石・混在。

II層：黒色土で層厚が90cmを超す所もあり、色調の変化でa・b・cに細分層される。

II a層：黒色土（主に弥生時代・古墳時代の包含層）

II b層：黒褐色土（縄文時代後期～晩期）

II c層：黒色土、粘性が強い

III層：白色軽石層で、2～5cmの堆積である。（池田カルデラ起源、約6,500年前）

IV層：暗茶褐色土、やや硬質

V層：黄橙色火山灰土で鬼界カルデラ起源である。上層が火山灰土、下層が軽石である。

V a層：黄橙色火山灰土（鬼界カルデラ起源アカホヤ、約7,500年前）

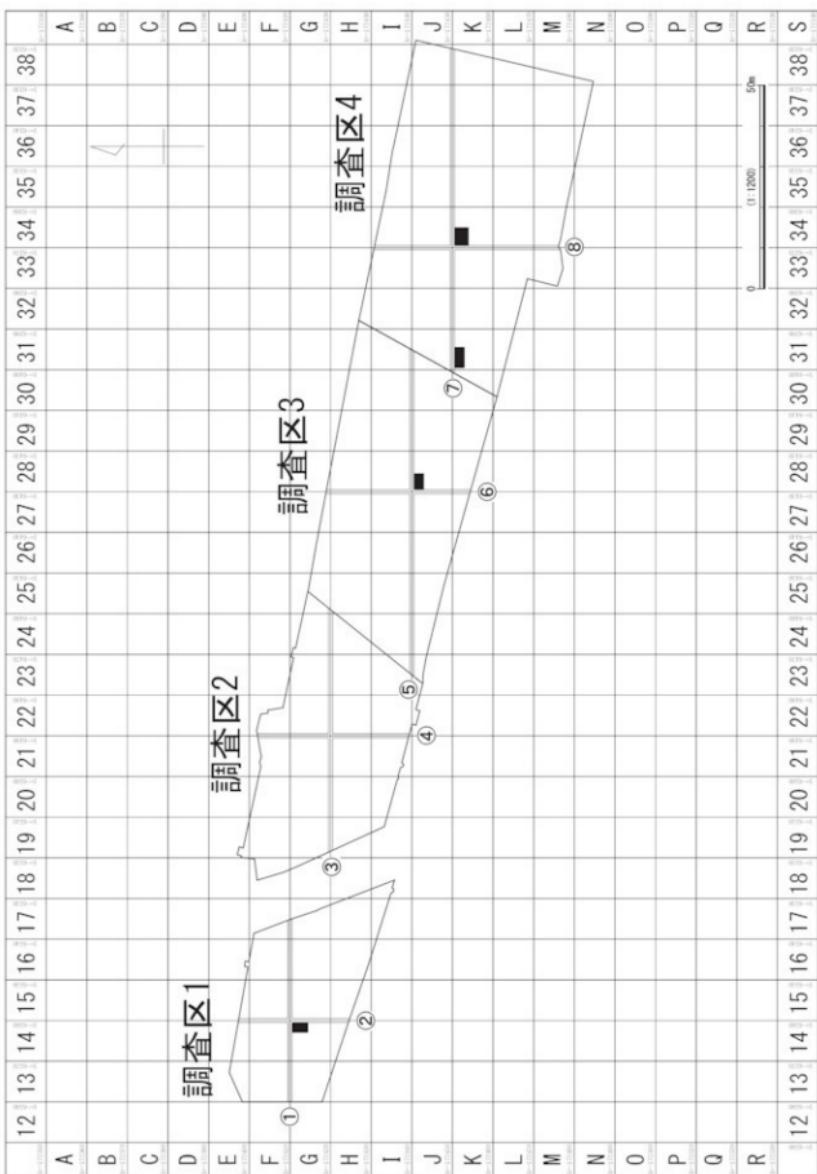
V b層：黄橙色軽石（鬼界カルデラ起源の軽石）

VI層：黒褐色土（黄色バミスを少量含む）

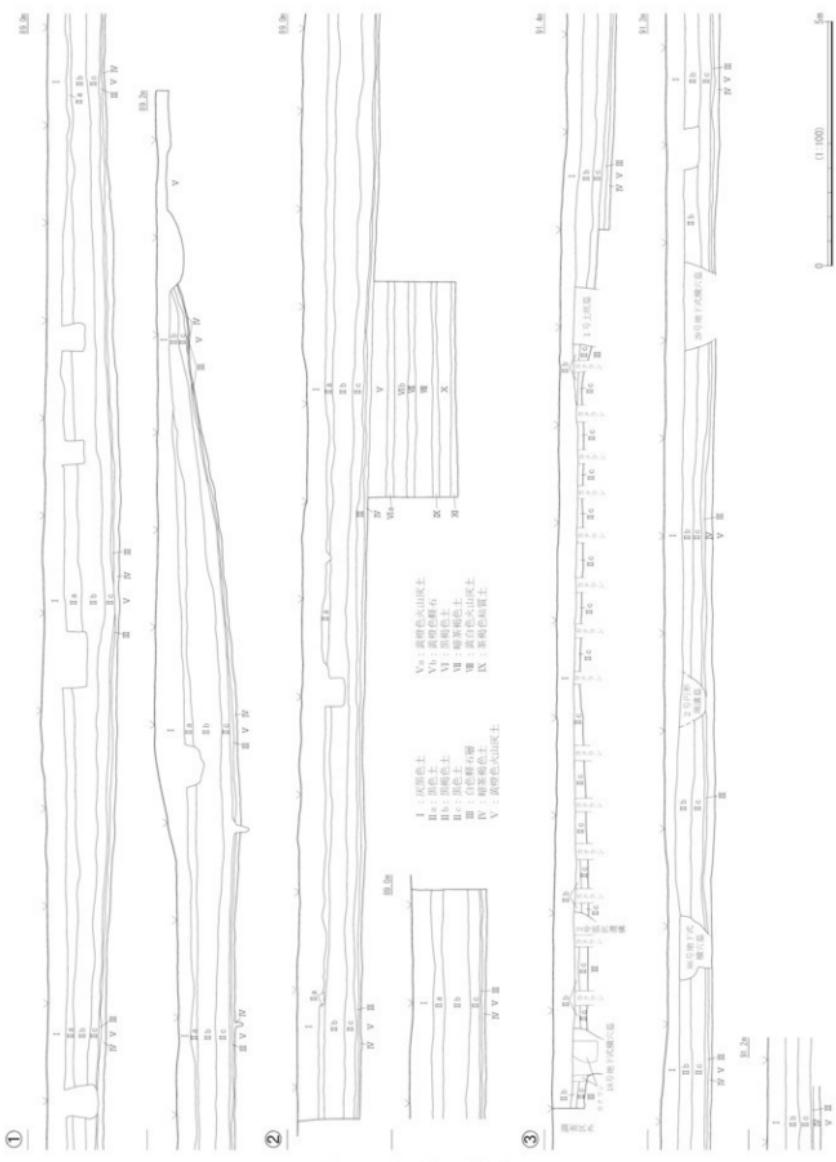
VII層：暗茶褐色土（黄色バミスを多量含む）

VIII層：黄白色火山灰土（桜島起源の薩摩火山灰）

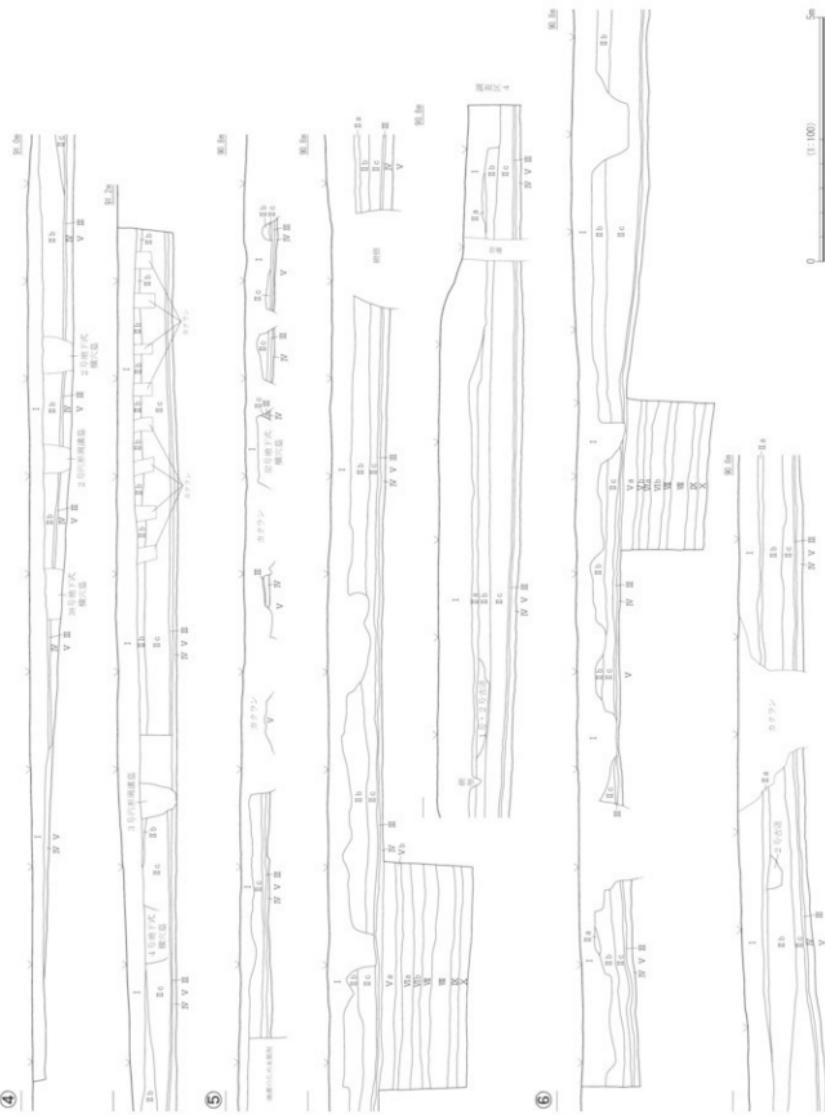
IX層：茶褐色粘質土



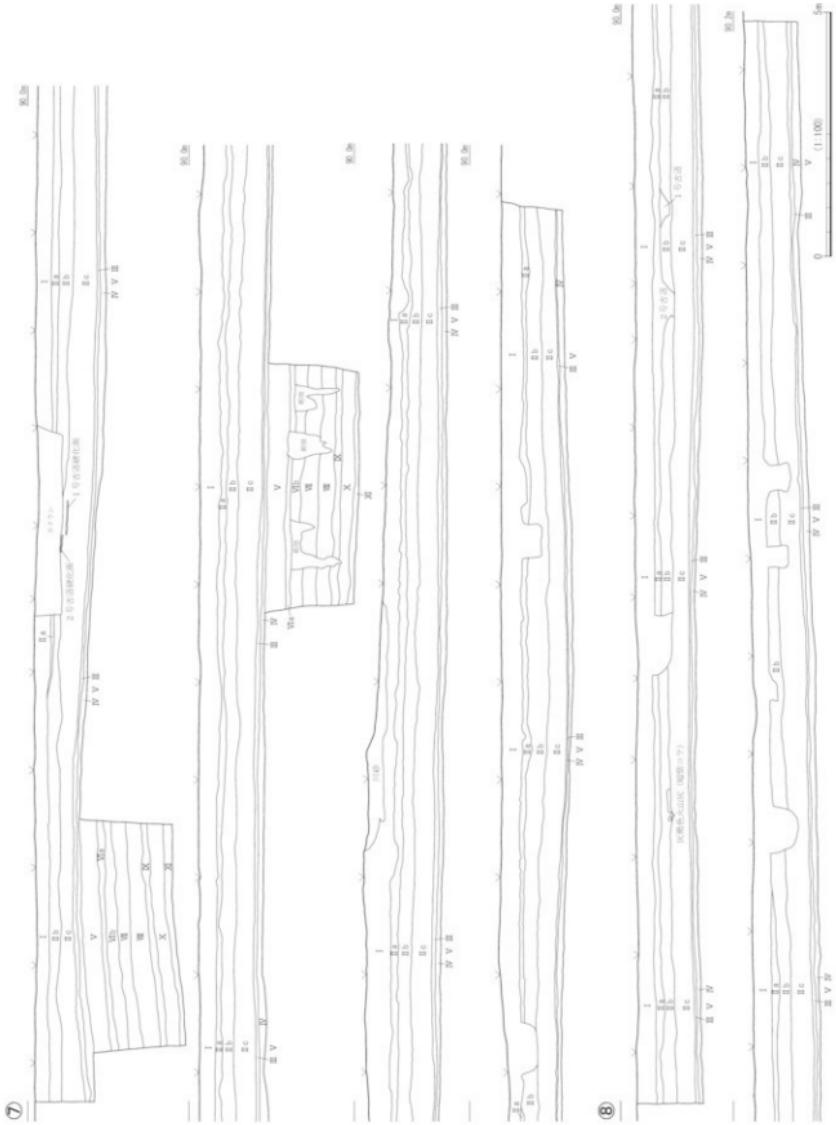
第3図 グリッド配置図・土層断面位置図



第4図 土層断面図①②③



第5図 土層断面図④⑤⑥



第6図 土層断面図⑦⑧

第3節 調査の成果

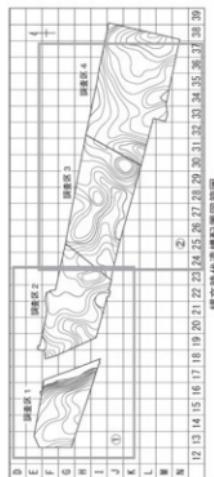
1 繩文時代後期・晚期の調査

(1) 調査の概要

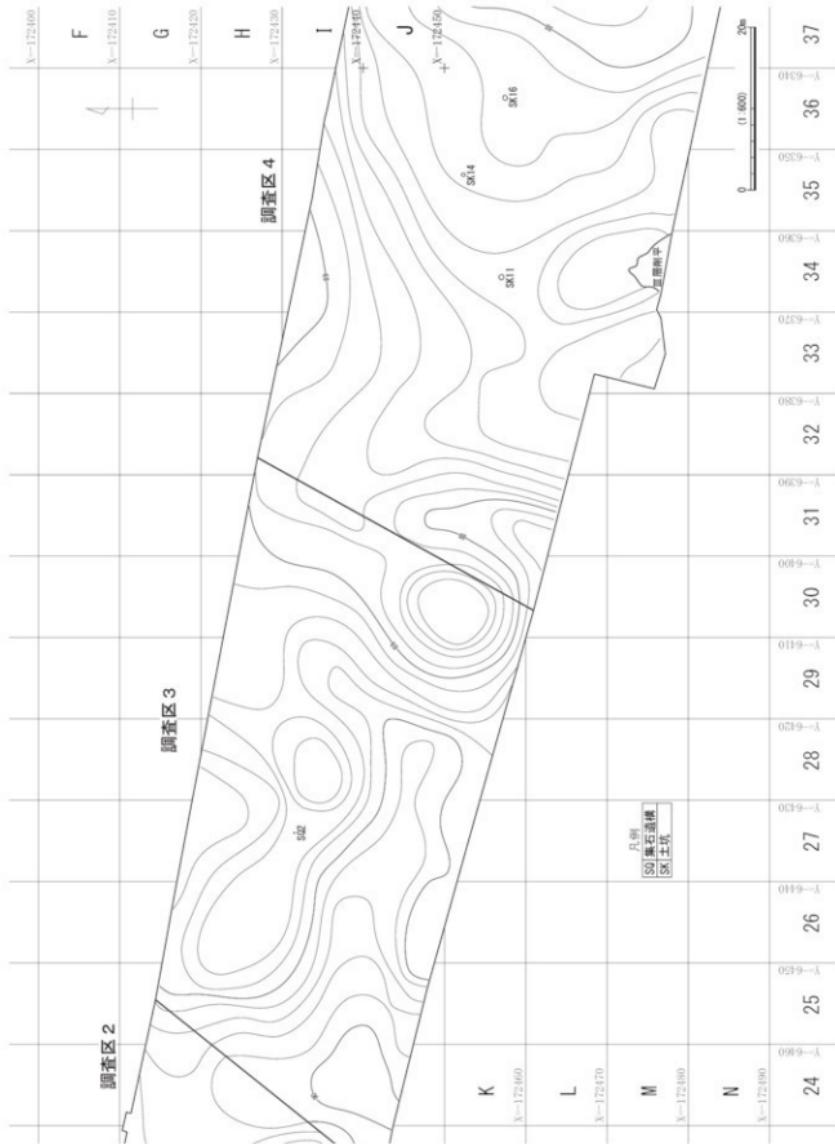
縄文時代の遺構・遺物は主にIIb層(黒褐色土)から出土している。遺構は、竪穴住居跡3軒、埋設土器12基、石斧集積遺構2基、集石遺構10基、落とし穴2基、土坑26基、ピットが複数検出されており、その大半の遺構が後期後半の中岳II式土器の時期に帰属するものである。

遺物は、後期後半の中岳II式土器が相当数出土している他、縄文時代後期中葉の西平式土器、晚期初頭の上加世田式土器、晚期中葉の黒川式土器、晚期末の刻目突帶文土器が出土している。石器は、縄文時代後期と晚期の

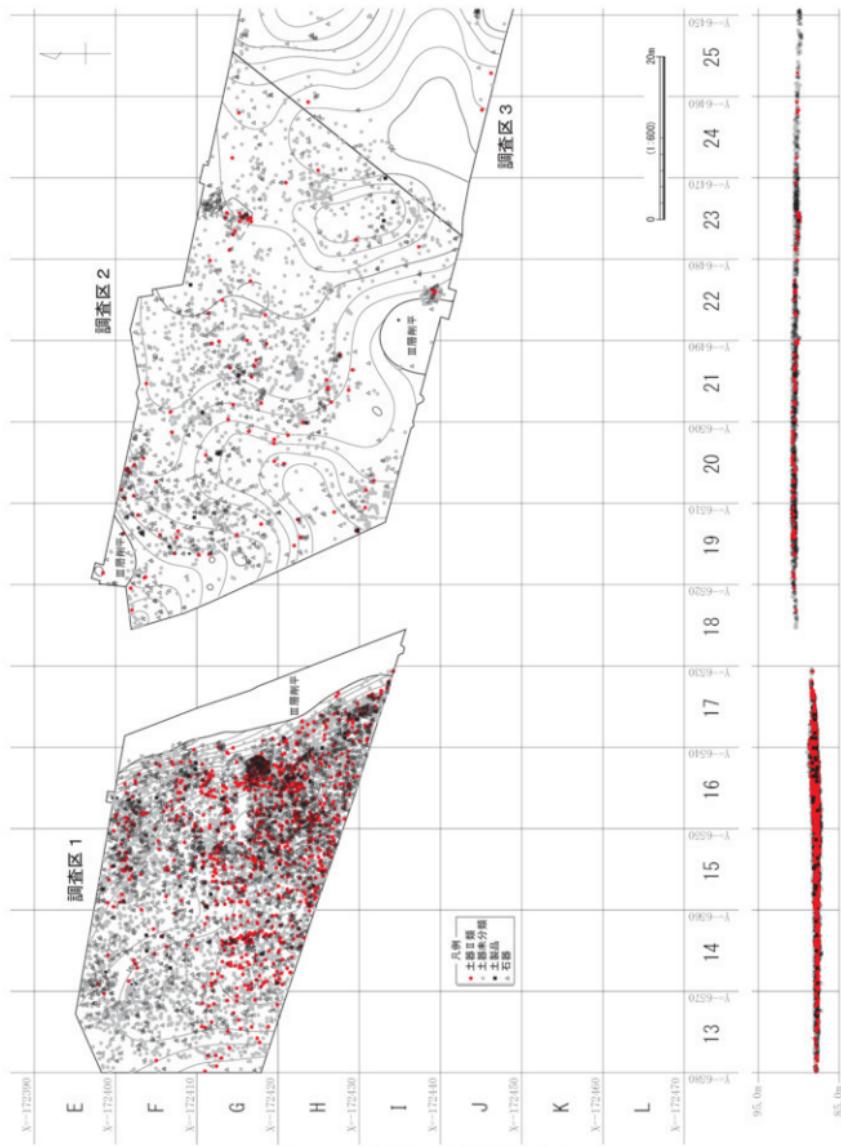
ものが混在している可能性があるが、殆どは中岳II式土器の時期に帰属するものと思われることから、一括して報告する。器種は打製石斧が多量に出土している他、磨製石斧・石鏃・ドリル・楔形石器・スクレイバー・磨石・敲石・石皿等多様である。また、垂飾・丸玉・勾玉・管玉等の装飾品や、精神文化を象徴する石刀が出土している。



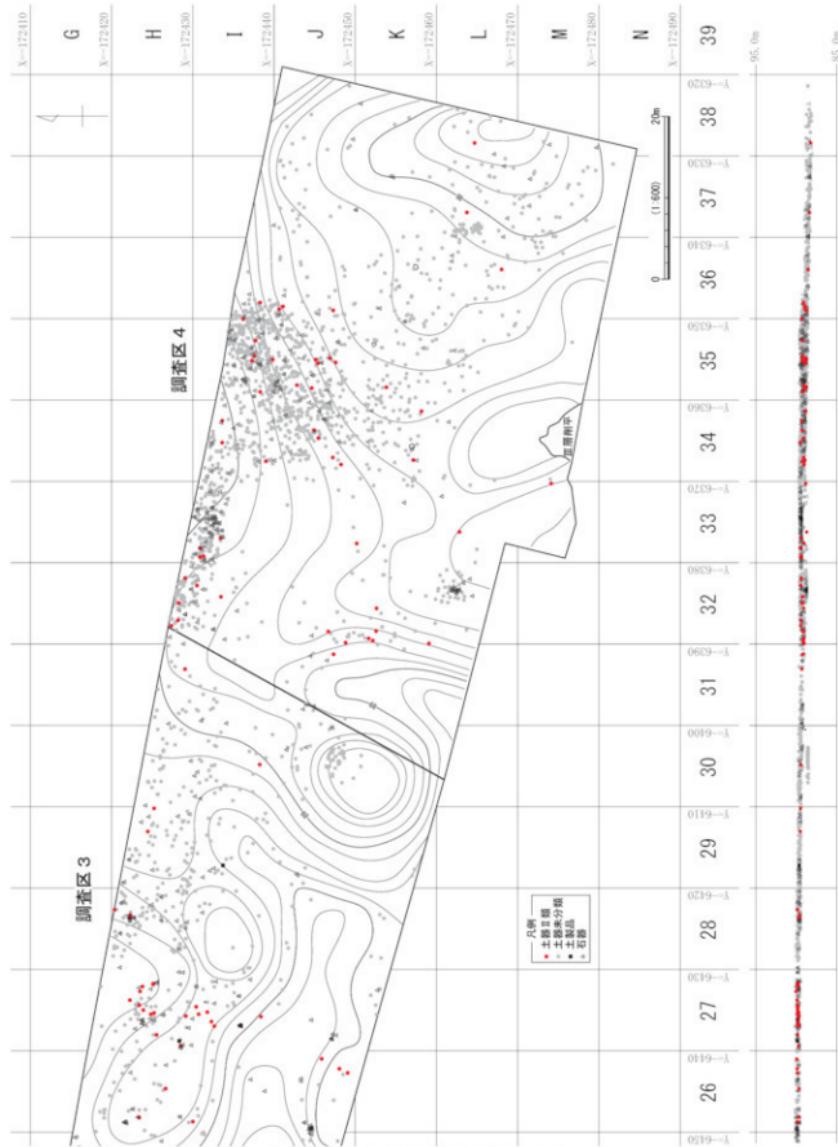
第7図 縄文時代後期遺構配置図(1)



第8図 繩文時代後期遺構配置図(2)



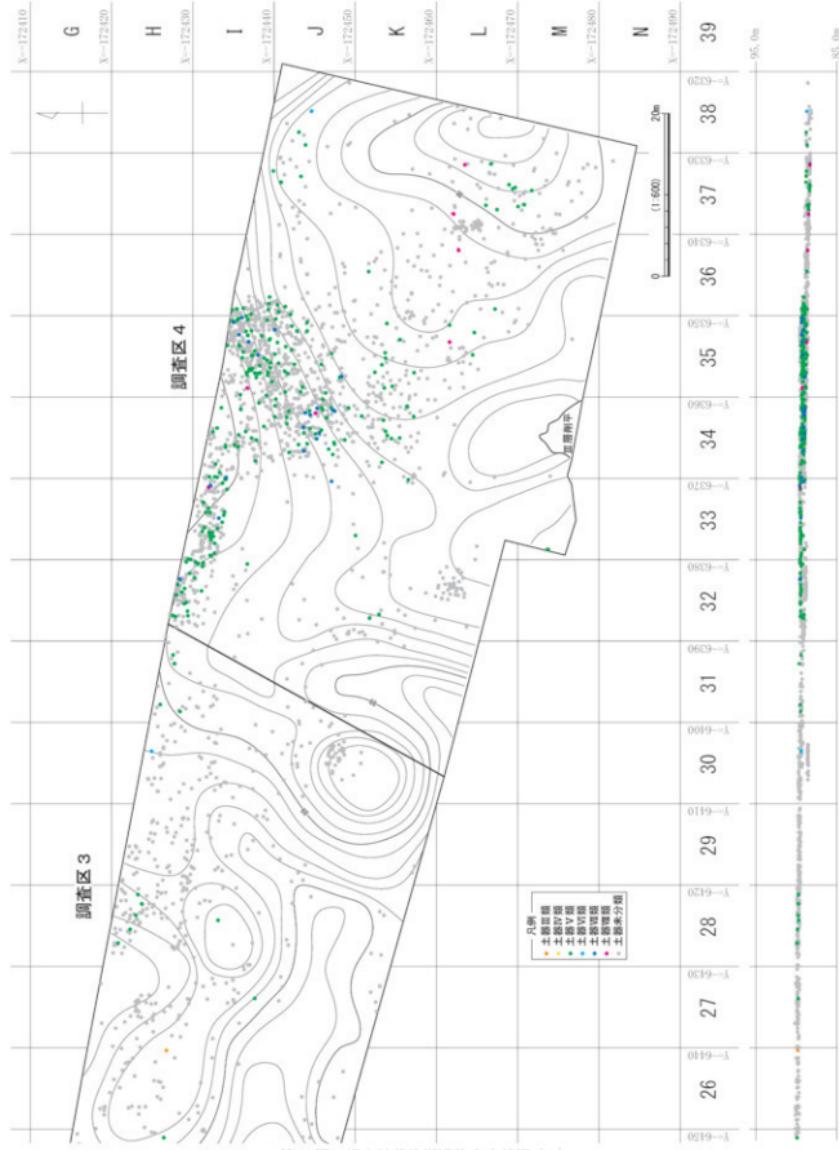
第9図 繩文時代後期遺物出土状況（1）



第10図 繩文時代後期遺物出土状況(2)



第11図 繩文時代晩期遺物出土状況(1)



第12図 繩文時代晩期遺物出土状況（2）

(2) 遺構 (第13図～第61図)

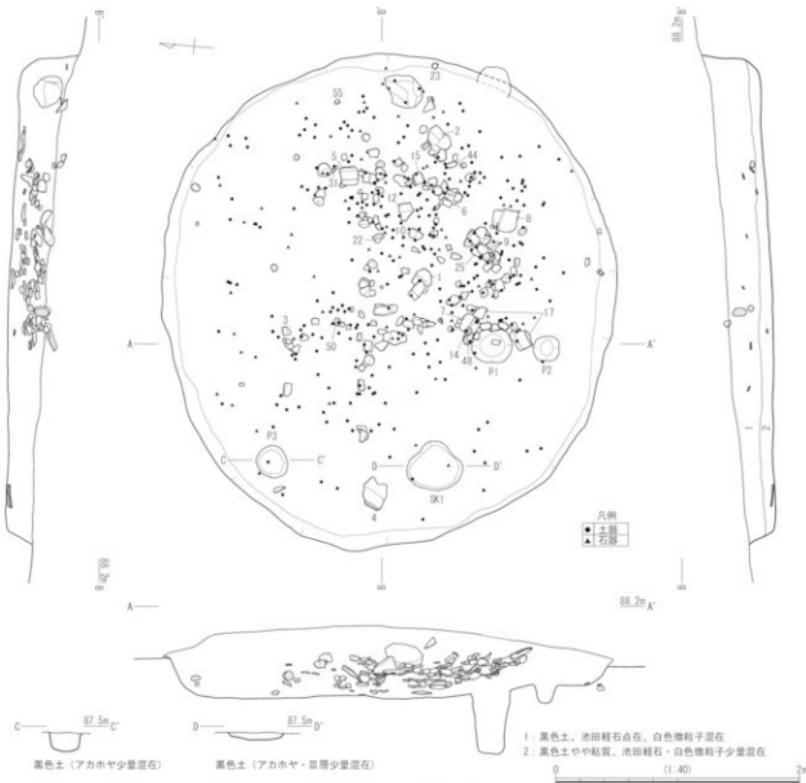
ア 穫穴住居跡

1号竪穴住居跡 (第13図～第19図)

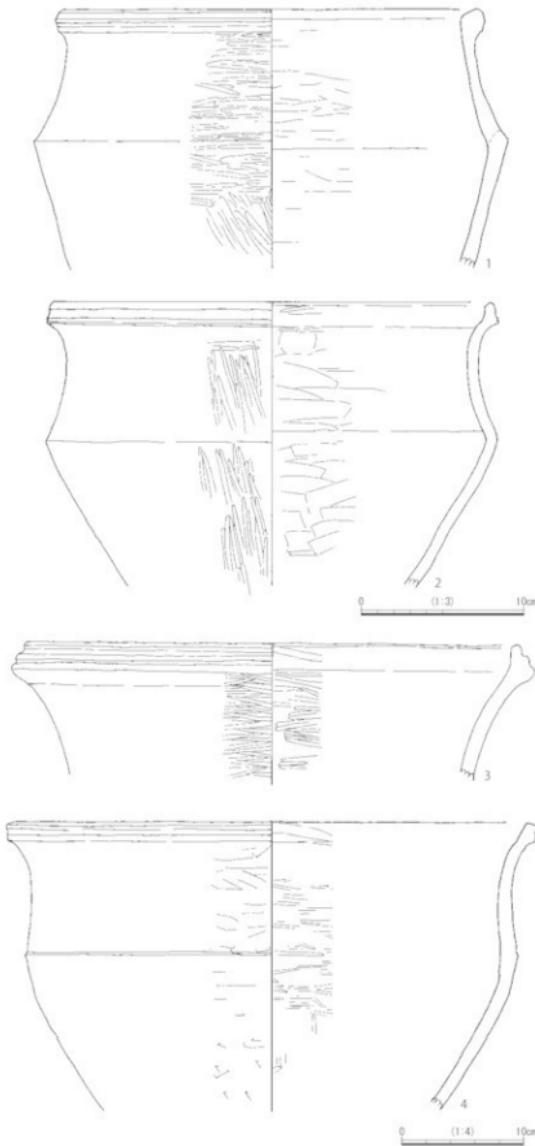
G-16区において検出された住居跡で、長軸4.1m、短軸3.8mの略円形を呈している。検出面はIIc層中で、確認面からの深さは0.4mである。埋土は黒色土を主体とする。南壁側にピット1・2、西壁側にピット3と不整形な円形で深さ0.06mの浅い土坑1基が検出されているが、柱穴と考えられる痕跡は認められなかった。南東隅にピット62に掘り込まれている。1号住居跡から採取された炭化物の分析の結果、¹⁴C年代測定で、3825±20年BPの年代値が得られている(第4章6参照)。

遺物は床面直上から1層下面にかけて多量に出土しており、中央から壁面に向かって広がっている。多量の土器に対し完形品が全くないことから、建物廃絶後に廃棄

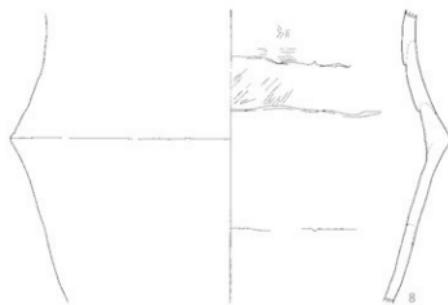
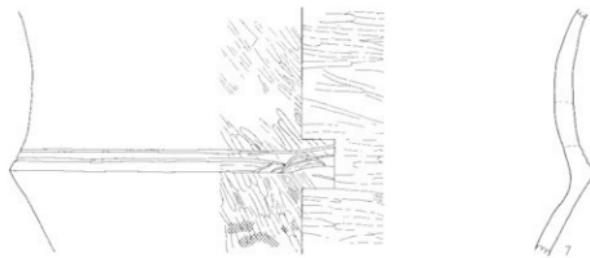
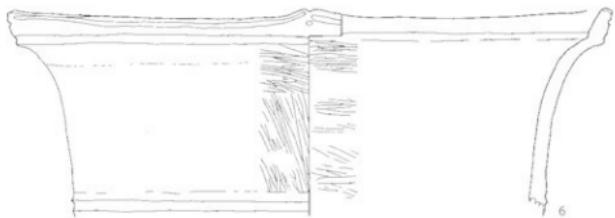
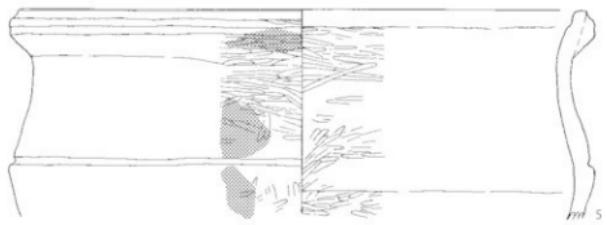
された可能性が考えられる。1～17・22・25・26は中岳II式土器の深鉢形土器、18～21・23・24が中岳II式土器の浅鉢形土器である。11がII A類、2～6・9・10・14・16・19がII B類、1・15がII C類、12がII D類、18・20がII G類にそれぞれ分類される。調査は、外面胸部上位に横位のミガキ、胸部下位に縱位のミガキを施すものが多い。内面は横位のナデと横位のミガキを行うものがある。1は口径25.2cmを測る。口縁部文様帯に浅く幅広の沈線を2条巡らせている。2は口径26.8cmを測る。3は口径32.0cmを測る。口縁部文様帯に沈線を2条巡らせている。外面に煤が付着している。4は口径41.1cmを測る。胸部に沈線を1条、口縁部文様帯に沈線を1条巡らせている。5は口径33.9cmを測る。胸部に沈線を1条巡らせ、口縁部は肥厚し、口縁部文様帯に浅く幅広の沈線を2条巡らせている。外面に煤が付着してい



る。6は口径37.0cmを測る4対の頂部を持つ波状口縁である。口縁部文様帶に沈線を2条巡らせ、頂部下に円形の凹点を施している。7・8は胴部最大径の所で「く」の字状に屈曲する胴部である。7は沈線を2条巡らせた後、三日月状の凹点を施している。9は口径27.3cmを測る4対の頂部を持つ波状口縁である。胴部に沈線を2条、口縁部文様帶に沈線を2条巡らせている。口唇部の一部に刻目を施している。外側には煤が付着している。10は口縁部文様帶に浅く幅広の沈線を2条巡らせている。11は口縁部文様帶に梢円形の凹点を連続的に施している。12は口径30.5cmを測る。胴部に沈線を2条巡らせている。口縁部文様帶に沈線を2条巡らせた後、「は」の字状の凹点を施している。13は沈線を1条巡らせた後、刻目を施している。14は波状口縁である。胴部に沈線2条と刻目、口縁部文様帶に沈線が2条と刻目がそれぞれ施されている。15は肥大した口縁部文様帶に沈線を3条巡らせている。16は口縁部文様帶に浅く幅広の沈線を2条巡らせている。17は胴部最大径の所で「く」の字状に屈曲する胴部である。胴部に沈線を2条巡らせた後、三日月形の凹点を施している。口縁部文様帶には沈線が2条残存している。18は口径25.6cmを測る。口縁部文様帶に沈線を2条巡らせている。19は口縁部文様帶に沈線を1条巡らせている。20～24は胴部最大径の所で「く」の字状に屈曲する胴部である。21は胴部に半月形の凹点を施している。22～24は胴部に沈線を1条巡らせている。22・24は胴部に梢円形の凹点を施している。23は胴部に刻目を施している。21・24は外側胴部上位には帯状に赤色顔料を塗布している。24は外側胴部下位には煤が付着している。25は底径4.1cmを測る、平底の底部である。26は底径28cmを測る、丸みを帯びた底部である。27～32は円盤形土製加工品である。周縁を打ち欠いた後、面取りを行っている。33～41は石器である。33・34がI c類で、35～38がII b類にそれぞれ分類される。39～41は未製品である。石材は、34・36・39～41が黒曜石、35・37・38が安山岩。

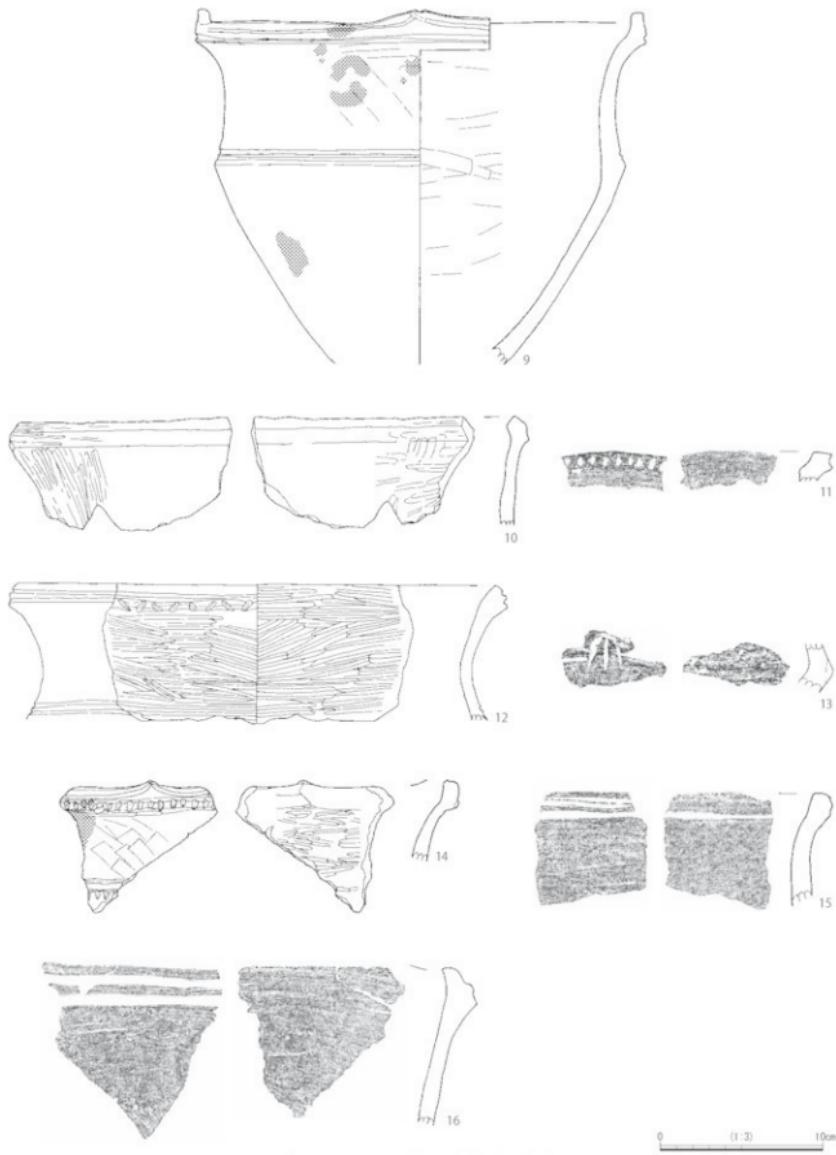


第14図 1号竪穴住居跡出土土器(1)

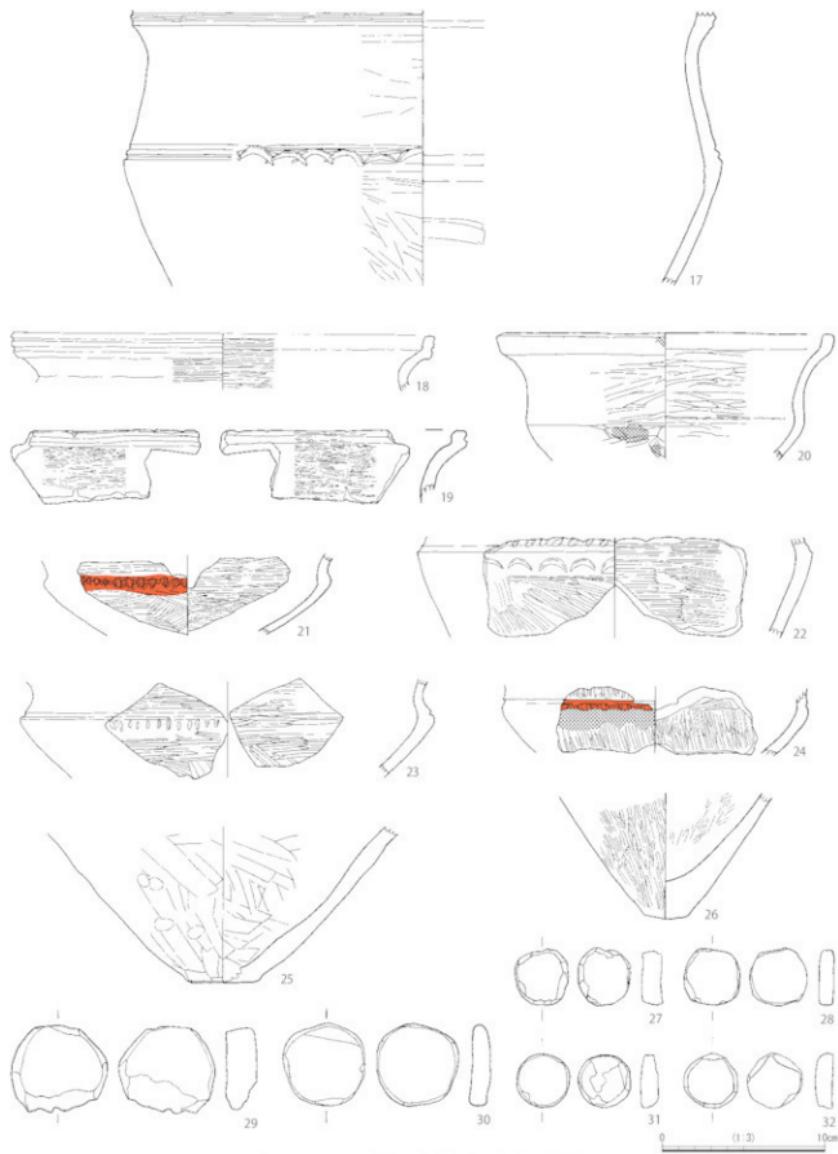


0 (1:3) 10cm

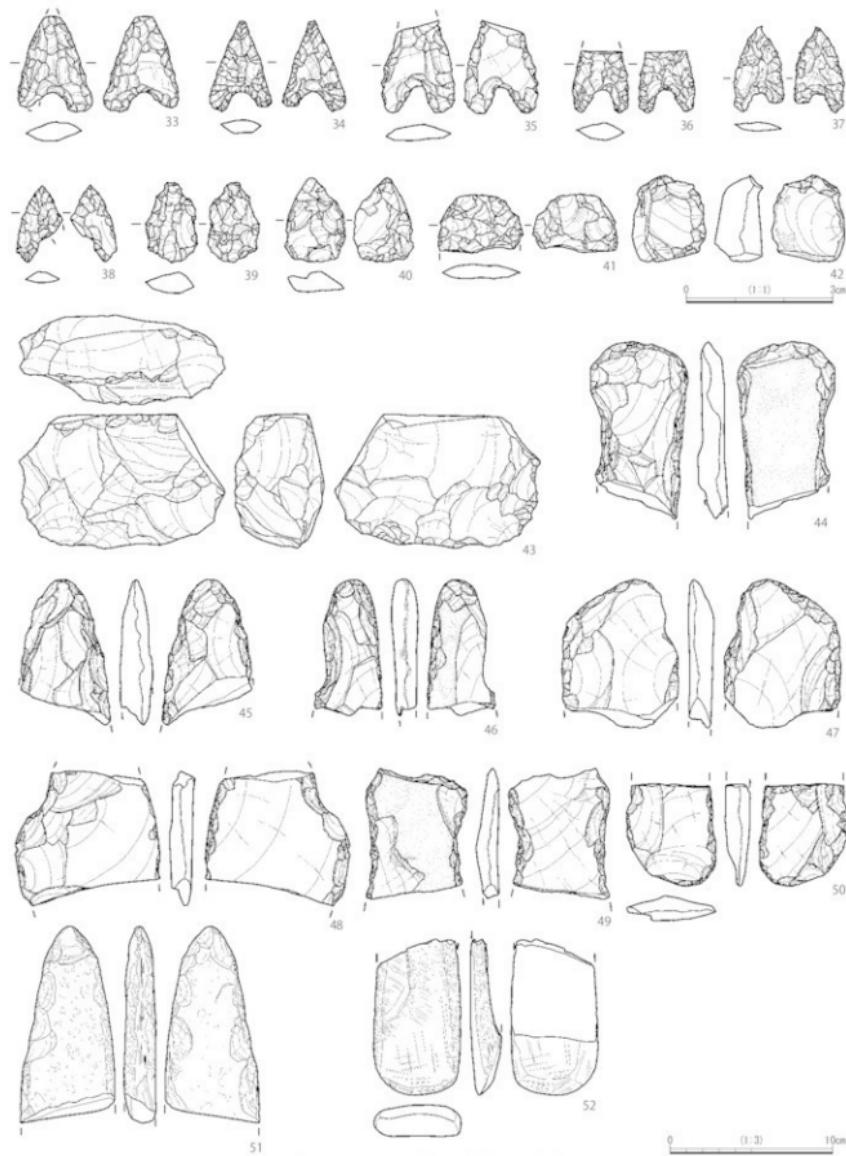
第15図 1号竪穴住居跡出土土器 (2)



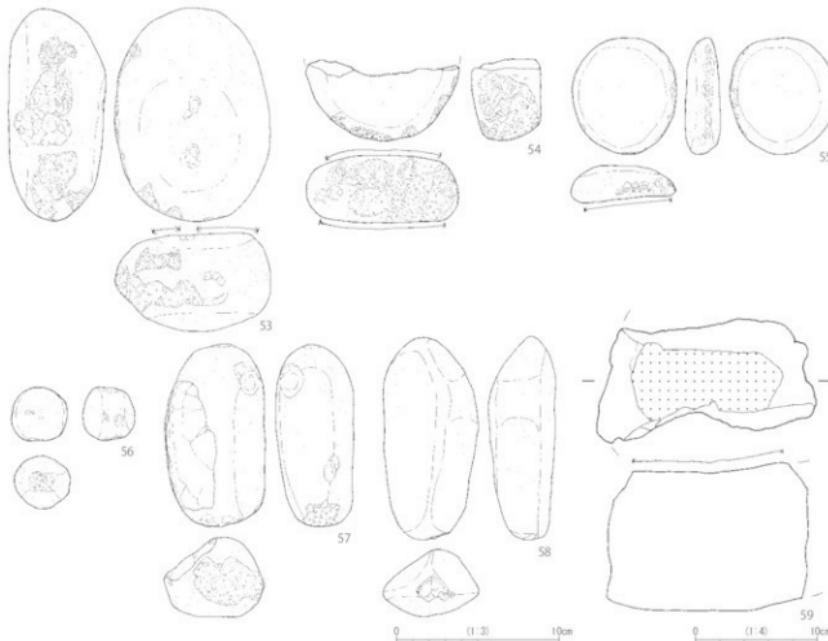
第16図 1号竪穴住居跡出土土器(3)



第17図 1号竪穴住居跡出土土器(4)・土製品



第18図 1号竖穴住居跡出土石器(1)



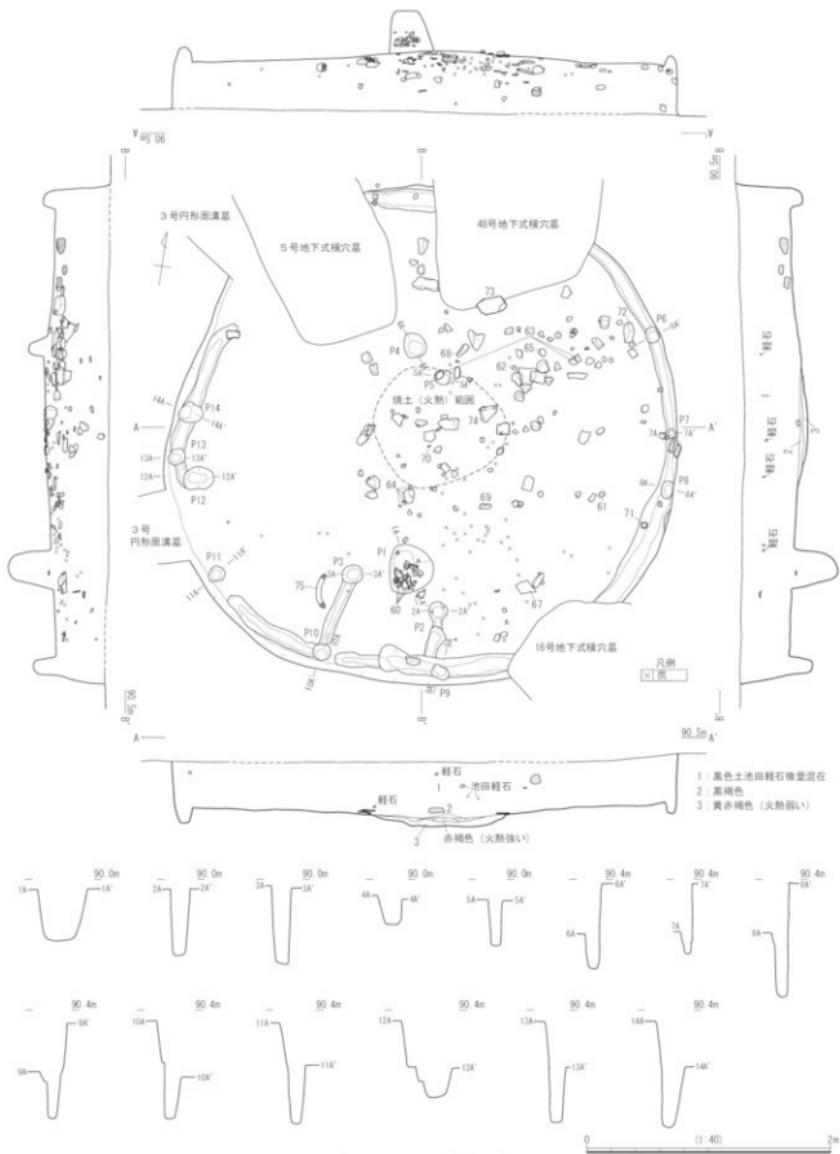
第19図 1号竪穴住居跡出土石器(2)

33がホルンフェルスである。42は黒曜石製の楔形石器である。上下両端部に対となる潰れ状の剥離が認められる。43はチャート製の石核で、打面転移を頻繁に行う石核の一端を剥離し、厚手の剥片を獲得し、裏面の下端縁から右側縁にかけて連続的に小型の剥片を剥離している。44～50は打製石斧である。45・47・50がI a類、49がIII a類、44・46がIV a類にそれぞれ分類される。全て欠損している。43を除き、素材剥片の剥離面や自然面を残している。石材は全てホルンフェルスである。51・52は磨製石斧で、共に欠損している。51は未製品で、側縁にのみ研磨痕が認められる他、側縁に剥離痕、表裏面中央に敲打成形の痕跡が残される。石材は共にホルンフェルスである。53～58は磨石・敲石類である。53～55は扁平な梢円形の礫を利用したもので、磨面と敲打痕が複合して認められる。56は球状の礫を利用したもので、右側縁及び、下端部に敲打痕が集中する。57・58は棒状の礫を利用したもので、下端部に敲打痕が集中する。石材は、53～57が安山岩、58がホルンフェルスである。59は石皿で、大部分が欠損している。表面は使用により、緩やかに凹面を形成している。石材は凝灰岩である。

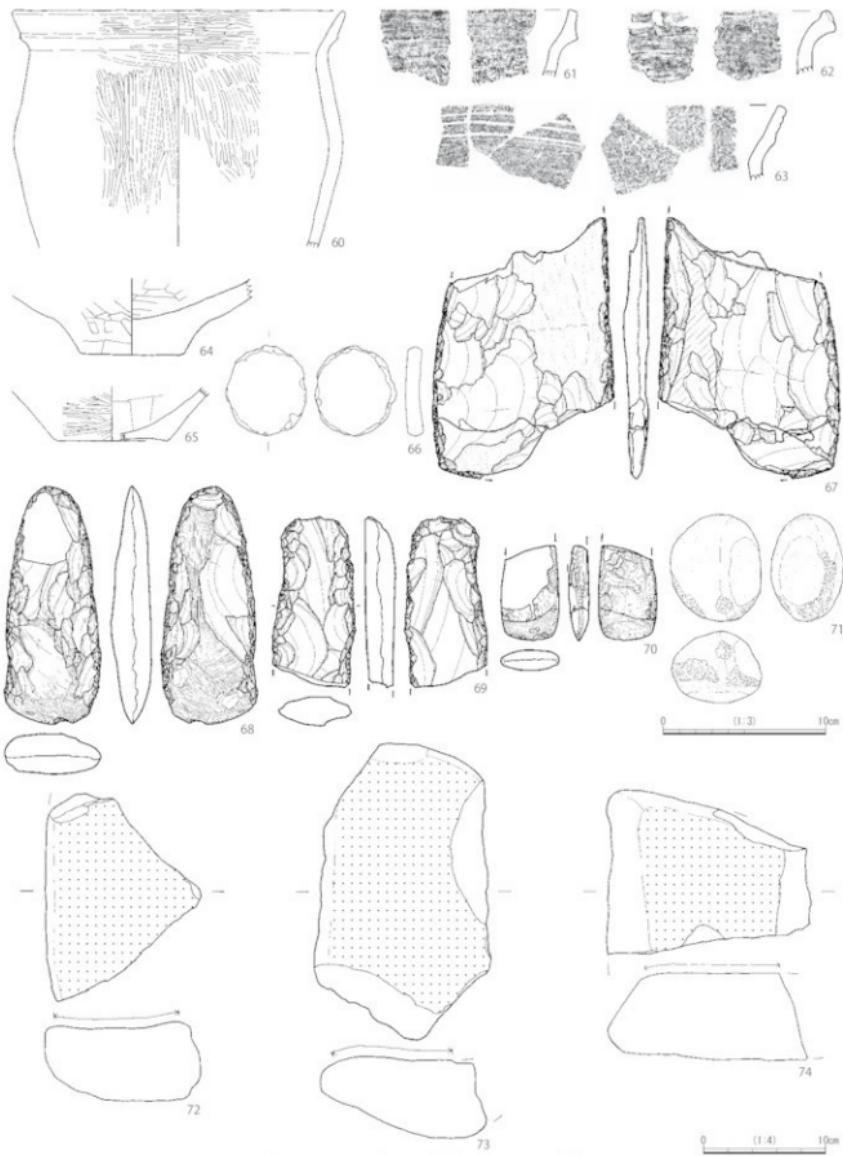
2号竪穴住居跡(第20図～第22図)

G-22区において検出された住居跡で、長軸4.2m、短軸4.1mの略円形を呈している。検出面はII b層中で、確認面からの深さは0.5mである。埋土は黒色土を主体とする。壁帶溝が略全周しており、溝の中に柱穴と思われるビットが検出されている。稟際の一部が3号円形周溝墓、5号弧状遺構、5・17・49号地下式横穴墓に掘り込まれている。中央に浅く窪んだ地床がある。焼土と炭化物・材が検出されている。2号住居から採取された炭化材の分析の結果、炭化材はクリで、¹⁴C年代測定では3015±20年BPの年代値が得られている(第4章6参照)。

遺物は主に床面上から出土しており、中央から東壁面に向かって広がっている。60～62・64・65は中岳II式土器の深鉢形土器である。61・62がII B類、60がII E類に分類される。63は上加世田式土器の深鉢形土器である。60は口径20.0cmを測る。器面調整は内外面共に丁寧なヘラミガキを施している。62は口縁部文様帶に梢円形の凹点が施されている。63は口縁部文様帶に沈線を3条巡らせている。64は底径6.2cmを測る平底



第20図 2号竖穴住居跡



第21図 2号竖穴住居跡出土土器・石器(1)



第22図 2号竪穴住居跡出土石器（2）

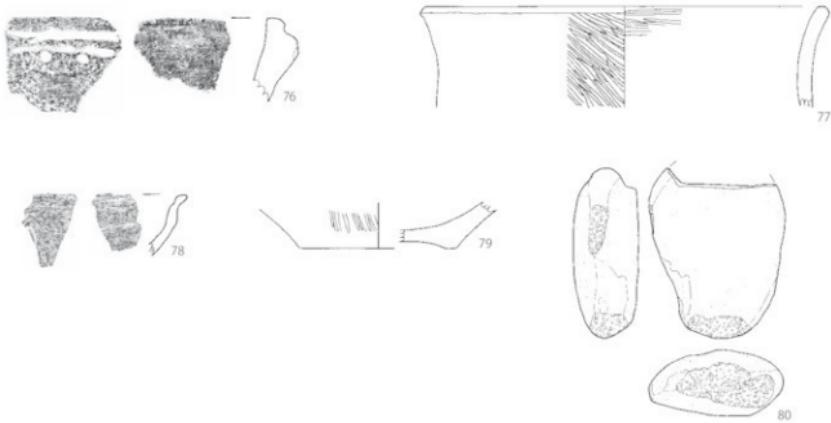
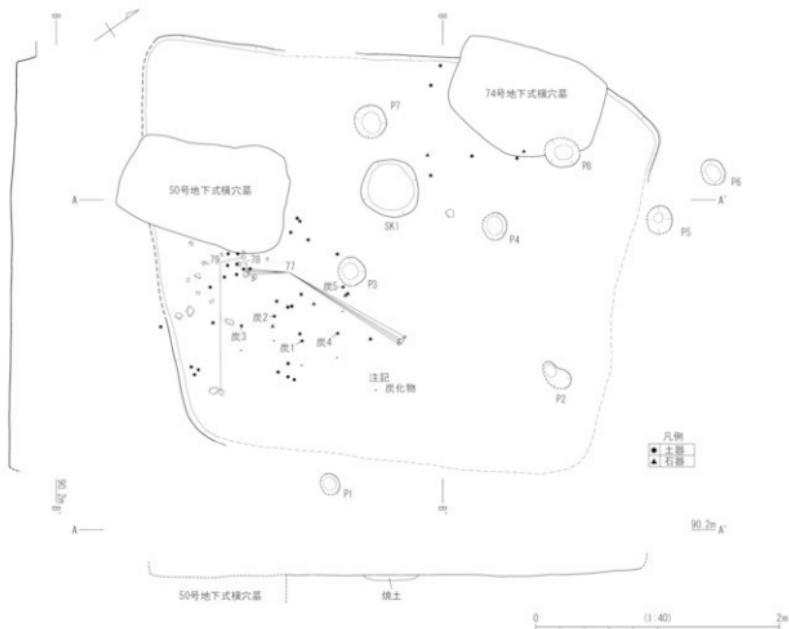
である。65は底径6.6cmを測る、やや上げ底の底部で、器厚が薄い。66は円盤形土製加工品である。周縁を打ち欠いた後、面取りを行っている。67～69は打製石斧である。67・69がI a類、68がI b類に分類される。67・68は自然面を残している。69は裏面に石材剥片時の剥離面を残している。石材は全てホルンフェルスである。70は磨製石斧で、基部を欠損している。刃部には使用によるものと思われる刃こぼれが認められる。石材はホルンフェルスである。71は磨面と敲打痕が複合して認められる礫石器である。扁平な梢円形の礫を利用している。石材は安山岩である。72～74は石皿である。全て欠損品である。72・73は使用により、緩やかに凹面を形成しており、74は平坦な使用面を形成している。石材は72・73が凝灰岩、74が安山岩である。75は最大長28.6cm、最大幅4.3cm、最大厚1.7cmの天附型の石刀である。住居内南西側の床面より出土している。刃部は鋭利でない。内反りで頭部に瘤状の突起ではなく全体的に扁平である。また、頭部と端部に櫛原文様と呼ばれる線刻が施されている。頭部は沈線により4分割された区画の中に4本と5本の弧状の文様が描かれている。端部も2条の沈線と1条の沈線で4分割した区画の中に3～4本の弧状の文様が描かれている。沈線内には赤色顔料が観察され、頭部の一部には黒色塗膜も認められる。蛍光X線分析により赤色顔料は朱であることが、ATR-FTIR分析により黒色塗膜は漆であることが明らかとなっている。資料の肉眼観察と分析結果

より、石刀に朱を塗布した後に黒色漆を塗布していることが理解できる。石材はホルンフェルスである。

3号竪穴住居跡（第23図）

G-23区において検出された住居跡で、長軸4.2m、短軸3.6mの方形に近い形状を呈している。検出面はII c層中で、確認面からの深さは0.2mである。埋土は黒色土を主体とする。住居内外にピットが複数基認められるが、規則性はなく、柱穴と考えられる痕跡は認められなかった。ピット264を掘り込み、50・60・74号地下式横穴墓に掘り込まれる。中央に略円形で深さ0.07mの浅い土坑が検出されており、焼土及び炭化物を含むことからがとを考えられる。3号住居から採取された炭化材の分析の結果、¹⁴C年代測定で、3030±20年BPの年代値が得られている（第4章6参照）。

住居内の遺物は少なく、図化できたのは5点である。76・77・79が中岳II式土器の深鉢形土器、78が中岳II式土器の浅鉢形土器である。76はII C類、77はII F類、78はII I類に分類される。76は肥厚した口縁部で、口縁部文様帶に沈線を2条巡らせ、三日月形と梢円形の四点を施している。77は口径24.2cmを測る。器面調整は、外面が斜め方向のミガキ、内面は横方向のミガキを施している。79は底径9.6cmを測る、やや上げ底の底部である。80は扁平な梢円形の礫を利用した敲石である。左側縁及び下端部に敲打痕が認められる。石材は砂岩である。



第23図 3号竪穴住居跡・出土土器・石器

イ 埋設土器

1号埋設土器(第24図・第26図)

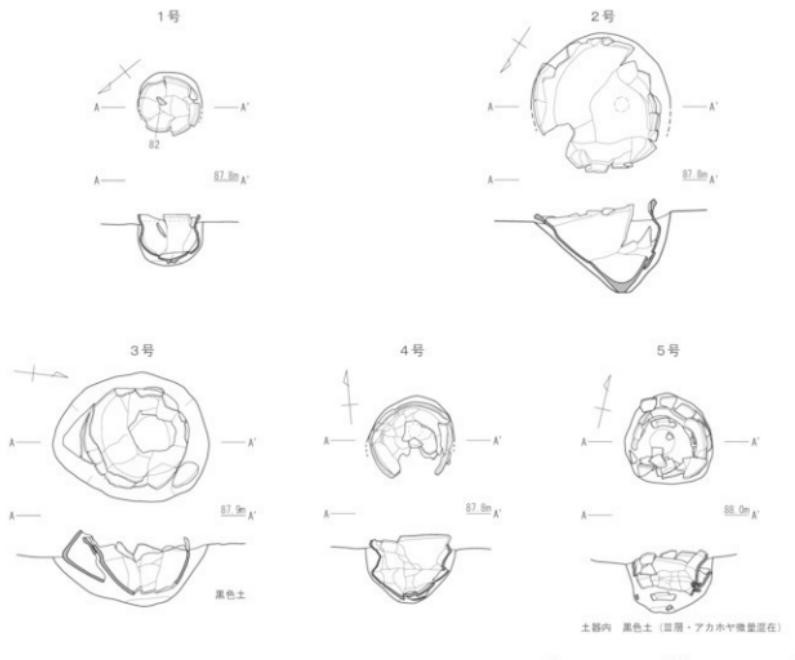
H-14区において検出された埋設土器で、掘り込みは長軸・短軸共に26.0cmの略円形を呈している。検出面はII b層中で、確認面からの深さは17.0cmである。埋土は黒色土を主体とする。土器は正位置で埋設されている。

81は口径22.2cm、底径4.0cm、器高23.2cmを測る中岳II式土器の深鉢形土器である。II B a類に分類される。底部はやや上げ底状で、胴部最大径の所までは直線的に延びる。胴部最大径の所で「く」の字状に内側に屈曲し、頸部は内傾しながら外反する。直行する口縁部へ至る。器面調整は、外面胴部下位がナデ仕上げ、胴部中位から頸部にかけて縦方向、口縁部は横方向のミガキを施している。内面は胴部が斜め方向、口縁部が横方向のミガキを施している。82は打製石斧の刃部である。表裏両面共に縁辺からの調整削離を行ひ、部分的に研磨を施している。石材は、ホルンフェルスである。

2号埋設土器(第24図・第26図)

G-14区において検出された埋設土器で、掘り込みは長軸57.5cm、短軸57.0cmの略円形を呈している。検出面はII b層中で、確認面からの深さは33.0cmである。埋土は黒色土を主体とする。土器は正位置で埋設されている。

83は口径21.6cm、底径3.6cm、器高42.9cmを測る中岳II式土器の深鉢形土器である。II C b類に分類される。底部は不安定な形状でやや膨らんでおり、胴部最大径の所までは直線的に延びる。胴部最大径の所で内側に屈曲し、頸部は内傾しながら外反する口縁部へ至る。口縁部は肥厚し口縁部文様帶に浅く幅広な沈線を2条巡らせ、梢円形の凹点を施している。胴部最大径の所には、浅く幅広な沈線を2条巡らせ、梢円形と山形の凹点を施している。器面調整は、外面胴部下位が縦方向のヘラケズリ、胴部中位から頸部にかけて縦方向のミガキを施している。内面は底部から胴部下位にかけてナデ、胴部中位から口縁部にかけて横方向を主体とするミガキが施されているが大部分が剥落している。



第24図 1号・2号・3号・4号・5号埋設土器

3号埋設土器(第24図・第27図)

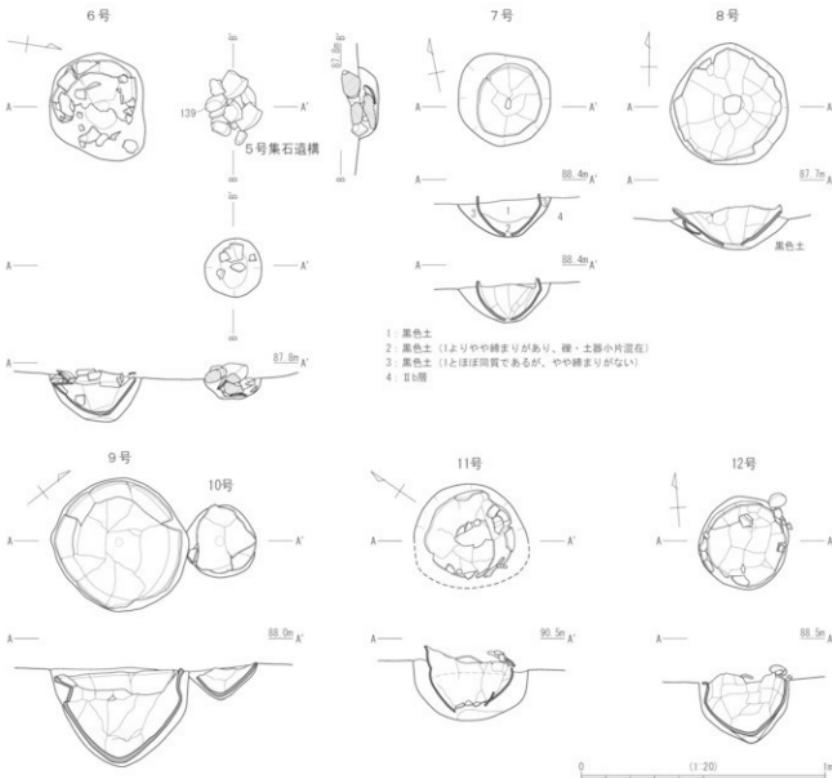
G-15区において検出された埋設土器で、掘り込みは長軸64.0cm、短軸53.0cmの楕円形を呈している。検出面はII b層中で、確認面からの深さは26.0cmである。埋土は黒色土を主体とする。掘り込みの南壁際で土器の底部が倒れた状態になっており、胸部から口縁部は、掘り込み中央で底部と接するように正位置で埋設されている。

84は口径36.7cm、底径18cm、器高39.4cmを測る中岳II式土器の深鉢形土器である。II A類に分類される。底部は不安定な形状でやや膨らんでおり、胸部最大径の所までは直線的に延びる。胸部最大径の所で「く」の字状に内側に屈曲し、頸部は内傾しながら外反し、直行する口縁部へ至る。4対の頂部を持つ波状口縁で、口縁部は肥厚し口縁部文様帶に浅く幅広な沈線を2条巡らせ、

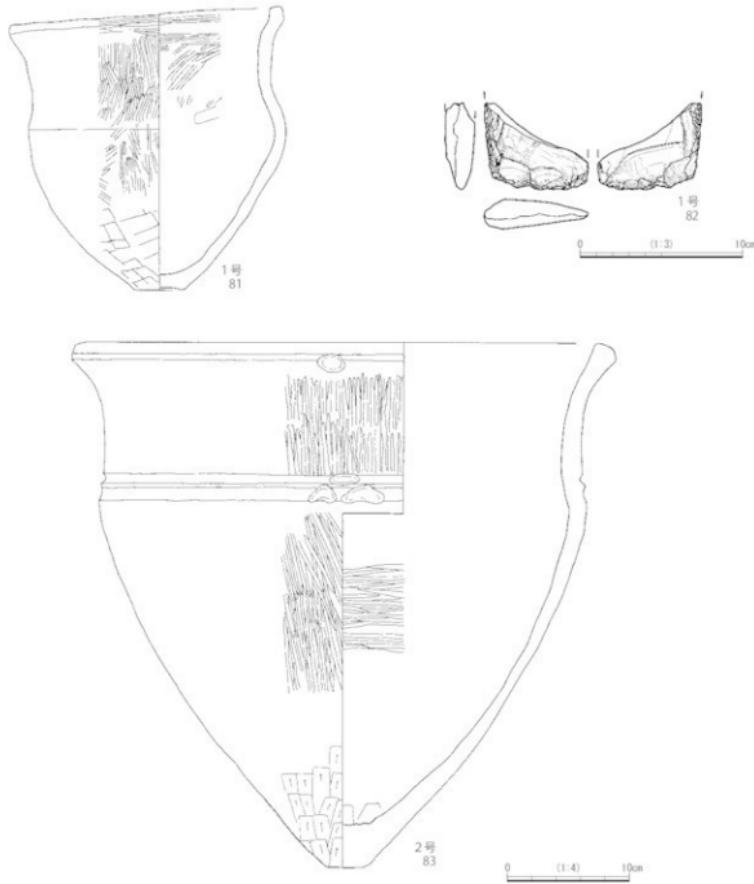
頂部下で円形の凹点を施している。胸部最大径の所には、沈線を2条巡らせている。器面調整は、外面胴部下位がナデ、胸部下位から中位にかけて斜め方向、頸部から口縁部にかけて横方向のミガキを施している。内面は胴部下位から胴部中位までが横方向、頸部から口縁部にかけて横方向を主体とするミガキが施されている。内面には煤が付着している。

4号埋設土器(第24図・第27図)

G-15区において検出された埋設土器で、掘り込みは長軸36.0cm、短軸33.5cmの略円形を呈している。検出面はII b層中で、確認面からの深さは22.0cmである。埋土は黒色土を主体とする。土器は正位置で埋設されており、4分の1欠損している。



第25図 6号・7号・8号・9号・10号・11号・12号埋設土器



第26図 1号・2号埋設土器出土遺物

85は口径29.7cm、底径3.6cm、器高31.3cmを測る中岳II式土器の深鉢形土器である。II B a類に分類される。底部は不安定な形状でやや膨らんでおり、胴部最大径の所までは直線的に延びる。胴部最大径の所で「く」の字状に内側に屈曲し、頸部は内傾しながら外反し、直行する口縁部へ至る。口縁部文様には沈線を2条巡らせている。器面調整は、外面胴部下位がナデ仕上げ、胴部中位から頸部にかけて縱方向、口縁部は横方向のミガキを施している。内面は胴部がナデ、頸部から口縁部が横方向のミガキを施している。

5号埋設土器(第24図・第27図)

E-14区において検出された埋設土器で、掘り込みは長軸37.5cm、短軸36.0cmの略円形を呈している。検出面はII b層中で、確認面からの深さは22.0cmである。理土は黒色土を主体とする。土器は底部がない状態で出土した。口縁部は復元できるが、半分は正位置に、もう片方は、逆位置に重ねて埋設されている。

86は口径16.4cmを測る中岳II式土器の深鉢形土器である。II B a類に分類される。胴部最大径の所で「く」の字状に内側に屈曲し、頸部は内傾しながら外反し、直行



第27図 3号・4号・5号埋設土器出土遺物

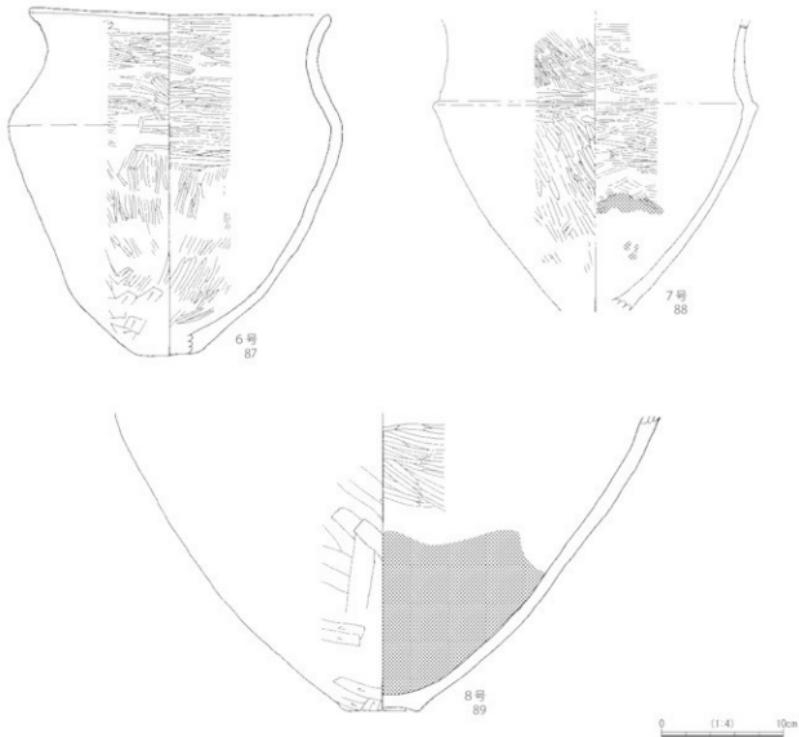
する口縁部へ至る。4対の頂部を持つ波状口縁で、口縁部文様帶には沈線を2条巡らせ、頂部下に円形の凹点を施している。器面調整は、外面胴部がナデ後、縦方向のミガキ、頭部から口縁部にかけて横方向のミガキを施している。内面は胴部から口縁部まで主に横方向のミガキを施している。

6号埋設土器(第25図・第28図)

F-14区において検出された埋設土器で、掘り込みは長軸44.0cm、短軸39.0cmの略円形を呈している。検出

面はII b層中で、確認面からの深さは23.0cmである。埋土は黒色土を主体とする。5号集石構造に隣り合って出土しており、土器は正位置で埋設されており、2分の1が欠損している。

87は口径23.0cm、底径5.0cm、器高28.7cmを測る中岳II式土器の深鉢形土器である。II F a類に分類される。底部は不安定な形状でやや膨らんでおり、胴部最大径の所までは直線的に延びる。胴部最大径の所で「く」の字状に内側に屈曲し、頭部は内傾しながら外反する口縁部へ至る。器面調整は、外面胴部下位がケズリ後、縦方向の



第28図 6号・7号・8号埋設土器出土遺物

ミガキ、頸部から口縁部にかけて横方向のミガキを施している。内面は胴部下位が縱方向のミガキ、胴部上位から口縁部までが横方向のミガキを施している。

7号埋設土器（第25図・第28図）

E・F-16区において検出された埋設土器で、掘り込みは長軸・短軸共に38.0cmの略円形を呈している。検出面はII b層中で、確認面からの深さは17.0cmである。埋土は黒色土を主体とする。土器は正位置で埋設しており、底部及び口縁部を欠損している。

88は胴部最大径35.0cmを測る中岳II式土器の深鉢形土器である。胴部最大径の所で「く」の字状に内側に屈曲し、頸部は内側しながら外反する。器面調整は、外面胴部下位がケズリ後、斜め方向のミガキが施される。斜め方向のミガキは頸部まで認められる。内面は胴部下位から頸部まで横方向のミガキを施している。内面に煤が付着している。

8号埋設土器（第25図・第28図）

E-13区において検出された埋設土器で、掘り込みは長軸50.5cm、短軸48.5cmの略円形を呈している。検出面はII c層中で、確認面からの深さは12.0cmである。埋土は黒色土を主体とする。土器は正位置で埋設しており、胴部上位から口縁部を欠損している。

89は底径6.3cmを測る中岳II式土器の深鉢形土器である。底部はやや上げ底状で、胴部最大径の所に向かって直線的に延びる。器面調整は、外面胴部下位がケズリ、内面胴部下位が横方向と斜め方向のミガキを施している。内面底部には、煤が付着している。

9号埋設土器（第25図・第29図）

F-15区において検出された埋設土器で、掘り込みは長軸56.0cm、短軸54.0cmの略円形を呈している。検出面はII b層中で、確認面からの深さは41.0cmである。理



第29図 9号・10号埋設土器出土遺物

土は黒色土を主体とする。10号埋設土器を掘り込んでいる。土器は10号埋設土器に接して出土しており、正位置で埋設している。

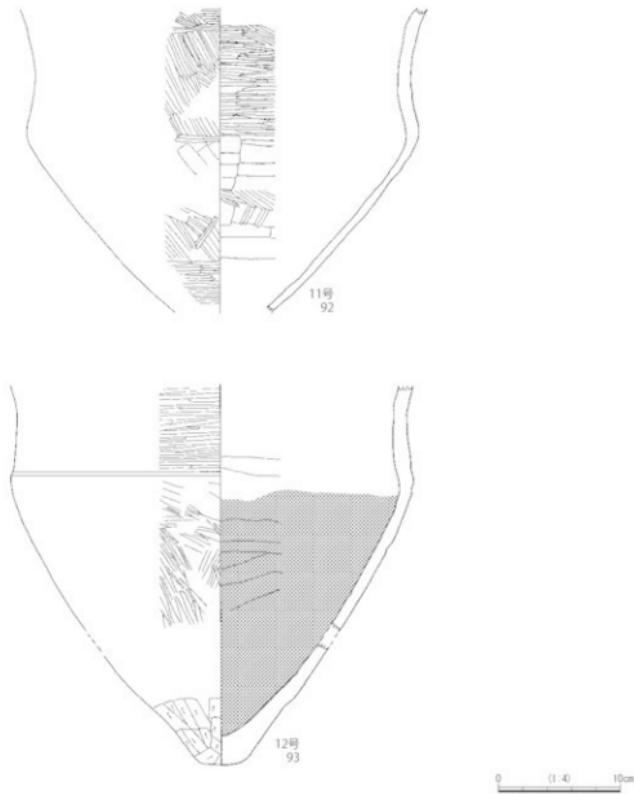
90は口径4.2cm、底径4.2cm、器高37.4cmを測る中岳II式土器の深鉢形土器である。II b類に分類される。底部はやや上げ底状で、胴部最大径の所までは直線的に延びる。胴部最大径の所で「く」の字状に内側に屈曲し、頸部は内傾しながら外反し、直行する口縁部へ至る。4対の頂部を持つ波状口縁で、口縁部は肥厚し口縁部文様帶に浅く幅広な沈線を2条巡らせ、頂部下で梢円形と三日月形の凹点を施している。胴部最大径の所には、沈線を2条巡らせた後、口縁部文様帶と同様に梢円形と三日月形の凹点を施している。器面調整は、外面胴部下位がナデ後、縱方向のミガキ、胴部上位から口縁部にかけて横方向のミガキを主体的に施している。内面は胴部下位

から口縁部にかけて横方向のナデが施され、部分的にミガキも施されている。

10号埋設土器（第25図・第29図）

F-15区において検出された埋設土器で、掘り込みは長軸31.0cm、短軸30.0cmの略円形を呈している。検出面はII b層中で、確認面からの深さは15.0cmである。埋土は黒色土を主体とする。9号埋設土器に掘り込まれている。土器は9号埋設土器に接して出土しており、胴部下位から底部までの状態で正位置に埋設している。

91は底径1.8cmを測る中岳II式土器の深鉢形土器である。底部は不安定な形状でやや膨らんでおり、胴部最大径の所に向かって直線的に延びる。器面調整は、外面胴部下位が縱方向のミガキで底部付近がケズリ、内面胴部下位は横方向のナデ後、ミガキを施している。



第30図 11号・12号埋設土器出土遺物

11号埋設土器（第25図・第30図）

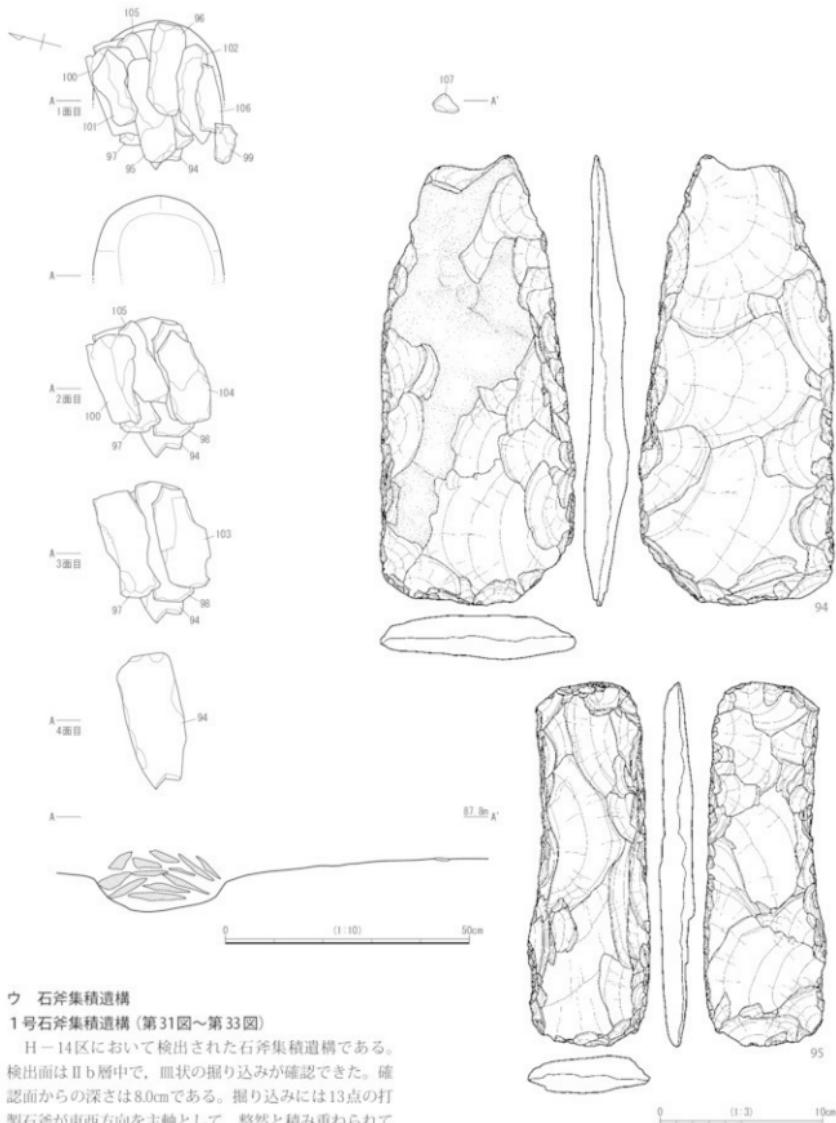
I-23区において検出された埋設土器で、掘り込みは長軸37.0cm、短軸36.0cmの略円形を呈している。検出面はIIc層中で、確認面からの深さは23.0cmである。埋土は黒色土を主体とする。1号円形周溝墓の溝により口縁部が破壊されている。土器は正位置で埋設しており、底部及び口縁部を欠損している。

92は胴部最大径32.0cmを測る中岳II式土器の深鉢形土器である。胴部最大径の所で「く」の字状に内側に屈曲し、頭部は内傾しながら外反する。器面調整は、外面胴部下位がナデと斜め方向、横方向のミガキが施される。ミガキは頭部まで認められる。内面は胴部下位から頭部までナデと横方向のミガキを施している。

12号埋設土器（第25図・第30図）

E・F-16区において検出された埋設土器で、掘り込みは長軸39.0cm、短軸38.0cmの略円形を呈している。検出面はIib層中で、確認面からの深さは25.0cmである。埋土は黒色土を主体とする。土器は正位置で埋設しており、口縁部を欠損している。

93は底径4.0cmを測る中岳II式土器の深鉢形土器である。底部は不安定な形状でやや膨らんでおり、胴部最大径の所に向かって直線的に延びる。器面調整は、外面底部付近がケズリ、副部が斜め方向のミガキ、頭部が横方向のミガキを施している。内面胴部から頭部が横方向のナデを施している。内面に煤が付着している。



ウ 石斧集積遺構

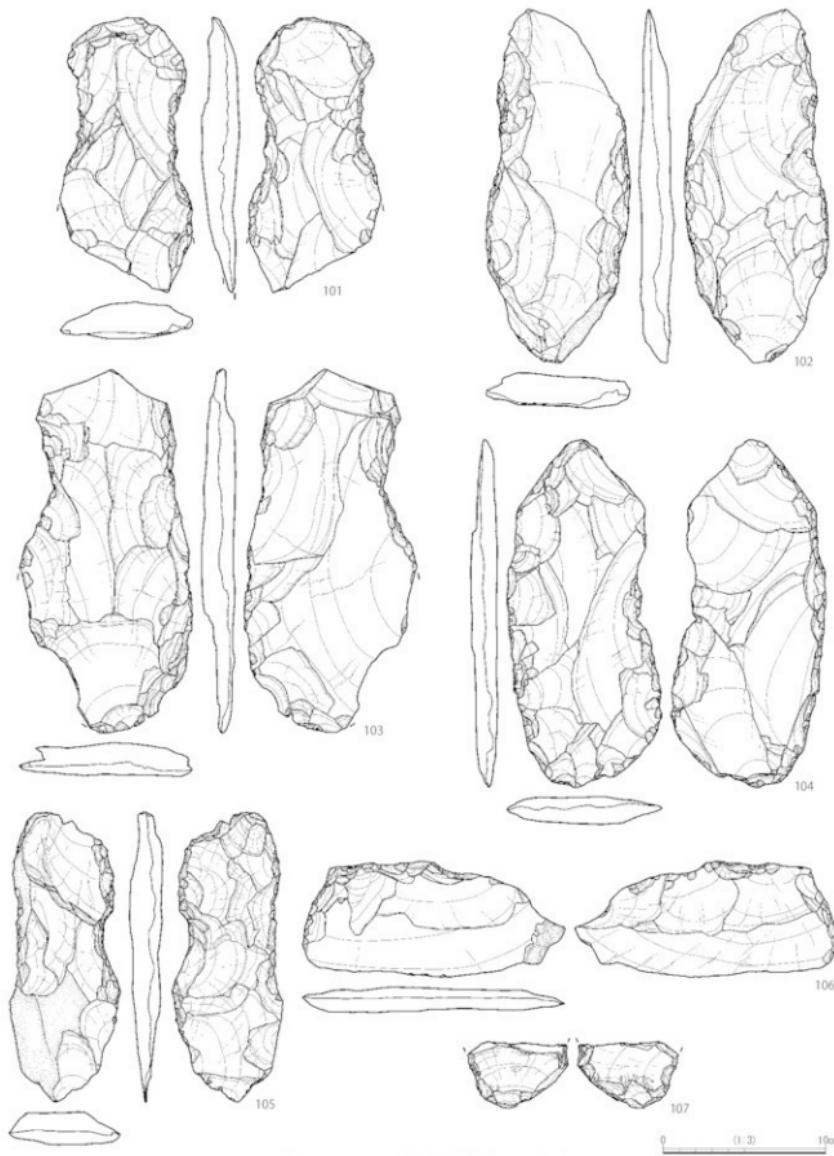
1号石斧集積遺構 (第31図～第33図)

H-14区において検出された石斧集積遺構である。検出面はIIb層中で、皿状の掘り込みが確認できた。確認面からの深さは8.0cmである。掘り込みには13点の打製石斧が東西方向を主軸として、整然と積み重ねられていた。13点の内、7点が長さ20.0cmを超える大型である。94～102は刃部を東に、103・104・105は刃部を西

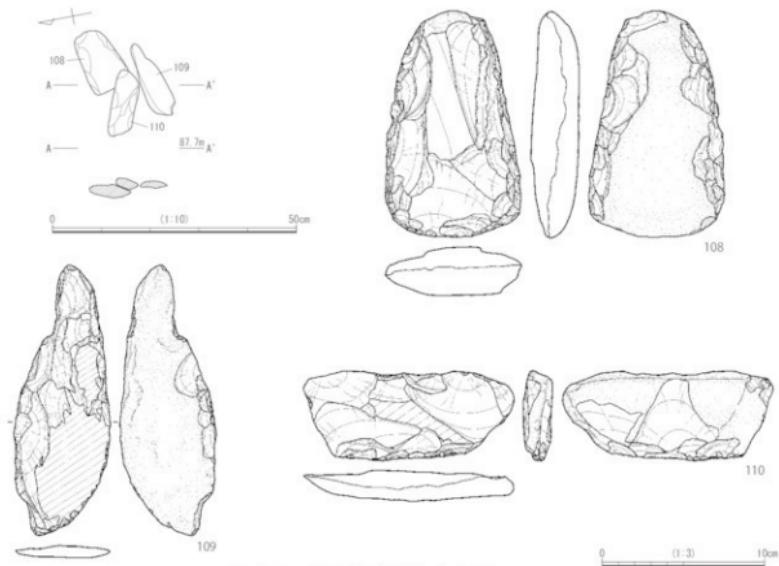
第31図 1号石斧集積遺構・出土石器(1)



第32図 1号石斧集積遺構出土石器（2）



第33図 1号石斧集積遺構出土石器 (3)



第34図 2号石斧集積遺構・出土石器

に向いている。106の刃部の向きは不明であるが、長軸を東西方向に向いている。掘り込み部分から南側約50.0cm離れた所で107が出土しているが、本来集積されていたものが長い年月の経過により散在した可能性があることから、本遺構出土遺物として取り扱った。全14点の打製石斧の中に、使用による刃こぼれや磨滅が確認できるものはなかった。したがって、欠損しているものについても、使用時に欠損したのか不明である。おそらく、未使用品ないし、製作途中のものを集積したと考えられる。

94～107は打製石斧である。94～96・99がI a類、100がIII B a類、103・105がIII C a類、97・101がIII a類、98・104がIV c類に分類される。製作工程は、大型の横長剥片や板状節理を有する剥片を素材とし、周縁から大まかに成形剥離を施した後、入念に調整剥離を施す傾向がある。102・106は未製品である。94・96・98・102・105は自然面を残している。95・97・100・103は素材剥片の剥離面を残している。99～101は刃部を欠損している。106は製作初期段階のもので、縁辺から成形剥離を施した後、調整剥離を施しているが、周縁には及んでいない。石材は、94・96・98・101・102が頁岩で、95・97・100・103～106がホルンフェルス、99・107は粘板岩である。

2号石斧集積遺構 (第34図)

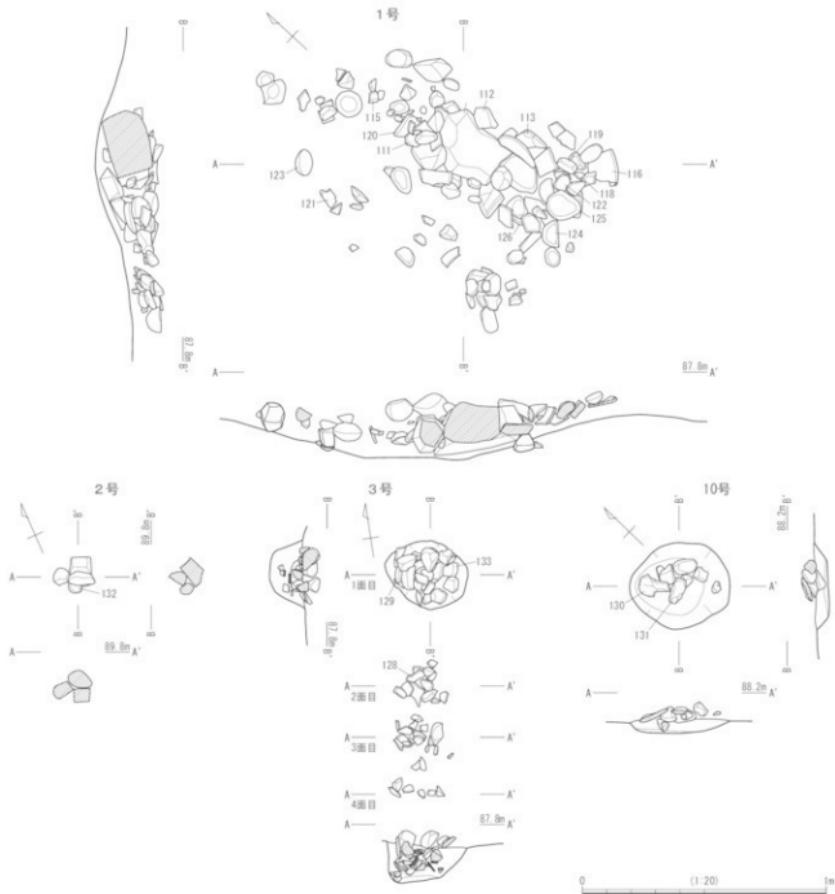
H-16区において検出された石斧集積遺構である。検出面はII b層中である。明確な掘り込みは確認できなかつた。東西方向を軸として、108は刃部を西に向いている。109・110の刃部の向きは不明であるが、長軸を東西方向に向いている。いずれも未使用品ないし、製作途中のものを集積している。

108～110は打製石斧である。108はI a類に分類される。表裏両面に自然面を残すことから、扁平な礫を素材としていたと考えられる。109・110は打製石斧の未製品である。板状に発達する節理を利用し、表皮付近で剥離された剥片を素材としている。109は、基部を成形する際、大きく変形してしまっていることから、失敗品の可能性も考えられる。石材は、108・110がホルンフェルス、109は頁岩である。

工 集石遺構

1号集石遺構 (第35図～第37図)

G-14区において検出された集石遺構で、長軸148.5cm、短軸116.0cmの皿状の掘り込みを持つ。検出面はII b層中で、確認面からの深さは18.0cmである。埋土は黒色土を主体とする。礫29点と石皿9点、磨石20点、打製石斧7点、敲石3点で構成されており、掘り込み底

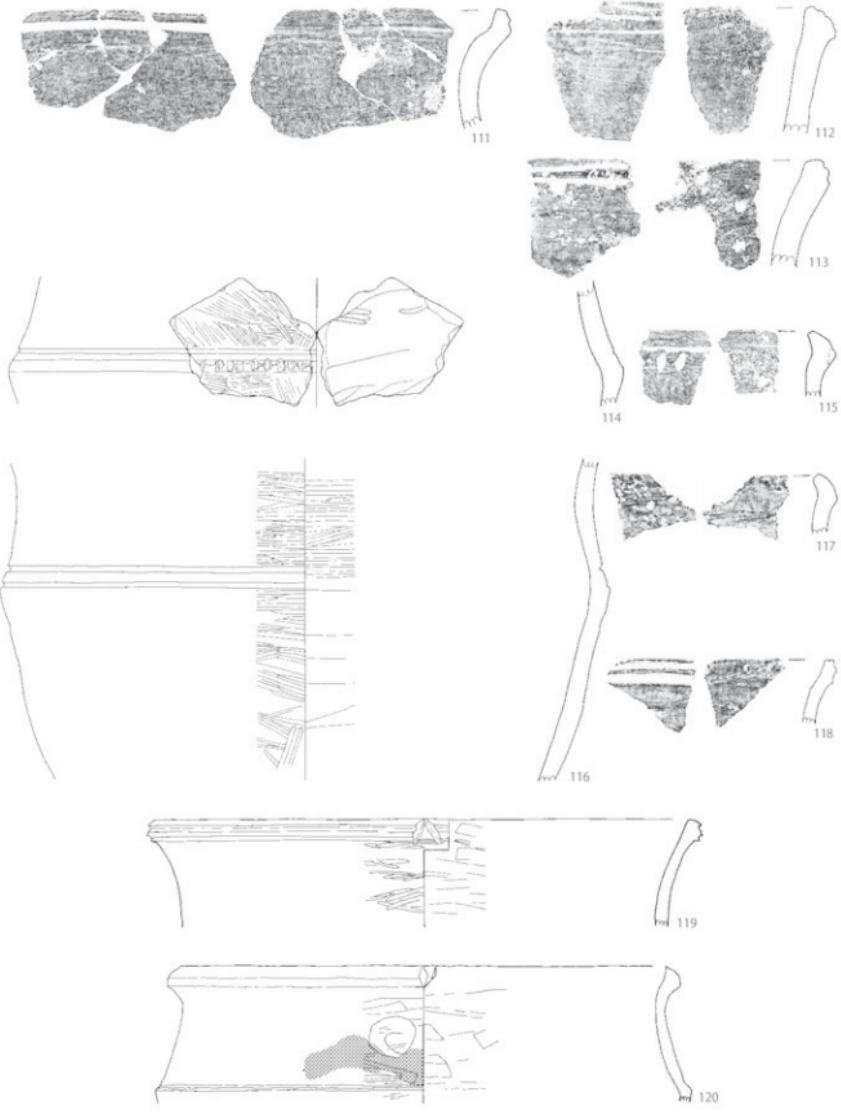


第35図 1号・2号・3号・10号集石遺構

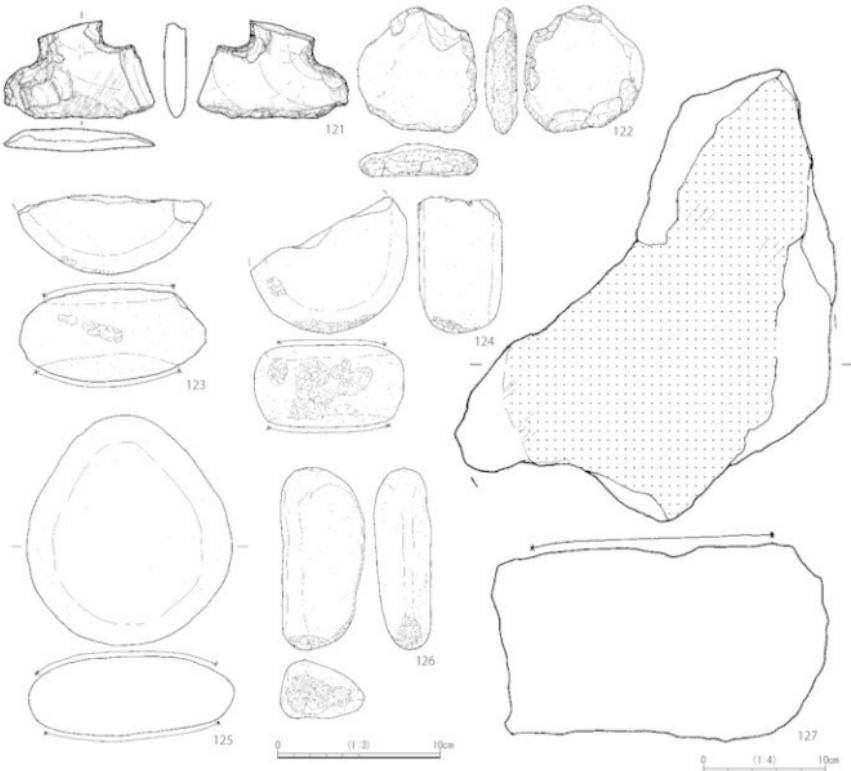
面からやや散在した状況で出土した。石器の殆どが欠損しており、廃棄されたものと推測される。石材は安山岩22点、ホルンフェルス6点、頁岩6点、花崗岩6点、石英3点、凝灰岩1点、砂岩1点、不明23点である。礫や石器と共に中岳II式土器の破片も出土している。

111～120は中岳II式土器の深鉢形土器である。111・115・117・118・120がII B類、112・113・119がII C類に分類される。111は口縁部文様帯に浅く幅広の沈線を1条巡らせている。112は肥厚した口縁部文様帯に沈線を3条巡らせている。113・118は口縁部文様帯に浅く幅

広の沈線を2条巡らせている。113は肥大した口縁部文様帯に沈線を3条巡らせている。114・116は胴部最大径の所に沈線を2条巡らせている。114は楕円形の凹点を施している。115は口縁部文様帯に浅く幅広の沈線を1条巡らせた後、楕円形の凹点を施している。117は口縁部文様帯に文様がみられないものである。111～118の器面調整は、内外面共に横方向のミガキを施している。119は口径44.6cmを測る。肥厚した口縁部文様帯に沈線を2条巡らせた後、山形の刻目を施している。器面調整は、外面が横方向のミガキ、内面が横方向のナデを主体



第36図 1号集石遺構出土土器



第37図 1号集石遺構出土石器

的に施し、一部ミガキを施している。120は口径39.8cmを測る。肥厚した口縁部文様帶に浅く幅広の沈線を2条運らせた後、菱形の線刻を施している。頭部には溝状の線刻が施されている。器面調整は、外面が横方向のミガキ、内面が横方向のナデを施している。121は打製石斧で、Ⅲ D b類に分類されるものである。表裏両面に素材剥片の剥離面を残している。122は扁平な円形の礫を利用した敲石である。上下両端部に連続する剥離痕が認められることから、礫器を転用したものと思われる。123・124は磨面と敲打痕が複合して認められる礫石器である。共に上半部を欠損している。125は扁平な梢円形の礫を利用した磨石である。126は棒状の礫を利用した敲石である。127は石皿である。表面の広範囲で使用による磨面が形成されている。石材は123・125・127が安山岩、121・122がホルンフェルス、124・126が花崗岩である。

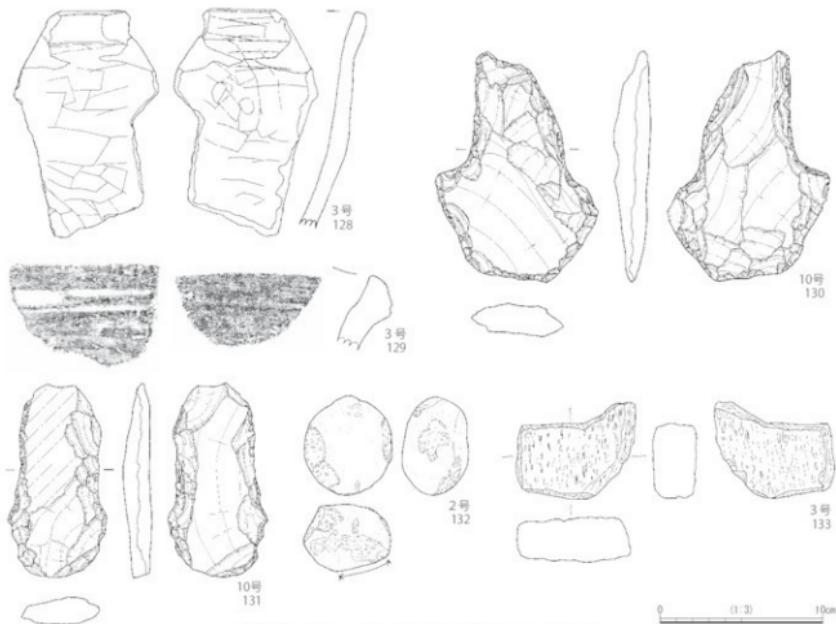
2号集石遺構 (第35図・第38図)

I-27区において検出された集石遺構で、明確な掘り込みは確認できなかった。検出面はII b層中である。磨石2点、敲石1点、石皿1点で構成される、小規模の集石遺構である。磨石・石皿はいずれも欠損している。石材は全て安山岩である。

132は球状の礫を利用した、磨面と敲打痕が複合して認められる礫石器である。

3号集石遺構 (第35図・第38図)

F-14区において検出された集石遺構で、長軸34.0cm、短軸28.5cmのたらい状の掘り込みを持つ。検出面はII b層中で、確認面からの深さは18.0cmである。礫8点、磨石15点、打製石斧7点、石皿1点、二次加工剥片1点、軽石製品1点で構成されており、掘り込み



第38図 2号・3号・10号集石遺構出土土器・石器

底面で纏まって出土した。石器の殆どが欠損しており、破棄されたものと推測される。石材は頁岩22点、安山岩6点、砂岩3点、ホルンフェルス1点、軽石1点である。礫や石器と共に中岳II式土器の破片も出土している。

128・129は中岳II式土器の深鉢形土器である。129はII B類、128はII F b類に分類される。129は口縁部文様帶に浅く幅広の沈線を2条巡らせている。133は軽石製品である。上半部を欠損している。表裏両面及び下面を面取り加工している。

10号集石遺構(第35図・第38図)

F-16区において検出された集石遺構で、長軸41.0cm、短軸36.0cmの皿状の掘り込みを持つ。検出面はII b層中で、確認面からの深さは7.0cmである。埋土は黒色土を主体とする。打製石斧2点、石皿2点、磨石2点、敲石1点、剥片1点で構成されており、掘り込み上層から纏まって出土している。石器の殆どが欠損しており、破棄されたものと推測される。石材は安山岩4点、頁岩3点、砂岩1点である。

130・131は打製石斧である。130・131共にIII A a類

に分類される。131は表裏面に素材剥片の剥離面を残している。石材は130・131共にハリ賀安山岩である。

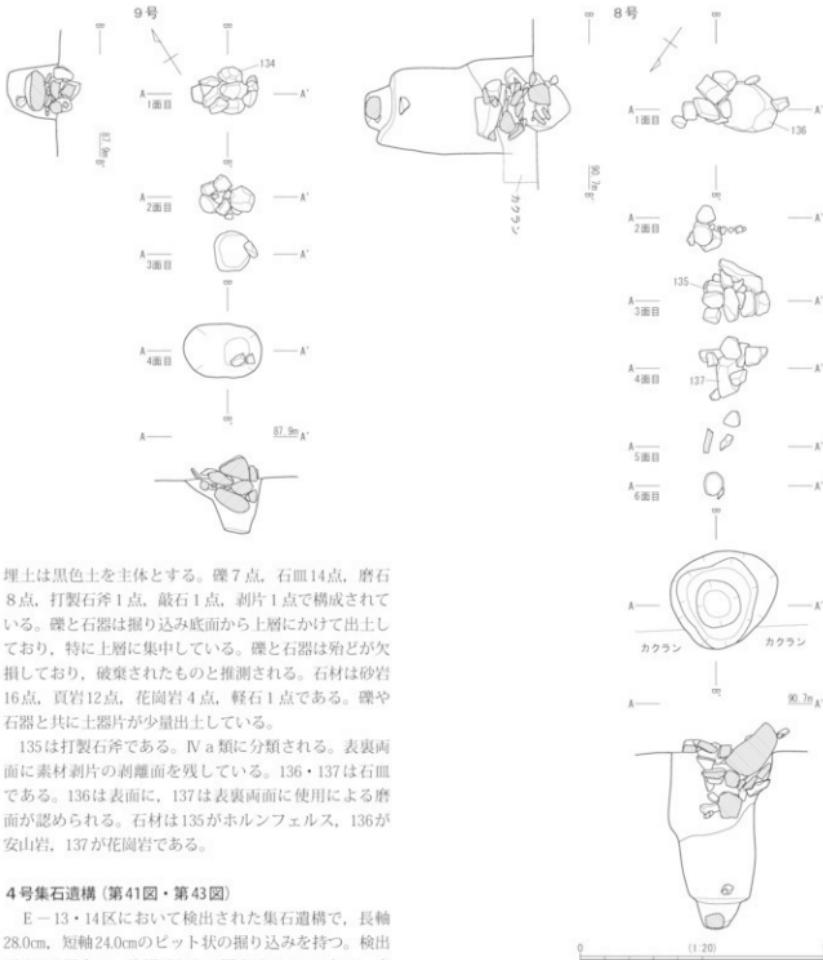
9号集石遺構(第39図・第40図)

F-14・15区において検出された集石遺構で、長軸32.0cm、短軸22.0cmのピット状の掘り込みを持つ。検出面はII b層中で、確認面からの深さは21.0cmである。埋土は黒色土を主体とする。礫5点、磨石10点、打製石斧3点、石皿1点、軽石製品1点で構成されており、掘り込み底面から上層にかけて纏まって出土した。石器の殆どが欠損しており、破棄されたものと推測される。石材は頁岩8点、安山岩5点、砂岩5点、凝灰岩1点、軽石1点である。礫や石器と共に土器片が少量と焼成粘土塊が1点出土している。

134は焼成粘土塊である。拳大で、表裏両面に複数の指の痕が残されている。

8号集石遺構(第39図・第40図)

F-19区において検出された集石遺構で、長軸44.0cm、短軸40.0cmの深いピット状の掘り込みを持つ。検出面はII c層中で、確認面からの深さは72.0cmである。



第39図 8号・9号集石遺構

5号集石遺構(第42図・第43図)

F-14区において検出された集石遺構で、長軸44.0cm、短軸39.0cmのたらい状の掘り込みを持つ。6号理設土器の北側で盛り合って検出されている。検出面はIIb層中で、確認面からの深さは21.0cmである。埋土は黒色土を主体とする。礫2点、磨石4点、石皿3点、敲石1点、剥片1点で構成されており、掘り込み底面から

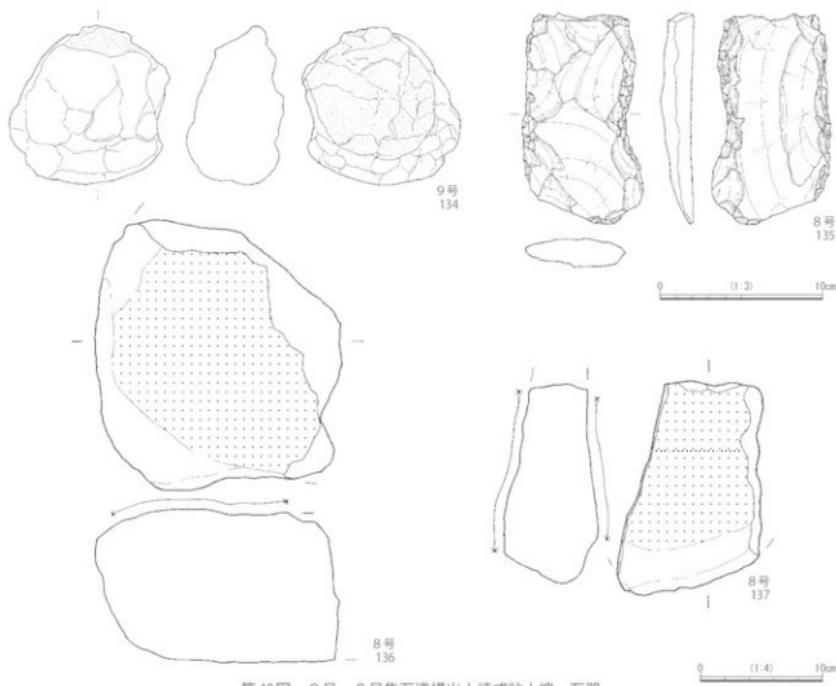
埋土は黒色土を主体とする。礫7点、石皿14点、磨石8点、打製石斧1点、敲石1点、剥片1点で構成されている。礫と石器は掘り込み底面から上層にかけて出土しており、特に上層に集中している。礫と石器は殆どが欠損しており、破棄されたものと推測される。石材は砂岩16点、頁岩12点、花崗岩4点、軽石1点である。礫や石器と共に土器片が少量出土している。

135は打製石斧である。IVa類に分類される。表裏両面に素材剥片の剥離面を残している。136・137は石皿である。136は表面に、137は表裏両面に使用による磨面が認められる。石材は135がホルンフェルス、136が安山岩、137が花崗岩である。

4号集石遺構(第41図・第43図)

E-13・14区において検出された集石遺構で、長軸28.0cm、短軸24.0cmのピット状の掘り込みを持つ。検出面はIIb層中で、確認面からの深さは26.0cmである。磨石5点、石皿4点、磨製石斧1点で構成されており、掘り込み底面から上層にかけて纏まって出土した。磨石1点を除く全てが欠損しており、廃棄されたものと推測される。石材は安山岩5点、砂岩3点、頁岩1点、花崗岩1点である。

138は磨製石斧の未製品である。棒状の礫を素材とし、左右両側縁に敲打成形を行っている。被熱により破碎している。石材はハリ質安山岩である。



第40図 8号・9号集石遺構出土焼成粘土塊・石器

上層にかけて纏まって出土した。石器の殆どが欠損しており、廃棄されたものと推測される。石材は砂岩3点、安山岩2点、凝灰岩2点、頁岩2点、ホルンフェルス2点である。礫や石器と共に土器片が少量出土している。

139は厚みのある楕円形の礫を利用した敲石である。周縁に敲打痕が認められ、特に、上下両端部に集中している。石材は頁岩である。

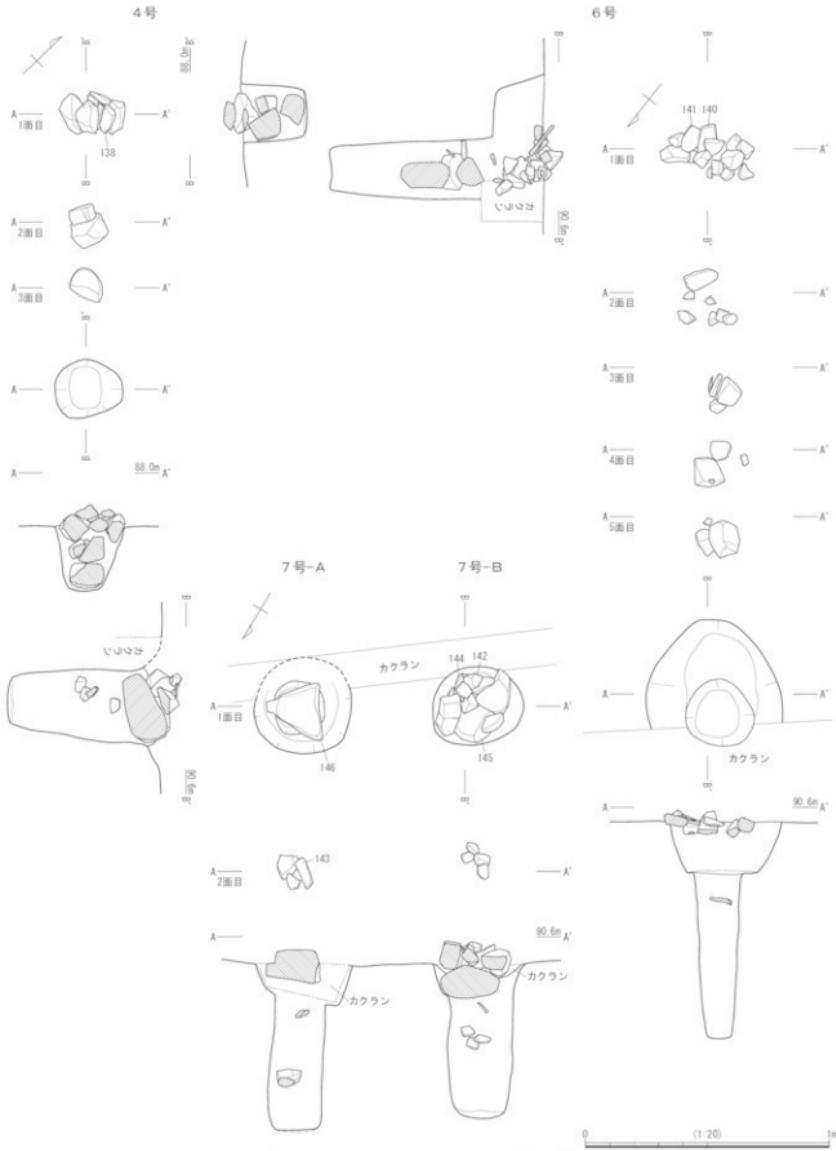
6号集石遺構（第41図・第43図）

F-20区において検出された集石遺構で、長軸56.0cm、短軸52.0cmの深いピット状の掘り込みを持つ。検出面はIIc層中で、確認面からの深さは89.0cmである。埋土は黒色土を主体とする。礫5点、石皿13点、磨石3点、打製石斧3点、剥片2点、磨製石斧1点、軽石製品1点で構成されており、掘り込みの中層から上層にかけて出土した。石器の殆どが欠損しており、廃棄されたものと推測される。石材は安山岩12点、頁岩9点、砂岩2点、ホルンフェルス2点、軽石2点、凝灰岩1点である。礫や石器と共に中岳II式土器の破片が出土している。

140は砥石である。面取り加工で板状に仕上げている。主たる使用面は表面である。141は磨製石斧である。大型の剥片を素材とし、表裏両面に研磨を施している。刃部は欠損している。石材は140が砂岩、141がホルンフェルスである。

7号-A集石遺構（第41図・第44図）

F-19区において検出された集石遺構で、長軸38.0cm、短軸32.0cmの深いピット状の掘り込みを持つ。検出面はIIc層中で、確認面からの深さは68.0cmである。埋土は黒色土を主体とする。検出時は、掘り込みが確認できなかつたため、7号-A・B集石遺構を同一の遺構として調査したが、東西並列して2つのピット状の掘り込みが確認できたため、それぞれ個別の遺構として認定した。石皿2点、打製石斧1点で構成されている小規模の集石遺構で、掘り込みの中層から上層にかけて出土した。石器は石皿1点を除く全てが欠損しており、破棄されたものと推測される。石材は頁岩1点、ホルンフェルス1点、花崗岩1点である。石器と共に土器片が少量出土している。



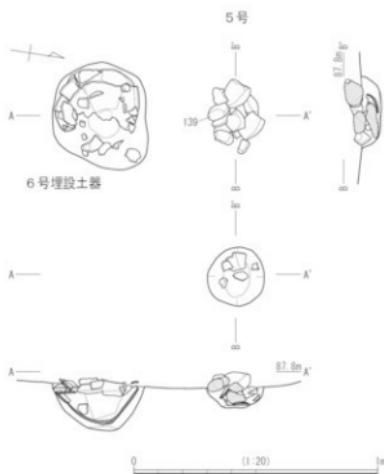
第41図 4号・6号・7号-A・B集石遺構

143は打製石斧である。Ⅲ a類に分類される。周縁から大まかな成形剥離を施した後、調整剥離を施している。部分的に研磨を施している。146は石皿である。表面及び右側面に使用による磨面が形成されている。石材は143が頁岩、146が花崗岩である。

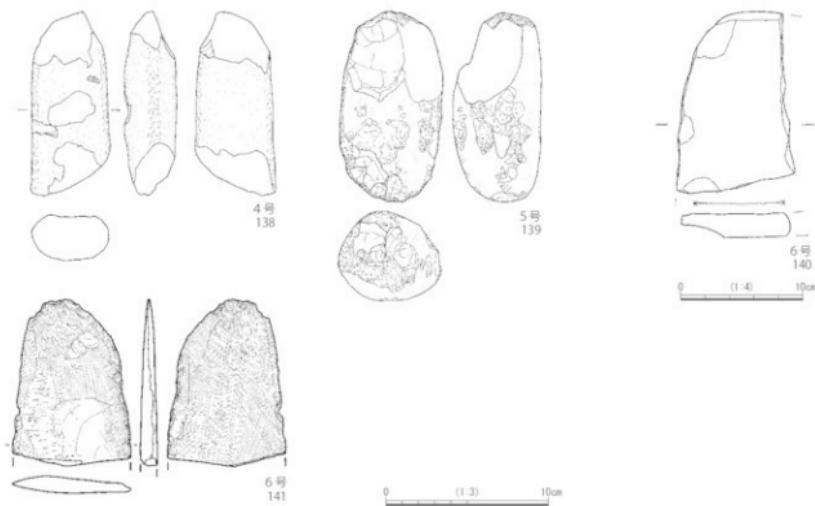
7号-B集石遺構(第41図・第44図)

F-19区において検出された集石遺構で、長軸40.0cm、短軸38.0cmの深いピット状の掘り込みを持つ。検出面はⅡc層中で、確認面からの深さは65.0cmである。埋土は黒色土を主体とする。礫2点、石皿1点、打製石斧3点、磨石1点で構成されている。礫と石器は掘り込みの中層から上層にかけて出土しており、特に上層に集中している。礫と石器は全てが欠損しており、破棄されたものと推測される。石材は安山岩6点、頁岩4点、ホルンフェルス1点、礫岩1点である。礫や石器と共に土器片が少量出土している。

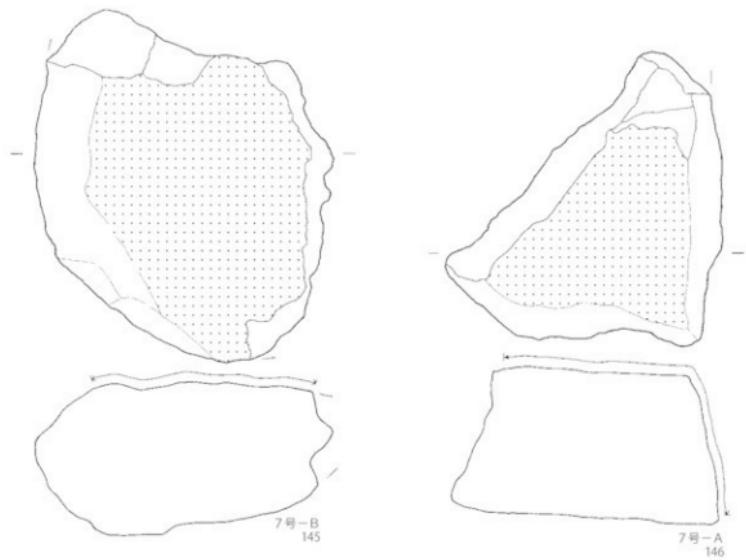
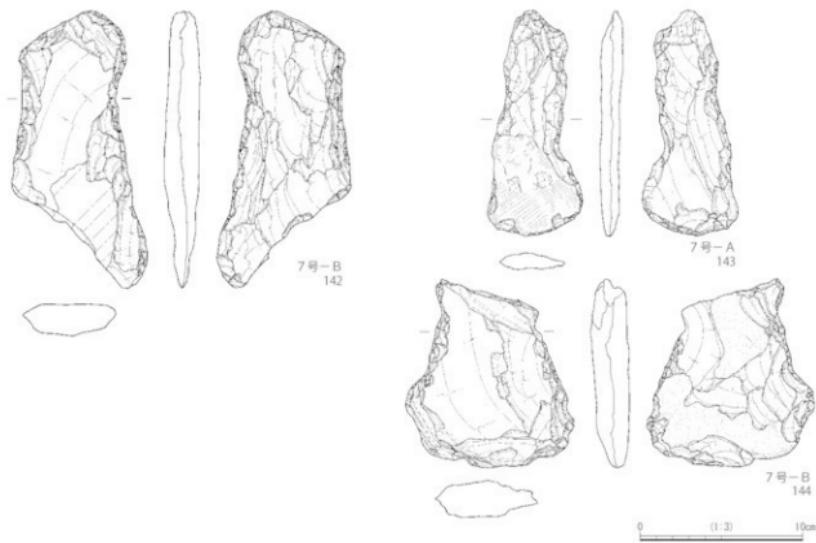
142・144は打製石斧である。142がⅢ a類、144がⅢ A b類に分類される。142は表裏両面に素材剥片の剥離面を残している。144は表面に素材剥片の剥離面、裏面に自然面を残している。142・144共に大型の横長剥片を素材とし、大まかな成形剥離後、調整剥離を行っている。144は刃部に部分的な研磨を施している。145は石皿である。表面に使用による磨面を形成している。石材は142・144がホルンフェルス、145が凝灰岩である。



第42図 5号集石遺構



第43図 4号・5号・6号集石遺構出土石器



第44図 7号-A・B集石遺構出土石器

オ 落とし穴

1号落とし穴(第45図)

F-20区において検出された落とし穴で、長軸70.0cm、短軸66.0cmの略円形を呈している。検出面はⅢ層中で、確認面からの深さは137.0cmである。1・2層はII層起源の黒色土が自然堆積し、3層以下は硬度、含有物から人為堆積の可能性がある。埋め戻し時期については構築時か、使用時か、廃棄時か不明である。掘り方中位に緩やかな段差があり、掘る際の足掛けの可能性を考えられるが判然としない。底面に小ピットの痕跡は認められない。南側をピット266に掘り込まれている。埋土中に遺物は認められなかった。

2号落とし穴(第45図)

G-18区において検出された落とし穴で、長軸69.0cm、短軸66.0cmの略円形を呈している。検出面はV



第45図 1号・2号落とし穴

層中で、確認面からの深さは116.0cmである。埋土は黒色土を主体とする。底面に小ピットの痕跡は認められない。埋土中に遺物は認められなかった。

カ 土坑

1号土坑(第46図・第47図)

G-19区において検出された土坑で、長軸218.0cm、短軸148.0cmの不整椭円形を呈している。検出面はIIc層中で、確認面からの深さは70.0cmである。埋土は黒色土を主体とする。掘り方は段を持ちながら立ち上がっていている。東側を4号円形周溝墓に掘り込まれている。遺物は土器片や石器が少量出土している。

147は球状の礫を利用した敲石である。下端部に敲打痕が集中している。石材は砂岩である。

2号土坑(第46図・第47図)

E-F-14区において検出された土坑で、長軸214.5cm、短軸134.0cmの楕円形を呈している。検出面はⅢ層中で、確認面からの深さは18.0cmである。埋土は黒色土(Ⅲ層混在)を主体とする。北西隅をピット103を掘り込み、南西隅をピット95に掘り込まれる。遺物は掘り方底面で石器や礫が出土している。

148は石皿である。使用により凹面を形成している。大部分が欠損している。石材は凝灰岩である。

3号土坑(第46図)

I-21区において検出された土坑で、長軸130.0cm、短軸80.0cmの楕円形を呈している。検出面はⅢ層中で、確認面からの深さは34.0cmである。埋土は黒色土(アカホヤ混在)を主体とする。埋土中に遺物は認められなかった。

4号土坑(第48図)

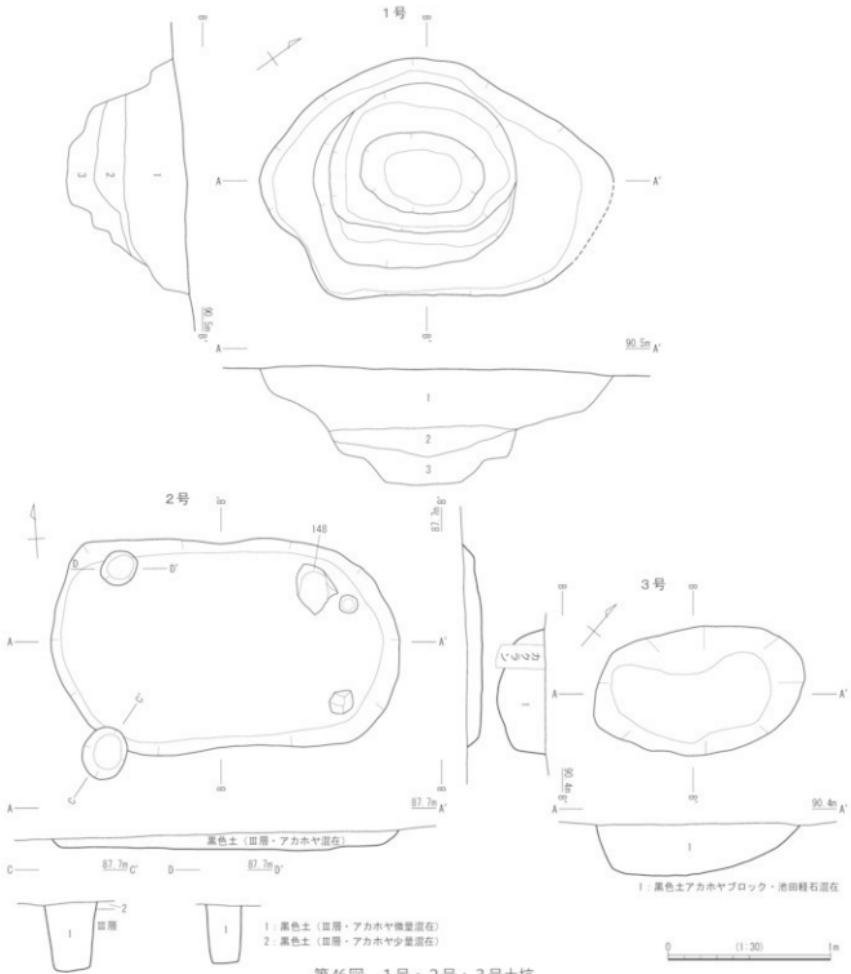
H-16区において検出された土坑で、長軸132.0cm、短軸80.0cmの楕円形を呈している。検出面はIIb層中で、確認面からの深さは74.0cmである。埋土は黒色土(Ⅲ層混在)を主体とする。遺物は土器片が少量出土している。

5号土坑(第48図)

E-19区において検出された土坑で、長軸120.5cm、短軸98.5cmの略円形を呈している。検出面はIV層中で、確認面からの深さは58.0cmである。埋土は黒色土を主体とする。遺物は掘り方底面で土器片が少量出土している。

6号土坑(第48図・第49図)

F-G-19区において検出された土坑で、長軸97.0cm、短軸96.0cmの略円形を呈している。検出面はⅢ層中で、確認面からの深さは71.0cmである。埋土は黒色

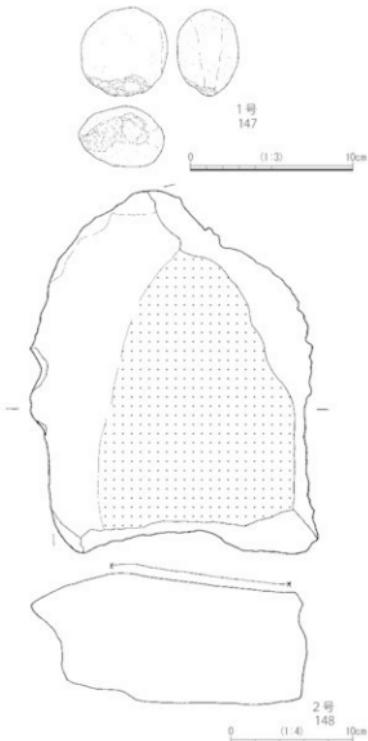


第46図 1号・2号・3号土坑

土を主体とする。断面形状は下縁に対して上縁が小さいプラスコ状を呈している。遺物は中層から、中岳II式土器や上加世田式土器の破片、打製石斧・磨石・敲石等が多量に出土した。

149は上加世田式土器の浅鉢形土器、150・152～154は中岳II式土器の深鉢形土器、151は中岳II式土器の浅鉢形土器である。150はII B類、152はII F類、151はII

I類に分類される。149は口径24.5cmを測る。口縁部文様帯に沈線を2条巡らせている。器面調整は、内外面共にナデ後、横方向のミガキを施している。150は口縁部文様帯に浅く幅広の沈線を2条巡らせている。器面調整は、内外面共に横方向のミガキを施している。151・152は口縁部文様帯と頸部の境がないものである。151の器面調整は、内外面共に横方向のミガキを主体的に施して



第47図 1号・2号土坑出土石器

いる。153は底径4.3cmを測る平底の底部である。154は底径3.8cmを測る上げ底状の底部である。155は土玉である。156・157・159は打製石斧である。157はI・b類に分類される。156・159は未製品である。大型の横長剥片を素材とし、左右両側縁から調整剝離を施している。157は板状に発達する筋理を利用し、横長剥片を獲得し、その素材形状を生かしてわずかの調整剝離で短冊形に整えている。部分的に研磨を施している。161・164は扁平な梢円形を利用し、磨面と敲打痕が複合して認められる礫石器である。162は磨石である。165は球状の砾を利用する敲石である。石材は156・159がホルンフェルス、157が頁岩、161が凝灰岩、162が花崗岩、164が安山岩、165が砂岩である。

7号土坑(第48図)

G-19区において検出された土坑で、長軸69.0cm、

短軸68.0cmの略円形を呈している。検出面はIIc層中で、確認面からの深さは18.0cmである。埋土は黒色土(アカホヤ混在)を主体とする。埋土中に遺物は認められなかつた。

8号土坑(第48図)

F-21区において検出された土坑で、長軸57.0cm、短軸50.0cmの略円形を呈している。検出面はIII層中で、確認面からの深さは78.0cmである。埋土は黒色土を主体とする。遺物は土器片が少量出土している。

9号土坑(第48図・第49図)

H-17区において検出された土坑で、長軸114.5cm、短軸100.0cmの隅丸方形を呈している。検出面はIV層中で、確認面からの深さは31.0cmである。埋土は黒色土(アカホヤ少量混在)を主体とする。158は打製石斧である。IVb類に分類される。表裏両面に素材剥片の剥離面を残している。大型の横長剥片を素材とし、上下両端から大まかな成形剝離を施した後、周縁に調整剝離を施している。抉りは素材剥片の打点側に偏っている。160は礫器である。扁平な梢円形の砾を素材とし、縁辺に調整剝離を施し、両刃の刃部を形成している。163は敲石である。上端部に敲打痕が認められる。石材は158・160がホルンフェルス、163が砂岩である。

10号土坑(第50図)

G・H-15区において検出された土坑で、長軸71.0cm、短軸70.0cmの略円形を呈している。検出面はIII層中で、確認面からの深さは42.0cmである。埋土は黒色土を主体とする。埋土中に遺物は認められなかつた。

11号土坑(第50図)

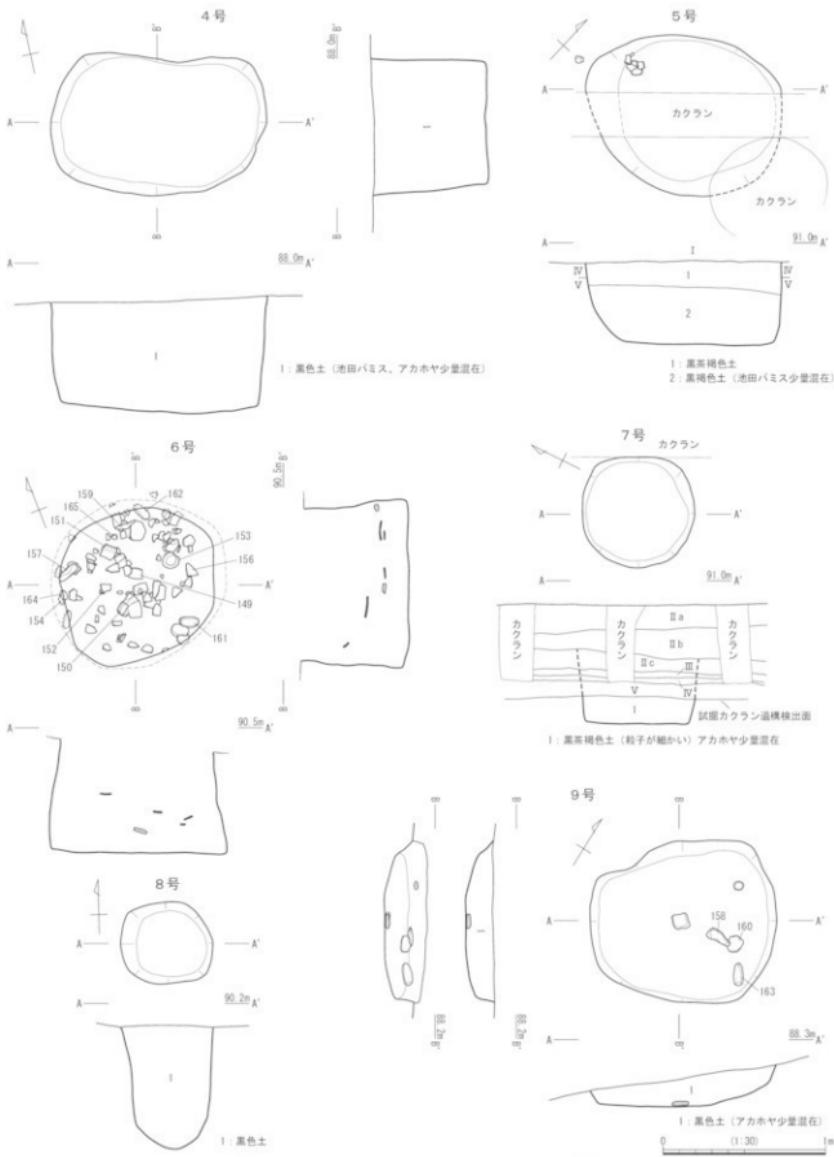
K-34区において検出された土坑で、長軸64.0cm、短軸63.0cmの略円形を呈している。検出面はIII層中で、確認面からの深さは19.0cmである。埋土は黒色土(II層)を主体とする。埋土中に遺物は認められなかつた。

12号土坑(第50図)

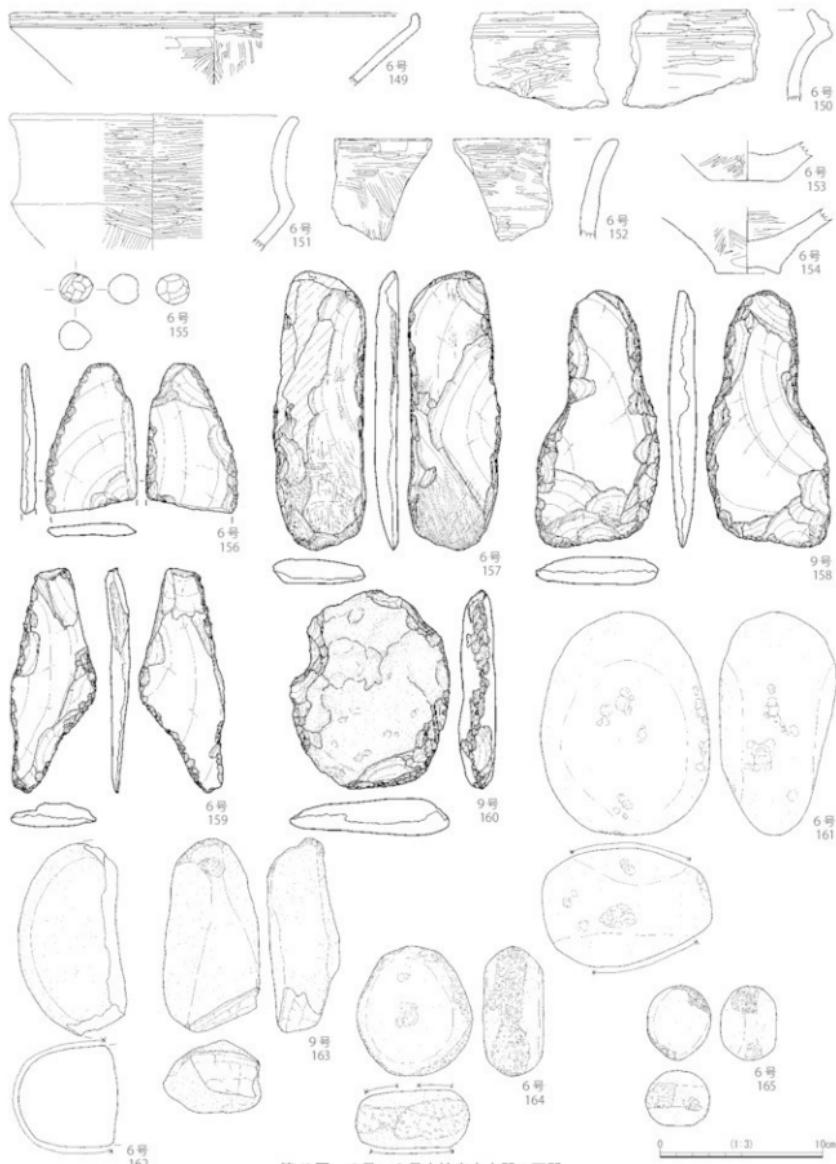
E・F-16区において検出された土坑で、長軸60.0cm、短軸46.5cmの不整円形を呈している。検出面はIII層中で、確認面からの深さは16.0cmである。北東隅にピット状の掘り込みが認められる。埋土は黒色土を主体とする。埋土中に遺物は認められなかつた。

13号土坑(第50図)

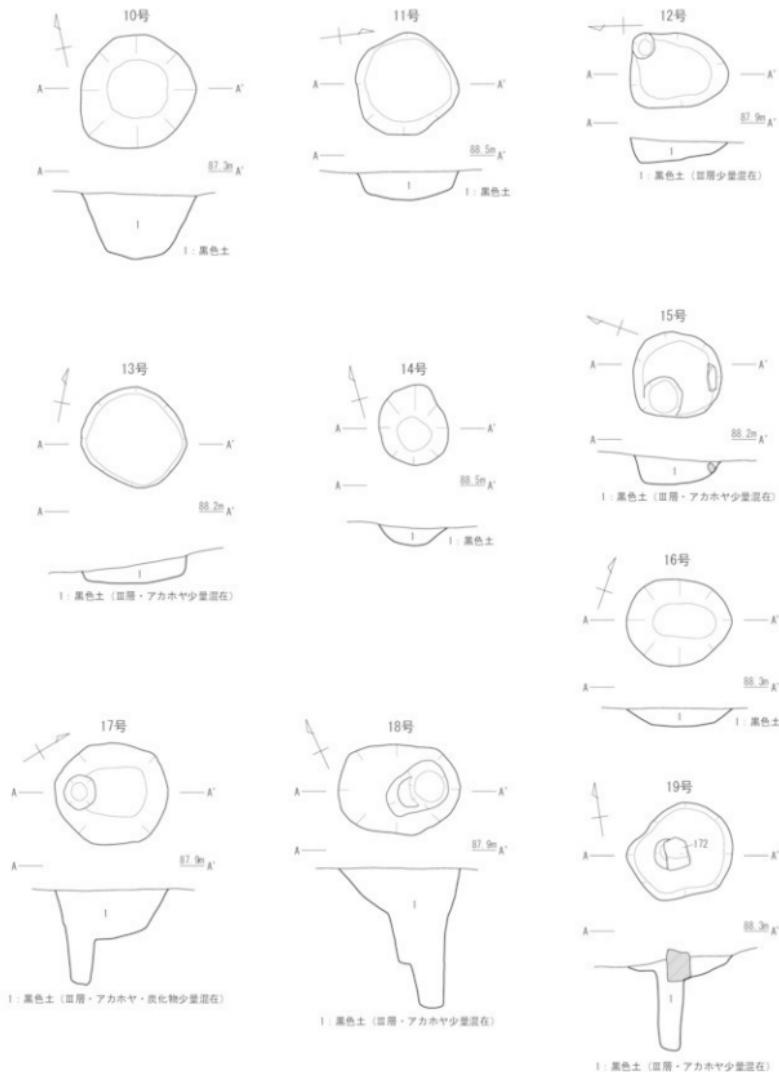
H-17区において検出された土坑で、長軸65.0cm、短軸62.0cmの略円形を呈している。検出面はV層中で、



第48図 4号・5号・6号・7号・8号・9号土坑

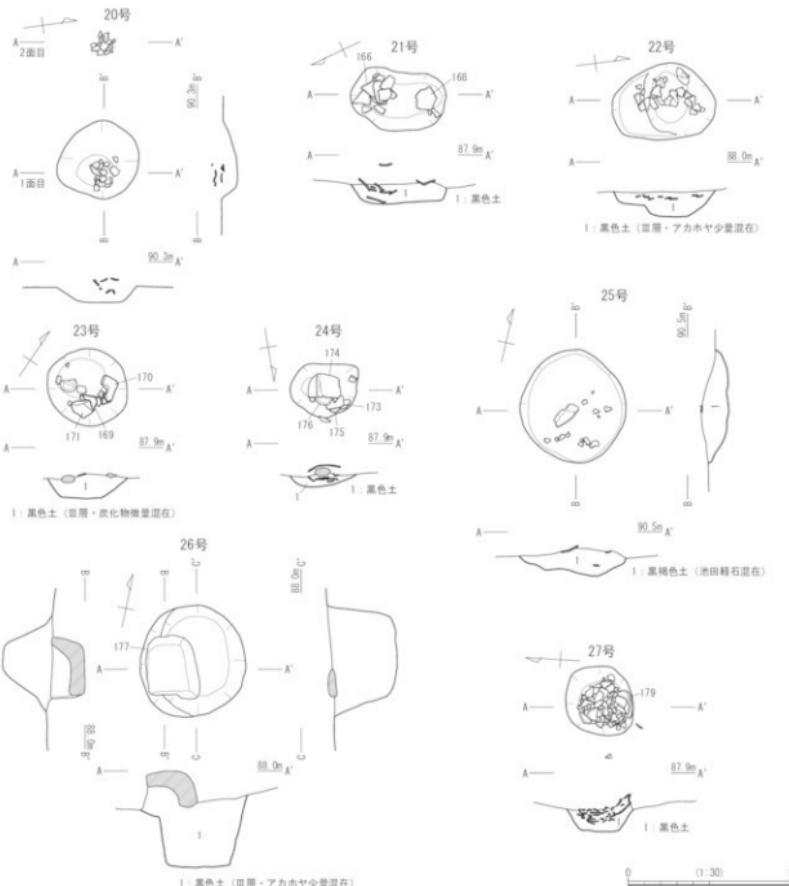


第49図 6号・9号土坑出土土器・石器



0 (1/30) m

第50図 10号・11号・12号・13号・14号・15号・16号・17号・18号・19号土坑



第51図 20号・21号・22号・23号・24号・25号・26号・27号土坑

確認面からの深さは17.0cmである。埋土は黒色土(Ⅲ層・アカホヤ少量混在)を主体とする。遺物は土器片少量と碎片1点が出土している。

14号土坑(第50図)

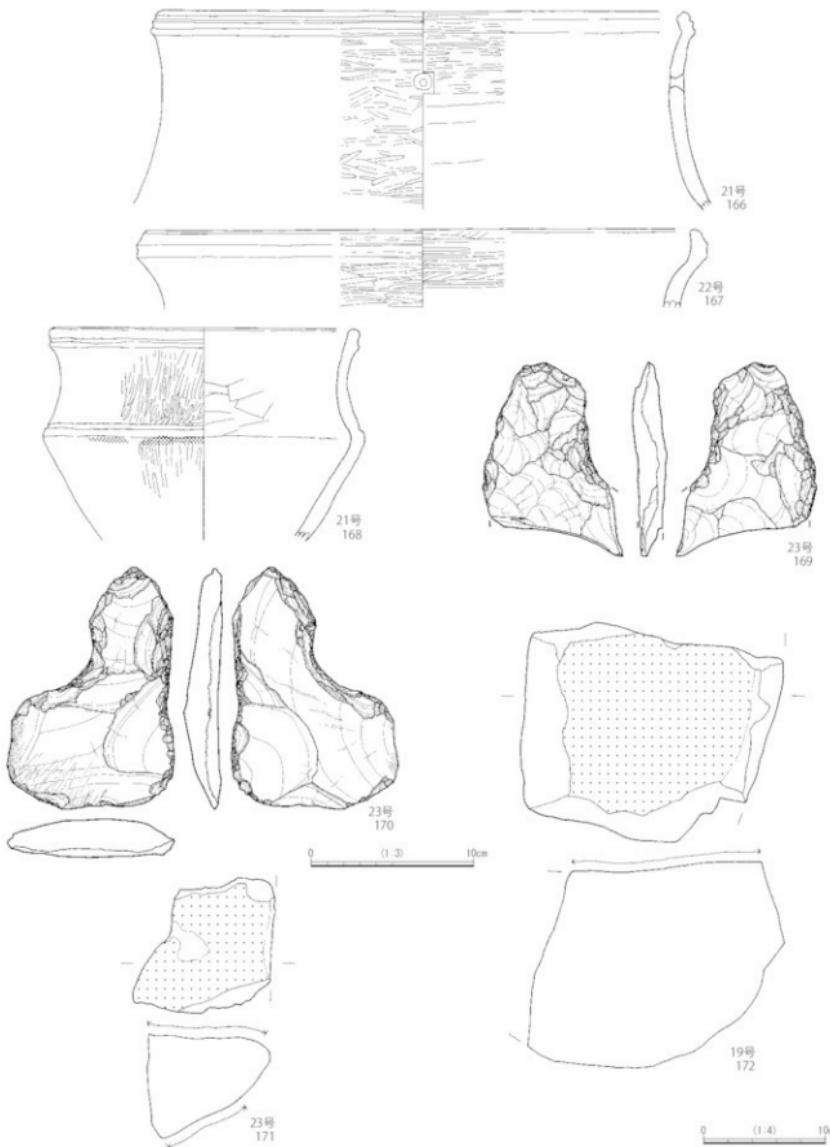
K-35区において検出された土坑で、長軸49.5cm、短軸42.5cmの略円形を呈している。検出面はⅢ層中で、確認面からの深さは15.0cmである。埋土は黒色土(Ⅱ層)を主体とする。埋土中に遺物は認められなかった。

15号土坑(第50図)

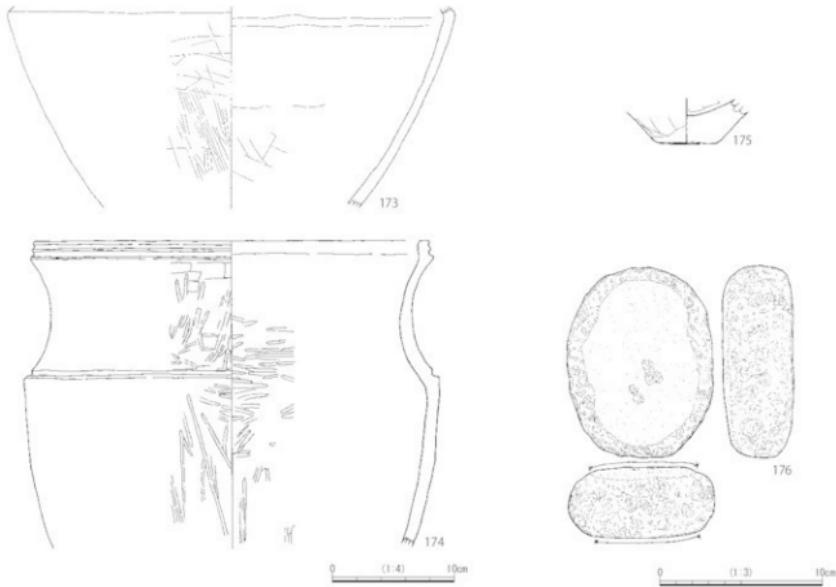
H-17区において検出された土坑で、長軸54.5cm、短軸53.0cmの略円形を呈している。検出面はⅤ層中で、確認面からの深さは21.0cmである。北西隅にピット状の掘り込みが認められる。埋土は黒色土(Ⅲ層・アカホヤ少量混在)を主体とする。遺物は土器片少量と礫1点が出土している。

16号土坑(第50図)

K-36区において検出された土坑で、長軸65.0cm、



第52図 19号・21号・22号・23号土坑出土土器・石器



第53図 24号土坑出土土器・石器

短軸53.5cmの略円形を呈している。検出面はⅢ層中で、確認面からの深さは11.0cmである。埋土は黒色土(II層)を主体とする。埋土中に遺物は認められなかった。

17号土坑(第50図)

F-15区において検出された土坑で、長軸70.0cm、短軸62.5cmの略円形を呈している。検出面はⅡc層中で、確認面からの深さは57.0cmである。南西側にピット状の掘り込みが認められる。埋土は黒色土(Ⅲ層少量混在)を主体とする。遺物は土器片が少量出土している。

18号土坑(第50図)

F-15区において検出された土坑で、長軸80.0cm、短軸56.0cmの楕円形を呈している。検出面はⅡc層中で、確認面からの深さは87.0cmである。東側にピット状の掘り込みが認められる。埋土は黒色土(Ⅲ層少量混在)を主体とする。遺物は土器片少量と敲石・石皿が各1点出土している。

19号土坑(第50図・第52図)

H-17区において検出された土坑で、長軸65.0cm、短軸60.0cmの楕円形を呈している。検出面はⅢ層中で、

確認面からの深さは67.0cmである。中央にピット状の掘り込みが認められる。埋土は黒色土(Ⅲ層・アカホヤ少量混在)を主体とする。遺物は石皿が1点、ピット状の掘り込みを塞ぐように出土している。

172は石皿である。表面に使用による磨面が形成されている。石材は凝灰岩である。

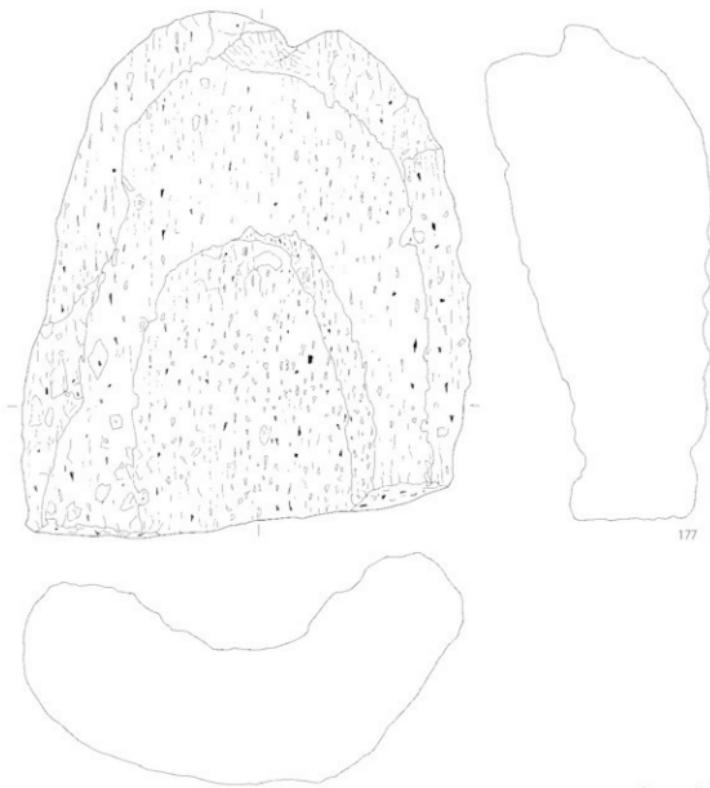
20号土坑(第51図)

H-23区において検出された土坑で、長軸50.0cm、短軸30.0cmの略円形を呈している。検出面はⅡb層中で、確認面からの深さは10.0cmである。埋土中に遺物は認められなかった。遺物は上層から土器片が纏まって出土しており、廃棄の可能性が考えられる。

21号土坑(第51図・第52図)

F-14区において検出された土坑で、長軸59.0cm、短軸39.5cmの不整円形を呈している。検出面はⅡb層中で、確認面からの深さは12.0cmである。埋土は黒色土を主体とする。掘り方北側と南側で中岳Ⅱ式土器の破片が出土している。

166・168は中岳Ⅱ式土器の深鉢形土器である。共にⅡB類に分類される。166は口径31.9cmを測る。口縁部文様



第54図 26号土坑出土石器

0 (1.4) 10cm

帶に沈線を2条巡らせている。頭部には補修孔が認められる。器面調整は、内外面共に横方向のミガキを施している。168は口径18.1cmを測る。口縁部文様帯及び胴部最大径の所に沈線を1条巡らせている。外面には煤が付着している。器面調整は、外面が胴部から口縁部まで縱方向のミガキを施し、内面は横方向のナデを施している。

22号土坑(第51図・第52図)

F-13・14区において検出された土坑で、長軸49.5cm、短軸42.5cmの楕円形を呈している。検出面はⅢ層中で、確認面からの深さは17.0cmである。埋土は黒色土を主体とする。上層から中岳Ⅱ式土器(167)の破片が出土している。

23号土坑(第51図・第52図)

F-13・14区において検出された土坑で、長軸49.0cm、短軸48.0cmの略円形を呈している。検出面はⅡb層中で、確認面からの深さは15.0cmである。埋土は黒色土を主体とする。遺物は上層から土器片少量と打製石斧2点・磨石1点・石皿1点が出土した。

169・170は打製石斧である。169はIVa類に分類される。刃部を欠損している。170はIVb類に分類される。171は石皿である。表裏両面に使用による磨面が形成されている。大部分が欠損している。石材は169・170がホルンフェルス、171が花崗岩である。

24号土坑(第51図・第53図)

F-14区において検出された土坑で、長軸42.0cm、短軸33.5cmの梢円形を呈している。検出面はII b層中で、確認面からの深さは9.0cmである。埋土は黒色土を主体とする。遺物は掘り方底面から中岳II式土器の破片と磨石1点が纏まって出土した。

173～175は中岳II式土器の深鉢形土器である。174はII B類に分類される。173は胴部最大径の所で「く」の字状に屈曲する頸部である。器面調整は、外側が横方向のナデ後に縦方向のミガキを施し、内面は横方向のナデを施している。174は口径31.7cmを測る。口縁部文様帶に沈線を2条巡らせている。胴部最大径の所には沈線を1条巡らせている。器面調整は、外側が胴部から口縁部まで縦方向のミガキを主体的に施し、内面は横方向のミガキを主体的に施している。175は底径3.6cmを測る平底の底部である。176は磨面と敲打痕が複合して認められる砾石器である。扁平な梢円形の礫を利用し、表裏両面に磨面、周縁に敲打痕が認められる。石材は安山岩である。

25号土坑(第51図)

G-19区において検出された土坑で、長軸70.0cm、短軸65.0cmの略円形を呈している。検出面はIII層中で、確認面からの深さは17.0cmである。埋土は黒色土を主体とする。遺物は土器片が少量出土している他、炭や赤色顔料も出土している。

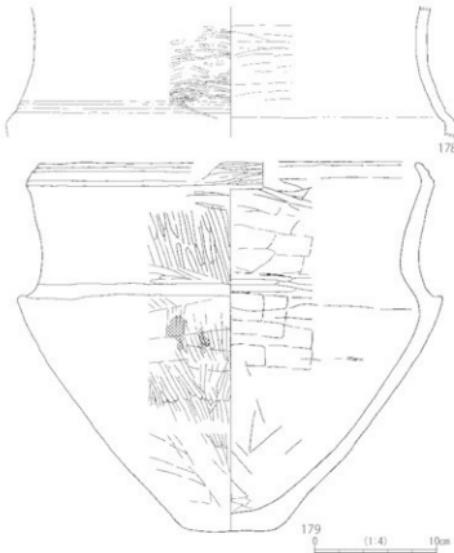
26号土坑(第51図・第54図)

H-17区において検出された土坑で、長軸69.0cm、短軸65.5cmの略円形を呈している。検出面はII c層中で、確認面からの深さは43.0cmである。埋土は黒色土(III層・アカホヤ少量混在)を主体とする。遺物は上層から土器片が少量と大型の軽石製品が1点、逆位で出土している。

177は大型の軽石製品である。上部に大きな切れ目を作出し、正面には深い凹を演出している。形態的特長から、女性器を模した女陰形石製品の可能性も考えられる。被熱により、全体がやや赤化している。半分を欠損しているが、赤化が欠損部に及んでいないことから、被熱後に欠損、或いは意図的に破壊し廃棄した可能性が考えられる。

27号土坑(第51図・第55図)

F-14区において検出された土坑で、長軸42.5cm、短軸42.5cmの略円形を呈している。検出面はII b層中で、確認面からの深さは18.0cmである。埋土は黒色土を主体とする。遺物は中岳II式土器の深鉢形土器が土圧により、細かく潰れた状態で出土している。それらの土器片を接合した結果、底部から口縁部まで復元することがで



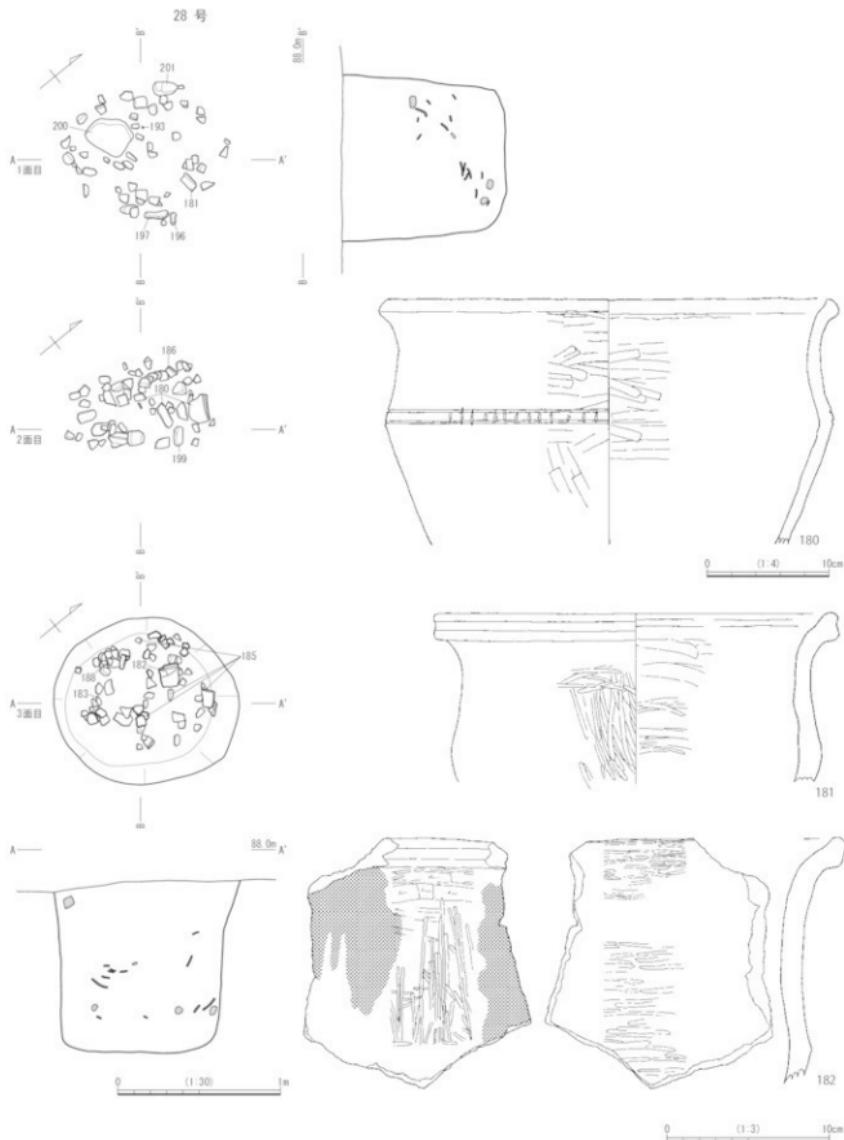
第55図 27号土坑出土土器

きた。断面の観察からは、正位で置かれていたようにも見え、埋設土器の可能性も考えられる。

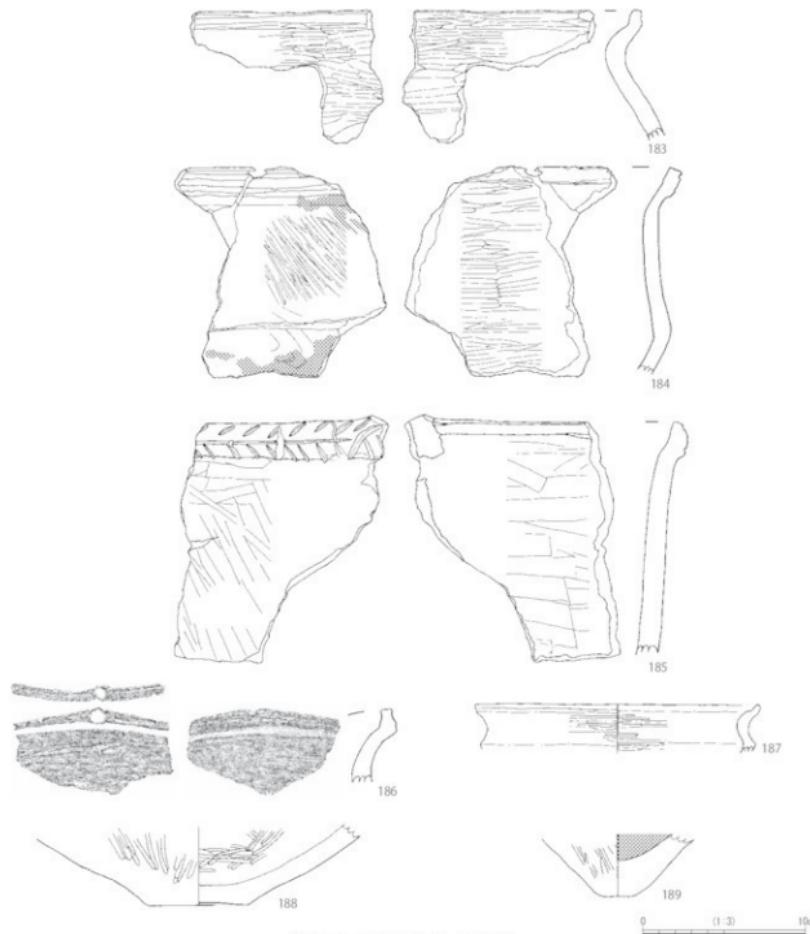
178・179は中岳II式土器の深鉢形土器である。179はII B類に分類される。178は胴部最大径の所で「く」の字状に屈曲し、沈線を2条巡らせている。器面調整は外側が横方向のミガキを施し、内面は横方向のナデを施している。179は口径23.0cm、底径5.6cm、器高22.4cmを測る。底部は不安定な平底で、胴部最大径の所までは直線的に延びる。胴部最大径の所で「く」の字状に内側に屈曲し、頸部は内傾しながら外反し、直行する口縁部へ至る。口縁部文様帶には浅く幅広の沈線を2条巡らせている。器面調整は、外側が胴部下位から口縁部まで横方向のナデ後、縦方向のミガキを施している。内面は胴部下位から口縁部まで横方向のナデを施している。外側に煤が付着している。

28号土坑(第56図～第58図)

F-16区において検出された土坑で、長軸114.5cm、短軸103.0cmの略円形を呈している。検出面はII c層中で、確認面からの深さは11.0cmである。埋土は黒色土(III層少量混在)を主体とする。遺物は底面から中層にかけて中岳II式土器の破片や石礫、打製石斧・磨・敲石・石皿が多量に出土しており、廃棄された可能性が考えられる。



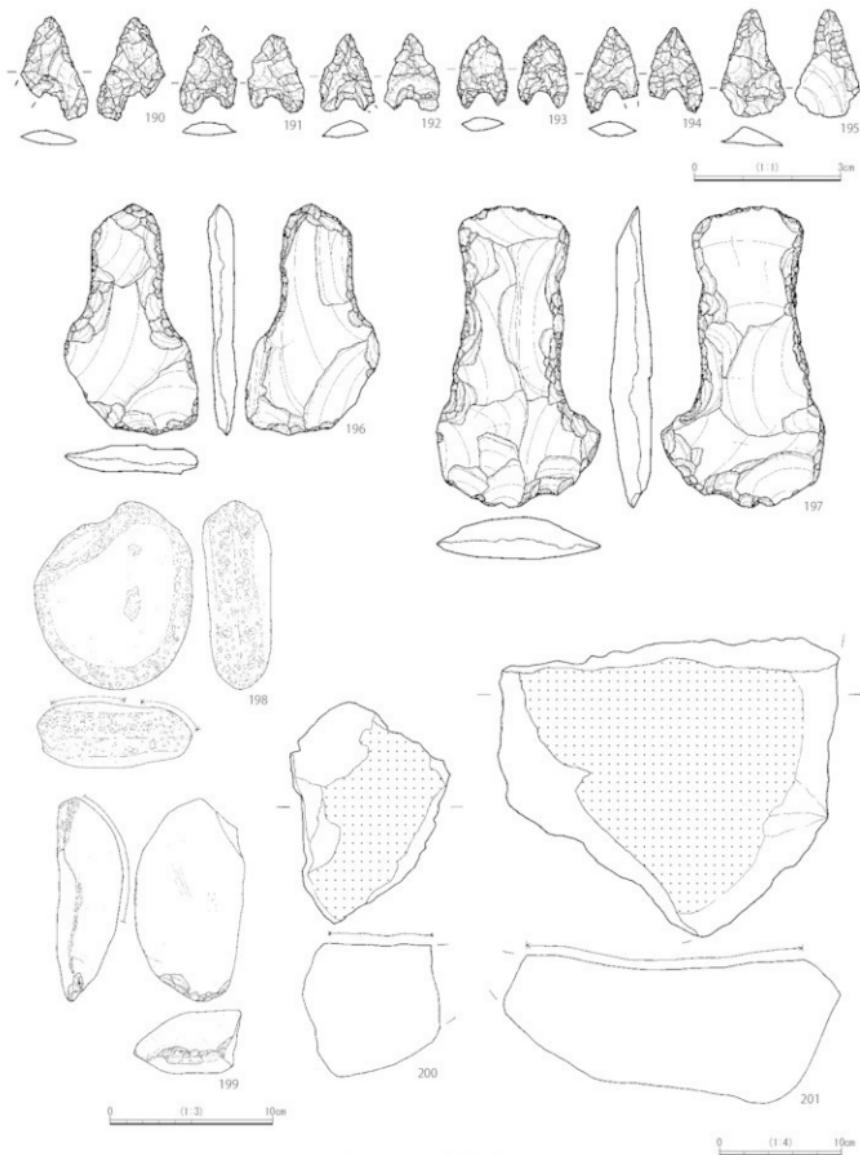
第56図 28号土坑・出土土器(1)



第57図 28号土坑出土土器(2)

180～185は中岳II式土器の深鉢形土器、186・187は中岳II式土器の浅鉢形土器、188・189は中岳II式土器の底部である。180はII A類、181～185がII B類、186・187がII G類に分類される。180は口径35.9cmを測る。胴部最大径の所で沈線を2条巡らせた後、刻目を連続的に施している。181～183は口縁部文様帯に浅く幅広の沈線を1条巡らせている。器面調整は、外面胴部下位が縱方向のミガキを施し、頸部は横方向のミガキを施す

傾向がある。内面は胴部下位から口縁部まで横方向のミガキを施す傾向がある。184は口縁部文様帯に沈線を2条、胴部最大径の所に沈線を1条巡らせている。器面調整は、外面が胴部から口縁部まで横方向のミガキを施し、内面は胴部から口縁部まで斜め方向のミガキを施している。185は口縁部文様帯に沈線を1条巡らせ綾杉文を施す。186は波状口縁である。口縁部文様帯に沈線を1条巡らせる他、頂部下に円形の凹点を施している。頂



第58図 28号土坑出土石器

部の上面には円形の凹点が施される。187は口縁部文様帶に沈線を1条巡らせている。器面調整は、内外面共に丁寧な横方向のミガキを施している。188は底径5.8cmを測る、やや上げ底状の底部である。189は底径2.1cmを測る、不安定な平底の底部である。190～195は石鑿である。190～193はI c類、194がII b類に分類される。195は石鑿未製品である。先端部を作出しているが、基部の作出には至っていない。196・197は打製石斧である。196はIII A a類、197がIV a類に分類される。共に裏面に素材剥片の剥離面を残している。柄を装着するための抉り部を作出し、入念に調整削離を施している。198・199は磨面と敲打痕が複合して認められる疊石器である。199は下端縁に潰れた刃部が確認できることから、疊器としての機能を失った後に磨・敲石として利用したものと思われる。200・201は石皿である。共に表面に使用による磨面が形成されている。大部分が欠損している。石材は、190～192・194・195・198・199が安山岩、196・197がホルンフェルス、200・201が凝灰岩、193が黒曜石である。

キ ピット(第59図～第61図)

本遺跡において、ピットが複数検出された。配置に規則性はない、建物を構成するようなピットや柱痕も認められなかった。埋土は全て単層で、II層の黒色土を主体としている。

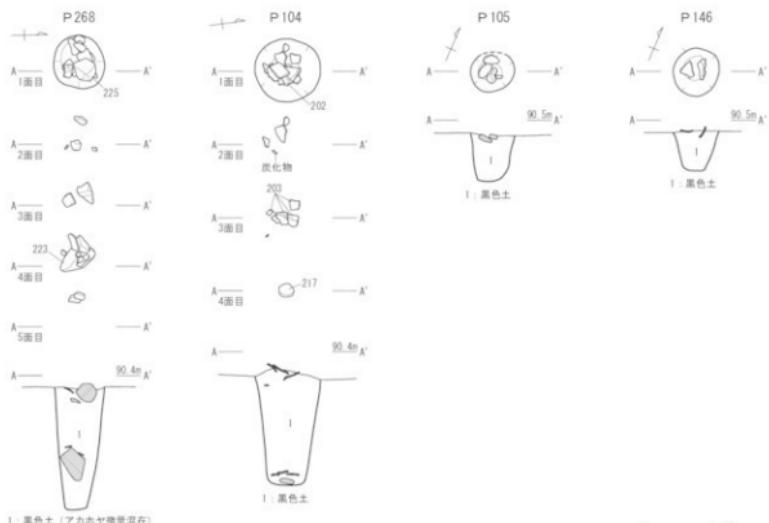
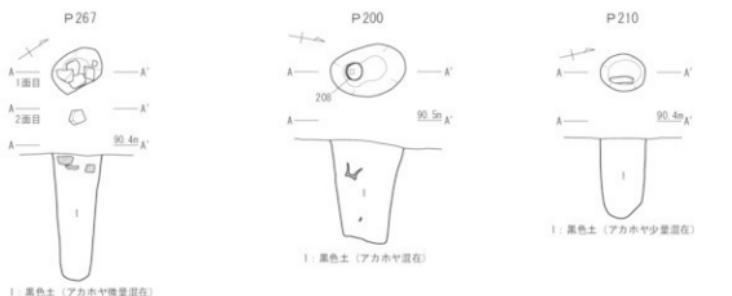
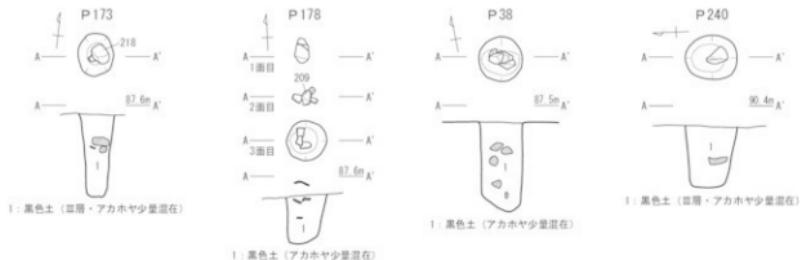
ここでは、複数検出されたピットの内、掘り方が明瞭で埋土中から比較的確まって遺物が出土したものを見た。また、計測値は第4表に示した。以下、ピット内から出土した遺物を個別に説明する。

202・209は中岳II式土器の深鉢形土器、203・204・206・207は中岳II式土器の浅鉢形土器である。206がII

B類、204がII D類、203がII G類、207がII I類に分類される。205は黒川式土器の浅鉢形土器、208は绳文時代晩期末の高环形土器である。202は胴部最大径の所で「く」の字状に屈曲し、沈線を1条巡らせている。器面調整は外面が横方向のミガキを施し、内面は指ナデを施している。203は口径20.1cmを測る。口縁部文様帶に沈線を2条巡らせている。器面調整は外面が頭部が横方向、頭部が横方向のミガキを施し、内面は胴部から口縁部まで横方向のミガキを施している。204は口縁部文様帶をもたないものである。器面調整は外面が横方向のミガキを主体的に施し、内面は横方向のナデを施している。205は胴部最大径の所で「く」の字状に内側に屈曲し、頭部は内傾しながら外反している。胴部最大径の所に円形の凹点が施されている。器面調整は内外面共に横方向のミガキを施している。206・207の器面調整は内外面共に横方向のミガキを主体的に施している。208は底径10.2cmを測る。脚部のみ残存する。器面調整は外面が縦方向のミガキを施し、内面は横方向のミガキを施している。209は底径6.6cmを測る、上げ底状の底部である。210～214は打製石斧である。210がIII D A類、211がIII D B類、212・213がIV a類に分類される。214は大型の横長剥片を素材とした未製品である。215は磨製石斧である。刃部は使用により潰れている。基部の欠損は使用に伴い欠損したものと思われる。216～218は磨面と敲打痕が複合して認められる疊石器である。219～221は磨石で、222は敲石である。216・217・219～221は扁平な梢円形の疊、218は亜角疊、222は柱状の疊を利用している。223～225は石皿で全て欠損している。224は脚付きの成形石皿である。石材は、210～215がホルンフェルス、216・217・220・221・223が凝灰岩、218・219が安山岩、222・225が砂岩、224が花崗岩である。

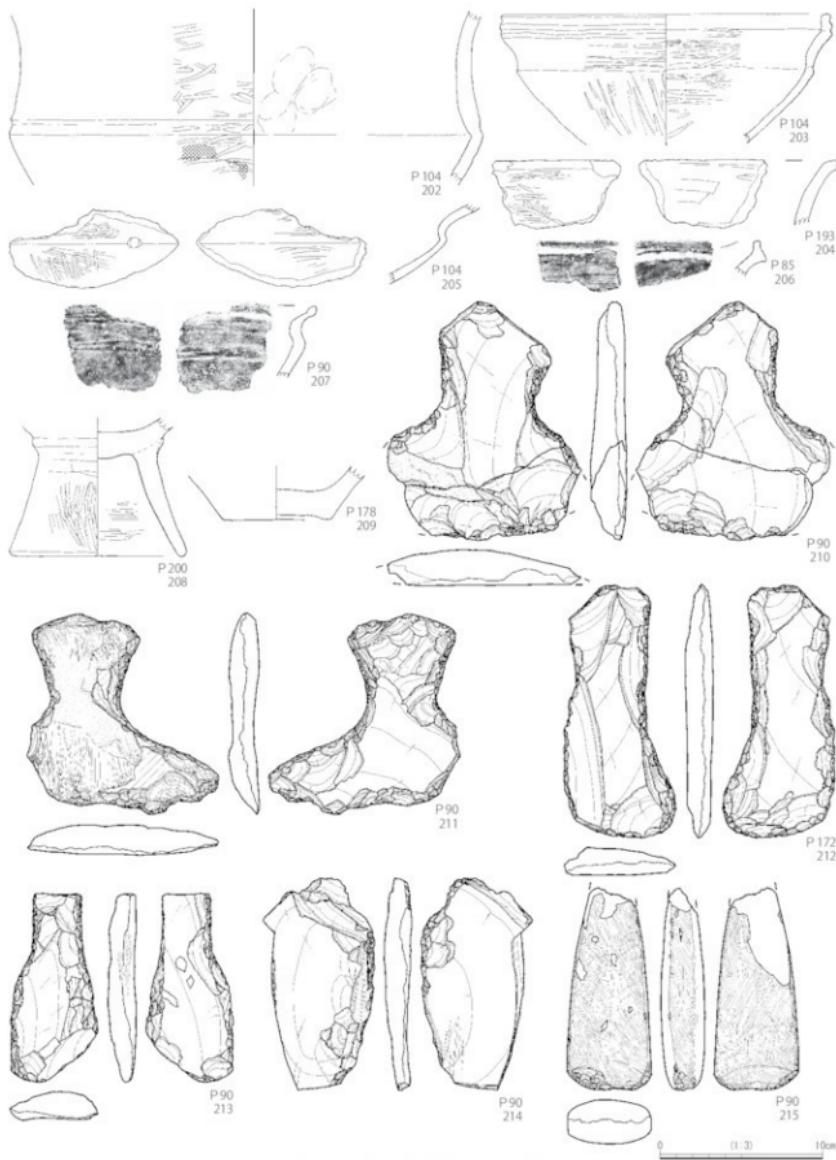
第4表 ピット計測値一覧表

遺構番号	区	検出面	埋土	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	平面形	切り合い	遺物等
ピット173	F-15	III	黒色土(Ⅲ層・アカホヤ少量混在)	26	22	51	略円形	無し	土器・石器
ピット178	F-15	III	黒色土(アカホヤ少量混在)	25	25	32	略円形	無し	土器・石器
ピット38	G-15	III	黒色土(アカホヤ少量混在)	28	27	51	略円形	無し	石器
ピット240	F-19	III	黒色土(Ⅲ層・アカホヤ少量混在)	32	27	38	略円形	無し	土器
ピット267	F-19	V	黒色土(アカホヤ微量混在)	31	29	77	梢円形	無し	疊・土器・石器
ピット200	G-19	II c	黒色土(アカホヤ混在)	46	33	63	梢円形	無し	土器
ピット210	G-19	II c	黒色土(アカホヤ少量混在)	27	23	49	略円形	無し	石器
ピット268	F・G-19	V	黒色土(アカホヤ微量混在)	33	32	76	略円形	無し	疊・土器・石器
ピット104	H-20	III	黒色土	40	39	68	略円形	無し	土器・石器
ピット105	I-22	III	黒色土	27	24	32	略円形	無し	石器
ピット146	I-20	III	黒色土	29	29	24	略円形	無し	土器

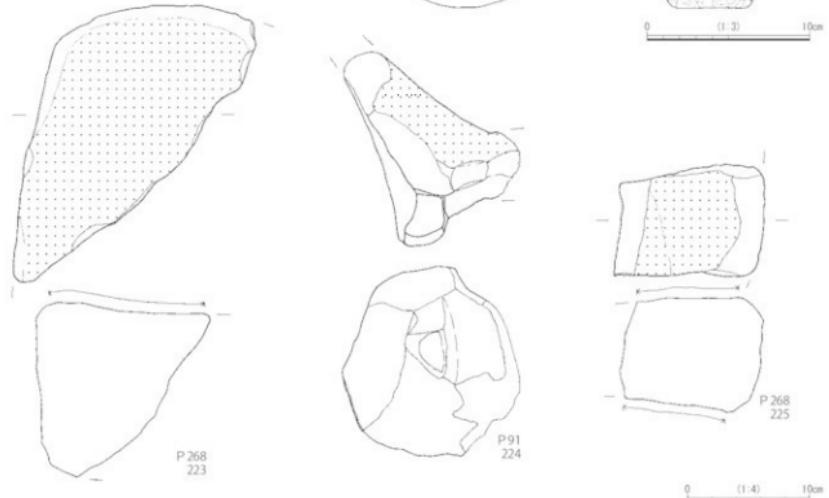
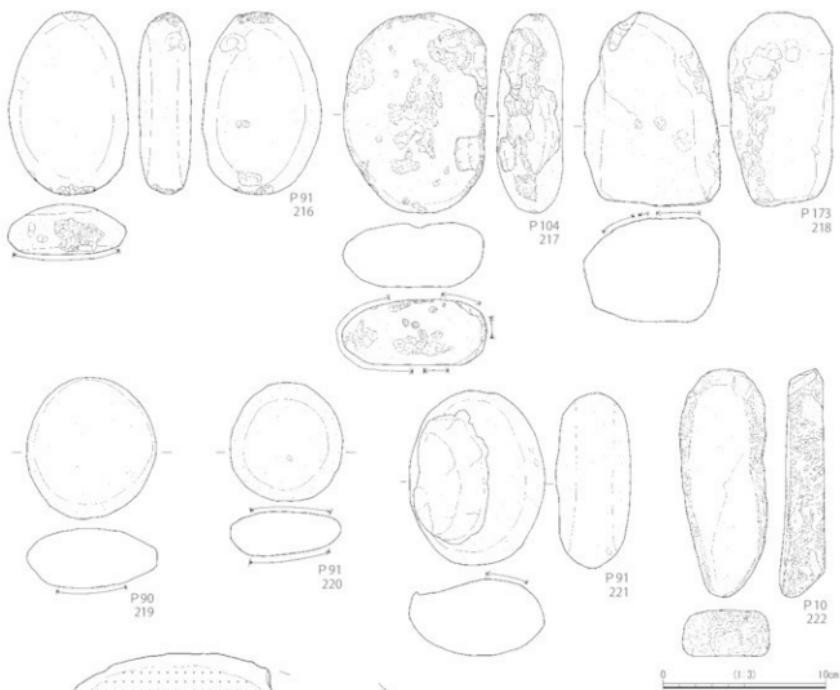


第59図 ピット

0 (1:30) 1m



第60図 ピット出土土器・石器(1)



第61図 ピット出土石器(2)

(3) 繩文時代後期の遺物 (第62図～第107図)

遺物は、II b層(黒色土)を中心に出土しており、その殆どが、後期後半の中岳II式土器の時期に帰属するものと思われる。

本項では、遺構外から出土したもの内、西平式土器4点、中岳II式土器311点、石鏃75点、ドリル1点、楔形石器1点、スクレイパー7点、異形石器3点、打製石斧117点、磨製石斧25点、礫器5点、磨石・敲石51点、石皿24点、砥石3点、用途不明石器2点、垂飾1点、丸玉2点、勾玉1点、管玉1点を図示した。

ア 土器 (第62図～第80図)

西平式土器 (第62図)

本遺跡出土遺物の中で最も古い後期中葉の土器で、少量出土している。226～229はI類の胴部である。器面調整は、外面がR L繩文を施した後、平行沈線を施し、内面はナデを施している。

中岳II式土器 (第63図～第78図)

本遺跡出土遺物の中で最も多く見られる後期後半の土器である。口縁部の形態的特長から大別II A～II I類に分類し、胴部の形態的特長からa・b類に細分した。分類の基準については、小結に表で示しているので、そちらを参照されたい。

230～420は深鉢形土器、421～481は浅鉢形土器である。230～252はII A類に分類される。231は口縁部文様帶に浅く幅広の沈線を1条、230・232～241は2条巡らせている。240・241は口縁部文様帶に沈線を2条巡らせた後、楕円形や円形の凹点を施している。242は口縁部文様帶に沈線を2条、頭部に沈線を1条巡らせている。245は肥厚した口縁部文様帶に沈線を1条巡らせている。246～248は口縁部文様帶に沈線が認められないものである。249は波状口縁で、口縁部文様帶に沈線を1条巡らせている。頭部下には山形の凹点を施している。250は口縁部文様帶に沈線を1条巡らせた後、山形の凹点を連続的に施している。251は口縁部文様帶に楕円形の凹点のみが施されている。252は口縁部文様帶に浅く幅広の沈線を2条巡らせた後、斜立切形の刻目を施している。II A類の器面調整の特徴としては、内外

面共に横方向のミガキで仕上げる傾向がある。238・248のように内外面をナデのみで仕上げているものも認められるが稀である。

253～354はII B類に分類される。その内、254～257・280～282・303がa類、317がb類に細分される。253・255～281は口縁部文様帶に浅く幅広の沈線を2条巡らせている。255は胴部に沈線を2条巡らせた後、添加文に三日月文、主文に円形の凹点を連続的に施している。282～301は口縁部文様帶に沈線を2条巡らせている。279～281は胴部に沈線を1条巡らせている。302～314は口縁部文様帶に沈線を1条巡らせている。303は胴部に沈線を1条巡らせている。315～326は口縁部文様帶に沈線が認められないものである。327～341は波状口縁をなすものである。327～337・340は口縁部文様帶に沈線を2条巡らせている。328・329・340は頂部下に円形の凹点を、338は三日月文を1点施している。332は口縁部文様帶に連続的に円形の凹点を施している。332・336・338・340は頂部の口唇部に円形の凹点を施している。342・343は口縁部文様帶に沈線を3条巡らせている。344は口縁部文様帶に浅く幅広の沈線を1条巡らせた後、楕円形の凹点を施している。345は肥厚した口縁部文様帶に沈線を2条巡らせ、頭部に楕円形の凹点を施している。347・348は肥厚した口縁部文様帶に沈線を2条巡らせ、頭部に円形の凹点を施している。346は口縁部文様帶に楕円形の凹点と三日月文を連続的に施している。349は口縁部文様帶に沈線を2条巡らせている。350は小型鉢で、口縁部文様帶に楕円形の凹点を連続的に施している。351は口縁部文様帶に沈線を1条巡らせた後、楕円形の凹点を連続的に施し、赤色顔料を帯状に塗布している。口唇部には刻目を施している。352は口縁部文様帶に沈線を1条、353・354は2条巡らせた後、凹点を連続的に施している。352・353は楕円形で、354は楕円形の凹点である。II B類の器面調整の特徴としては、外面が胴部下位を縱や斜め方向のミガキで仕上げ、胴部中位から頸部にかけて主に横方向のミガキで仕上げる傾向がある。内面は胴部下位から頸部にかけては横方向のミガキか、ナデで仕上げる傾向がある。254～257・281・282・285・328は外面に煤が付着している。



226



227



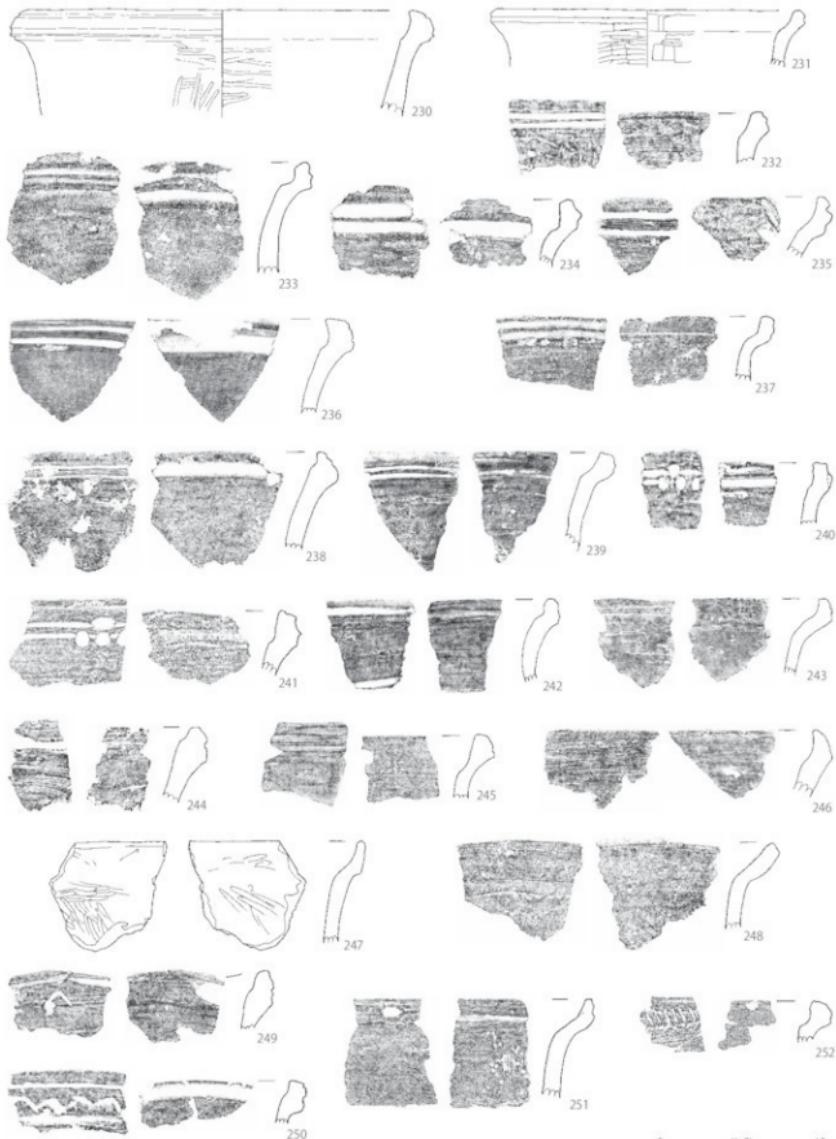
228



229

0 (1:3) 10cm

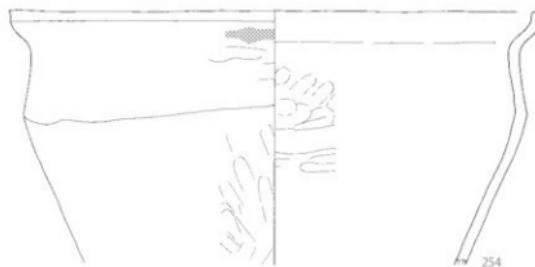
第62図 繩文時代後期の土器(1)



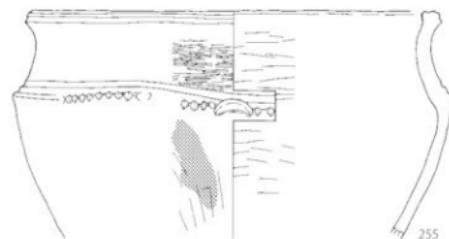
第63図 縄文時代後期の土器（2）



253

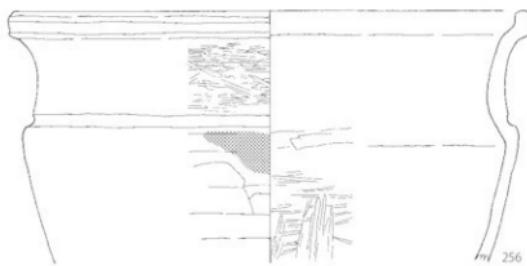


254

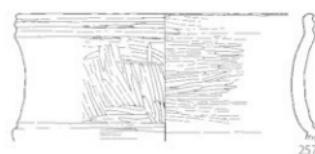


255

0 (1:4) 10cm



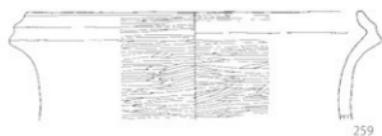
256



257



258



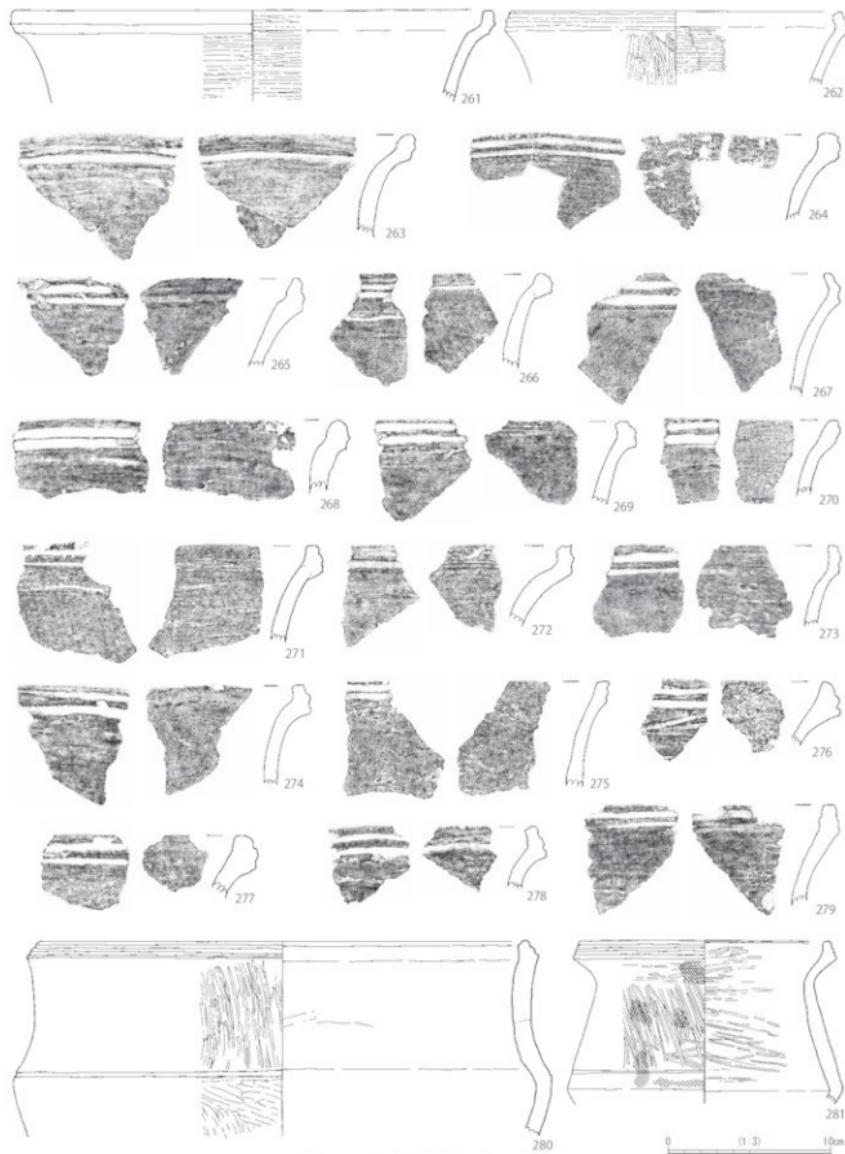
259



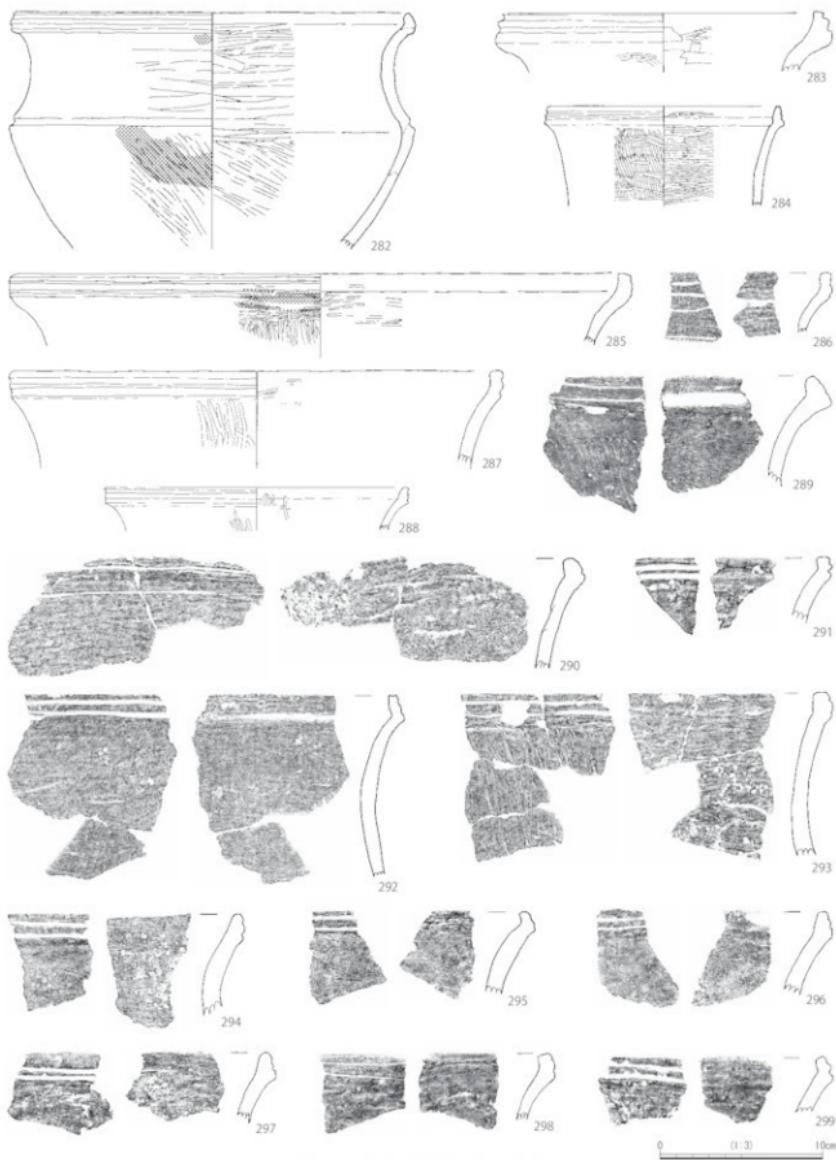
260

0 (1:3) 10cm

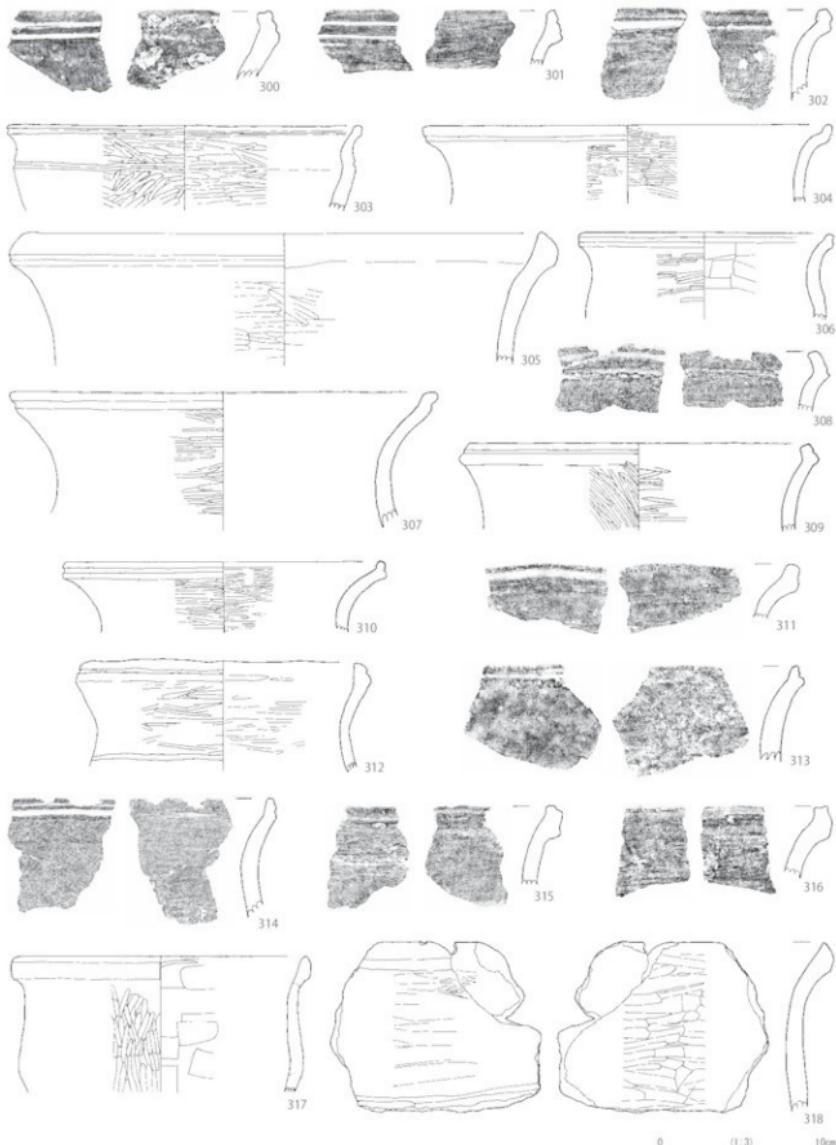
第64図 縄文時代後期の土器（3）



第65図 繩文時代後期の土器(4)



第66図 繩文時代後期の土器(5)

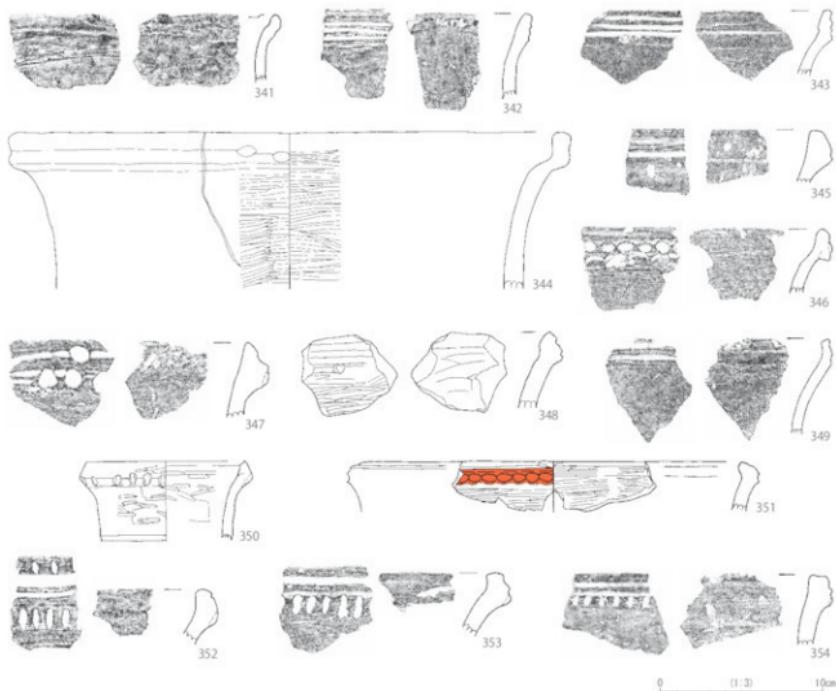


第67図 縄文時代後期の土器（6）



第68図 縄文時代後期の土器（7）

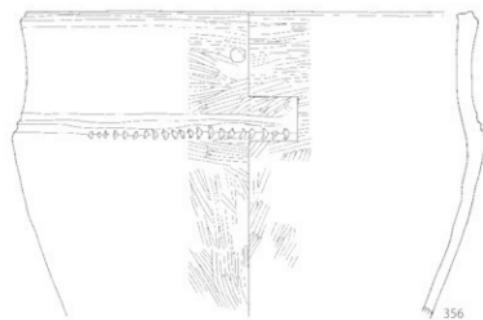
0 (1:3) 10cm



第69図 縄文時代後期の土器(8)

355～373はII C類に分類される。その内、356～358・370がa類に、355がb類に細分される。355・358～366・368は口縁部文様帯に沈線を2条巡らせている。358・359・365・368の沈線は浅く幅広である。355は胴部にも沈線を2条巡らせている。359・364は円形の凹点を連続的に施している。361は口縁部文様帯に山形の凹点を連続的に施している。362は口縁部文様帯と胴部最大径の所に刻目を連続的に施している。363は口縁部文様帯に三日月文を2点施している。356・357・367～370・372は口縁部文様帯に沈線を1条巡らせている。367のみ沈線が細く、その他のものは浅く幅広である。367は波状口縁で、頂部上面に梢円形の凹点を施している。356は胴部に浅く幅広の沈線を2条巡らせた後、刻目を連続的に施し、頸部に円形の凹点を施している。370は胴部に沈線が1条巡らせていている。371・373は口縁部文様帯に沈線が認められないものである。II C類の器面調整の特徴としては、外側が胴部下位に縱や斜め方向のミガキ、胴部中位から頸部にかけて主に横方向のミガキで仕上げる傾向がある。内面は胴部下位が縱や斜め方向のミガキ、胴部中位から頸部にかけては横方向のミガキか、ナデで仕上げる傾向がある。357・371のように外面を横方向のナデで仕上げるものもある。

374～387はII D類に分類される。その内、375がa類、374・382がb類に細分される。374・376～381は口縁部文様帯に沈線を2条巡らせている。377～378の沈線は浅く幅広である。374は胴部にも沈線を1条巡らせている。376・378は波状口縁である。380・381は口縁部文様帯に円形の凹点を連続的に施している。375・382・383は口縁部文様帯に沈線を1条巡らせている。375・383の沈線は浅く幅広である。382は胴部にも沈線を1条巡らせている。384～387は口縁部文様帯に沈線が認められないものである。II D類の器面調整の特徴としては、外側に縱方向及び横方向のミガキを施し、内面に横方向のミガキやナデを施す傾向がある。374・382は外側に煤が付着している。



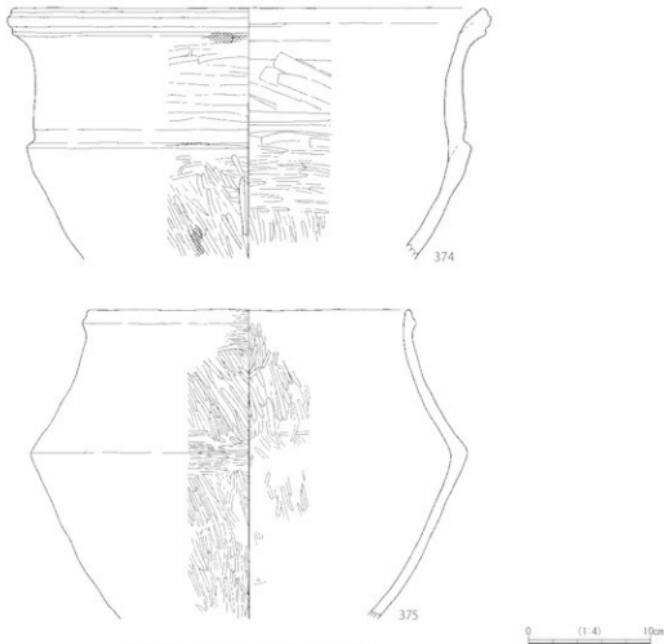
0 (1-4) 10cm

第70図 繩文時代後期の土器 (9)



第71図 縄文時代後期の土器 (10)

0 (1:3) 10cm



第72図 繩文時代後期の土器 (11)

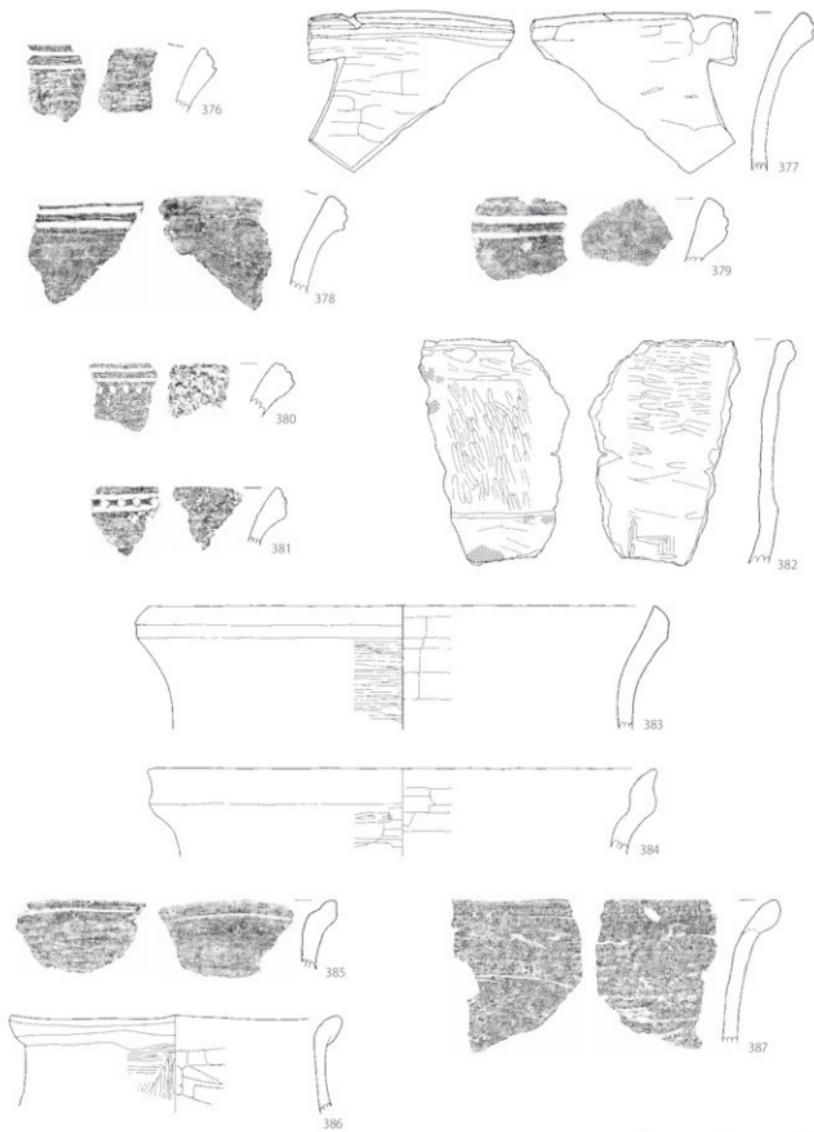
388～393はII E類に分類される。その内、388がb類に細分される。388は口縁部文様帶に沈線を1条巡らせている。389～391は口縁部文様帶に沈線が認められないものである。392・393は口縁部文様帶に沈線を3条巡らせている。393は口縁部文様帶に円形の凹点を連続的に施している。II E類の器面調整の特徴としては、外面に横方向のミガキを施し、内面に横方向のミガキやナデを施す傾向がある。391は外面に煤が付着している。

394～407はII F類に分類される。その内、404がa類に細分される。394は口縁部に低い段を持っている。395は口唇部に2条の沈線を巡らせている。406は口縁部に沈線を1条巡らせた後、刻目を施している。II F類の器面調整の特徴としては、内外面共に横方向のミガキやナデを施す傾向がある。398のように外面に縱方向のミガキを施すものや401のように内面に横方向のケズリを施すものもある。

408～420は深鉢形土器の胴部である。408～416・418～420はII a類、417がII b類に分類される。408～411は胴部最大径の所に沈線を3条巡らせている。409・410は楕円形の凹点を連続的に施している。410は半月

形の凹点も施されている。412は胴部最大径の所に沈線を2条巡らせ、綾杉状に刻目を施している。413～415は胴部最大径の所に沈線を2条巡らせた後、楕円形や円形の凹点を連続的に施している。418は口縁部の一部を欠損している。口縁部文様帶に沈線を1条巡らせている。419は胴部最大径の所に沈線を1条巡らせている。420は胴部最大径の所に刻目突帯を巡らせている。II a・II b類の器面調整は、内外面にミガキやナデを施す傾向がある。417は外面に貝殻条痕を施している。

421～470はII G類に分類される。その内、442・448・451・454・459・460・468はa類に、421はb類に細分される。421～435は口縁部文様帶に浅く幅広沈線を2条巡らせている。424は沈線を巡らせた後、楕円形の凹点を施している。429は沈線を巡らせた後、刻目を連続的に施している。436は口縁部文様帶に浅く幅広沈線を1条巡らせた後、円形の凹点を連続的に施している。437～447は口縁部文様帶に沈線を2条巡らせている。437は沈線を巡らせた後、円形の凹点を連続的に施している。448～462は口縁部文様帶に沈線を1条巡らせている。455・462は玉縁を呈している。463・465は

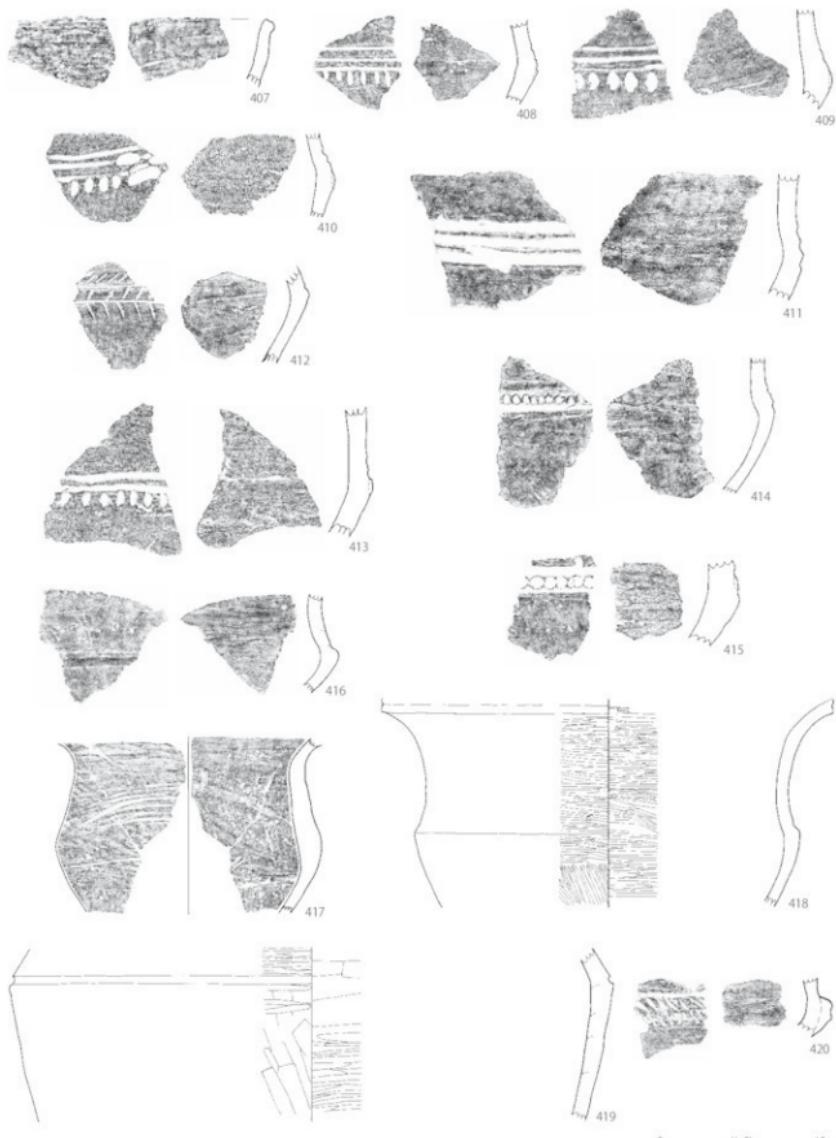


第73図 縄文時代後期の土器 (12)

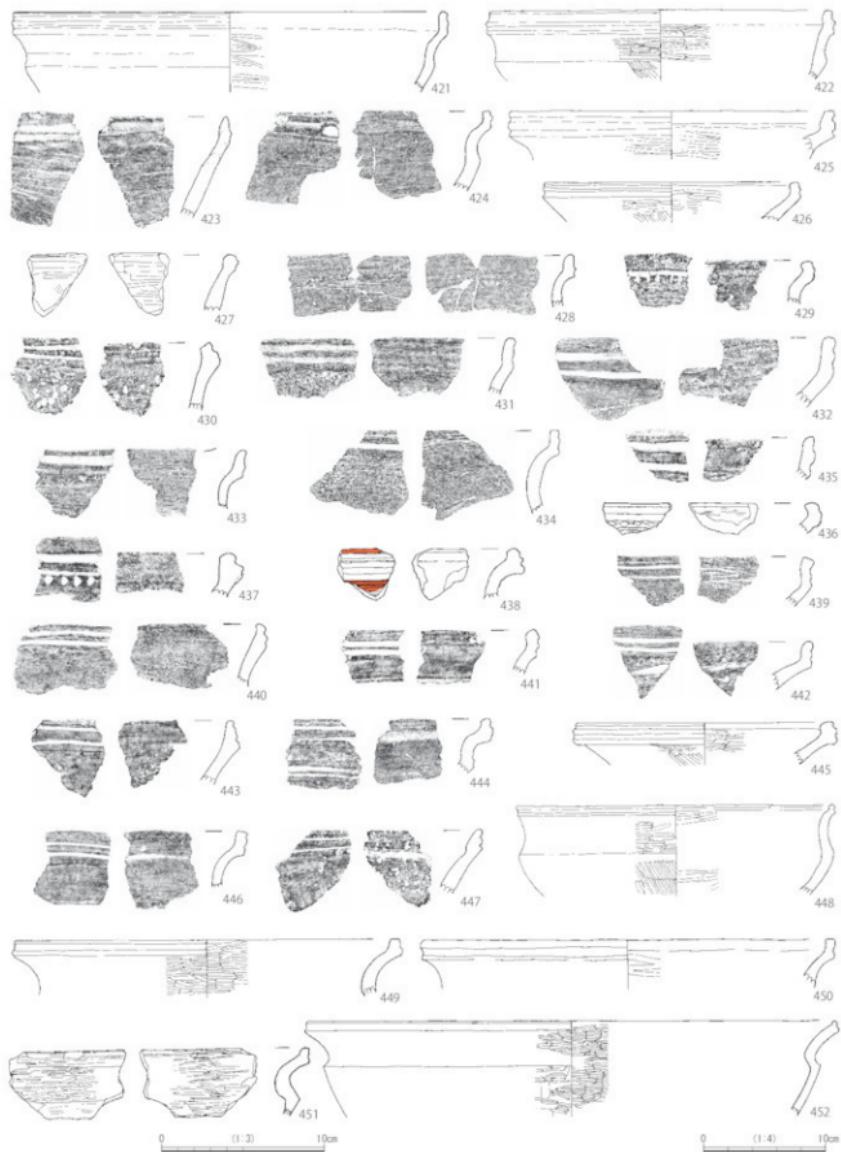
0 (1:3) 10cm



第74図 繩文時代後期の土器 (13)



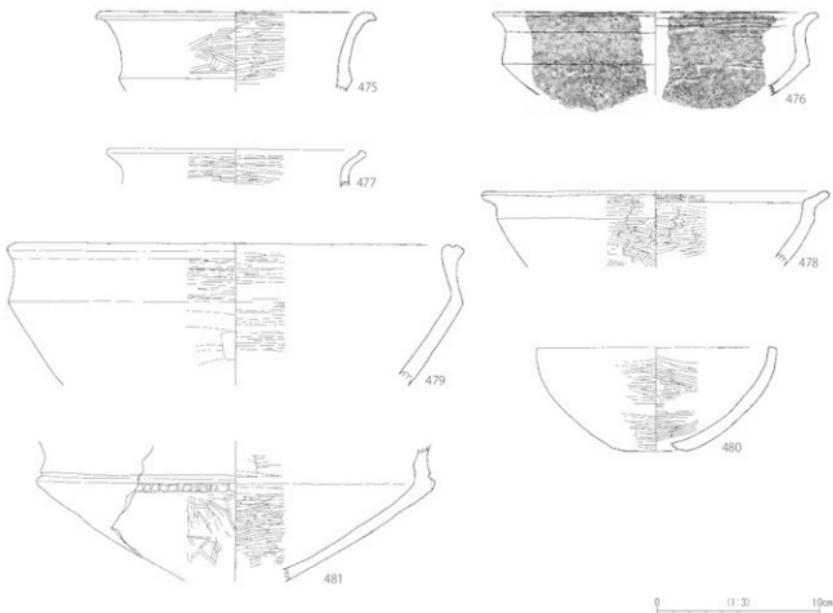
第75図 縄文時代後期の土器 (14)



第76図 縄文時代後期の土器 (15)



第77図 縄文時代後期の土器 (16)



第78図 縄文時代後期の土器 (17)

0 (1:3) 10cm

口縁部文様帯に沈線が認められないものである。464は口縁部文様帯に沈線を2条巡らせている。波状口縁をなし、頂部下には円形の凹点を施している。463・464は口縁部文様帯に円形の凹点を施している。466～470は口縁部文様帯に沈線を3条巡らせている。468は胸部最大径の所で沈線を1条巡らせている。468・469は波状口縁である。468は4対の頂部をもつものである。II G類の器面調整の特徴としては、外面が縱方向や横方向のミガキ、内面が横方向のミガキやナデを施す傾向がある。438は外面に赤色顔料を塗布している。468は外面に煤が付着している。

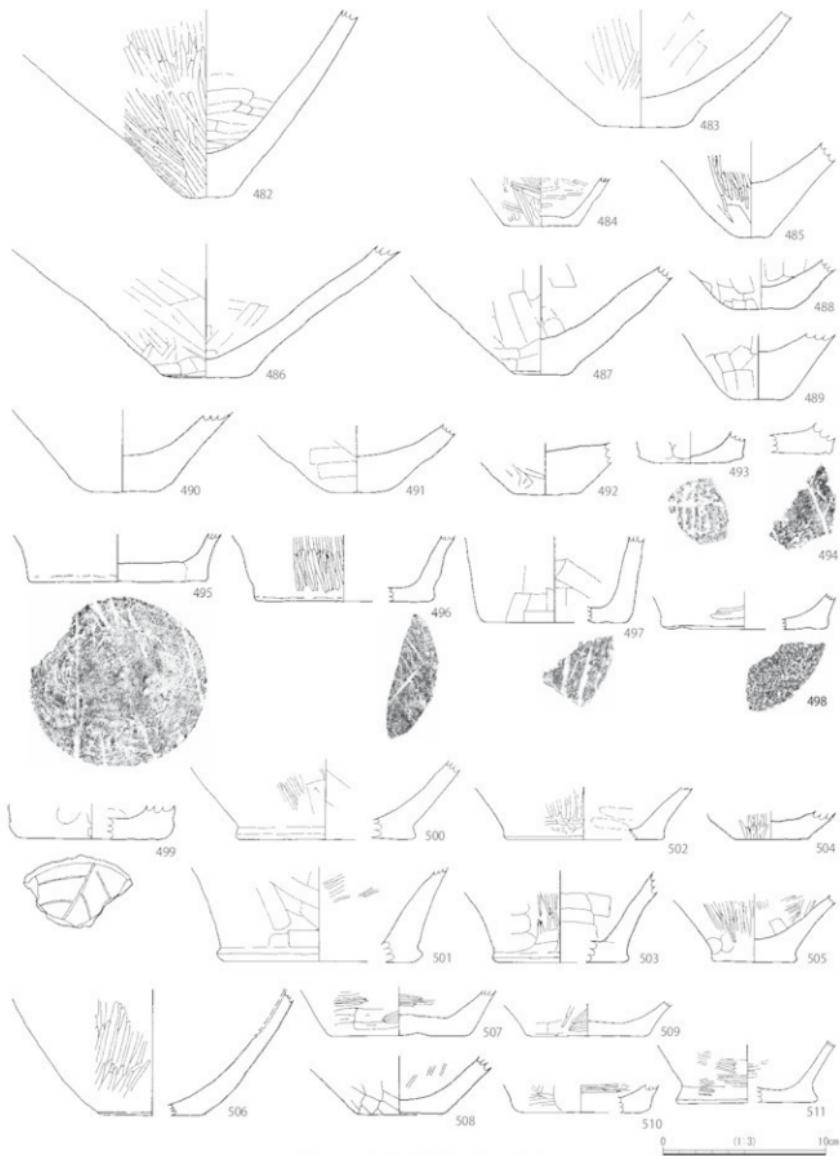
471～474はII H類に分類される。472は口縁部に沈線を1条巡らせている。474は口縁部に補修孔が認められる。II H類の器面調整の特徴としては、外面が縱方向や横方向のミガキ、内面が横方向のミガキ及びナデを施す傾向がある。471は外面に煤が付着している。

475～481はII I類に分類される。その内、475・476・479・481はa類に細分される。475～479・481は外反する口縁部で、480は直立する口縁部である。479は口唇部に沈線を巡らせている。481は胸部最大径の所で沈線を1条巡させる他、刻目を連続的に施している。

II I類の器面調整の特徴としては、外面が横方向や縱方向のミガキ、内面が横方向のミガキを施している。

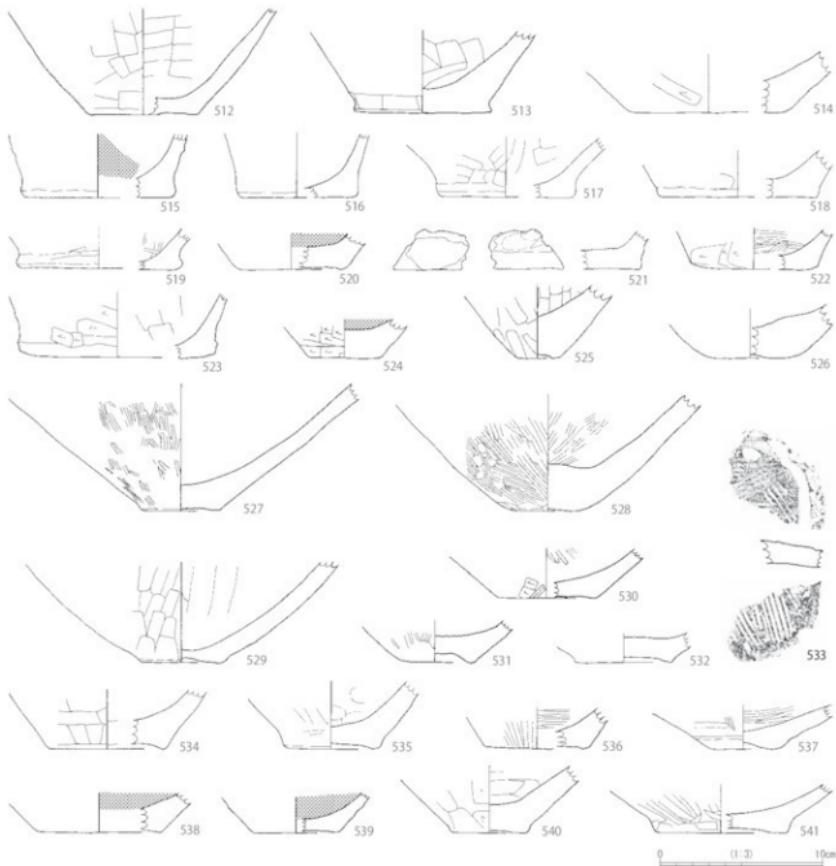
縄文時代後期の土器底部 (第79図・第80図)

482～492・524～529はII類の底部である。493～523・530～541は未分類の底部である。482～492・524は底径1.6～5.1cmの底部に厚みのある平底である。493～497・499は底部に木葉痕が認められる。498は鰐の脊椎と思われる文様が認められる。500～523は底径4.5～11.5cmの比較的底部が薄い平底である。525～541は底径2.6～8.0cmの上げ底状の底部である。器面調整は内外面共に縱方向や横方向のミガキ、ナデ、ヘラ削り等様々である。533は外面上に具殻条痕が認められる。515・520・524・538・539は内面に煤が付着している。



第79図 縄文時代後期の土器 (18)

0 (1:3) 10cm



第80図 繩文時代後期の土器 (19)

イ 土製品 (第81図・第82図)

円盤形土製加工品 (第81図・第82図)

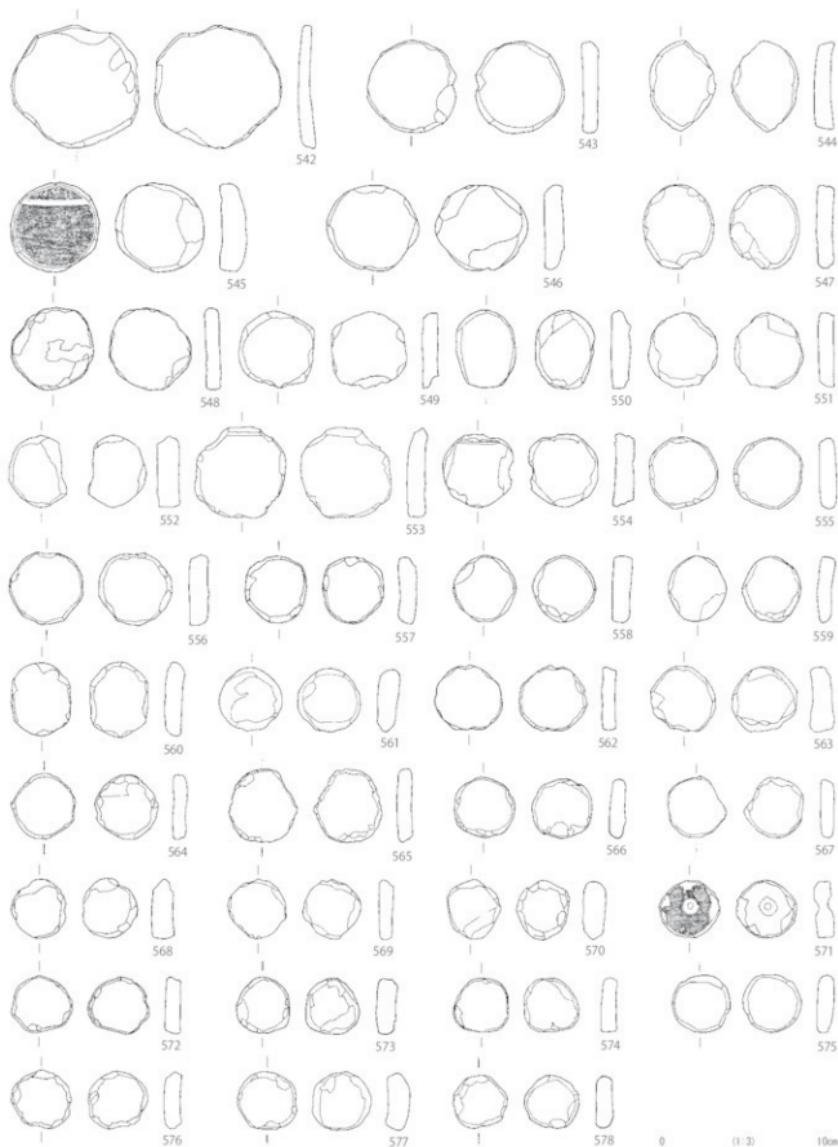
542～591は円盤形土製加工品である。器面調整は内外面にミガキを施すものが殆どであり、中岳式土器を利用したものと考えられる。542～548は直径5cm以上の大型で、549～580が3cm以上5cm未満の中型。581～591が3cm未満の小型である。545は沈線が認められる。571は両面から穿孔を行っているが貫通はしていない。

土製品 (第82図)

592は土製品とするか焼成粘土塊とするのか迷うもの

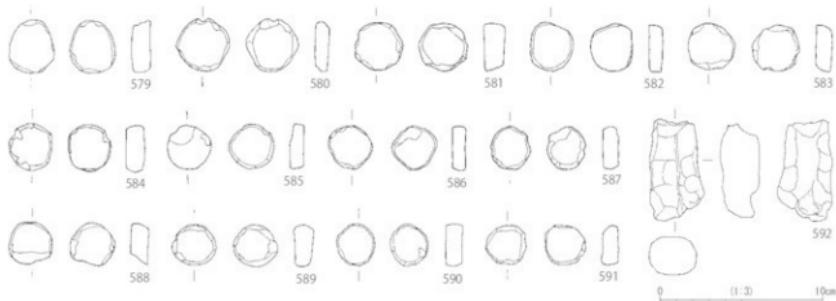
であるが、2枚の粘土塊を重ねた後、全体に手で押された痕跡が認められるため、ここでは土製品として取り扱うこととする。現存部分で長さ6.2cm、幅2.4～3.3cm、厚さ2.9cmである。上位は欠損しているが、つまんだ痕跡が認められ、0.7cmと薄くなっている。また、下位は1cmの切れ込みが認められる。表面とした面では重ねたときの名残りか中央に沈線が認められる。

この土製品を土偶と想定して、上位の欠損した部分が頭で、下位の切れ込みが足。また中央の沈線が妊娠線と考えられないだろうか。



第81図 繩文時代後期の土製品(1)

0 (1:3) 10mm



第82図 繩文時代後期の土製品(2)

ウ 石器(第83図～第107図)

石鏃(第83図・第84図)

平面形態からI～IV類に分類し、I・II類は基部形態からa～c類に細分した。分類の基準については、小結に表で示しているので、そちらを参照されたい。

593～595はI a類、596～614がI b類、615～637がI c類、638がII a類、639～653がII b類、654～655がIII類、656がIV類に分類される。657・658は先端部のみで基部形状は不明である。659～667は石鏃未製品である。3cm前後の小型剥片を素材としている。石材は、601・602・612・614・618・622・624～628・632～636・638～641・643・648・649・653～661・663・667が黒曜石、594・595・597・603・604・607・608・610・613・617・620・621・623・631・637・646・652が安山岩、615・619・629・644・650・651・662・664がチャート、598・599・606・616・647がホルンフェルス、596・609・630が頁岩、593・600・611が水晶、605・666が玉髓、645・665が珪質頁岩、642が流紋岩である。

ドリル(第85図)

668はドリルである。表裏両面に調整剥離を施し、先端部を作出している。石材は、安山岩である。

楔形石器(第85図)

669は楔形石器である。表裏両面に節理面を残している。上下両端部に対となる潰れ状の剥離が認められる。石材は、頁岩である。

スクレイパー(第85図)

670～676はスクレイパーである。670・671は刃幅5.2cm～5.7cmの中型で、672～676は刃幅9.1cm～14.6cmの大型である。670・671は比較的長い並列剥離で刃部を作出しているのに対し、672～676は簡易な剥離で刃部を作出しているのに対し、672～676は簡易な剥離で刃

部を作出している。674・676は刃部に使用に伴うものと思われる摩滅が認められる。石材は、672～676がホルンフェルス、670が安山岩、671が水晶である。

異形石器(第85図)

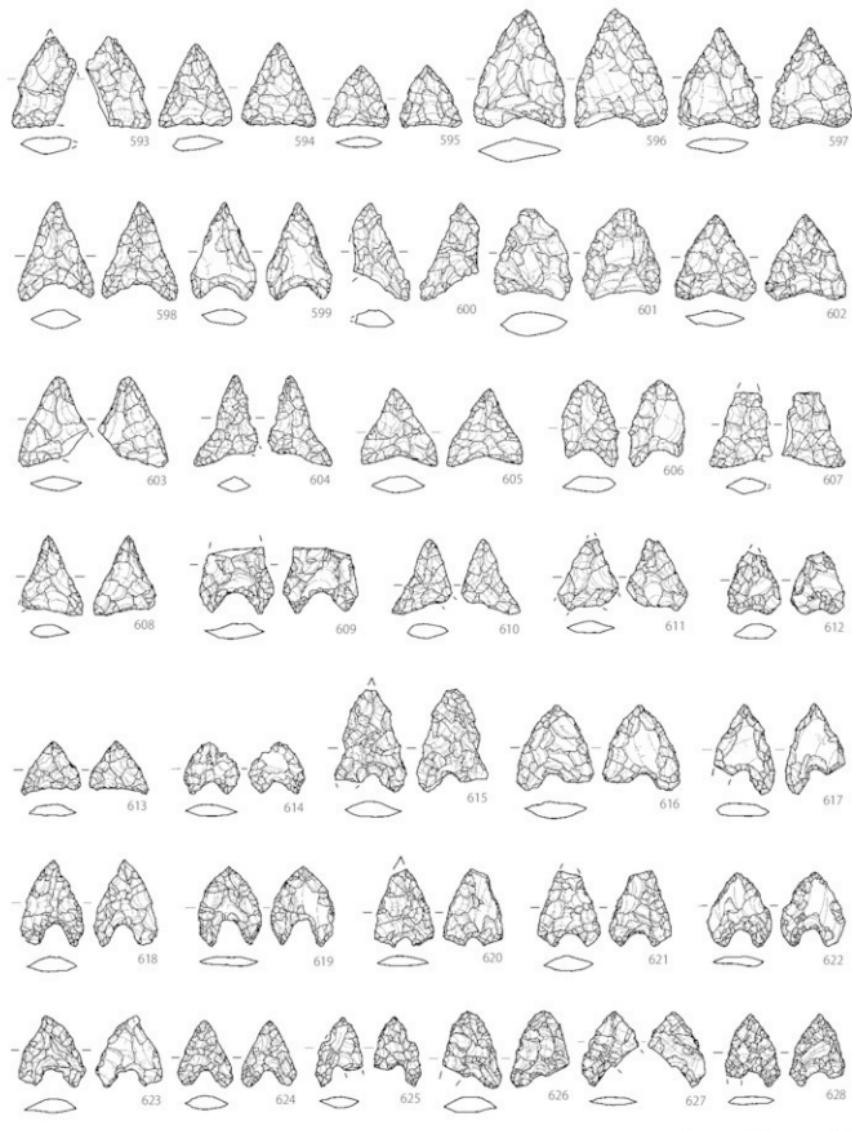
677～679は異形石器である。677・678は表裏両面に平坦剥離を施している。677はブーメラン形、678は靴形を呈する。679は縱長剥片を素材とし、上下両端部をつまみ形に仕上げている。石材は、全て黒曜石である。

打製石斧(第86図～第95図)

本遺跡出土石器の中で最も多く見られるもので、平面形態からI～IV類に分類し、IVについて刃部形態からA～D類に分類した。I～IV類は打ち欠きのみで仕上げているものをa類、打ち欠き後、部分的に簡易な研磨を施すものをb類に細分した。分類の基準については、小結に表で示しているので、そちらを参照されたい。

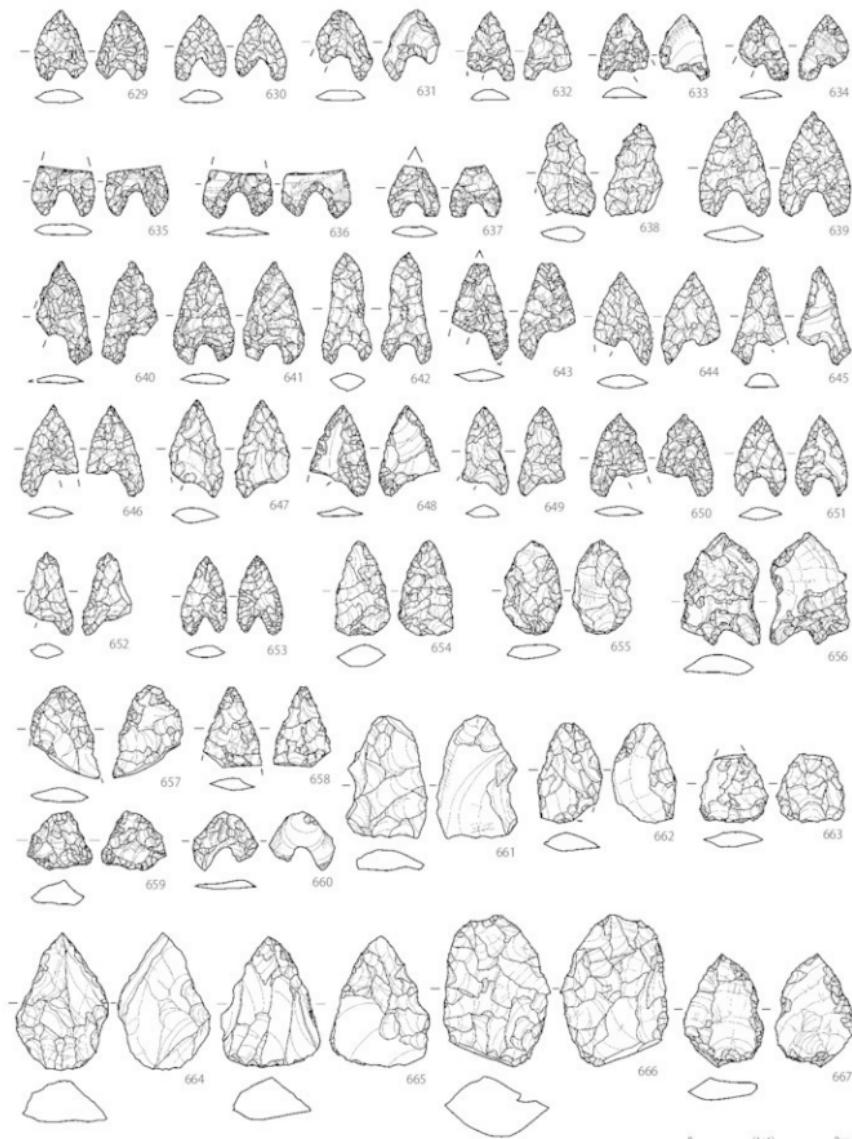
b類は所謂「局部磨製石斧」や「部分磨製石斧」と呼ばれているものである。a・b類の製作工程は、部分研磨を施すことを除き共通しており、大型の剥片なし、礫片・扁平な礫を素材とし、縁辺から大まかな成形剥離後、細部を調整剥離している。したがって、a類としたものの中にb類の研磨前のものが含まれている可能性がある。本遺跡では、両者を明確に分けることができないため類型化した。

680～704はI a類、705～731がI b類、732～738がII a類、739～744がII b類、745～751がIII A a類、752～756がIII A b類、757～761がIII B a類、762がIII B b類、763～768がIII C a類、769がIII C b類、784～788がIV a類、783・789がIV b類に分類される。770～776は有刃で打製のものではあるが、刃部形態が不明であることからIII a類とした。777～782是有刃で部分研磨を施すものではあるが、刃部形態が不明であることからIII b類とした。790は打製石斧が欠損し、基部のみが

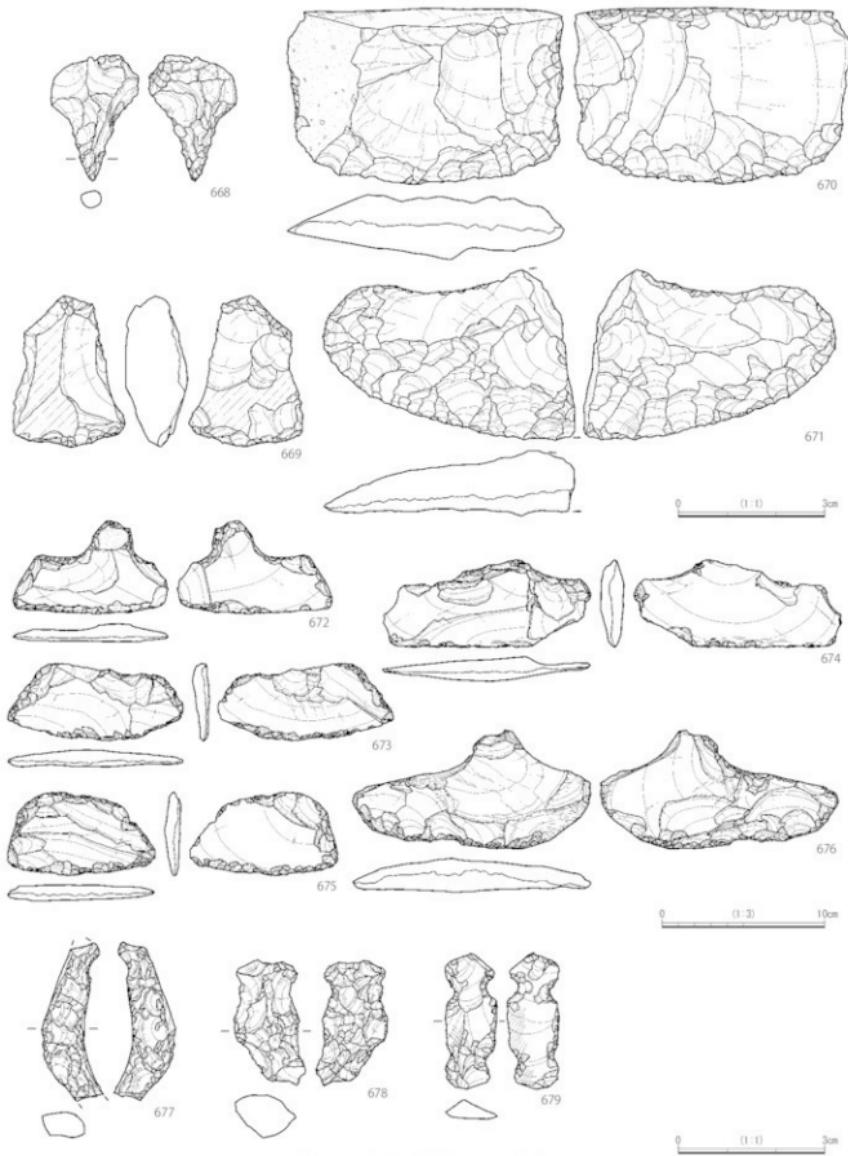


第83図 縄文時代後期の石器（1）

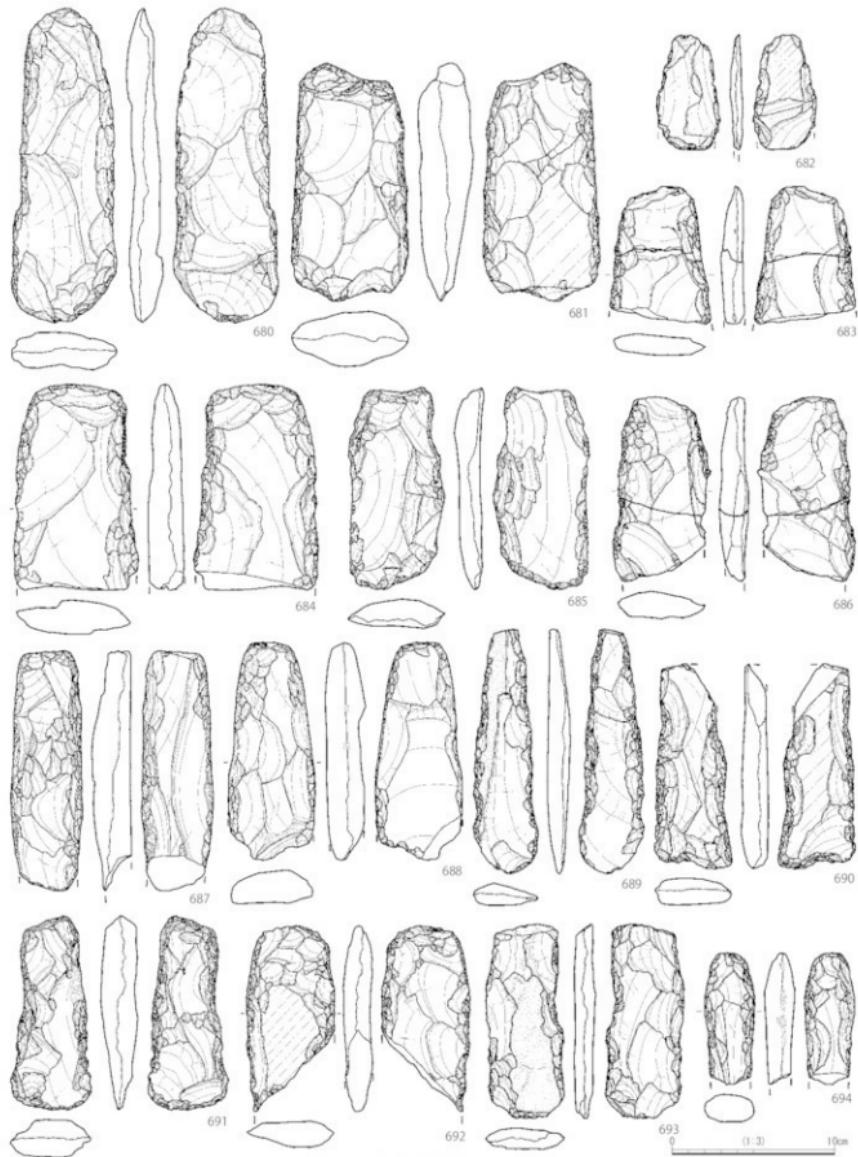
0 (1:1) 3cm



第84図 繩文時代後期の石器（2）



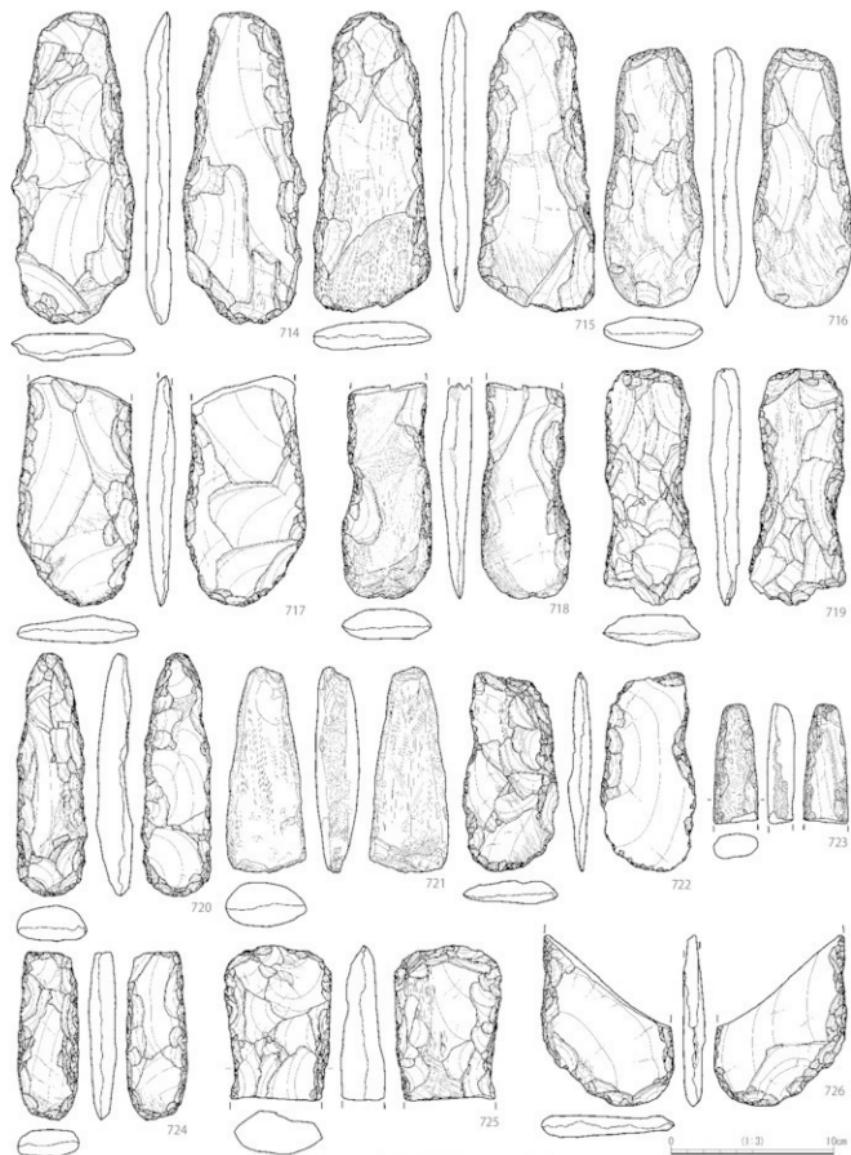
第85図 縄文時代後期の石器（3）



第86図 縄文時代後期の石器(4)



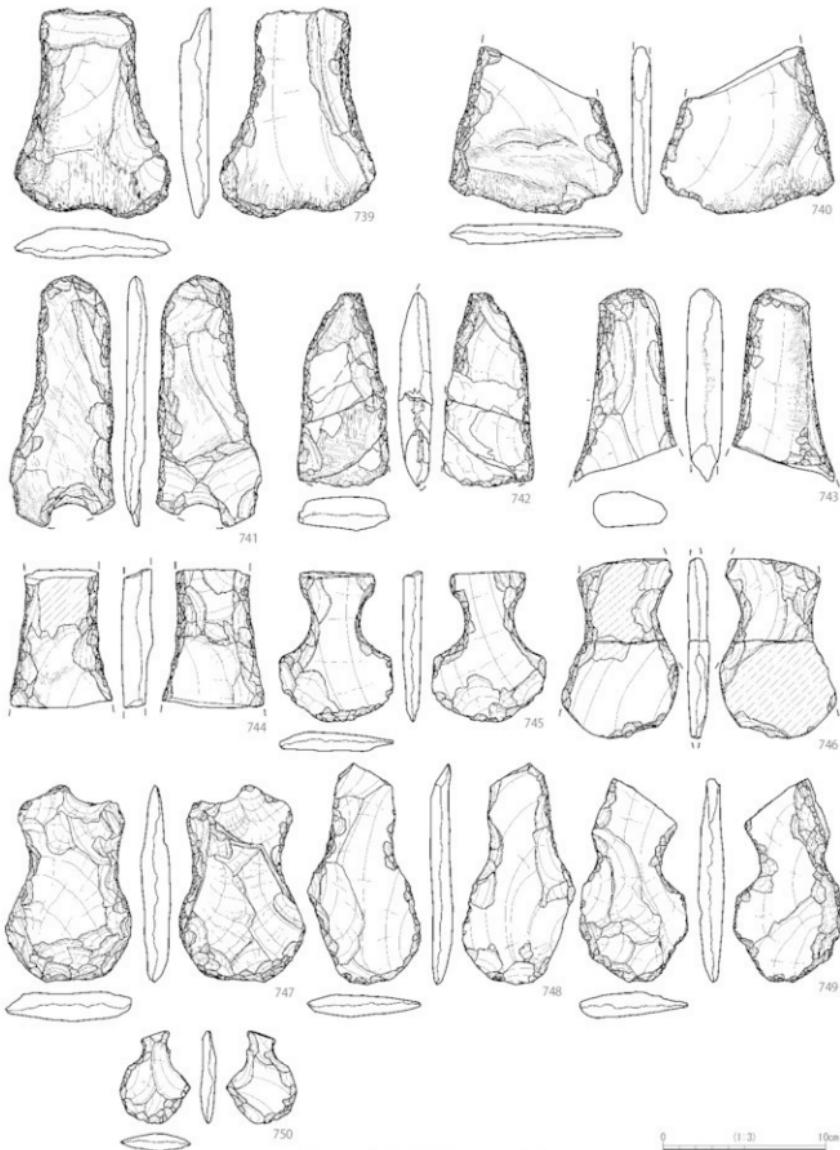
第87図 縄文時代後期の石器（5）



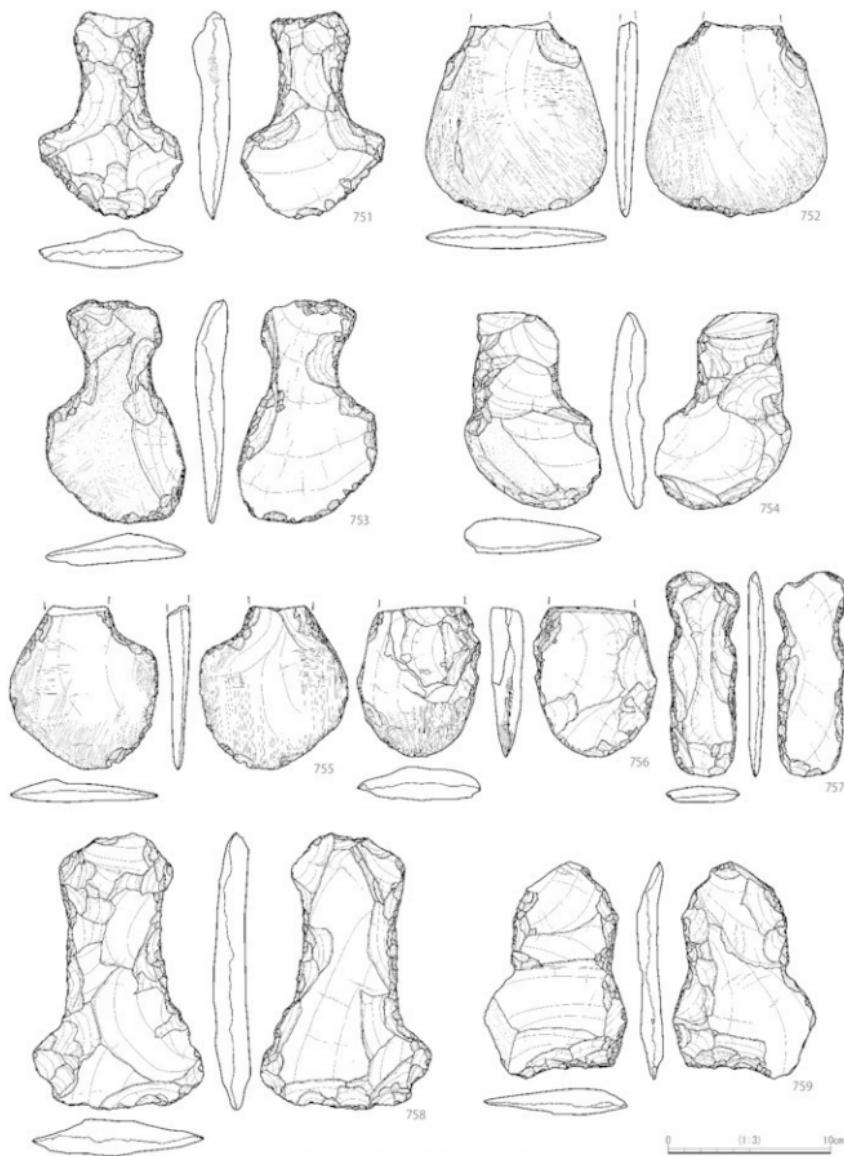
第88図 縄文時代後期の石器（6）



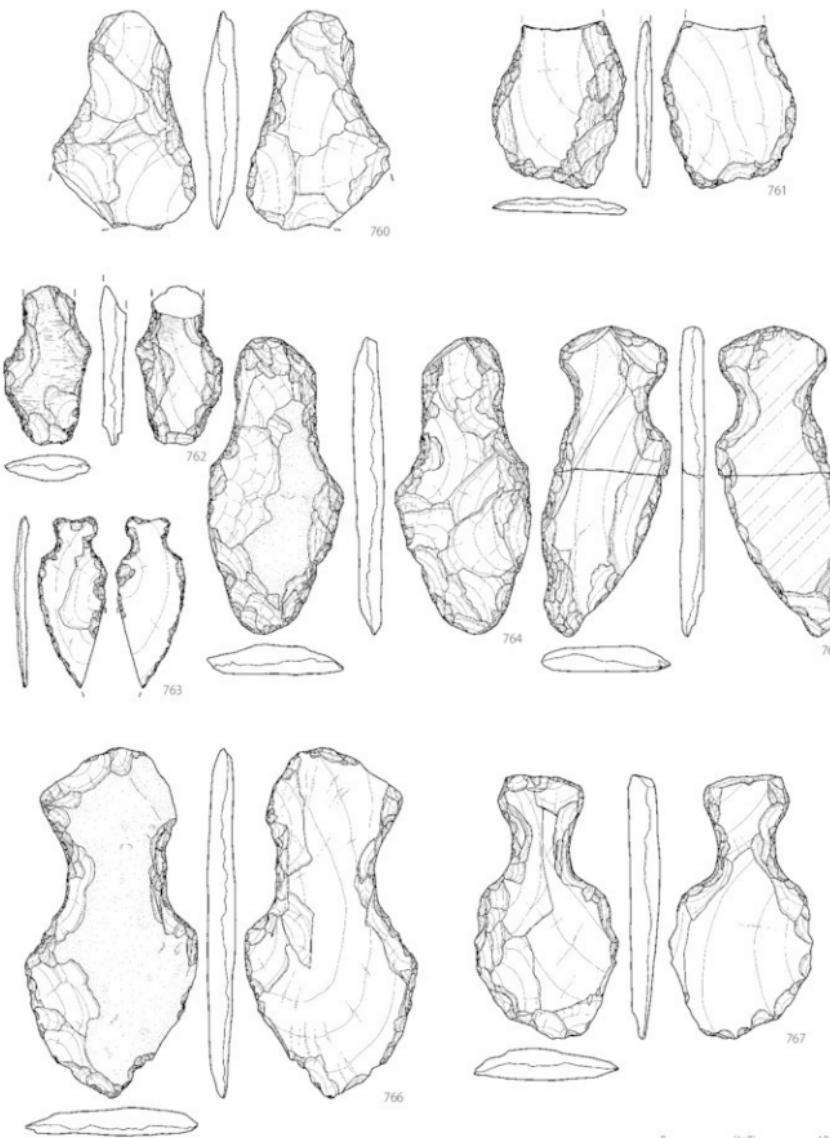
第89図 繩文時代後期の石器（7）



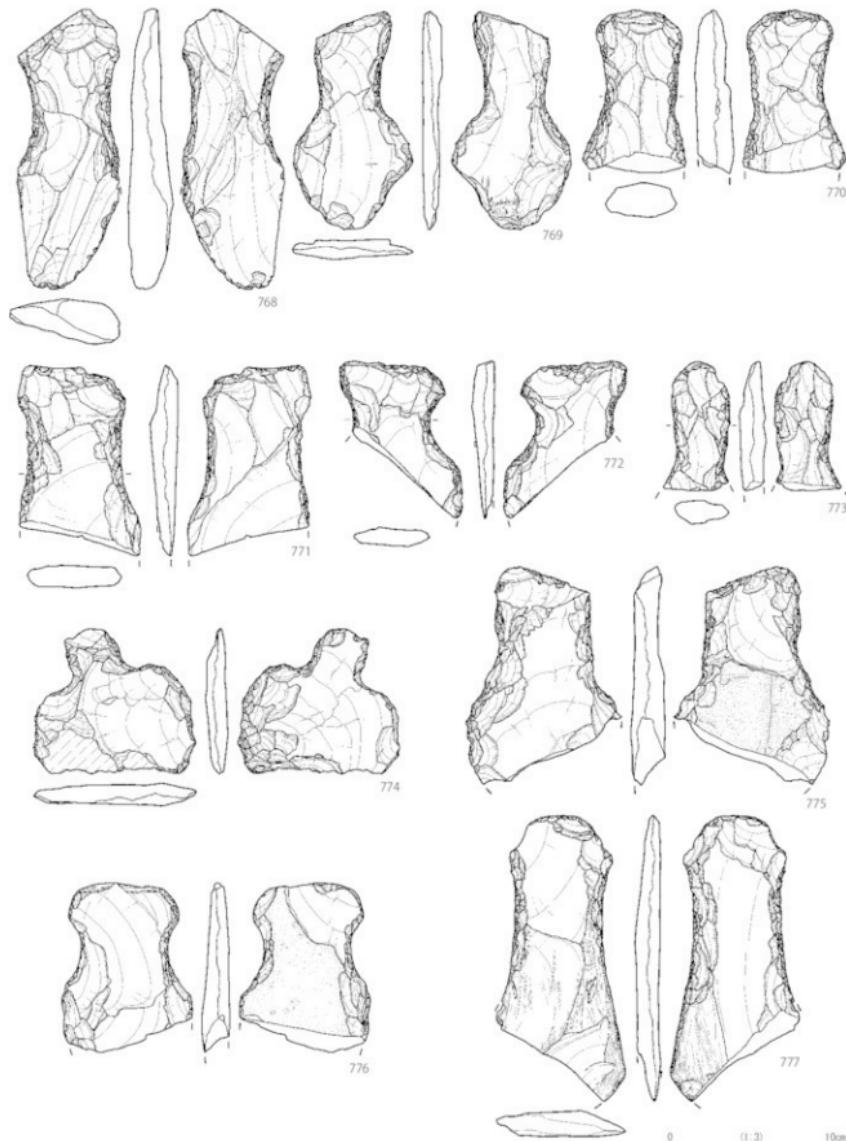
第90図 縄文時代後期の石器（8）



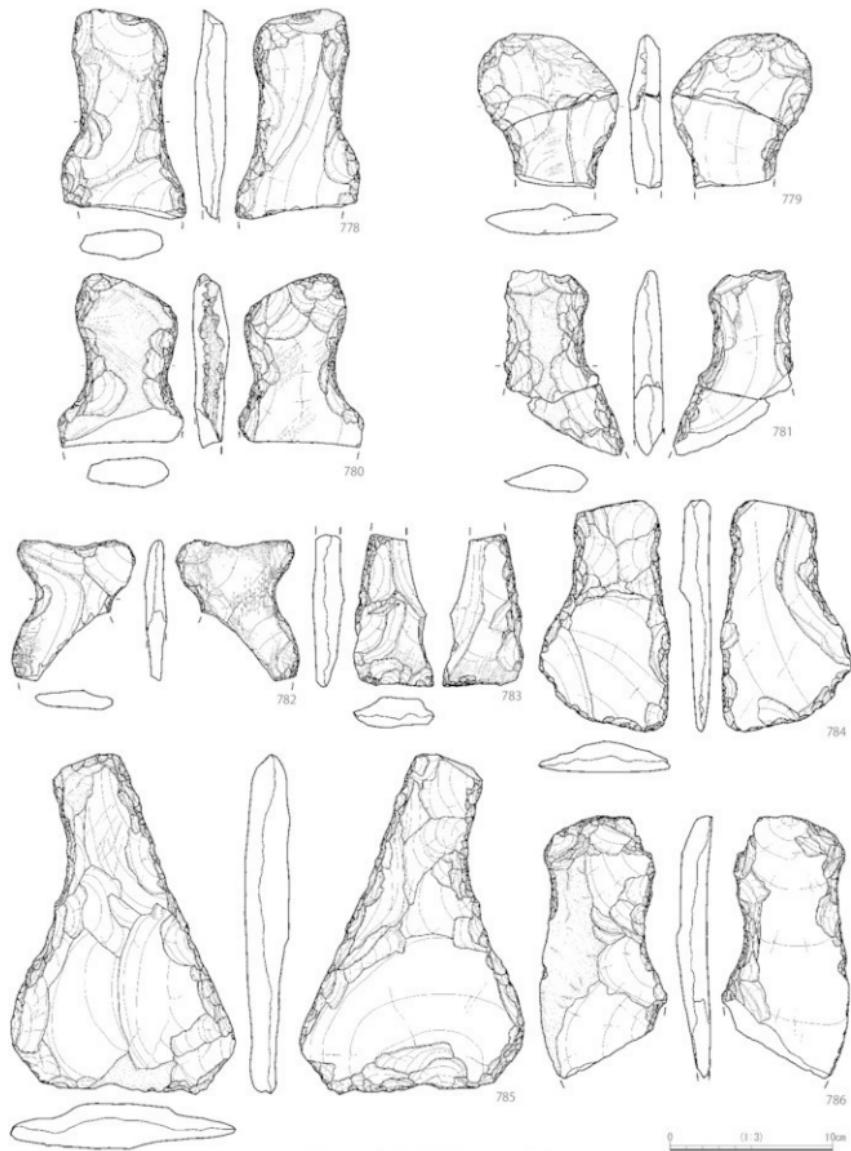
第91図 縄文時代後期の石器（9）



第92図 縄文時代後期の石器 (10)

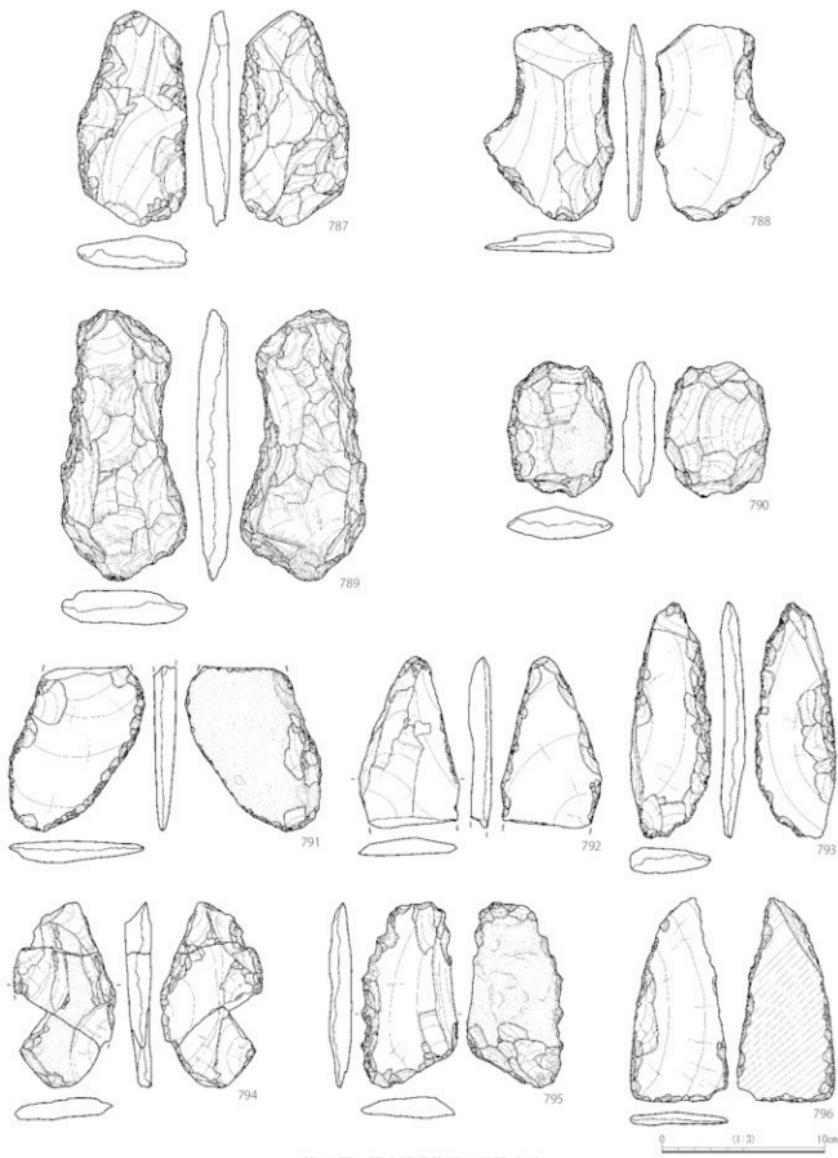


第93図 縄文時代後期の石器 (11)

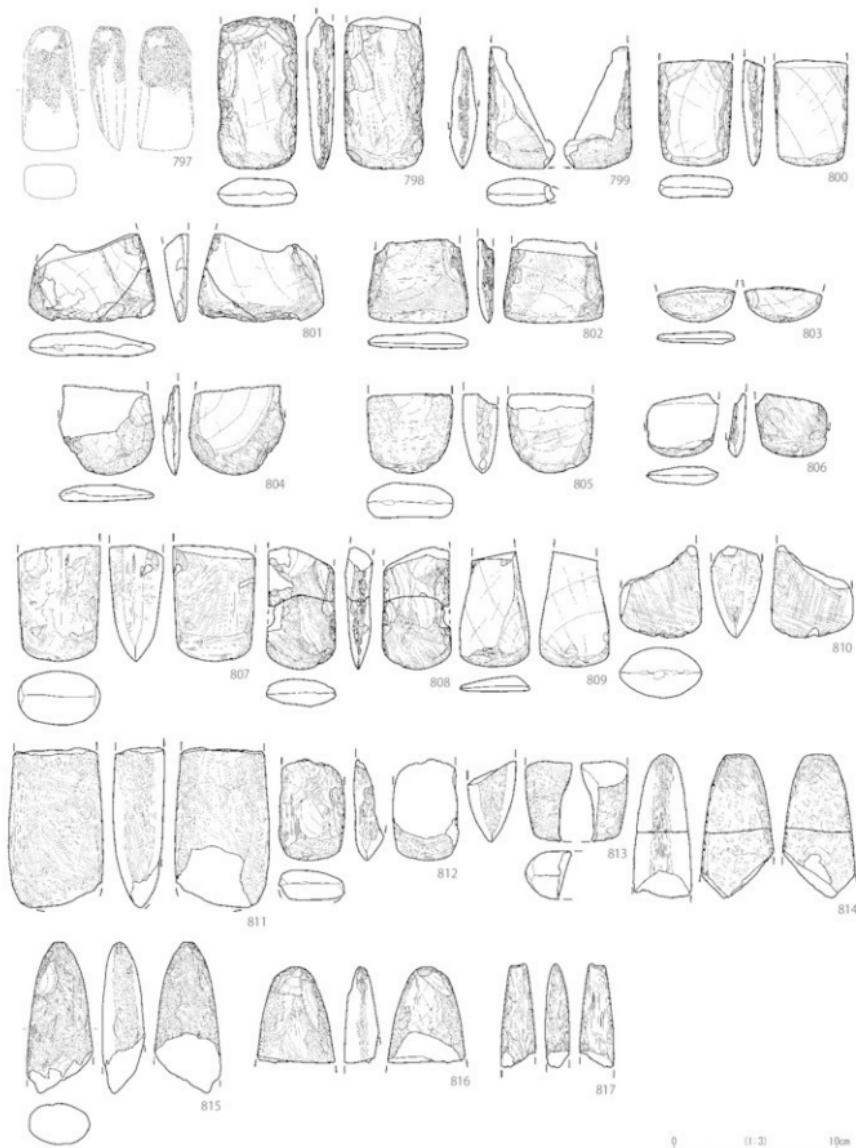


第94図 縄文時代後期の石器 (12)

0 (1:3) 10cm

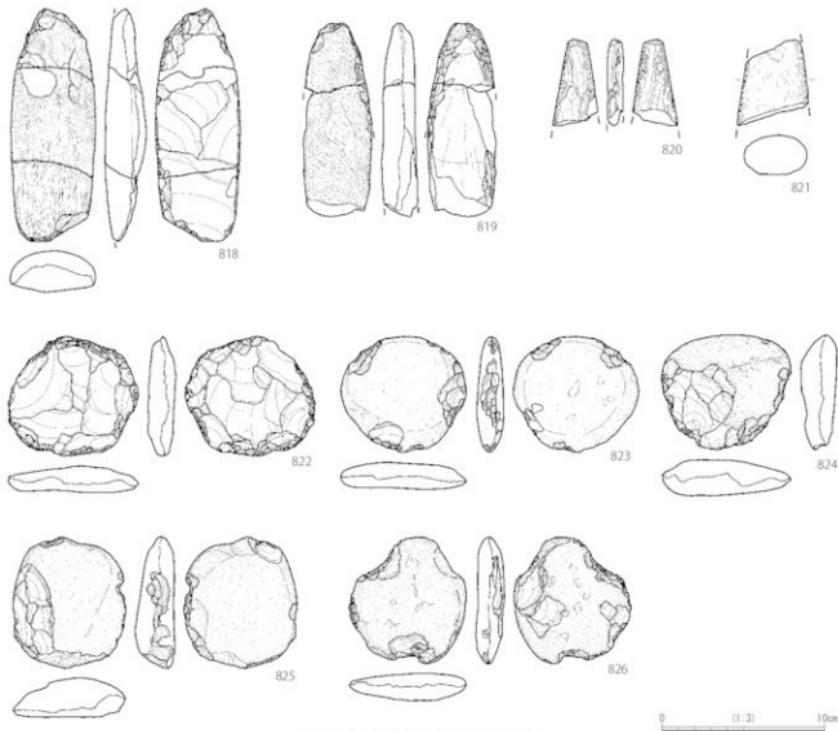


第95図 縄文時代後期の石器 (13)



第96図 縄文時代後期の石器 (14)

0 (1:3) 10cm



第97図 縄文時代後期の石器 (15)

残存したもので、折れ面に再加工を施している。791～796は打製石斧未製品である。石材は、680・681・683～702・704～727・729～740・742～779・782～796がホルンフェルス、682・703・741が頁岩、728・780・781がハリ質安山岩である。

磨製石斧 (第96図・第97図)

797～821は磨製石斧である。刃部形状は蛤刃を呈する。製作工程は敲打成形後、研磨整形を施す傾向がある。797を除く全てが欠損品である。798～804・805・808・810・811～813のように刃部に使用による刃こぼれが認められることから、欠損の原因の大半は使用によるものと推測される。797は完形品で、丁寧な研磨が施されている。未使用品であり、石材が勾玉・管玉同様に結晶片岩様緑色岩製であることから玉斧と思われる。その他の石

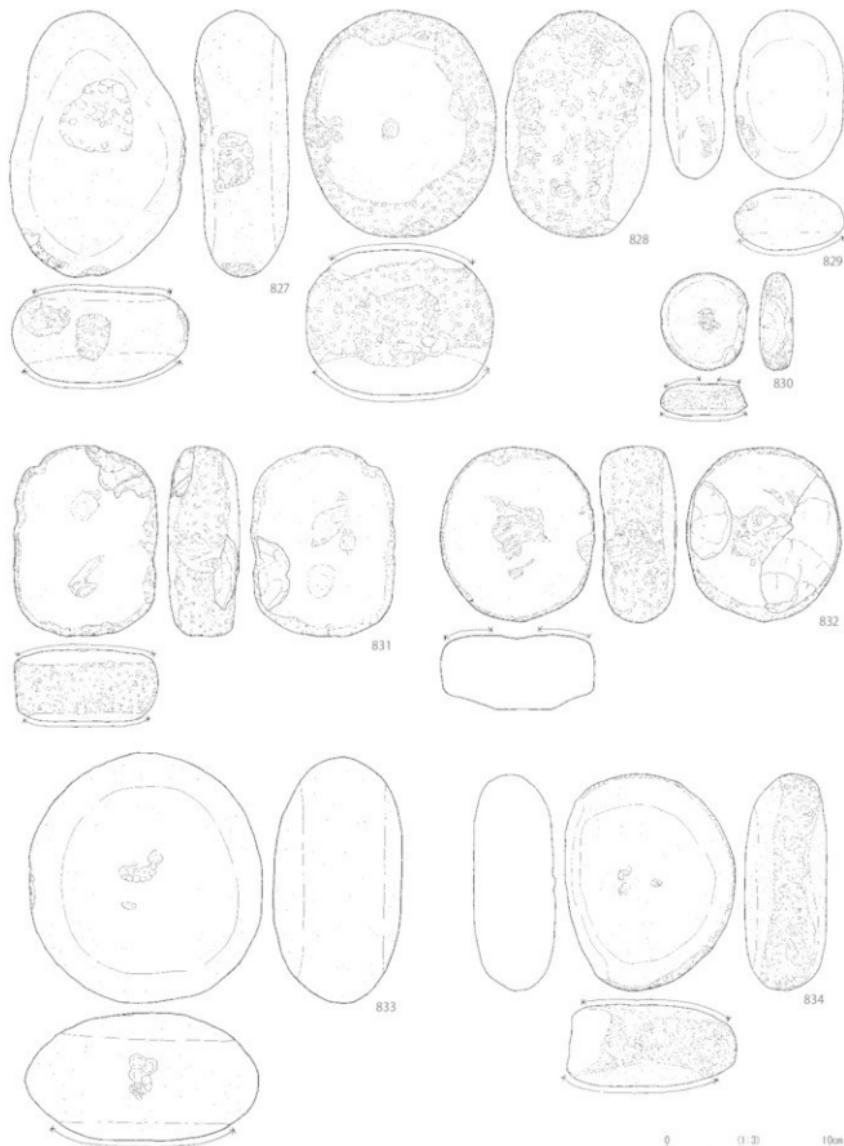
材は、798～809・811～821がホルンフェルス、810が砂岩である。

礫器 (第97図)

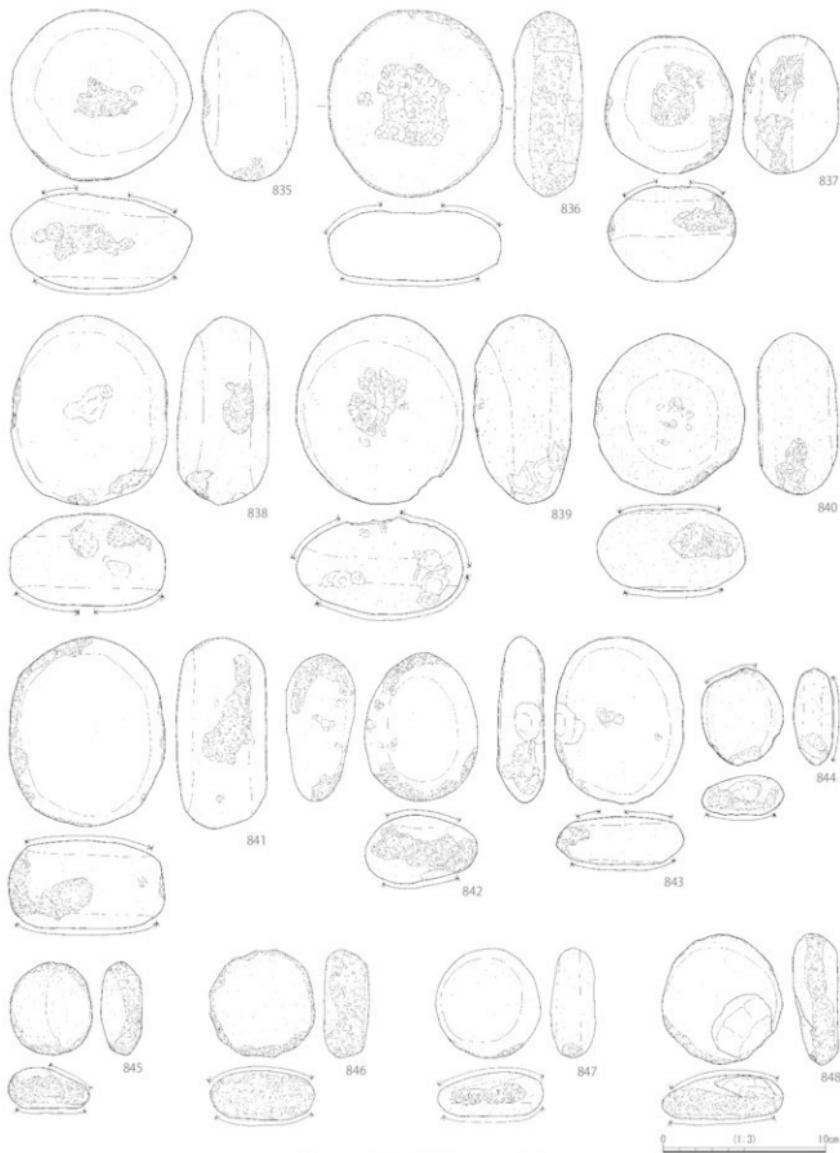
822～826は両刃の礫器である。822は厚手の剥片ないし、分割礫を素材として、周縁からの剥離によって円形の刃部を形成している。823～826は扁平な円形の礫を素材とし、部分的に剥離を施して刃部を形成している。石材は、全てホルンフェルスである。

磨石・敲石類 (第98図～第102図)

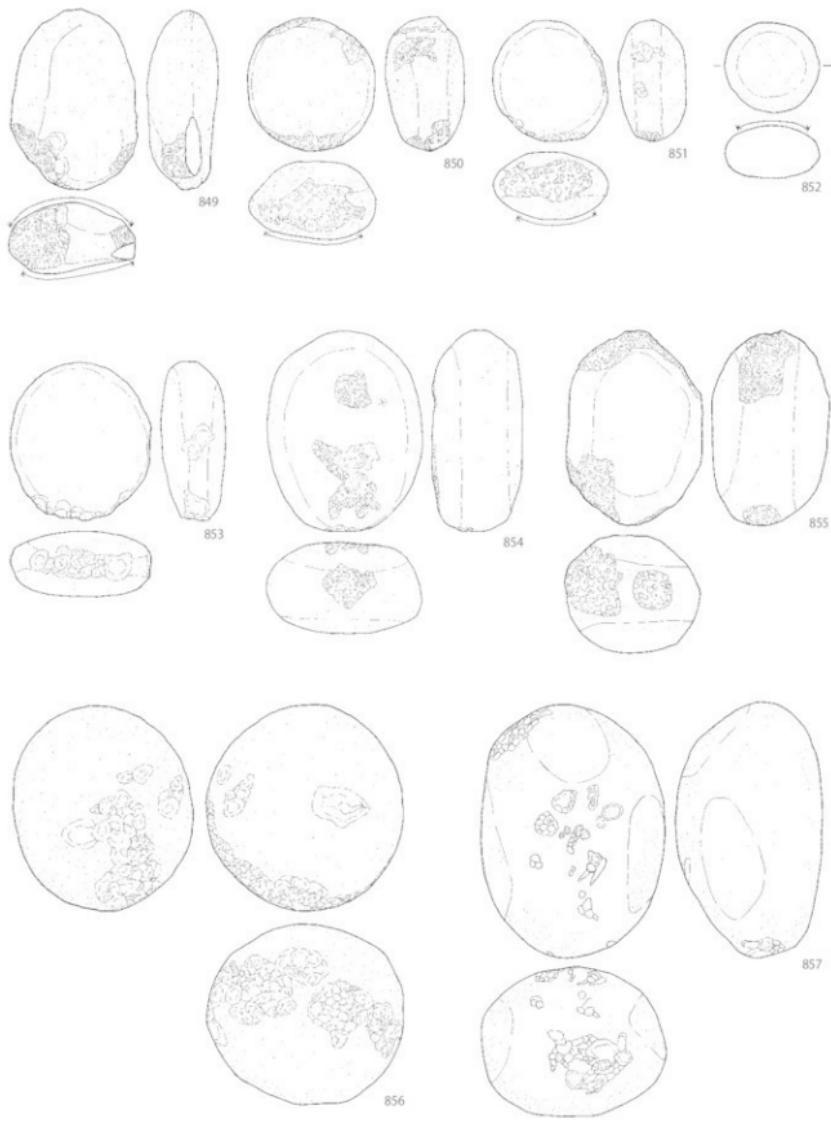
磨面のみ認められるもの、敲打痕のみ認められるものの、磨面と敲打痕が複合して認められるものがある。磨面と敲打痕が複合して認められるものは、磨石として利用した後、敲石として利用したのか、その逆なのか、磨・敲を並行しながら作業を行ったのか判断でき



第98図 縄文時代後期の石器 (16)



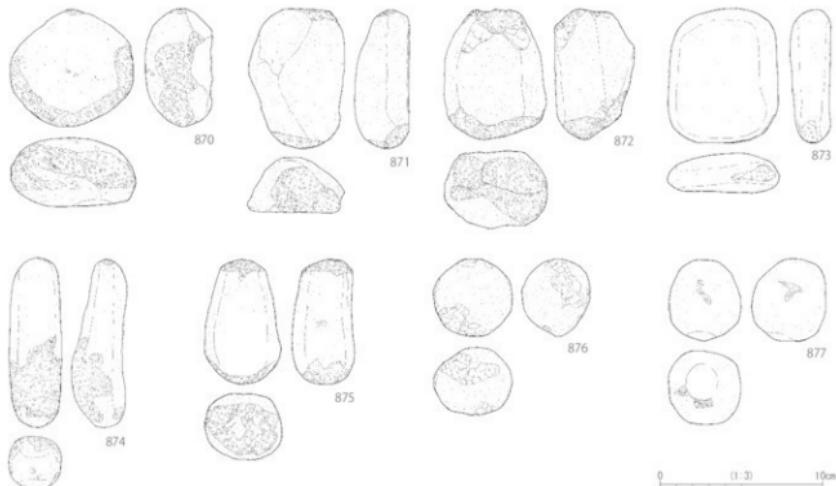
第99図 縄文時代後期の石器 (17)



第100図 縄文時代後期の石器 (18)



第101図 縄文時代後期の石器 (19)



第102図 繩文時代後期の石器(20)

ないものが大半であることから、磨・敲打石として取り扱った。

827～851は磨面と敲打痕が複合して認められるもの、852は磨面のみ認められるもの、853～877は敲打痕のみ認められるものである。827・829～854・866・867・870・873は扁平な円形ないし、梢円形の礫を利用し、828・855～857・863・876・877は球状の礫を利用し、858～862・864・865・868・869・874・875は棒状の礫を利用し、871・872は亜角礫を利用している。磨面と敲打痕が複合して認められるものは、扁平な円形ないし、梢円形の礫を利用する傾向があり、敲打痕のみのものは、棒状の礫を利用する傾向がある。磨面と敲打痕が複合して認められるものの中、828・830～832・834・836・846・848は継続して利用した結果、石鹼状になったものである。830・832・835・840・841・854は被熱しており、その内831は被熱によりはじけている。石材は、827～829・831・833～841・843・848・851・853・854・866・875・876・877が安山岩、830・832・842・844～847・850・861・865・867・868・871・873・874が砂岩、858～860・862・864・869・870・872がホルンフェルス、849・852・855～857・863が花崗岩である。

石皿(第103図～第107図)

878～901は石皿である。全て欠損品である。878・879・881・883・895は使用面が凹んでいる。880・882・884～894・896～901は使用面が平坦である。878～888・

890～895は被熱している。石材は、878～880・883・884・886・887・889・891・892・894・895・897・898・900・901が安山岩、881・885・888が花崗岩、882・896・899が凝灰岩、890・893が砂岩である。

砥石(第107図)

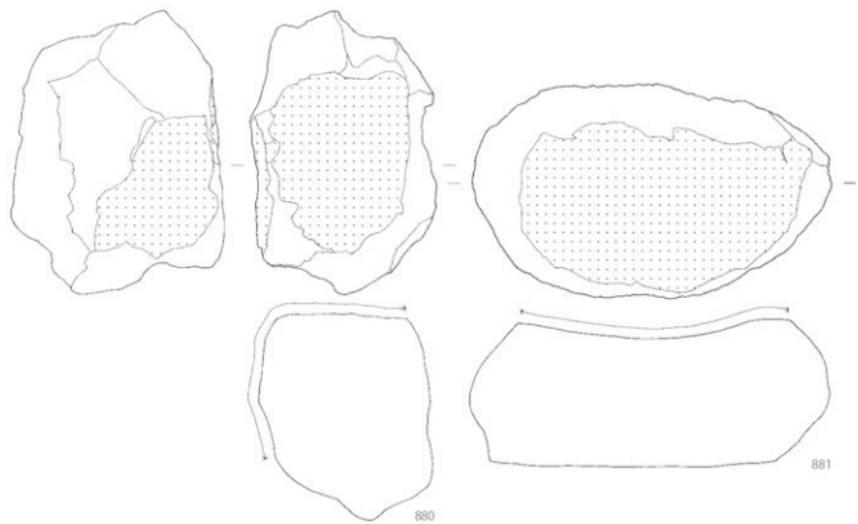
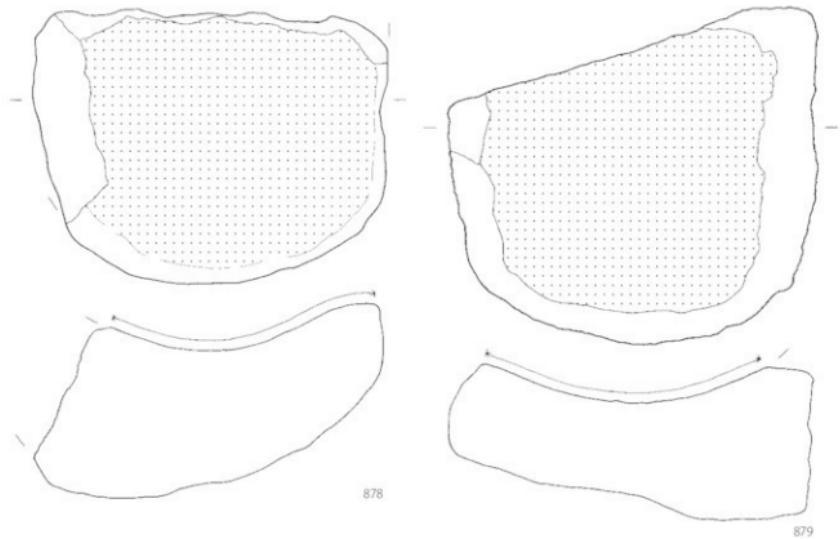
902～904は砥石である。903・904は溝状の痕跡が認められることから攻玉砥石と思われる。石材は、902が花崗岩、903・904が砂岩である。

用途不明石器(第107図)

905・906は用途不明石器である。905は表面が面取りされている。906は表面が面取りされ、裏面は敲打により凹んでいる。905・906と共に被熱により黒化している。石材は、905・906と共に凝灰岩である。

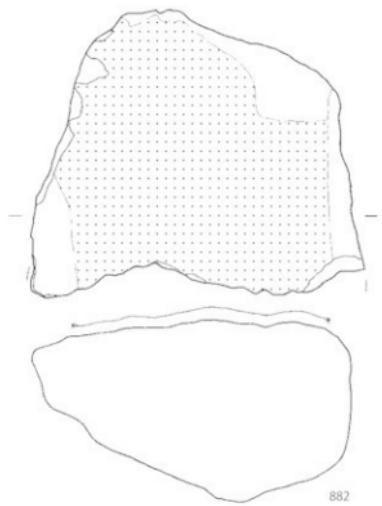
工 装飾品(第107図)

907は棒状の垂飾である。裏面上部に溝状の加工を施し、表面上部から穿孔を行っている。908・909は丸玉である。いずれも表面から穿孔を行っている。910は扁平な勾玉である。911は管玉である。わずかに丸みを帯びている。石材は、907～909がヒスイである。ヒスイは蛍光X線分析の結果、新潟県糸魚川産であることが同定されている。910・911は結晶片岩様緑色岩である。同石材を利用した玉造遺跡には、上加世田遺跡が挙げられ、本遺跡出土勾玉・管玉も関連性が窺える。

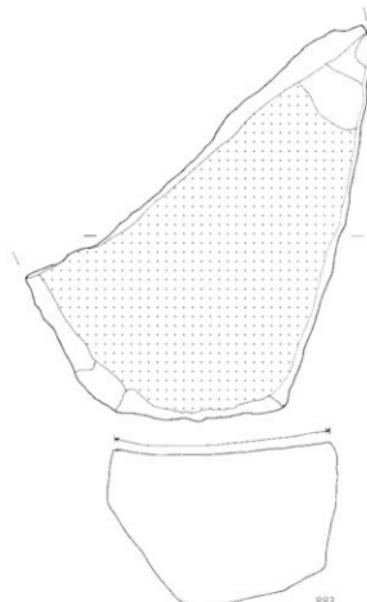


第103図 縄文時代後期の石器 (21)

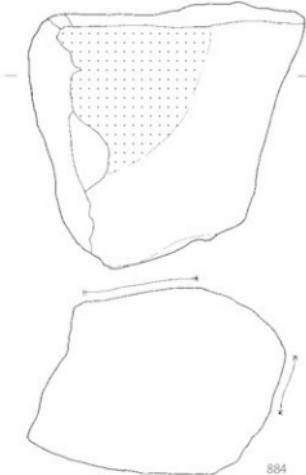
0 (1.4) 10cm



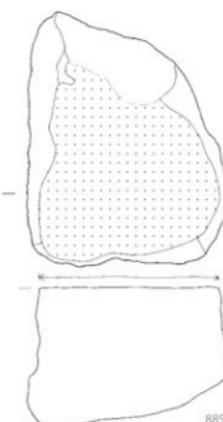
882



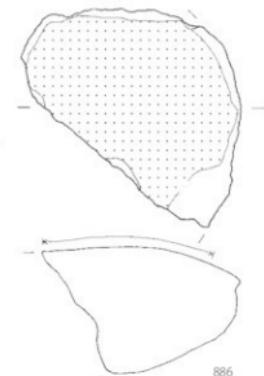
883



884



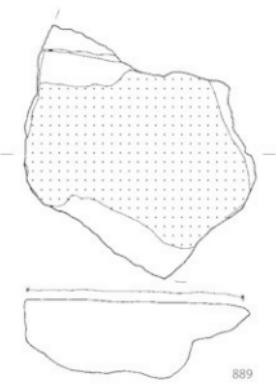
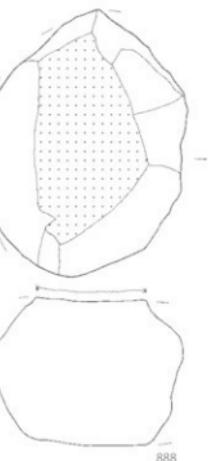
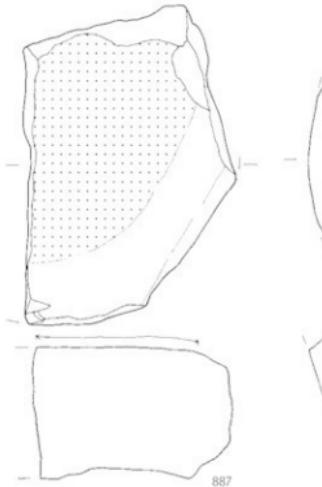
885



886

0 (1.4) 10cm

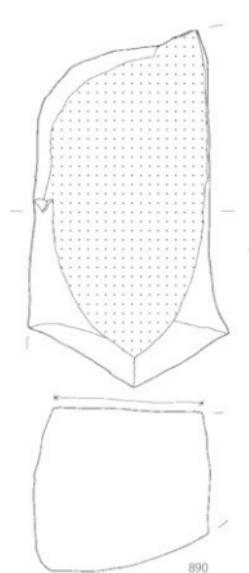
第104図 縄文時代後期の石器 (22)



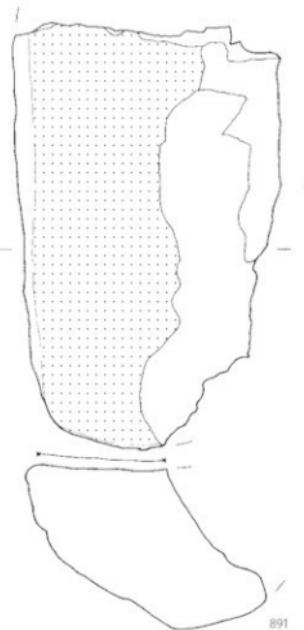
887

888

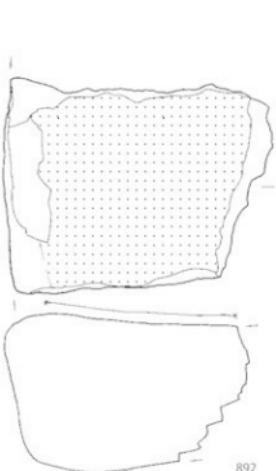
889



890



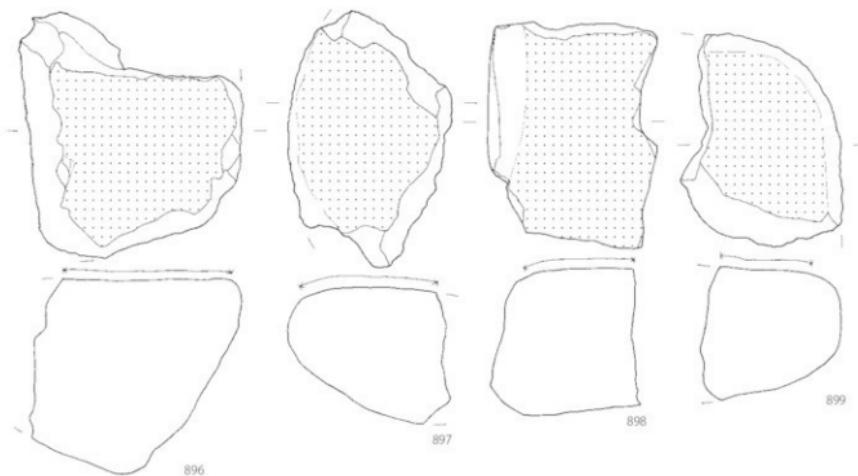
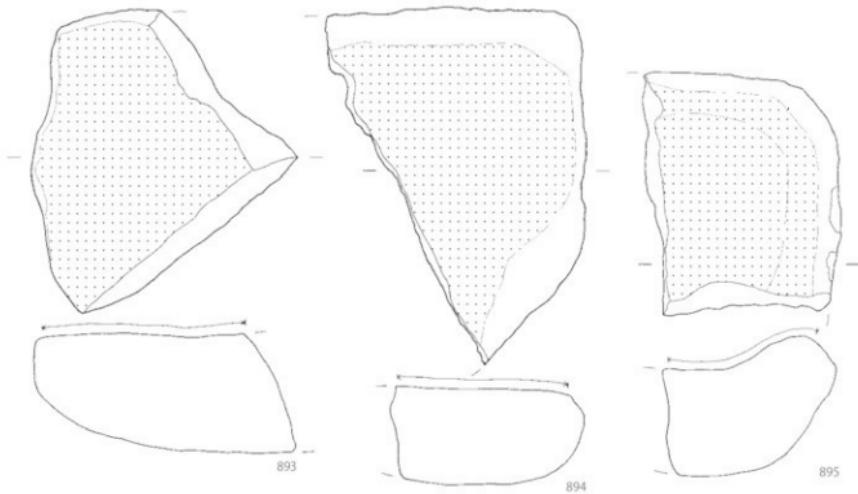
891



892

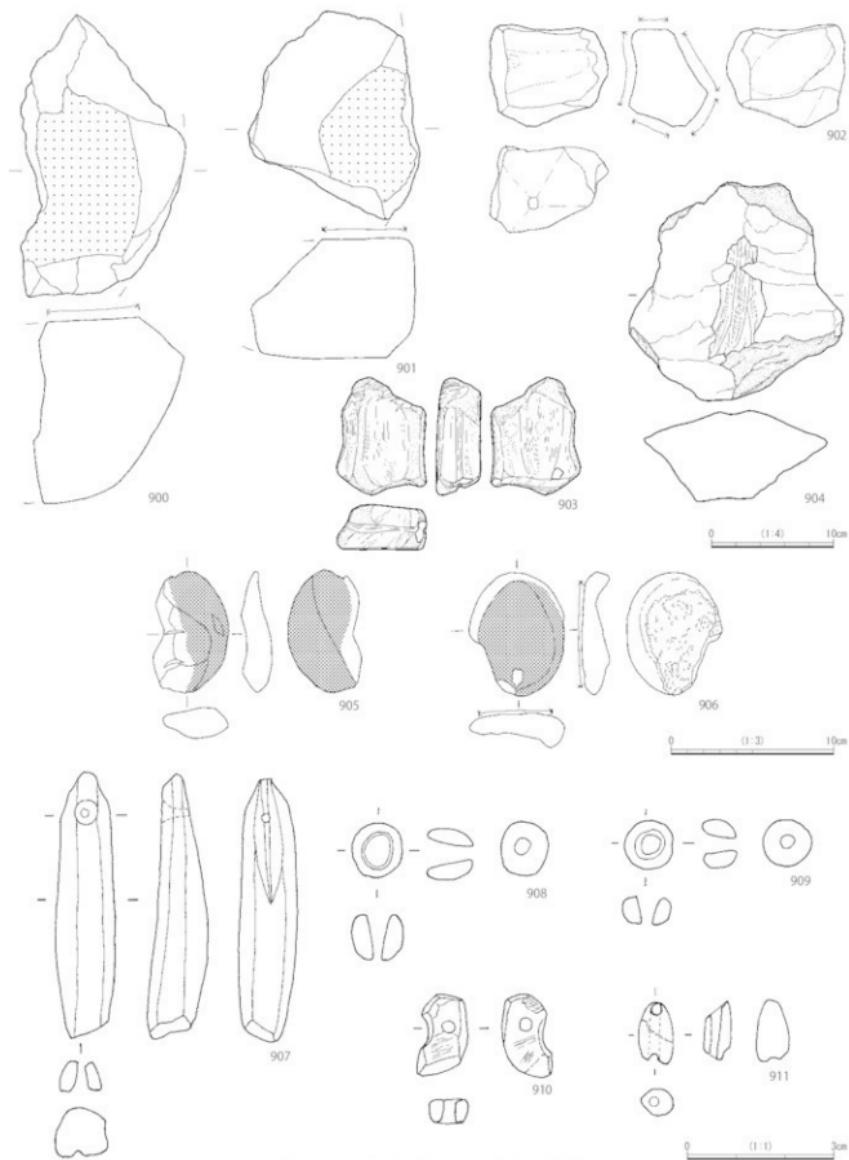
0 (1.4) 10cm

第105図 縄文時代後期の石器 (23)



第106図 縄文時代後期の石器 (24)

0 (1.4) 10cm



第107図 繩文時代後期の石器 (25)・装飾品

(4) 繩文時代晚期の土器 (第108図～第116図)

晩期の遺物は、後期の遺物同様にⅡ b層(黒色土)を中心に出土しており、両者のレベル差は認められなかった。本遺跡では、中岳Ⅱ式土器に続く、晩期初頭の上加世田式土器、晩期中葉の黒川式土器が少量出土している他、晩期末から弥生時代初頭の刻目突帯文土器、組織痕土器、未命名型式の土器、無刻目突帯文土器が相当数出土している。

本項では、遺構外から出土したものとの内、上加世田式土器11点、黒川式土器2点、縄文時代晩期末分類の土器2点、縄文時代晩期末から弥生時代初頭の刻目突帯文土器89点、組織痕土器5点、未命名型式の土器29点、無刻目突帯文土器8点、縄文時代晩期末から弥生時代初頭の未分類の土器16点を図示した。

上加世田式土器 (第108図)

912～921はⅢ類の深鉢形土器である。Ⅱ類土器に比べ器厚が薄い。912は口径28.6cmを測る口縁部である。口縁部文様帶に沈線を3条巡らせている。919・917・920も口縁部文様帶に沈線を3条巡らせている。913・914は口縁部文様帶に沈線を2条巡らせている。

915・916は口縁部文様帶に沈線を4条巡らせている。921は口縁部文様帶に沈線を1条巡らせている。器面調整は、内外面共に横方向のミガキやナデを施している。

922はⅢ類の浅鉢形土器である。頸部で屈曲し、外反

する口縁部で、端部は外面に沈線を1条巡らせている。器面調整は、内外面共に横方向のミガキを施している。

黒川式土器 (第108図)

923・924はⅣ類の浅鉢形土器である。923は胴部屈曲部が最上端にあり、ごく短い頸部から強く屈曲して外開きする口縁部へ至る。924は胴部最大径の所で「く」の字状に屈曲し、外反する口縁部に至る。器面調整は、内外面共に横方向の丁寧なミガキを施している。

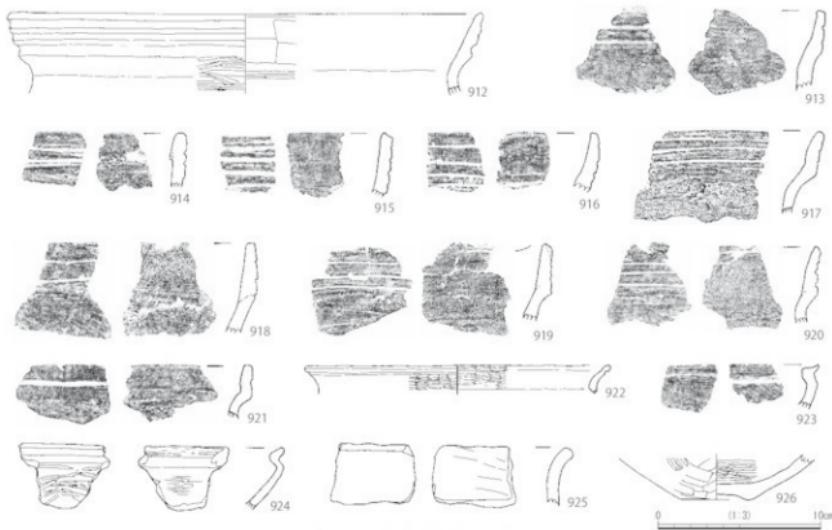
縄文時代晩期の土器 (第108図)

925は粗製の深鉢である。外反する口縁部である。器面調整は、内外面共に横方向のナデを施している。926は底径4.2cmを測る、上げ底状の底部である。器面調整は、外面が横方向のナデ後、縱方向のミガキを施し、内面は横方向のミガキを施している。

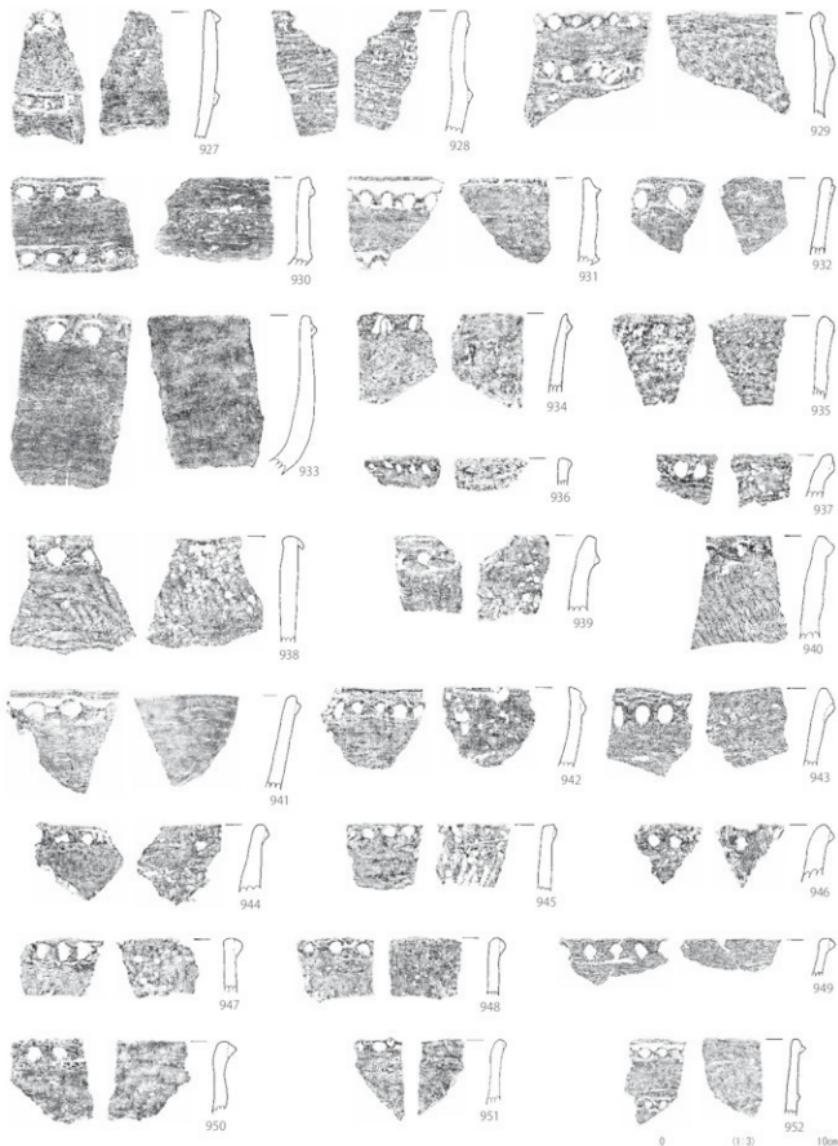
刻目突帯文土器 (第108図～第112図)

927～1015はV類の深鉢形土器である。927～952は幅広の刻目が認められるものである。その内、932・933・937・938・941・943・948は突帯に指を押し当てて刻目している。927～931は口縁部と胴部に突帯を巡らせるものである。

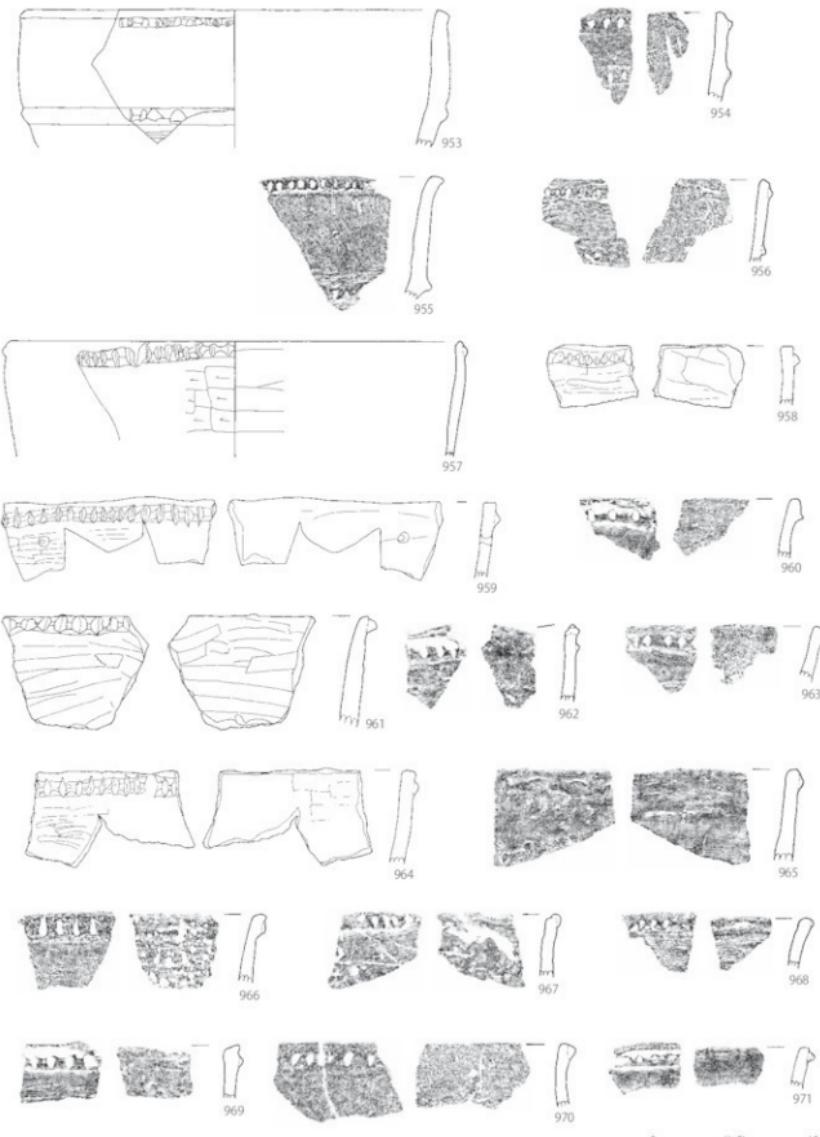
953～982は櫛状工具による細い刻目が認められるものである。953～956は口縁部と胴部に突帯を巡らせる



第108図 縄文時代晩期の土器



第109図 繩文時代晩期末から弥生時代初頭の土器（1）



第110図 繩文時代晩期末から弥生時代初頭の土器（2）



第111図 繩文時代晩期末から弥生時代初頭の土器（3）



第112図 繩文时代晚期末から弥生时代初头の土器 (4)

0 (1:3) 10cm

ものである。955は外面に煤が付着している。

983～996は爪形の刻目が認められるものである。983～986は口縁部と胴部に突帯を巡らせるものである。その内、983は2条の突帯間に2条を単位とする沈線で鋸歯文を描いている。983・986・990は外面に煤が付着している。

997～1015はヘラ状工具による刻目が認められるものである。997・998・1000は口縁部と胴部に突帯を巡らせるものである。1012は突帯下に円形刺突具により孔列を巡らせていている。1013～1015は突帯を窓枠状に施している。1014・1015は波状口縁をなし、その内、1014は頂部上面に刺突を施し、口唇部の一部に沈線を1条巡らしている。

組織痕土器（第113図）

1016～1020はVI類の深鉢形土器である。1016は直行する口縁部である。器面調整は、外面が貝殻条痕文、内面は横方向のケズリ後ナデを施している。1017は直行する口縁部で、口唇部を面取りしている。器面調整は、内外面共に横方向の粗いミガキを施している。1018は胴部である。器面調整は、内外面共に貝殻条痕文を施している。1019・1020は組織痕が認められる底部である。

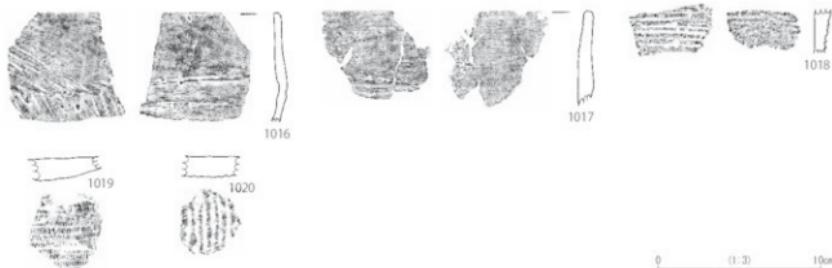
縄文時代晩期末の未命名型式の土器（第114図・第115図）

口唇部に突起や粘土紐貼り付け、胴部にドーナツ状の浮文等の特徴が認められる土器をVII類に分類した。1021～1049はVII類の深鉢形土器である。1021は4対の山形突起を持つもので、頂部上面に刺突を施している。胴部最大径の所で「く」の字状に内側に屈曲し、頭部は内傾しながら外反し、直行する口縁部へ至る。口縁部文様帶には、口縁部の形に沿うように沈線を頂部下で途切れさせながら1条巡らせている。1022は4対の山形突起を持つもので、頂部上面に刺突を施している。屈曲した胴部から外反し、直立する口縁部へ至る。1023・1024は口縁部に山形突起を持つもので、頂部上面に刺突を施

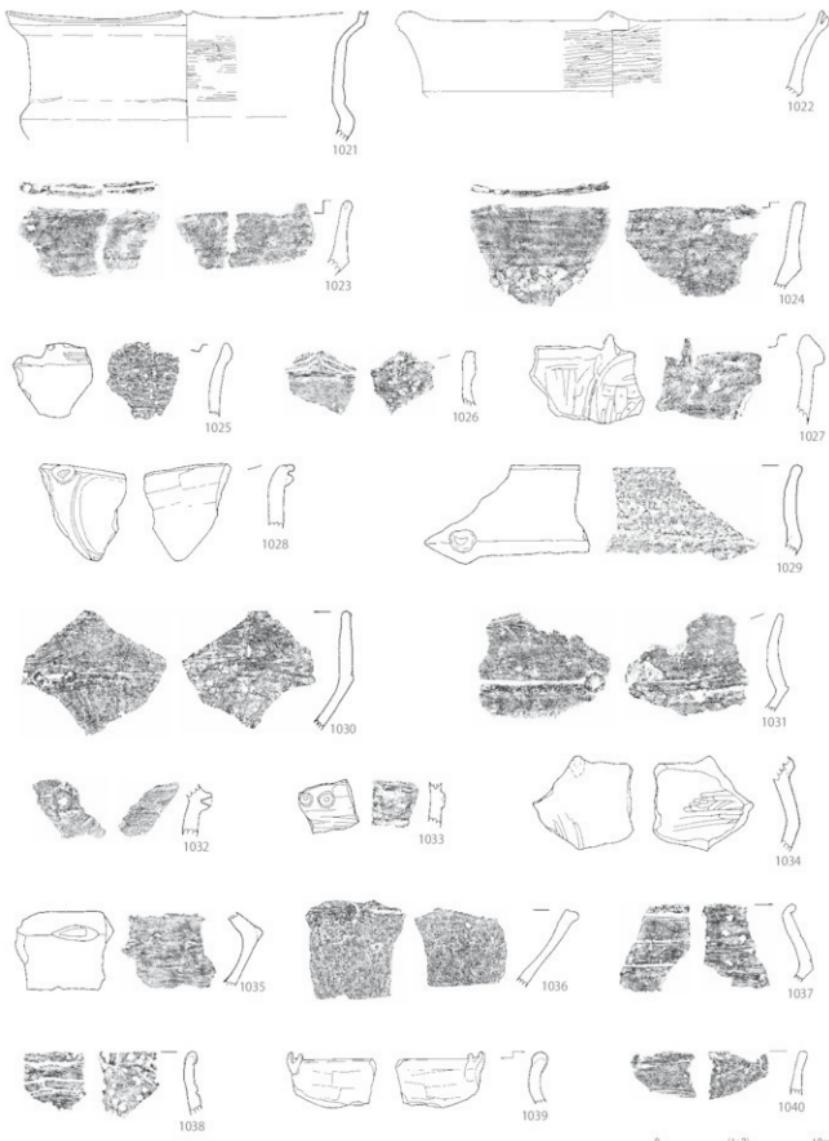
し、口唇部には沈線を1条巡らせている。1025は不定形な波状口縁をなすもので、頂部下に刺突を施している。口縁部文様帶には、沈線を2条巡らせている。1026は波状口縁をなすもので、口縁部文様帶に沈線を2条巡らせている。1027・1028は無刻目の突帯を弧状に巡らせてている。1029は口唇部にドーナツ状の浮文が貼り付けられている。1029～1033は胴部最大径の所にドーナツ状の浮文が貼り付けられているものである。1030・1031は沈線を1条巡らせた後、ドーナツ状の浮文を貼り付けている。1034は胴部上位に突起が貼り付けられている。1035・1036は胴部最大径の所に突起が貼り付けられている。1037～1043は口唇部に粘土紐を貼り付けて装飾しているものである。1037・1038は胴部上位に沈線を3条巡らせている。1044は口唇部に鶏冠状の突起を持つもので、頂部上面に刻目を施している。口縁部より下がった部分には刻目突帯を1条巡らせている。1045は頭部の所で「く」の字状に屈曲し、短く延びる口縁部へ至る。1046は直行する口縁部で、頭部に沈線を1条巡らせている。1047は内傾する頭部から、直立する口縁部へ至る。口縁部より下がった部分に沈線を1条巡らせている。1048は直行する口縁部で、口縁部より下がった部分に沈線を1条巡らせている。1049は胴部最大径の所で屈曲し、直行する口縁部である。口唇部下に沈線を2条、胴部最大径の部分に沈線を2条巡らせている。

無刻目突帯文土器（第115図）

1050～1057はVII類の深鉢形土器である。1050は口縁部と胴部に突帯を巡らせるものである。突帯間に2条を単位とする鋸歯文を描いている。外面全体に赤色顔料を塗布している。1051は口縁部に突帯を巡らせるものである。外面突帯下に赤色顔料を塗布している。1052は胴部で、並行沈線で区画した間に2条を単位とする鋸歯文を描いている。刻目突帯文土器の可能性もある。1053～1057は口縁部に突帯を1条巡らせるものである。

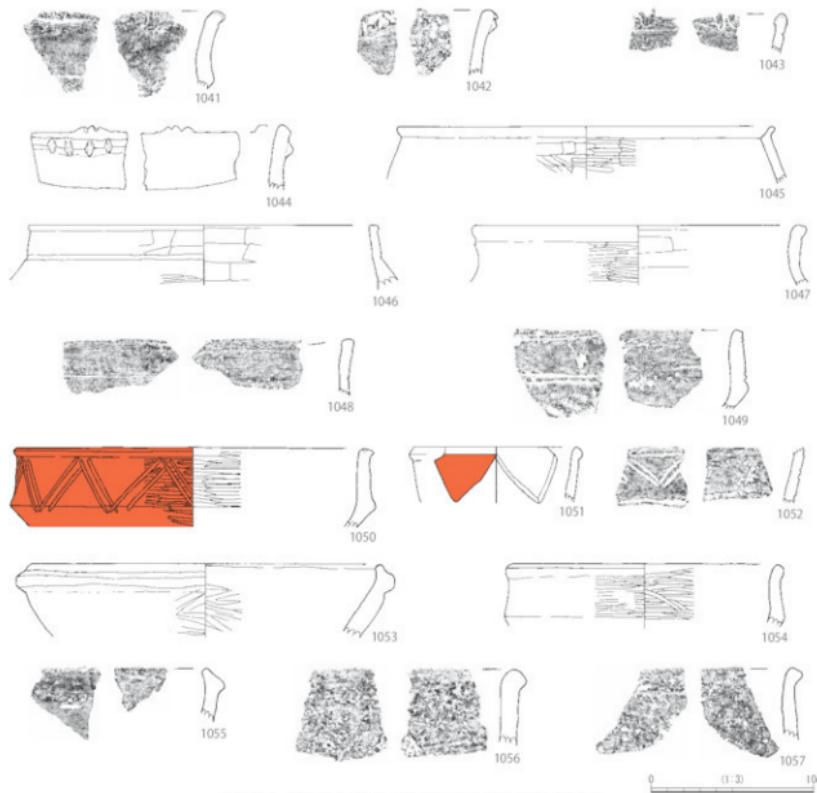


第113図 縄文時代晩期末から弥生時代初頭の土器（5）



第114図 繩文時代晩期末から弥生時代初頭の土器（6）

0 (1:3) 10cm



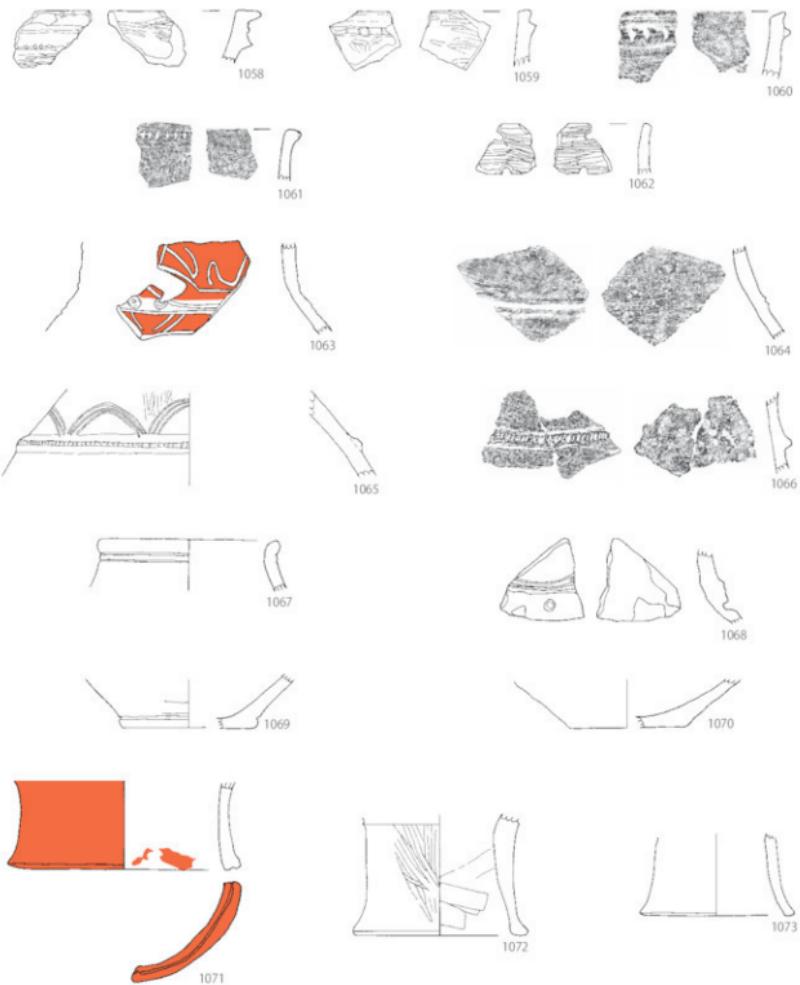
第115図 繩文時代晩期末から弥生時代初頭の土器（7）

縄文時代晩期末から弥生時代初頭の土器（第116図）

1058～1062は撫形土器である。1058は逆L字状の口縁部で、口縁部直下に突帯を巡らせている。口唇部及び突帯にはヘラ状工具による刻目が施されている。1059・1060は未発達な逆L字状の口縁部で、口縁部直下に刻目突帯を巡らせている。刻目はヘラ状工具によるものと思われる。1061は短く外反する口縁部で、口唇部にヘラ状工具による刻目が施されている。1062は口縁部に穿孔が2孔認められる。残存部位が少ない為、孔列状になるかは不明である。

1063～1070は壺形土器である。1063は肩部と頸部の境が屈曲するものである。肩部と頸部の境にドーナツ状の浮文を貼り付けており、肩部と頸部でそれぞれ異なる沈線文を施している。また、外面は肩部と頸部の境を帶

状に残し赤色顔料を塗布している。1064は頸部に沈線を2条巡らせるものである。1065は胴部上位に刻目突帯文を巡らせ、突帯上に3重の弧文を施している。1066は胴部に刻目突帯を1条巡らせている。1067は外反する口縁部で、口縁部と頸部の境に沈線を2条巡らせている。1068は肩部と頸部の境に突帯を2条巡らせている。突帯下に未貫通の穿孔が認められる。1069は底径8.0cmを測る平底の底部である。胴部下端に沈線を1条巡らせている。1070は底径7.0cmを測る平底の底部である。1071～1073は高壺形土器である。1071は脚部下面に沈線を1条巡らせている。外面全体と内面の一部に赤色顔料を塗布している。1072は壺部と脚部の境に沈線を1条巡らせている。1073は脚部である。器面調整は内外面共にナデを施している。



第116図 繩文時代晩期末から弥生時代初頭の土器（8）

0 (1:3) 10cm

(5) 遺物観察表

第5表 繩文時代後期・晚期土器観察表(1)

地図番号	測量番号	出土地点	遺構	層位	取上面番号	分類	器種	部位	器面調整		色調		胎土				備考
									外面	内面	外面	内面	石英	長石	角閃石	金雲母	
14	1	G-16	S11	12503	II Ca	深鉢	口縁部 ～側部	ナガキ ミガキ	暗褐色 茶褐色	ナデ	茶褐色～ 灰褐色	○	○	○	○	-	縄文
	2	G-16	S11	12550	II B	深鉢	口縁部 ～側部	ミガキ	ナデ	指擦区域	茶褐色	○	○	+	-	-	縄文
	3	G-16	S11	12814	II B	深鉢	口縁部	ミガキ	ビロイ 褐色	ナデ	褐色～ 黑褐色	○	○	○	+	-	縄文、 外面深付着
	4	G-16	S11	12819	II Bb	深鉢	口縁部 ～側部	ナガキ ケヌリ後 ナデ	貝齒痕痕 後ナデ	ナデ	暗褐色～ 黑褐色	暗褐色	○	○	○	+	-
15	5	G-16	S11	12790	II Bb	深鉢	口縁部 ～側部	ナガキ ミガキ	ナデ後 ミガキ	ビロイ 褐色	黒褐色	○	○	+	○	-	縄文、 外面深付着
	6	G-16	S11	11768- 12489	II B	深鉢	口縁部 ～側部	ミガキ	ナデ後 ミガキ	ビロイ 褐色	黒褐色	○	○	○	○	-	縄文、 波状口縁
	7	G-16	S11	12752	II a	深鉢	側部	ミガキ ナガキ	ビロイ 褐色	ナデ	褐色	○	○	-	○	-	縄文、三日月文、 外面深付着
	8	G-16	S11	12084	II a	深鉢	側部	ナガキ 調整後 ナデ	ナデ後 ミガキ	ビロイ 褐色	黒褐色	○	○	○	-	-	-
16	9	G-16	S11	12085- 12086- 12087- 12214	II Ba	深鉢	口縁部 ～側部	ヨコナデ ナデ	ナデ	暗褐色～ 褐褐色	黒褐色	○	○	○	+	-	縄文、則目、 波状口縁、 外面深付着
	10	G-16	S11	12501	II B	深鉢	口縁部	ミガキ	ナデ	暗褐色	暗褐色	○	○	○	-	○	帰石、 縄文
	11	G-16	S11	-	II A	深鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	黒褐色	黒褐色	○	○	-	-	-	鶴円形凹点文
	12	G-16	S11	12502	II D	深鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	黒褐色	灰褐色	○	○	-	○	-	縄文
17	13	G-16	S11	10618	II a	深鉢	側部	ミガキ	ミガキ	褐色	褐色	○	○	-	○	-	縄文、 波状口縁
	14	G-16	S11	11554- 12549	II B	深鉢	口縁部	ナデ	ミガキ ナデ	明褐色～ 暗褐色	明褐色～ 暗褐色	○	○	-	○	-	縄文、則目、 波状口縁、 外面深付着
	15	G-16	S11	12079	II C	深鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	黒褐色	褐色	○	○	○	-	-	縄文
	16	G-16	S11	10967	II B	深鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	黒褐色	黒褐色	○	○	-	-	-	縄文、 波状口縁
18	17	G-16	S11	10966- 10968- 10939- 11750- 16366- 10959	II a	深鉢	口縁部 ～側部	ヨコナデ ナデ	ナデ	褐色～ 黑褐色	黒褐色	○	○	-	-	-	縄文、 連続山形文
	18	G-16	S11	11758	II G	浅鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	黒褐色	黒褐色	○	○	-	-	-	縄文
	19	G-16	S11	5110	II B	浅鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	にぶい 赤褐色	黒色	○	○	-	-	-	縄文
	20	G-16	S11	10635	II Ga	浅鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	灰褐色～ 褐色	灰褐色	○	○	-	-	-	外面深付着
21	21	G-16	S11	11278- 11373	II a	浅鉢	側部～ 内土裏面	ミガキ	ミガキ	褐色	褐色	○	○	-	-	-	半月形凹点文、 赤褐色直布
	22	G-16	S11	12745	II a	深鉢	側部	ミガキ	ミガキ	ナデ後 ミガキ	黒褐色	○	○	-	○	-	縄文、 鶴円形凹点文
	23	G-16	S11	12067	II a	浅鉢	側部	ミガキ	ミガキ	褐色	にぶい 粉色	○	○	-	○	-	縄文、則目
	24	G-16	S11	10593	II a	浅鉢 (内土裏面)	側部	ミガキ	ミガキ	黒褐色	黑色	○	○	-	-	-	縄文、鶴円形凹点文、 赤褐色直布、 氧化物付着
25	25	G-16	S11	10602- 10995- 11096- 11555- 12244- 12400	II	深鉢	側部～ 底部	ナデ	ナデ	にぶい 褐色～ 黑褐色	黒褐色	○	○	-	-	-	-
	26	F-16	S11	511-66	II	深鉢	底部	ミガキ ナデ	ナデ	暗褐色～ 褐色	暗褐色	○	○	○	○	-	-
	60	G-22	S12	512- 129- 131- 132- 133- 135	II Eb	深鉢	口縁部 ～側部	ミガキ	ミガキ	暗褐色～ 黑褐色	茶褐色～ 暗褐色	○	○	-	-	-	-
	61	G-22	S12	512-53	II B	深鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	明赤褐色	褐色	○	○	-	○	-	-
21	62	G-22	S12	512-46	II B	深鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	黒褐色	にぶい 赤褐色	○	○	○	-	-	鶴円形凹点文
	63	G-22	S12	512- 77- 96	III	深鉢	口縁部	ミガキ	ナデ	橙色	明黃褐色	○	○	-	-	-	縄文
	64	G-22	S12	512-32	II	深鉢	底部	ナデ	ナデ	にぶい 褐色	にぶい 黃褐色	○	○	-	○	-	-
	65	G-22	S12	512- 113	II	深鉢	底部	ミガキ	ナデ	にぶい 褐色	黒褐色	○	○	-	-	-	-
23	76	G-23	S13	17497	II C	深鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	橙色	橙色	○	○	○	-	-	縄文、三日月文、 鶴円形凹点文
	77	G-23	S13	17544- 17924- 17925- 17926	II F	深鉢	口縁部	ミガキ	ナデ後 ミガキ	黒褐色	黒褐色	○	○	-	○	-	-

第6表 繩文時代後期・晚期土器観察表(2)

探査番号	出土場所	遺構番号	断面番号	分類	器種	部位	表面調整		色調		胎土				備考	
							外面	内面	外面	内面	石英	長石	角閃石	金雲母		
23	G-23	S13	17927	IIa	浅鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	赤褐色	にぶい 赤褐色	○	○	-	-	輝石	
							ナデ	ナデ	橙色	浅黃褐色	○	○	-	-		
26	H-14	S11	-	II Ba	深鉢	口縁部 ～底部	ミガキ	ミガキ	明赤褐色	褐色	○	○	-	-	輝石 山形斑点文 楕円形斑点文	
							ナデ	ナデ	褐色	にぶい 褐色	○	○	-	-		
83	G-14	S12	6900	II Cb	深鉢	口縁部 ～底部	ミガキ	ミガキ	褐色	にぶい 褐色	○	○	-	-	輝石 波状口縁 楕円形斑点文 内面深付着	
							ナデ	ナデ	褐色	明赤褐色	○	○	-	-		
84	G-15	S13	-	II Aa	深鉢	口縁部 ～底部	ミガキ	ミガキ	褐色	暗赤褐色	褐色	○	○	-	-	輝石 波状口縁 楕円形斑点文 内面深付着
							ナデ	ナデ	褐色	明褐色	○	○	-	-		
85	G-15	S14	-	II Ba	深鉢	口縁部 ～底部	ミガキ	ミガキ	褐色	明褐色	○	○	-	-	輝石 波状文	
							ナデ	ナデ	褐色	浅黃褐色	○	○	-	-		
86	E-14	S15	-	II Ba	深鉢	口縁部 ～底部	ミガキ	ミガキ	褐色	にぶい 褐色	○	○	-	-	波状文 波状口縁 楕円形斑点文	
							ナデ	ナデ	褐色	褐色	○	○	-	-		
87	F-14	S16	-	II Fa	深鉢	口縁部 ～底部	ミガキ	ミガキ	褐色	褐色	○	○	-	-	輝石	
							ケズリ	ミガキ	褐色	暗褐色～ 褐色	○	○	-	-		
88	E-F- 16	S17	-	II a	深鉢	頭部 ～底部	ミガキ	ミガキ	褐色	暗褐色～ 褐色	○	○	-	-	内面深付着	
							ケズリ	ミガキ	褐色	明赤褐色	○	○	-	-		
89	E-13	S18	-	II	深鉢	頭部 ～底部	ミガキ	ミガキ	褐色	明赤褐色	○	○	-	-	内面深付着	
							ナデ	ナデ	褐色	暗褐色	○	○	-	-		
90	F-15	S19	-	II Ba	深鉢	頭部 ～底部	ミガキ	ミガキ	褐色	にぶい 赤褐色	○	○	-	-	波状文 波状口縁 楕円形斑点文 三日月文	
							ナデ	ナデ	褐色	褐色	○	○	-	-		
91	F-15	S110	-	II	深鉢	頭部 ～底部	ミガキ	ミガキ	褐色	暗褐色	○	○	-	-	輝石	
							ナデ	ナデ	褐色	にぶい 赤褐色	○	○	-	-		
92	I-23	S111	-	II	深鉢	頭部 ～底部	ミガキ	ミガキ	褐色	暗褐色	○	○	-	-	輝石 内面深付着	
							ナデ	ナデ	褐色	にぶい 赤褐色	○	○	-	-		
93	E-F- 16	S112	-	II a	深鉢	頭部 ～底部	ミガキ	ミガキ	褐色	暗褐色	○	○	-	-	輝石 内面深付着	
							ケズリ	ミガキ	褐色	にぶい 褐色	○	○	-	-		
111	G-14	S01	28	II B	深鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	褐色	暗褐色	○	○	-	-	波状文	
							ナデ	ナデ	褐色	褐色	○	○	-	-		
112	G-14	S01	501- 110	II C	深鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	褐色	褐色	○	○	-	-	波状文	
							ナデ	ナデ	褐色	暗褐色	○	○	-	-		
113	G-14	S01	512	II C	深鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	褐色	暗褐色	○	○	-	-	波状文	
							ミガキ	ミガキ	褐色	にぶい 褐色	○	○	-	-		
114	G-14	S01	98	II a	深鉢	頭部	ミガキ	ミガキ	褐色	にぶい 褐色	○	○	-	-	波状文 楕円形斑点文	
							ナデ	ナデ	褐色	暗褐色	○	○	-	-		
115	G-14	S01	39	II B	深鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	褐色	暗褐色	○	○	-	-	波状文 楕円形斑点文	
							ナデ	ナデ	褐色	明褐色	○	○	-	-		
116	G-14	S01	108	II a	深鉢	頭部	ミガキ	ミガキ	褐色	暗褐色	○	○	-	-	波状文	
							ナデ	ナデ	褐色	暗褐色	○	○	-	-		
117	G-14	S01	103	II B	深鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	褐色	暗褐色	○	○	-	-	輝石	
							ナデ	ナデ	褐色	暗褐色	○	○	-	-		
118	G-14	S01	501- 28	II B	深鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	褐色	暗褐色	○	○	-	-	波状文	
							ナデ	ナデ	褐色	褐色	○	○	-	-		
119	G-14	S01	501- 100	II C	深鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	褐色	暗褐色	○	○	-	-	波状文 目白	
							ナデ	ナデ	褐色	暗褐色～ 褐色	○	○	-	-		
120	G-14	S01	501- 29	II Ba	深鉢	口縁部 ～頭部	ミガキ	ミガキ	褐色	暗褐色	○	○	-	-	波状文 楕円形斑点文 内面深付着	
							ナデ	ナデ	褐色	暗褐色	○	○	-	-		
128	F-14	S03	503- 21	II Fb	深鉢	口縁部 ～頭部	ミガキ	ミガキ	褐色	暗褐色	○	○	-	-	輝石 指頭圧痕	
							ナデ	ナデ	褐色	褐色	○	○	-	-		
129	F-14	S03	12	II B	深鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	褐色	暗褐色	○	○	-	-	波状文 波状口縁	
							ナデ	ナデ	褐色	暗褐色	○	○	-	-		
149	F-G- 19	S06	506- 84	III	浅鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	褐色	暗褐色	○	○	-	-	波状文	
							ナデ	ナデ	褐色	暗褐色	○	○	-	-		
150	F-G- 19	S06	506-25	II B	深鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	褐色	暗褐色	○	○	-	-	波状文	
							ナデ	ナデ	褐色	暗褐色	○	○	-	-		
151	G-19	S06	506-7	II a	深鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	褐色	暗褐色	○	○	-	-	波状文	
							ナデ	ナデ	褐色	暗褐色	○	○	-	-		
152	F-G- 19	S06	506-19	II F	深鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	褐色	暗褐色	○	○	-	-	波状文	
							ナデ	ナデ	褐色	暗褐色	○	○	-	-		
153	F-G- 19	S06	506-2	II	深鉢	底部	ミガキ	ナデ	褐色	暗褐色	○	○	-	-	波状文	
							ミガキ	ミガキ	褐色	暗褐色	○	○	-	-		
154	G-19	S06	506-61	II	深鉢	底部	ミガキ	ミガキ	褐色	暗褐色	○	○	-	-	輝石	
							ナデ	ナデ	褐色	暗褐色	○	○	-	-		
166	F-14	S021	-	II B	深鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	褐色	暗褐色	○	○	-	-	波状文	
							ナデ	ナデ	褐色	暗褐色	○	○	-	-		
167	F-16	S022	-	II B	深鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	褐色	暗褐色	○	○	-	-	波状文	
							ナデ	ナデ	褐色	暗褐色	○	○	-	-		
168	F-14	S021	-	II Ba	深鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	褐色	暗褐色	○	○	-	-	波状文 外表面深付着	
							ナデ	ナデ	褐色	暗褐色	○	○	-	-		
173	F-14	S024	-	II	深鉢	頭部	ミガキ	ミガキ	褐色	暗褐色	○	○	-	-	波状文	
							ナデ	ナデ	褐色	暗褐色	○	○	-	-		
174	F-14	S024	-	II Ba	深鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	褐色	暗褐色	○	○	-</			

第7表 繩文時代後期・晚期土器観察表(3)

探査番号	測量番号	出土地点	遺構層位	測量上層番号	分類	器種	部位	表面調整		色調		胎土				備考		
								外面		内面		石英	長石	角閃石	金雲母			
								外側	内側	外側	内側	外側	内側	外側	内側			
56	180	F-15 -16	SK28	SK28- 71, 84, 100	II Aa	深鉢	口縁部 ～肩部	ナデ	ナデ	黄褐色～ 褐色	黄褐色～ 褐色	○	○	×	○	×	沈縄文、刮目	
	181	F-16	SK28	SK28- 16	II Bb	深鉢	口縁部 ～肩部	ミガキ, ナデ	ミガキ, ナデ	黄褐色	黄褐色	○	○	-	-	-	沈縄文	
	182	F-16	SK28	SK28- 130	II Bb	深鉢	口縁部 ～肩部	ナデ, ケズリ後 ミガキ	ナデ後 ミガキ	黄褐色	黄褐色	○	○	○	○	-	沈縄文、 外面深付着	
57	183	F-16	SK28	SK28- 138	II B	深鉢	口縁部	ヨコナデ	ミガキ	にぶい 褐色	にぶい 褐色	○	○	○	○	-	沈縄文	
	184	F-16	SK28	-	II Ba	深鉢	口縁部 ～肩部	ミガキ, ナデ	ミガキ, ナデ	褐色～ 灰褐色	にない 褐色	○	○	-	○	-	沈縄文、 外周深付着	
	185	F-16	SK28	SK28- 157, 163, 166	II B	深鉢	口縁部	ケズリ後 ナデ	ナデ	にぶい 褐色	にぶい 褐色	○	○	-	○	-	沈縄文、 絞杉文	
58	186	F-18	SK28	SK28- 66	II G	浅鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	橙色	雨赤褐色	○	○	○	○	-	沈縄文、 波状口縁、 円形節点文	
	187	F-16	SK28	-	II Ga	浅鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	栗色	栗褐色	○	○	-	-	-	沈縄文	
	188	F-16	SK28	SK28- 142	II	深鉢	底部	ミガキ	ミガキ	赤褐色	明褐色	○	○	○	-	-		
59	189	F-16	SK28	-	II	深鉢	底部	ミガキ	-	にぶい 褐色	灰褐色	○	○	-	-	-	内面深付着	
	202	H-20	P104	P104-3	II a	深鉢	脚部	ミガキ	ナデ	暗茶褐色	茶褐色	○	○	-	-	-	沈縄文、外周深付着	
	203	H-20	P104	P104- 10- 11- 13- 14	II Ga	浅鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	茶褐色	暗茶褐色	○	○	-	-	○	輝石	
60	204	G-19	P193	-	II D	浅鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	ナデ後 ミガキ	暗褐色	褐色	○	○	-	-	-	
	205	H-20	P104	P104- 10	IV	浅鉢	口縁部 ～脚部	ミガキ	ミガキ	褐色	暗褐色	○	○	-	-	-	円形節点文	
	206	I-17	P85	-	II B	浅鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	栗色	明赤褐色	○	○	-	-	○	輝石、 波状口縁	
61	207	E-F- 14	P90	-	II a	浅鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	栗色	栗褐色	○	○	-	-	-		
	208	G-19	P200	-	曳輪末	高环	脚部	ミガキ	ミガキ	明黄色	にぶい 褐色	○	○	-	-	-		
	209	F-15	P178	P178-2	II	深鉢	底部	ナデ	ナデ	橙色	灰褐色	○	○	-	-	○	輝石、 波状口縁	
62	226	H-15	II b	-	I	深鉢	脚部	ナデ	ナデ	栗色	栗褐色	○	○	-	-	-	沈縄文	
	227	H-21	II b	-	I	深鉢	脚部	ナデ	ナデ	栗色	褐色	○	○	-	-	-	沈縄文	
	228	F-20	II b	-	I	深鉢	脚部	L岐文	ナデ	明赤褐色	にぶい 栗褐色	○	○	-	-	-	沈縄文	
63	229	G-19	II c	-	I	深鉢	脚部	L岐文	ナデ	褐色	暗褐色	○	○	-	-	-	沈縄文	
	230	F-15	II b	16817	II A	深鉢	口縁部	ナデ後 ミガキ	ナデ後 ミガキ	褐色	黒色	○	○	-	-	-	沈縄文	
	231	H-17	II b	7016	II A	深鉢	口縁部	ナデ後 ミガキ	ナデ後 ミガキ	暗褐色	黒褐色	○	○	-	-	-	沈縄文	
64	232	H-26	II b	10952	II A	深鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	褐色	褐色	○	○	-	-	-	沈縄文	
	233	G-15	II b	7255	II A	深鉢	口縁部	ミガキ	ナデ	暗褐色	にぶい 褐色	○	○	-	-	-	沈縄文	
	234	H-15	II b	7640	II A	深鉢	口縁部	ナデ後 ミガキ	ナデ後 ミガキ	暗褐色	にぶい 褐色	○	○	-	○	-	沈縄文	
65	235	E-15	II b	16409	II A	深鉢	口縁部	ミガキ	ナデ	褐色	褐色	○	○	-	-	-	沈縄文	
	236	I-17	II b	12031	II A	深鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	暗褐色	にぶい 褐色	○	○	-	-	-	沈縄文	
	237	F-14	II b	14236	II A	深鉢	口縁部	ミガキ	ナデ後 ミガキ	暗褐色	黒褐色	○	○	-	-	-	沈縄文	
66	238	H-17	II c	12672	II A	深鉢	口縁部	ナデ	ナデ	にぶい 褐色	にぶい 褐色	○	○	-	-	-	沈縄文	
	239	F-14	II b	14559	II A	深鉢	口縁部	ナデ後 ミガキ	ナデ後 ミガキ	褐色	明褐色	○	○	-	-	-	沈縄文	
	240	H-16	II b	8724	II A	深鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	褐色	灰褐色	○	○	-	-	-	沈縄文、 円形節点文	
67	241	F-14	II b	13965	II A	深鉢	口縁部	ミガキ	ナデ	赤褐色	褐色	○	○	-	-	○	輝石、 沈縄文、 楕円形節点文	
	242	H-15	II c	10796	II A	深鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	黑色	黑褐色	○	○	-	-	-	沈縄文	
	243	H-16	II b	11214	II A	深鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	明褐色	褐色	○	○	-	-	-	沈縄文	
68	244	F-15	II b	15581	II A	深鉢	口縁部	ナデ後 ミガキ	ナデ	灰褐色	褐色	○	○	-	-	○	輝石、 沈縄文	
	245	F-16	II b	15871	II B	深鉢	口縁部	ミガキ	ナデ	黒褐色	褐色	○	○	-	-	-	沈縄文	
	246	H-16	II b	10845	II A	深鉢	口縁部	ナデ後 ミガキ	ミガキ	褐色	褐色	○	○	-	○	-	沈縄文	
69	247	G-24	II b	13850	II A	深鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	暗茶褐色	暗茶褐色	○	○	-	-	-		

第8表 繩文時代後期・晚期土器観察表(4)

探査番号	出土場所	遺構層位	貯蔵番号	分類	器種	部位	表面調整		色調		胎土				備考	
							外面	内面	外面	内面	石英	長石	角閃石	金雲母		
63	248	F-15	IIb	15503	IIA	深鉢	口縁部	ナデ ミガキ	ナデ ミガキ	にぶい 褐色	にぶい 褐色	○	○	+	○	-
	249	H-16	IIb	7613	IIA	深鉢	口縁部	ナデ ミガキ	ナデ ミガキ	灰黃褐色	褐色	○	○	+	+	-
	250	F-13	IIb	14249	IIA	深鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	にぶい 褐色	褐色	○	○	+	+	○
	251	F-14	IIb	14234	IIA	深鉢	口縁部	ミガキ	ナデ	赤褐色	褐色	○	○	+	-	-
	252	H-17	IIb	12521	IIA	深鉢	口縁部	ナデ後 ミガキ	ナデ後 ミガキ	赤褐色	明赤褐色	○	○	+	+	○
64	253	H-15	IIc	7703- 10801	IIB	深鉢	口縁部	ナデ	ミガキ	暗褐色	褐色	○	○	+	○	-
	254	I-17	IIb	12092- 12094- 12285	IIBa	深鉢	口縁部 ～胴部	ヨコナデ, ナデ	ナデ	明褐色	暗褐色～ 暗灰褐色	○	○	+	○	-
	255	H-16	IIb	1135	IIBa	深鉢	口縁部 ～胴部	ミガキ, ナデ	ナデ	黒褐色～ 赤褐色	褐色	○	○	○	-	-
	256	G-15	IIb	9175- 11730	IIBa	深鉢	口縁部 ～胴部	ナデ後 ミガキ	ナデ後 ミガキ	赤褐色～ 黑褐色	褐色	○	○	+	○	-
	257	F-16	IIc	17903	IIBa	深鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	黒褐色	褐色	○	○	+	○	-
65	258	F-15	IIb	16593- 16595- 17646	IIB	深鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	灰褐色	褐色	○	○	+	-	-
	259	F-20	IIb	15017	IIB	深鉢	口縁部 ～胴部	ミガキ	ミガキ	黒褐色	にぶい 赤褐色	○	○	+	-	-
	260	H-16	IIb	9965	IIB	深鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	褐色	にぶい 褐色	○	○	+	-	○
	261	F-15	IIb	16097	IIB	深鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	にぶい 赤褐色	褐色	○	○	+	-	-
	262	G-15	IIc	10451- 10452- 10772	IIB	深鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	黒褐色	褐色	○	○	+	-	-
66	263	G-15	IIb	9170	IID	深鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	黒褐色	褐色	○	○	+	○	-
	264	G-15	IIb	7815	IID	深鉢	口縁部	ミガキ	ナデ	黒褐色	褐色	○	○	+	○	-
	265	H-16	IIb	11317	IID	深鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	明黃褐色	黑色	○	○	+	-	-
	266	H-17	IIc	12823	IID	深鉢	口縁部	ミガキ	ナデ	暗赤褐色	褐色	○	○	○	-	-
	267	I-17	IIb	12368	IID	深鉢	口縁部 ～胴部	ミガキ	ミガキ	黒褐色	にぶい 褐色	○	○	+	-	-
67	268	H-15	IIb	8377	IID	深鉢	口縁部	ナデ後 ミガキ	ナデ後 ミガキ	黒褐色	褐色	○	○	+	○	-
	269	H-16	IIb	11041	IID	深鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	ナデ後 ミガキ	褐色	○	○	+	-	-
	270	H-16	IIb	10008	IID	深鉢	口縁部	ミガキ	ナデ後 ミガキ	黒褐色	褐色	○	○	+	-	○
	271	G-16	IIc	4780	IID	深鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	明褐色	褐色	○	○	+	○	-
	272	H-15	IIb	11721	IID	深鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	黒褐色	褐色	○	○	+	○	-
68	273	F-16	IIb	17199	IID	深鉢	口縁部 ～胴部	ミガキ	ミガキ	黒褐色	褐色	○	○	+	-	-
	274	I-27	IIb	10516	IID	深鉢	口縁部	ナデ後 ミガキ	ナデ後 ミガキ	黑色	黒褐色	○	○	+	-	-
	275	H-17	IIc	8174	IID	深鉢	口縁部	ナデ後 ミガキ	ナデ後 ミガキ	黒褐色	褐色	○	○	+	-	-
	276	H-17	IIb	12319	IID	深鉢	口縁部	ミガキ	ナデ	暗赤褐色	褐色	○	○	+	-	-
	277	H-16	IIb	6958	IID	深鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	黒褐色	褐色	○	○	+	-	-
69	278	H-16	IIb	11644	IID	深鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	明褐色	褐色	○	○	+	-	-
	279	H-16	IIb	10365	IID	深鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	深褐色	明褐色	○	○	+	-	-
	280	H-15	IIb	6910	IID	深鉢	口縁部	ナデ ミガキ	ナデ ミガキ	にぶい 褐色 ～黒褐色	褐色	○	○	○	○	-
	281	F-16	IIb	16225- 16685- 17181- 17182- 17251	IID	深鉢	口縁部 ～胴部	ナデ ミガキ	ナデ ミガキ	明褐色	褐色	○	○	+	-	-
	282	H-17	IIb	12848	IID	深鉢	口縁部 ～胴部	ミガキ	ナデ後 ミガキ	暗褐色～ 褐色	褐色	○	○	○	○	-
70	283	-	IIb	11229- 12160	IID	深鉢	口縁部	ナデ後 ミガキ	ナデ後 ミガキ	にぶい 褐色	暗褐色	○	○	+	-	-
	284	H-16	IIb	10644	IID	深鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	黒褐色	褐色	○	○	+	-	-
	285	G-16	IIb	9293- 9295	IID	深鉢	口縁部	ナデ後 ミガキ	ナデ後 ミガキ	褐色	灰褐色	○	○	+	-	-
	286	H-17	IIb	12035- 12037	IID	深鉢	口縁部	ミガキ	ナデ後 ミガキ	黒褐色	明黃褐色	○	○	+	-	-
	287	F-16	IIc	17769	IID	深鉢	口縁部	ミガキ	厚斜 一部ミガキ	にぶい 黃褐色	にぶい 黃褐色	○	○	+	-	-
71	288	H-19	IIb	11827	IID	深鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	にぶい 褐色	褐色	○	○	+	-	-
	289	H-16	IIb	9469	IID	深鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	にぶい 黃褐色	褐色	○	○	+	-	-
															-	-

第9表 繩文時代後期・晚期土器観察表(5)

探査番号	出土場所	遺構番号	貯蔵層号	分類	器種	部位	表面調整		色調		胎土				備考	
							外面	内面	外面	内面	石英	長石	角閃石	金雲母		
	290	F-16	IIb	16807-17243	IIB	深鉢	口縁部 ～脚部	ナデ	ナデ	褐色	暗褐色	○	○	○	○	- 沈縄文
	291	G-16	IIb	10051	IIB	深鉢	口縁部	ナデ後 ミガキ	ナデ後 ミガキ	褐色	暗褐色	○	○	-	-	- 沈縄文
	292	G-15	IIb	7806-7813	IIB	深鉢	口縁部	ミガキ ナデ後 ケズリ後 ミガキ	ナデ後 ミガキ	褐色	褐色～ 黒褐色	○	○	○	○	- 沈縄文
66	293	H-17	IIb	157-4813-8832	IIB	深鉢	口縁部 ～脚部	ナデ ミガキ	ナデ ミガキ	褐色	暗褐色	○	○	○	○	- 沈縄文
	294	H-16	IIb	11631	IIB	深鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	褐色	褐色	○	○	-	-	- 沈縄文
	295	G-15	IIb	7254	IIB	深鉢	口縁部	ナデ後 ミガキ	ナデ後 ミガキ	褐色	暗褐色	○	○	-	-	- 沈縄文
	296	G-15	IIb	7755	IIB	深鉢	口縁部	ミガキ	ナデ	褐色	暗褐色	○	○	-	-	- 沈縄文
	297	H-15	IIb	8367	IIB	深鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	褐色	褐色	○	○	-	-	- 沈縄文
	298	G-16	IIc	10205	IIB	深鉢	口縁部	ナデ後 ミガキ	ミガキ	褐色	暗褐色	○	○	-	-	- 沈縄文
	299	G-21	IIb	14014	IIB	深鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	褐色	暗褐色	○	○	-	-	- 沈縄文
	300	H-15	IIb	9079	IIB	深鉢	口縁部	ナデ後 ミガキ	ナデ	褐色	暗褐色	○	○	○	-	- 沈縄文
	301	G-16	IIb	8145	IIB	深鉢	口縁部	ナデ後 ミガキ	ナデ後 ミガキ	褐色	暗褐色	○	○	-	-	- 沈縄文
	302	G-16	IIb	9878	IIB	深鉢	口縁部	ミガキ	ナデ	褐色	暗褐色	○	○	-	-	- 沈縄文
	303	G-16	IIb	8120-9237	IIBa	深鉢	口縁部	ミガキ	ナデ ミガキ	褐色	暗褐色	○	○	○	-	- 沈縄文
	304	F-15	IIb	15509	IIB	深鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	褐色	褐色	○	○	-	-	- 沈縄文
	305	H-16	IIb	9978	IIB	深鉢	口縁部	ミガキ	ナデ後 ミガキ	褐色	暗褐色	○	○	-	-	- 沈縄文
	306	I-22	IIb	-	IIB	深鉢	口縁部 ～脚部	ミガキ	ナデ	褐色	暗褐色	○	○	-	-	- 沈縄文
	307	G-16	IIb	10432	IIB	深鉢	口縁部	ミガキ	ナデ	褐色	暗褐色	○	○	-	-	- 沈縄文
	308	F-14	IIb	14798	IIB	深鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	褐色	暗褐色	○	○	-	-	- 沈縄文
67	309	H-29	IIb	18102-18108	IIB	深鉢	口縁部 ～脚部	ミガキ	ミガキ	褐色	褐色	○	○	-	-	- 沈縄文
	310	H-16	IIb	11048	IIB	深鉢	口縁部	ナデ後 ミガキ	ミガキ	褐色	暗褐色	○	○	-	-	- 沈縄文
	311	ST	IIb	49	IIB	深鉢	口縁部	ナデ	ナデ	褐色	暗褐色	○	○	-	○	- 沈縄文
	312	H-15	IIb	7719	IIB	深鉢	口縁部	ナデ後 ミガキ	ナデ後 ミガキ	褐色	暗褐色	○	○	○	○	- 沈縄文
	313	H-16	IIb	10685	IIB	深鉢	口縁部 ～脚部	ミガキ	ナデ	褐色	褐色	○	○	-	○	○ 横石、沈縄文
	314	G-15	IIb	7759	IIB	深鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	褐色	暗褐色	○	○	-	-	- 沈縄文
	315	F-16	IIb	16820	IIB	深鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	褐色	褐色	○	○	-	-	- 沈縄文
	316	H-16	IIb	11175	IIB	深鉢	口縁部	ナデ後 ミガキ	ナデ	褐色	暗褐色	○	○	-	-	- 沈縄文
	317	G-21	IIb	16797	IIB	深鉢	口縁部 ～脚部	ミガキ	ナデ	褐色	暗褐色	○	○	-	-	- 沈縄文
	318	G-16	II	10410	IIB	深鉢	口縁部	ナデ ミガキ?	ナデ	褐色	暗褐色	○	○	-	-	- 沈縄文
	319	H-19	IIb	11829	IIB	深鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	褐色	暗褐色	○	○	-	-	- 沈縄文
	320	G-22	IIb	14383	IIB	深鉢	口縁部	ミガキ	ナデ	茶褐色	暗褐色	○	○	-	-	- 沈縄文、波状口縁
	321	F-16	IIb	15910	IIB	深鉢	口縁部	ナデ	ナデ	褐色	褐色	○	○	-	-	- 沈縄文
	322	E-15	IIb	16996	IIB	深鉢	口縁部	ミガキ	ナデ	褐色	褐色	○	○	-	○	- 沈縄文
	323	H-16	IIb	11119	IIB	深鉢	口縁部	ナデ	ナデ	褐色	暗褐色	○	○	-	-	- 沈縄文
	324	G-24	IIb	-	IIB	深鉢	口縁部	ナデ	ナデ	褐色	暗褐色	○	○	-	-	- 沈縄文
	325	H-16	IIb	11295	IIB	深鉢	口縁部	ナデ後 ミガキ	ナデ	褐色	暗褐色	○	○	-	-	- 沈縄文
	326	G-23	IIc	-	IIB	深鉢	口縁部	ミガキ	ナデ	褐色	暗褐色	○	○	-	○	- 沈縄文
68	327	F-15	IIb	16145	IIB	深鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	褐色	暗褐色	○	○	-	-	- 沈縄文、波状口縁
	328	H-17	IIb	12312-12394	IIB	深鉢	口縁部 ～脚部	ミガキ ナデ	ミガキ ナデ	褐色～ 暗褐色	暗褐色～ 赤褐色	○	○	-	-	- 沈縄文、波状口縁、 円形凹点文、 外縁深付帯
	329	H-15	IIb	9053	IIB	深鉢	口縁部	ナデ ミガキ	ミガキ	褐色	暗褐色	○	○	-	-	- 沈縄文、波状口縁
	330	H-15	IIc	9658-10979	IIB	深鉢	口縁部	△ラ	ケズリ	褐色	暗褐色	○	○	-	-	- 沈縄文、波状口縁
	331	H-16	IIb	11682	IIB	深鉢	口縁部	ミガキ	ケズリ後 ミガキ	褐色	暗褐色	○	○	-	-	○ 横石、沈縄文、 波状口縁
	332	G-16	IIb	12039	IIB	深鉢	口縁部	ミガキ	摩耗の 痕跡	褐色	暗褐色	○	○	-	-	- 沈縄文、波状口縁、 円形凹点文
	333	G-16	IIb	9303	IIB	深鉢	口縁部	ミガキ、ナデ	ミガキ	褐色	暗褐色	○	○	-	-	- 沈縄文、波状口縁
	334	H-16	IIb	10672	IIB	深鉢	口縁部	ミガキ	ナデ	褐色	暗褐色	○	○	-	-	- 沈縄文、波状口縁

第10表 繩文時代後期・晚期土器観察表(6)

探査番号	出土地名	遺構番号	層位番号	分類	器種	部位	器形調整		色調		胎土				備考	
							外面	内面	外面	内面	石英	長石	角閃	金剛石		
68	335	H-16	II b	9699	II B	深鉢	口縁部	三ガキ	三ガキ	ミガキ	明赤褐色	にぶい 褐色	○	○	-	-
	336	F-16	II b	17337	II B	深鉢	口縁部	三ガキ	三ガキ	ナデ	にぶい 黃褐色	灰黃褐色	○	○	-	-
	337	H-16	II b	12147	II B	深鉢	口縁部	三ガキ	三ガキ	ナデ	にぶい 褐色	にぶい 褐色	○	○	-	-
	338	G-21	II b	16731	II B	深鉢	口縁部	三ガキ	三ガキ	ナデ	にぶい 褐色	褐色	○	○	-	-
	339	F-16	II b	16932	II B	深鉢	口縁部	ナデ後 三ガキ	ナデ後 三ガキ	ナデ後 三ガキ	にぶい 褐色	褐色	○	○	-	-
	340	F-16	II c	17893	II B	深鉢	口縁部	三ガキ	ミガキ	ナデ後 三ガキ	明褐色	明褐色	○	○	-	-
	341	I-22	II b	2429	II B	深鉢	口縁部	ナデ後 三ガキ	ナデ後 三ガキ	ナデ	黒褐色	黒褐色	○	○	-	-
69	342	F-16	II b	16248	II B	深鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	ナデ後 三ガキ	にぶい 褐色	黒褐色	○	○	-	-
	343	H-16	II b	10302	II B	深鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	ナデ後 三ガキ	黒褐色	褐灰色	○	○	-	-
	344	G-15	II b	9541	II B	深鉢	口縁部	三ガキ	三ガキ	ミガキ	明赤褐色	褐色	○	○	-	-
	345	H-16	II b	9104	II B	深鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	ナデ後 三ガキ	にぶい 褐色	褐色	○	○	-	-
	346	G-14	II b	5809	II B	深鉢	口縁部	ケツワ後 三ガキ	ケツワ後 三ガキ	ナデ後 三ガキ	にぶい 褐色	灰褐色	○	○	-	-
	347	G-21	II b	15177	II B	深鉢	口縁部	ナデ後 三ガキ	ナデ後 三ガキ	ナデ	黒褐色	にぶい 赤褐色	○	○	-	-
	348	G-22	II b	14661	II B	深鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	ナデ	明茶褐色	褐色	○	○	-	-
70	349	H-16	II b	9930	II B	深鉢	口縁部	ケツワ後 三ガキ	ケツワ後 三ガキ	ナデ後 三ガキ	にぶい 褐色	黒褐色	○	○	-	○
	350	G-15	II b	7210- 7265	II B	深鉢	口縁部	ナデ後 三ガキ	ナデ後 三ガキ	ナデ後 三ガキ	明褐色	黒褐色	○	○	-	-
	351	G-16	II b	10029	II B	深鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	ミガキ	明褐色	灰黃褐色	○	○	-	-
	352	F-15	II c	17943	II B	深鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	ナデ後 三ガキ	にぶい 褐色	褐灰色	○	○	-	○
	353	F-16	II c	16302	II B	深鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	ミガキ	黒褐色	黒褐色	○	○	-	-
	354	H-16	II b	12188	II B	深鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	ナデ後 三ガキ	褐色	黒褐色	○	○	-	-
	355	G-19	II b	15277	II Cb	深鉢	口縁部 ～鋤部	ミガキ	ミガキ	ミガキ	明褐色	黒色	○	○	○	-
71	356	G-H- 20	II b	1921- 1924	II Ca	深鉢	口縁部 ～鋤部	ミガキ	ミガキ	ミガキ	明赤褐色	灰褐色	○	○	-	-
	357	F-15	II b	16479- 17321	II Ca	深鉢	口縁部 ～鋤部	ナデ	ナデ	ナデ	黒褐色	黒褐色	○	○	-	-
	358	H-17	II b	9675	II Ca	深鉢	口縁部 ～鋤部	ミガキ	ミガキ	ナデ 三ガキ	黒色	黒褐色～ にぶい 黃褐色	○	○	-	-
	359	H-16	II b	11123	II C	深鉢	口縁部	ナデ後 三ガキ	ナデ後 三ガキ	ナデ後 三ガキ	明赤褐色	明赤褐色	○	○	-	-
	360	F-16	II b	17257	II C	深鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	ミガキ	黒褐色	灰黃褐色	○	○	-	-
	361	I-17	II b	7029	II C	深鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	ナデ後 三ガキ	にぶい 黃褐色	明褐色	○	○	-	-
	362	F-15	II b	17038	II C	深鉢	口縁部 ～鋤部	ミガキ	ミガキ	ナデ後 三ガキ	にぶい 褐色	灰褐色	○	○	○	-
72	363	H-15	II b	7324- 7733	II C	深鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	ナデ後 三ガキ	黒褐色	赤褐色	○	○	-	-
	364	H-19	II b	11813	II C	深鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	ナデ	褐色	明赤褐色	○	○	-	-
	365	E-15	II b	10258	II C	深鉢	口縁部	ナデ 三ガキ	ナデ 三ガキ	ナデ	明褐色	褐色	○	○	-	-
	366	G-14	II b	6490	II C	深鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	ミガキ	黒褐色	暗褐色	○	○	-	-
	367	G-21	II b	14397	II C	深鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	ナデ	黒褐色	黒色	○	○	-	-
	368	F-16	II c	17367	II C	深鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	ミガキ	褐色	にぶい 褐色	○	○	-	-
	369	G-15	II b	6292	II C	深鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	ナデ後 三ガキ	黒褐色	にぶい 黃褐色	○	○	-	-
73	370	F-14	II b	14560	II Ca	深鉢	口縁部 ～鋤部	ミガキ	ミガキ	ナデ	にぶい 褐色	暗褐色	○	○	○	-
	371	G-16	II b	8553	II C	深鉢	口縁部	ナデ	ナデ	ナデ	褐色	褐色	○	○	-	-
	372	H-16	II b	10703	II C	深鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	ナデ後 三ガキ	にぶい 褐色	褐色	○	○	-	-
	373	F-16	II c	17702	II C	深鉢	口縁部	ナデ後 三ガキ	ナデ後 三ガキ	ナデ	にぶい 黃褐色	明褐色	○	○	-	-
	374	F-16	II c	17727	II Db	深鉢	口縁部 ～鋤部	ミガキ ナデ	ミガキ ナデ	ミガキ ナデ	褐色～ 黒褐色	暗褐色	○	○	-	-
	375	F-15	II b	16568- 16691- 16993- 16998- 17033	II Da	深鉢	口縁部 ～鋤部	ミガキ	ミガキ	ミガキ	黒褐色～ 褐色	褐色	○	○	○	土縁文

第11表 繩文時代後期・晚期土器觀察表(7)

図面 番号	測定 番号	出土 地點	測定 部位	測定番号	分類	器種	部位	表面調整		色 調		胎 土				備考
								外面	内面	外面	内面	石英	長石	角閃	金雲母	
	376	H-15	IIb	9021	IID	深鉢	口縁部	ナデ後 ミガキ	ナデ	黒褐色	赤褐色	○	○	○	-	-
	377	F-15	IIb	16591	IID	深鉢	口縁部	ナデ	ナデ	黒褐色	赤褐色	○	○	○	-	-
	378	H-17	IIb	11968	IID	深鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	黒色	黒褐色	○	○	-	-	○
	379	F-16	IIb	16866	IID	深鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	褐色	黒褐色	○	○	-	-	-
	380	F-15	IIb	15916	IID	深鉢	口縁部	ミガキ	ナデ	橙色	褐色	○	○	-	-	○
	381	F-15	IIb	16651	IID	深鉢	口縁部	ミガキ	ナデ	黒褐色	黒褐色	○	○	-	-	-
73	382	F-16	IIb	17188	IIDb	深鉢	口縁部 ～側面	ミガキ	ミガキ	明褐色	黒褐色	○	○	-	-	-
	383	H-16	IIc	16208	IID	深鉢	口縁部	ミガキ	ナデ	褐色	黒色	○	○	-	-	-
	384	F-19	IIc	16779	IID	深鉢	口縁部	ナデ後 ミガキ	ナデ	にぶい 褐色	褐色	○	○	-	-	-
	385	G-15	IIb	9829	IID	深鉢	口縁部	ナデ後 ミガキ	ナデ後 ミガキ	赤褐色	明赤褐色	○	○	-	-	○
	386	F-20	IIb	15818	IID	深鉢	口縁部 ～側面	ナデ	ナデ	褐色	にぶい 褐色	○	○	-	-	-
	387	F-20	IIb	14900	IID	深鉢	ナデ後 ミガキ	ナデ	にぶい 褐色	灰褐色	○	○	-	-	-	
	388	H-28	IIb	18157-	IIEb	深鉢	口縁部 ～側面	ナデ	ミガキ	にぶい 赤褐色	褐色	○	○	-	○	-
	389	G-19	IIb	12436	IIE	深鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	黒褐色	系褐色	○	○	-	-	-
	390	H-28	IIb	18158	IIE	深鉢	口縁部	ナデ後 ミガキ	ナデ後 ミガキ	灰褐色	にぶい 褐色	○	○	-	-	-
	391	F-16	IIb	16202	IIE	深鉢	口縁部	ナデ	ナデ	にぶい 褐色	褐色	○	○	-	-	-
	392	G-19	IIc	15683	IIE	深鉢	口縁部	ナデ	ナデ	褐色	灰褐色	○	○	-	-	-
	393	G-16	IIb	2957	IIE	深鉢	口縁部	ナデ	ナデ	黒褐色	黒褐色	○	○	-	-	-
	394	F-20	IIb	6775	IFF	深鉢	口縁部	ナデ	ミガキ	にぶい 褐色	褐色	○	○	-	-	-
	395	E-13	IIb	13559	IFF	深鉢	口縁部	ミガキ	ナデ	黒褐色	黒褐色	○	○	-	-	-
	396	H-20	IIc	17827	IFF	深鉢	口縁部	ミガキ	ナデ	にぶい 褐色	褐色	○	○	-	-	-
74	397	F-20	IIb	14438	IFF	深鉢	口縁部	ナデ	ナデ後 ミガキ	黒褐色	褐灰色	○	○	-	-	-
	398	I-20	IIb	-	IFF	深鉢	口縁部	ミガキ	ナデ	茶褐色	茶褐色	○	○	○	-	-
	399	H-16	IIb	11712	IID	深鉢	口縁部	ナデ	ナデ	褐色	褐色	○	○	-	-	-
	400	F-16	IIc	17657	IFF	深鉢	口縁部	ハラ ケズリ	ナデ	黒褐色	灰褐色	○	○	-	-	-
	401	G-23	IIb	14619	IFF	浅鉢	口縁部 ～側面	ナデ後 ミガキ	ナデ後 ミガキ	ケズリ後 ナデ	暗褐色	○	○	-	-	-
	402	I-22	IIb	14066	IFF	深鉢	口縁部	ミガキ	ナデ	黒褐色	灰褐色	○	○	-	-	-
	403	I-22	IIb	2427	IFF	深鉢	口縁部	ナデ後 ミガキ	ナデ	黒褐色	黒褐色	○	○	-	-	○
	404	I-34	IIb	4206	IIFa	深鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	にぶい 褐色	褐色	○	○	-	-	-
	405	F-20	IIb	12696	IFF	深鉢	口縁部 ～側面	ミガキ	ナデ	灰褐色	褐色	○	○	-	-	○
	406	F-18	IIb	-	IFF	深鉢	口縁部	ナデ	ナデ	茶褐色	茶褐色	○	○	-	-	-
	407	F-19	IIb	13427	IFF	深鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	褐色	褐色	○	○	-	-	-
	408	G-16	IIb	8500	IIa	深鉢	頭部	ナデ後 ミガキ	ナデ	にぶい 褐色	灰褐色	○	○	-	-	-
	409	H-19	IIb	11815	IIa	深鉢	頭部	ミガキ	ナデ	明赤褐色	にぶい 褐色	○	○	-	-	○
	410	H-19	IIb	11817	IIa	深鉢	頭部	ナデ	ナデ	赤褐色	にぶい 褐色	○	○	○	-	○
	411	G-15	IIb	6262	IIa	深鉢	頭部	ミガキ	一團ミガキ	暗褐色	灰褐色	○	○	-	-	-
	412	F-15	IIb	15483	IIa	深鉢	頭部	ナデ後 ミガキ	ナデ	黒褐色	黒褐色	○	○	-	-	-
	413	H-16	IIb	11656	IIa	深鉢	頭部	ナデ	ナデ	灰褐色	褐灰色	○	○	-	-	-
	414	H-16	IIb	9945	IIa	深鉢	頭部	ナデ後 ミガキ	ナデ後 ミガキ	暗褐色	褐灰色	○	○	-	-	-
	415	G-21	IIb	15011	IIa	深鉢	頭部	ミガキ	ナデ	暗褐色	灰褐色	○	○	○	-	-
	416	F-14	IIb	14561	IIa	深鉢	頭部	ナデ後 ミガキ	ナデ	褐色	黒褐色	○	○	○	-	-
	417	J-26	IIb	10935	IIb	深鉢	頭部～ 側面	貝殻多孔	ケズリ	黒褐色	にぶい 褐色	○	○	-	-	-
	418	E-19	IIb	14590- 15057- 15087	IIa	深鉢	口縁部 ～側面	ミガキ	ミガキ	褐色	褐灰色	○	○	-	-	○
	419	G-16	IIb	9871- 9877	IIa	深鉢	頭部	ナデ後 ミガキ	ナデ	灰褐色	褐灰色	○	○	-	-	-
	420	I-17	IIb	12265	IIa	深鉢	頭部	ミガキ	ミガキ	明赤褐色	明褐色	○	○	-	-	-
76	421	G-15	IIb	7792	IIGb	浅鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	明黃褐色	黃褐色	○	○	-	-	-
	422	H-15	IIb	8997	IIG	浅鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	黒褐色	黒褐色	○	○	-	-	-

第12表 繩文時代後期・晚期土器觀察表(8)

図面 番号	出土 地點	遺構 層位	貯上 番号	分類	器種	部位	表面調整		色 調		施 土				備考	
							外面	内面	外面	内面	石英	長石	角閃	金青母		
423	H-16	II b	12624	II G	浅鉢	口縁部	ナデ 三ガキ	ナデ	にぶい 赤褐色	黒褐色	○	○	○	-	- 沖縄文	
424	I-27	II b	8752	II Ga	浅鉢	口縁部	三ガキ	三ガキ	褐灰色	褐色	○	○	-	-	- 沖縄文, 横円凹凸点文	
425	G-16	II c	16200	II G	浅鉢	口縁部	三ガキ	三ガキ	褐褐色	褐色	○	○	-	-	- 沖縄文	
426	G-15	II b	6295	II G	浅鉢	口縁部	三ガキ	三ガキ	にぶい 赤褐色	黒褐色	○	○	-	-	- 沖縄文	
427	F-16	II b	16369	II G	浅鉢	口縁部	三ガキ	三ガキ	褐褐色	褐茶褐色	○	○	○	-	- 沖縄文	
428	G-15	II b	9957	II G	浅鉢	口縁部	三ガキ	三ガキ	黒褐色	褐色	○	○	-	○	- 沖縄文	
429	H-16	II b	10331	II G	浅鉢	口縁部	三ガキ	三ガキ	にぶい 褐色	褐色	○	○	-	○	- 沖縄文, 明晩文	
430	H-16	II b	7473	II G	浅鉢	口縁部	三ガキ	三ガキ	褐褐色	褐色	○	○	-	-	- 沖縄文	
431	E-13	II b	14463	II G	浅鉢	口縁部	ナデ 三ガキ	三ガキ	黒褐色	黒色	○	○	-	-	- 沖縄文	
432	G-15	II b	10455	II G	浅鉢	口縁部	三ガキ	三ガキ	ナデ像 三ガキ	黒色	黒褐色	○	○	-	○	櫻石
433	G-15	II b	7267	II G	浅鉢	口縁部	三ガキ	三ガキ	褐褐色	灰褐色	○	○	-	-	- 沖縄文, 波状口縁	
434	F-21	II b	15130	II G	浅鉢	口縁部	三ガキ	三ガキ	黒褐色	黒褐色	○	○	○	-	- 沖縄文	
435	F-17	II b	7056	II G	浅鉢	口縁部	三ガキ	三ガキ	褐褐色	褐色	○	○	-	-	- 沖縄文	
436	G-22	II b	14771	II G	浅鉢	口縁部	三ガキ	三ガキ	茶褐色	茶褐色	○	○	-	-	- 沖縄文, 内円凹凸点文	
437	I-17	II b	12375	II G	浅鉢	口縁部	三ガキ	ナデ	にぶい 赤褐色	黒褐色	○	○	○	-	- 沖縄文, 内円凹凸点文	
76	438	E-14	II b	14789	II G	浅鉢	口縁部	三ガキ	三ガキ	褐灰色	黑色	○	○	-	-	- 沖縄文 (沖縄物に丹の跡)
439	H-16	II b	10378	II G	浅鉢	口縁部	三ガキ	三ガキ	褐褐色	褐色	○	○	-	-	- 沖縄文	
440	G-16	II b	10168	II G	浅鉢	口縁部	ナデ像 三ガキ	ナデ像 三ガキ	明赤褐色	にぶい 赤褐色	○	○	-	-	- 沖縄文	
441	G-20	II b	15113	II G	浅鉢	口縁部	三ガキ	三ガキ	褐褐色	黒色	○	○	-	-	- 沖縄文	
442	F-15	II b	16605	II Ga	浅鉢	口縁部	三ガキ	三ガキ	ナデ像 三ガキ	にぶい 褐色	灰褐色	○	○	-	-	- 沖縄文
443	H-17	II c	433	II G	浅鉢	口縁部	三ガキ	三ガキ	茶褐色	明褐色	○	○	-	-	- 沖縄文	
444	H-17	II c	8179	II G	浅鉢	口縁部	三ガキ	三ガキ	褐褐色	褐色	○	○	-	-	- 沖縄文	
445	H-16	II b	10643	II G	浅鉢	口縁部	三ガキ	三ガキ	にぶい 黄褐色	にぶい 黄褐色	○	○	-	-	- 沖縄文	
446	G-16	II c	10181	II G	浅鉢	口縁部	三ガキ	三ガキ	褐色	黑色	○	○	-	-	- 沖縄文	
447	F-15	II b	16476	II G	浅鉢	口縁部	三ガキ	三ガキ	にぶい 黄褐色	橙色	○	○	-	-	- 沖縄文	
448	H-15	II b	6856	II Ga	浅鉢	口縁部	三ガキ	三ガキ	褐褐色	黑色	○	○	-	-	- 沖縄文	
449	H-17	II b	12306	II G	浅鉢	口縁部	三ガキ	三ガキ	褐褐色	褐色	○	○	-	-	- 沖縄文	
450	I-17	II b	7405	II G	浅鉢	口縁部	三ガキ	三ガキ	淡白色	褐色	○	○	-	-	- 沖縄文	
451	F-16	II b	17558	II Ga	浅鉢	口縁部 ~側部	ミガキ	ミガキ	灰黄色	にぶい 黄色	○	○	-	-	- 沖縄文	
452	F-15	II b	16600	II G	浅鉢	口縁部 ~側部	ナデ像 三ガキ	ミガキ	黑色	暗褐色	○	○	-	-	- 沖縄文	
453	G-15	II b	4637	II G	浅鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	ナデ像 三ガキ	橙色	○	○	-	-	- 沖縄文	
454	G-21	II b	18261	II Ga	浅鉢	口縁部 ~側部	ミガキ	ミガキ	暗赤褐色	黒褐色	○	○	-	-	- 沖縄文	
455	I-19	II b	1876	II G	浅鉢	口縁部	三ガキ	三ガキ	褐褐色	明褐色	○	○	-	-	- 沖縄文	
456	G-15	II b	6258	II G	浅鉢	口縁部	三ガキ	三ガキ	褐褐色	褐褐色	○	○	-	○	櫻石, 沖縄文	
457	H-16	II b	10836	II G	浅鉢	口縁部	三ガキ	三ガキ	黒褐色	黒褐色	○	○	-	-	- 沖縄文	
458	I-17	II b	12030	II G	浅鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	にぶい 褐色	褐色	○	○	-	-	- 沖縄文	
459	F-20	II b	14904	II Ga	浅鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	褐色	黑色	○	○	-	-	- 沖縄文	
460	G-16	II c	10118	II Ga	浅鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	にぶい 褐色	褐色	○	○	-	-	- 沖縄文	
461	I-17	II c	297	II G	浅鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	褐褐色	褐色	○	○	-	○	櫻石, 沖縄文	
462	G-16	II b	9264	II G	浅鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	褐褐色	明褐色	○	○	-	-	- 沖縄文	
463	I-20	II b	11437	II G	浅鉢	口縁部	ミガキ	ナデ	茶褐色	茶褐色	○	○	-	○	内円凹凸点文	
77	464	H-20	II b	2146	II G	浅鉢	口縁部	ミガキ	ナデ	茶褐色	灰褐色	○	○	-	-	- 沖縄文, 内円凹凸点文
465	F-15	II b	15509	II G	浅鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	褐色	黑色	○	○	-	-	- 沖縄文	
466	F-16	II c	17092	II G	浅鉢	口縁部	ナデ像 ミガキ	ミガキ	暗褐色	灰褐色	○	○	-	-	- 沖縄文	
467	H-17	II b	12117	II G	浅鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	褐褐色	褐灰色	○	○	-	○	櫻石, 沖縄文	
468	H-17	II b	9165- 9674	II Ga	浅鉢	口縁部 ~側部	ミガキ	ミガキ	明黃褐色	灰黃褐色	○	○	-	-	- 沖縄文, 波状口縁, 外縁深付着	
469	G-21	II b	14072	II G	浅鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	にぶい 褐色	褐色	○	○	-	-	- 沖縄文, 波状口縁	
470	I-17	II b	11628	II G	浅鉢	口縁部	ナデ像 ミガキ	ナデ	褐色	褐色	○	○	-	○	櫻石, 沖縄文	
471	H-17	II b	12583	II H	浅鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	暗褐色	茶褐色	○	○	-	-	- 外縁深付着	
472	F-14	II b	14205	II H	浅鉢	口縁部	ミガキ	ナデ	褐色	褐色	○	○	-	-	- 沖縄文	
473	F-18	II b	-	II H	浅鉢	口縁部	ナデ	ミガキ	暗褐色	暗褐色	○	○	-	-	- 沖縄文	
474	F-20	II b	14447	II H	浅鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	暗褐色	茶褐色	○	○	-	-	- 沖縄文	

第13表 繩文時代後期・晩期土器観察表(9)

探査番号	出土場所	遺構番号	取上番号	分類	器種	部位	肩部調整		色調		胎土				備考	
							外面	内面	外面	内面	石英	長石	角閃石	金雲母		
78	475	J-35	II b	2694	II ia	浅鉢	口縁部 ～肩部	三ガキ	ミガキ	灰褐色	灰褐色	○	○	-	-	
	476	G-23	II b	-	II ia	浅鉢	口縁部 ～肩部	ミガキ	ミガキ	褐色	褐色	○	○	-	-	
	477	F-22	II c	-	II i	浅鉢	口縁部 ～肩部	ミガキ	ミガキ	明赤褐色	褐色	○	○	-	-	
	478	J-24	II b	10918	II i	浅鉢	口縁部 ～肩部	ミガキ	ミガキ	灰褐色	褐色	○	○	-	-	
	479	I-33	II b	3843-3849	II ia	浅鉢	口縁部 ～肩部	ナデ	ナデ	褐色	灰褐色	○	○	-	-	土縞文
	480	H-14	II b	8226-8227	II i	浅鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	褐色	褐色	○	○	-	-	
	481	G-15	II b	7230	II ia	浅鉢	肩部	ミガキ	ミガキ	粗色	灰褐色	○	○	-	-	土縞文、朝目
	482	F-16-18	II b	17465	II	深鉢	肩部～底部	ミガキ	ナデ	灰褐色	灰褐色	○	○	○	-	○
	483	F-21	-	11545	II	深鉢	底部	ミガキ、ナデ	ナデ	褐色	灰褐色	○	○	○	-	
79	484	I-35	II b	4430	II	深鉢	底部	ミガキ	ミガキ	灰褐色	灰褐色	○	○	-	-	
	485	F-16	II b	17566	II	深鉢	底部	ミガキ	ナデ	明赤褐色	明赤褐色	○	○	-	-	
	486	G-15-16	II b	1006-1042-1045-10742	II	深鉢	肩部～底部	ナデ	ナデ	褐色	黑色	○	○	○	-	
	487	H-15	II c	10807	II	深鉢	底部	ナデ	ナデ	灰褐色	黑褐色	○	○	-	-	
	488	G-17	-	4761	II	深鉢	底部	ナデ	ナデ	褐色	褐色	○	○	-	-	
	489	I-17	II b	12032	II	深鉢	底部	ナデ	ナデ	灰褐色	褐色	○	○	-	-	
	490	F-15	II b	15057	II	深鉢	底部	ナデ	ナデ	褐色	灰褐色	○	○	-	-	
	491	L-36	II b	530	II	深鉢	底部	ナデ	ナデ	褐色	灰褐色	○	○	-	-	
	492	H-17	II c	12579	II	深鉢	底部	ケズリ後 ミガキ	ケズリ	灰褐色	黑色	○	○	-	-	
80	493	F-15	II b	17014	繩文後期	深鉢	底部	指印压痕	ナデ	灰褐色	赤褐色	○	○	○	-	底部網代層
	494	I-33	II b	3845	繩文後期	深鉢	底部	剥落	ナデ	灰黃褐色	灰褐色	○	○	-	-	○ 横石、底層木質層
	495	G-21	II b	15448	繩文後期	深鉢	底部	ナデ	ナデ	灰褐色	褐色	○	○	-	-	底部木質層
	496	F-20	II b	15026	繩文後期	深鉢	底部	ミガキ	ナデ	褐色	黑褐色	○	○	-	-	底部木質層
	497	G-20	II b	1837	繩文後期	深鉢	底部	ナデ	ナデ	灰褐色	褐色	○	○	-	-	底部木質層
	498	F-15	II b	-	繩文後期	深鉢	底部	ナデ	ナデ	褐色	褐色	○	○	-	-	底層相變層 (輪の輪?)
	499	G-19	II b	15148	繩文後期	深鉢	底部	ナデ	ナデ	褐色	暗褐色	○	○	-	-	底部木質層
	500	L-36	II b	529	繩文後期	深鉢	底部	ナデ後 ミガキ	ナデ	褐色	灰褐色	○	○	-	-	
	501	F-19	II b	144	繩文後期	深鉢	底部	ミガキ	ナデ	褐色	黑褐色	○	○	-	-	
81	502	H-21	II b	4715	繩文後期	深鉢	底部	ミガキ、ナデ 指印压痕	ナデ	褐色	暗褐色	○	○	-	-	○ 横石
	503	H-32	II b	4568	繩文後期	深鉢	底部	ナデ後 ミガキ	ナデ	明黄褐色	暗褐色	○	○	○	-	
	504	H-16	II b	10324	繩文後期	浅鉢	底部	ミガキ	ナデ	黑褐色	灰褐色	○	○	-	-	
	505	H-21	II b	16787-16789	繩文後期	深鉢	底部	ミガキ後 ナデ	ミガキ後 ナデ	明赤褐色	黑褐色	○	○	-	-	
	506	F-14	II b	13121	繩文後期	深鉢	底部	ミガキ	ナデ	褐色	褐色	○	○	-	-	
	507	M-37	II b	997	繩文後期	深鉢	底部	ミガキ	ミガキ	褐色	褐色	○	○	-	-	
	508	H-16	II b	10009	繩文後期	深鉢	底部	ナデ	ミガキ	褐色	褐色	○	○	-	-	
	509	J-34	II b	1436	繩文後期	深鉢	底部	ナデ後 ミガキ	ナデ	灰褐色	褐色	○	○	-	-	
	510	I-37	II b	3486	繩文後期	深鉢	底部	ミガキ	ミガキ	灰褐色	褐色	○	○	-	-	○ 横石、指印压痕
82	511	H-30	II b	18026	繩文後期	深鉢	底部	ミガキ	ミガキ	黑褐色	褐色	○	○	-	-	
	512	F-14	II b	13182-13183	繩文後期	深鉢	肩部～底部	ナデ	ナデ	灰褐色	灰褐色	○	○	-	-	
	513	F-15	II b	15057-15058	繩文後期	深鉢	底部	ナデ	ナデ	褐色	褐色	○	○	-	-	
	514	F-16	II b	15273	繩文後期	深鉢	底部	ナデ	ナデ	灰褐色	暗褐色	○	○	-	-	
	515	I-33	II b	4471	繩文後期	深鉢	底部	ナデ	ナデ	浅黃褐色	褐色	○	○	-	-	○ 横石、表面揮付着
	516	H-19	II b	11498	繩文後期	深鉢	底部	ナデ	ナデ	明褐色	褐色	○	○	-	-	
	517	J-34	II b	1749	繩文後期	深鉢	底部	ナデ	ナデ	明黃褐色	明黃褐色	○	○	-	-	
	518	J-35	II b	1554	繩文後期	深鉢	底部	ナデ	ナデ	灰褐色	黃褐色	○	○	-	-	

第14表 繩文時代後期・晚期土器観察表(10)

項目 番号	測定 番号	出土 地點	測定 部位	測定 番号	分類	器種	部位	器形調整		色 調		施 土				備考
								外面	内面	外面	内面	石英	長石	角閃	金雲母	
	519	F-21	II b	15000	繩文後期	深鉢	底部	ミガキ	ミガキ	褐色	褐褐色	○	○	○	-	-
	520	F-16	II b	17137	繩文後期	深鉢	底部	ナデ	ナデ	黃褐色	黑褐色	○	○	-	○	内面保付着
	521	H-21	II b	1968	繩文後期	深鉢	底部	ナデ 削落	ナデ 削落	淡褐色	褐色	○	○	○	-	-
	522	I-35	II b	4136	繩文後期	深鉢	底部	ケズリ	ミガキ	にぶい 褐色	褐褐色	○	○	-	-	-
	523	I-33	II b	3598	縄文後期	深鉢	底部	ケズリ	ナデ	明黄褐色	褐灰色	○	○	-	○	縄石
	524	M-33	II c	1681	II	深鉢	底部	ケズリ	-	暗赤褐色	黑色	○	○	-	-	内面保付着
	525	G-14	II b	6690	II	深鉢	底部	ナデ	ナデ	にぶい 褐色	褐褐色	○	○	-	-	-
	526	I-23	II b	2331	II	深鉢	底部	ナデ	ナデ	黃褐色	黃褐色	○	○	-	-	-
	527	F-15	II b	16669	II	深鉢	底部	ミガキ	ナデ	明褐色	灰黃褐色	○	○	-	-	-
	528	G-16	II c	10203	II	深鉢	底部	ミガキ	ミガキ ケズリ 後 ミガキ	褐色	にぶい 黃褐色	○	○	-	-	-
80	529	F-G-20	II b	1413	II	深鉢	底部	ナデ	ナデ	褐色	灰褐色	○	○	○	-	-
	530	G-14	II b	7866	繩文後期	深鉢	底部	ケズリ後 ミガキ	ミガキ	褐色	黑色	○	○	-	-	-
	531	H-16	II b	10669	繩文後期	深鉢	底部	ミガキ	ミガキ	にぶい 褐色	黑褐色	○	○	-	-	-
	532	F-14	II b	15986	繩文後期	深鉢	底部	剥落	ナデ	明黃褐色	黑色	○	○	-	-	-
	533	F-14	II b	13723	繩文後期	深鉢	底部	貝粉垂痕	ナデ	灰褐色	灰黃褐色	○	○	-	-	-
	534	F-15	II b	17865	繩文後期	深鉢	底部	ナデ	ナデ	褐色	灰褐色	○	○	-	-	-
	535	H-19	-	11831	繩文後期	深鉢	底部	ナデ	ナデ	革褐色	暗褐色	○	○	-	-	-
	536	G-22	II b	14373	繩文後期	深鉢	底部	ミガキナデ	ミガキ	褐色	黑褐色	○	○	-	-	-
	537	J-31	II b	18315- 18316	繩文後期	深鉢	底部	ナデ ミガキ	ミガキ	明黃褐色	灰褐色	○	○	-	○	縄石
	538	F-15	II b	15500	繩文後期	深鉢	底部	ナデ	ナデ	灰褐色	黑褐色	○	○	-	-	内面保付着
	539	F-16	II b	17224	繩文後期	深鉢	底部	ナデ	ナデ	灰褐色	黑褐色	○	○	-	-	内面保付着
	540	I-25	II b	10530	繩文後期	深鉢	底部	ケズリ後 ナデ	ナデ	にぶい 黃褐色	灰黃褐色	○	○	-	○	縄石
	541	G-25	II b	14613	繩文後期	深鉢	底部	ナデ	ナデ	暗褐色	黑褐色	○	○	-	-	-
	912	H-17	II b	12090	II	深鉢	口縁部	ミガキ	ナデ	褐色	にぶい 褐色	○	○	-	-	-
	913	H-21	II b	14048	II	深鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	褐色	にぶい 褐色	○	○	-	-	-
	914	H-26	II b	9741	II	深鉢	口縁部	ケズリ後 ミガキ	ミガキ	褐色	黑褐色	○	○	-	○	縄石、沈縄文
	915	F-18	II b	12943	II	深鉢	口縁部	ミガキ ナデ後 ミガキ	ナデ後 ミガキ	にぶい 褐色	にぶい 黒褐色	○	○	-	-	-
	916	F-20	II b	6771	II	深鉢	口縁部	ミガキ ナデ後 ミガキ	ナデ	黑褐色	黑褐色	○	○	-	○	縄石、沈縄文
	917	I-20	II b	2981	II	深鉢	口縁部	ナデ	ナデ	暗褐色	暗褐色	○	○	-	○	縄石、沈縄文
	918	F-16	II c	17806	II	深鉢	口縁部	ケズリ後 ナデ	ケズリ後 ナデ	にぶい 褐色	褐色	○	○	-	○	縄石、沈縄文
	919	3T	II b	87	II	深鉢	口縁部	ミガキ ナデ後 ミガキ	ミガキ	黑褐色	褐色	○	○	-	○	縄石、沈縄文
	920	3T	II b	82	II	深鉢	口縁部	ミガキ ナデ後 ミガキ	ナデ後 ミガキ	黑褐色	黑褐色	○	○	-	-	-
	921	I-17	II b	11936	II	深鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	黑褐色	黑褐色	○	○	-	-	-
	922	F-22	II b	18064	II	浅鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	黑褐色	黑褐色	○	○	-	-	-
	923	F-20	II c	15813	IV	浅鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	褐色	暗褐色	○	○	-	-	-
	924	J-23	II c	-	IV	浅鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	暗茶褐色	暗茶褐色	○	○	-	○	縄石
	925	G-22	II b	2869	繩文後期	深鉢	口縁部	ナデ	ナデ	灰褐色	黃褐色	○	○	-	-	-
	926	G-20	II b	14411	繩文後期	浅鉢	底部	ナデ後 ミガキ	ミガキ	灰黃褐色	黑褐色	○	○	-	-	-
	927	I-32	II b	4552	V	深鉢	口縁部	ケズリ	ナデ	明黃褐色	黃褐色	○	○	-	-	-
	928	I-33	II b	4487	V	深鉢	口縁部	ケズリ後 ミガキ	ケズリ	黑褐色	にぶい 黃褐色	○	○	-	-	刮目突蒂文
	929	H-32	II b	4567	V	深鉢	口縁部	ナデ	ミガキ	赤褐色	黑色	○	○	-	-	刮目突蒂文
	930	I-34	II b	1237	V	深鉢	口縁部	ケズリ後 ミガキ	ケズリ後 ミガキ	黑褐色	にぶい 黃褐色	○	○	-	-	刮目突蒂文
	931	H-31	II b	18040	V	深鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	にぶい 褐色	にぶい 黃褐色	○	○	-	-	刮目突蒂文
	932	I-35	II b	4082	V	深鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	褐色	褐色	○	○	-	-	刮目突蒂文
	933	I-32	II b	3821	V	深鉢	口縁部	ケズリ後 ミガキ	ナデ	黑褐色	黑褐色	○	○	-	-	刮目突蒂文 祖國土著に類似 刮目突蒂文
	934	K-35	II b	913	V	深鉢	口縁部	ナデ	ナデ	にぶい 褐色	にぶい 黃褐色	○	○	-	-	刮目突蒂文
	935	J-34	II b	1388	V	深鉢	口縁部	ナデ	ナデ	黃褐色	黃褐色	○	○	-	-	刮目突蒂文
	936	J-34	II b	1430	V	深鉢	口縁部	ナデ	ナデ	褐色	明黃褐色	○	○	-	-	刮目突蒂文
	937	J-35	II b	1319	V	深鉢	口縁部	ナデ	ナデ	褐色	明黃褐色	○	○	-	-	刮目突蒂文
	938	J-35	II b	1644	V	深鉢	口縁部	ミガキ	ナデ	褐色	明黃褐色	○	○	-	-	刮目突蒂文

第15表 繩文時代後期・晚期土器觀察表(11)

項目 番号	測定 番号	出土 地點	遺構 層位	測定 番号	分類	器種	部位	表面調整		色調		胎土 石英 長石 角閃 金雲母				備考		
								外面		内面		外面		内面				
								外側	内側	外側	内側	外側	内側	外側	内側	外側		
109	939	I-28	IIb	18253	V	深鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	褐色	にぶい 黄褐色	○	○	△	-	-	刮目突帯文	
	940	F-19	IIb	14429	V	深鉢	口縁部	ミガキ	ナデ	灰褐色	褐色	○	○	-	-	-	刮目突帯文	
	941	H-32	IIb	4575	V	深鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	褐灰色	褐灰色	○	○	-	-	-	刮目突帯文	
	942	H-31	IIb	18036	V	深鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	褐色	にぶい 褐色	○	○	-	-	-	刮目突帯文	
	943	J-35	IIb	1530	V	深鉢	口縁部	ケズリ	ケズリ	褐色	黃褐色	○	○	-	-	-	刮目突帯文	
	944	K-35	IIb	827	V	深鉢	口縁部	ナデ	ナデ	褐色	褐色	○	○	-	-	-	刮目突帯文	
	945	H-28	IIb	17992	V	深鉢	口縁部	ナデ	ナデ	褐色	明黃褐色	○	○	-	-	-	刮目突帯文	
	946	J-35	IIb	2705	V	深鉢	口縁部	ナデ	ナデ	褐色	明黃褐色	○	○	-	-	-	刮目突帯文	
	947	H-24	IIb	9415	V	深鉢	口縁部	ナデ	ナデ	灰黃褐色	褐色	○	○	-	-	-	刮目突帯文	
	948	H-31	IIb	18039	V	深鉢	口縁部	ナデ	ナデ	にぶい 黃褐色	褐色	○	○	-	-	-	刮目突帯文	
110	949	J-36	IIb	1498	V	深鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	褐色	褐色	○	○	-	-	-	刮目突帯文	
	950	I-33	IIb	3855	V	深鉢	口縁部	ナデ	ナデ	明黃褐色	黃褐色	○	○	-	-	-	刮目突帯文	
	951	K-33	IIb	3028	V	深鉢	口縁部	ナデ	ナデ	明黃褐色	黃褐色	○	○	-	-	○	擦石 刮目突帯文	
	952	H-32	IIb	3786	V	深鉢	口縁部	ナデ	ナデ	にぶい 褐色	褐色	○	○	-	-	-	刮目突帯文	
	953	K-34	IIb	806	V	深鉢	口縁部 ～胸部	ナデ	ナデ	褐色	明褐色	○	○	-	-	-	刮目突帯文	
	954	F-21	IIb	-	V	深鉢	口縁部	ケズリ	ミガキ	ナデ	褐色	○	○	-	-	-	刮目突帯文	
	955	F-19	IIb	12416	V	深鉢	口縁部	ナデ	ナデ	褐色	茶褐色	○	○	-	-	-	刮目突帯文 外面探付着	
	956	G-19	IIb	15697- 15698	V	深鉢	口縁部	ケズリ	ミガキ	ナデ	褐色	にぶい 褐色	○	○	-	-	-	刮目突帯文
	957	L-37	IIb	545	V	深鉢	口縁部 ～胸部	ケズリ	ミガキ	ナデ	灰黃褐色	にぶい 黃褐色	○	○	-	○	-	刮目突帯文
	958	H-22	IIb	4723	V	深鉢	口縁部	ナデ	ミガキ	ケズリ	ナデ	灰黃褐色	茶褐色	○	-	-	-	刮目突帯文
111	959	G-21	IIb	-	V	深鉢	口縁部	ナデ	ケズリ	褐色	茶褐色	○	○	-	-	-	刮目突帯文	
	960	I-33	IIb	4961	V	深鉢	口縁部	ナデ	ナデ	にぶい 褐色	褐色	○	○	-	-	-	刮目突帯文	
	961	F-20	IIb	14451	V	深鉢	口縁部	ナデ	ナデ	灰褐色	灰褐色	○	○	-	-	-	刮目突帯文	
	962	G-16	IIb	7480	V	深鉢	口縁部	ナデ	ナデ	茶褐色	にぶい 褐色	○	○	-	-	-	刮目突帯文 波状口縁	
	963	I-22	IIb	2391	V	深鉢	口縁部	ミガキ	ナデ	褐色	褐色	○	○	-	-	-	刮目突帯文	
	964	H-22	IIb	1949	V	深鉢	口縁部	ミガキ	ナデ	茶褐色	茶褐色	○	○	-	-	-	刮目突帯文	
	965	H-32	IIb	3825	V	深鉢	口縁部	ナデ	ミガキ	にぶい 褐色	茶褐色	○	○	-	-	-	刮目突帯文	
	966	I-34	IIb	4951	V	深鉢	口縁部	ナデ	ケズリ	褐色	茶褐色	○	○	-	-	-	刮目突帯文	
	967	G-22	IIb	14381	V	深鉢	口縁部	ナデ	ナデ	にぶい 褐色	褐色	○	○	-	-	-	刮目突帯文	
	968	F-20	IIb	-	V	深鉢	口縁部	ケズリ	ケズリ	茶褐色	茶褐色	○	○	-	-	-	刮目突帯文	
112	969	G-16	IIb	7505	V	深鉢	口縁部	ナデ	ナデ	にぶい 褐色	明褐色	○	○	-	-	-	刮目突帯文	
	970	I-33	IIb	4516- 4517	V	深鉢	口縁部	ナデ	ナデ	茶褐色	茶褐色	○	○	-	-	-	刮目突帯文	
	971	F-16	IIb	16216	V	深鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	にぶい 褐色	茶褐色	○	○	-	-	-	刮目突帯文	
	972	J-34	IIb	2797	V	深鉢	口縁部 ～胸部	ミガキ	ミガキ	茶褐色	にぶい 茶褐色	○	○	-	-	-	刮目突帯文	
	973	J-34	IIb	1042	V	深鉢	口縁部 ～胸部	ミガキ	ミガキ	にぶい 茶褐色	茶褐色	○	○	-	-	-	刮目突帯文	
	974	G-15	IIb	4974	V	深鉢	口縁部	ミガキ	ナデ	茶褐色	茶褐色	○	○	-	-	-	刮目突帯文	
	975	F-23	IIb	-	V	深鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	にぶい 茶褐色	茶褐色	○	○	-	-	○	擦石 刮目突帯文	
	976	F-20	IIb	1778	V	深鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	茶褐色	茶褐色	○	○	-	-	-	刮目突帯文	
	977	G-19	IIb	-	V	深鉢	口縁部	ナデ	ナデ	にぶい 茶褐色	茶褐色	○	○	-	-	-	刮目突帯文	
	978	I-33	IIb	4475	V	深鉢	口縁部	ナデ	ナデ	にぶい 茶褐色	茶褐色	○	○	-	-	-	刮目突帯文	
113	979	I-33	IIb	4519	V	深鉢	口縁部	ナデ	ナデ	にぶい 茶褐色	茶褐色	○	○	-	-	-	刮目突帯文	
	980	H-32	IIb	3808	V	深鉢	口縁部	ナデ	ケズリ	褐色	明黃褐色	○	○	-	-	-	刮目突帯文	
	981	H-21	S15	-	V	深鉢	胸部	ナデ	ナデ	茶褐色	茶褐色	○	○	-	-	-	刮目突帯文	
	982	F-19	IIb	15378	V	深鉢	口縁部	ナデ	ナデ	にぶい 褐色	褐色	○	○	-	-	-	刮目突帯文 外面探付着	
	983	G-20	I	-	V	深鉢	口縁部	ナデ	ナデ	茶褐色	茶褐色	○	○	-	-	-	刮目突帯文 外面探付着	

第16表 繩文時代後期・晚期土器觀察表(12)

探査 番号	測定 番号	出土 地點	測定 部位	測定 番号	分類	器種	部位	表面調整		色 調		施 土				備考
								外面	内面	外面	内面	石英	長石	角閃	金雲母	
	984	J-34	II b	1607	V	深鉢	口縁部 ～脚部	ミガキ	ナデ	黒褐色	暗灰黄色	○	○	-	-	剖目突帯文
	985	H-32, I-33	II b	3792, 4463, 4542	V	深鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	黒褐色	明黃褐色	○	○	-	-	剖目突帯文
	986	G-21	S16	17819	V	深鉢	口縁部	ナデ	ナデ	黒褐色	暗褐色	○	○	○	-	剖目突帯文、 外腹深付着
	987	I-35	II b	1245	V	深鉢	口縁部	ケズリ後 ナデ	ケズリ	黑色	褐色	○	○	-	-	剖目突帯文
	988	F-21	II b	12963	V	深鉢	口縁部	ナデ	ナデ	にぶい 褐色	にぶい 褐色	○	○	-	-	剖目突帯文
111	989	F-20	II b	-	V	深鉢	口縁部	ケズリ後 ミガキ	ナデ	褐色	にぶい 褐色	○	○	-	-	剖目突帯文
	990	F-20	II b	15013	V	深鉢	口縁部	ナデ	ナデ	黑色	黃褐色	○	○	-	-	剖目突帯文、 外腹深付着
	991	F-19	II b	-	V	深鉢	口縁部	ナデ	ナデ	黒褐色	黑色	○	○	-	-	剖目突帯文
	992	F-23	II b	-	V	深鉢	口縁部	ナデ	ナデ	橙色	黃褐色	○	○	-	-	輝石、 剖目突帯文
	993	H-23	II b	17546	V	深鉢	口縁部	ナデ後 ミガキ	ナデ後 ミガキ	黒褐色	にぶい 褐色	○	○	-	-	剖目突帯文
	994	I-33	II b	3887	V	深鉢	口縁部	ナデ後 ケズリ	ナデ	褐色	にぶい 褐色	○	○	-	-	剖目突帯文
	995	G-19	II b	-	V	深鉢	口縁部	ナデ	ナデ	褐色	灰色	○	○	-	-	剖目突帯文
	996	I-35	II b	1276	V	深鉢	口縁部	ナデ	ナデ	明赤褐色	にぶい 褐色	○	○	-	-	剖目突帯文
	997	I-J -33	II b	4597	V	深鉢	口縁部 ～脚部	ミガキ	ナデ	明褐色	橙色	○	○	-	-	剖目突帯文
	998	J-35	II b	1544	V	深鉢	口縁部	ケズリ	ナデ	褐色	明赤褐色	○	○	-	-	剖目突帯文
	999	I-35	II b	1559	V	深鉢	口縁部	ナデ	ナデ	にぶい 黒褐色	にぶい 褐色	○	○	-	-	剖目突帯文
112	1000	I-35	II b	1259	V	深鉢	口縁部	ケズリ後 ナデ	ケズリ	黒褐色	にぶい 褐色	○	○	○	-	剖目突帯文
	1001	G-19	II b	-	V	深鉢	口縁部	ナデ	ナデ	褐色	淡褐色	○	○	-	-	剖目突帯文
	1002	I-35	II b	4438	V	深鉢	口縁部	ナデ	ナデ	にぶい 褐色	にぶい 褐色	○	○	-	-	剖目突帯文
	1003	I-36	II b	4407	V	深鉢	口縁部	ナデ	ナデ	黑色	にぶい 褐色	○	○	-	○	剖目突帯文
	1004	H-28	II b	17974	V	深鉢	口縁部	ナデ	ナデ	橙色	褐色	○	○	-	-	剖目突帯文
	1005	J-34	II b	1457	V	深鉢	口縁部	ナデ	ナデ	褐色	淡褐色	○	○	-	-	剖目突帯文
	1006	F-19	II c	15671	V	深鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	灰褐色	にぶい 褐色	○	○	-	-	剖目突帯文
	1007	G-21	II b	8558	V	深鉢	口縁部	ナデ	ナデ	橙色	にぶい 褐色	○	○	-	-	剖目突帯文
	1008	H-28	II b	17972	V	深鉢	口縁部	ミガキナデ	ナデ	明赤褐色	褐色	○	○	-	-	剖目突帯文
	1009	I-35	II b	1256	V	深鉢	口縁部	ナデ	ナデ	黒褐色	にぶい 褐色	○	○	-	-	剖目突帯文
113	1010	H-19	II b	12442	V	深鉢	口縁部	ナデ	ナデ	淡い褐色	淡褐色	○	○	-	-	剖目突帯文
	1011	I-34	II b	3577	V	深鉢	口縁部	ナデ	ナデ	橙色	にぶい 褐色	○	○	-	-	剖目突帯文
	1012	I-36	II b	4147	V	深鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	黒褐色	にぶい 褐色	○	○	-	-	剖目突帯文、 孔列文
	1013	H-23	II b	1955	V	深鉢	口縁部	ナデ	ナデ	褐色	淡褐色	○	○	-	-	剖目突帯文
	1014	I-35	II b	4156	V	深鉢	口縁部	ケズリ後 ミガキ	ミガキ	黒褐色	にぶい 褐色	○	○	-	-	剖目突帯文、波状口縁
	1015	H-22	S2a2	-	V	深鉢	口縁部	ミガキ	ケズリ/ナデ	茶褐色	灰褐色	○	○	-	-	剖目突帯文、 波状口縁
	1016	J-38	VI	3613	VI	深鉢	口縁部	貝殻柔痕	ケズリ後 ナデ	黑色	褐色	○	○	○	-	-
	1017	I-25	II b	9745	VI	深鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	橙色	褐色	○	○	-	-	-
	1018	H-30	II b	18091	VI	深鉢	脚部	貝殻柔痕	貝殻柔痕	明赤褐色	にぶい 褐色	○	○	-	-	-
	1019	H-23	II b	14761	VI	深鉢	底部	剥落	ナデ	橙色	にぶい 褐色	○	○	-	-	底部粗緻度
114	1020	G-19	II b	-	VI	深鉢	底部	剥落	ナデ	にぶい 黒褐色	にぶい 褐色	○	○	-	-	底部粗緻度
	1021	G-15	II b	11477	VI	深鉢	口縁部 ～脚部	ナデ	ミガキ	にぶい 黒褐色	にぶい 褐色	○	○	-	-	沈線文、波状口縁、 口唇部突起
	1022	J-34	II b	1396	VI	深鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	黒褐色	にぶい 褐色	○	○	-	-	沈線文、波状口縁、 口唇部突起
	1023	J-34	II b	1433- 1735	VI	深鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	にぶい 黒褐色	明黃褐色	○	○	-	-	沈線文、波状口縁、 口唇部突起
	1024	G-23	II b	14361	VI	深鉢	口縁部	ミガキ	ナデ	浅黃褐色	灰白色	○	○	-	-	沈線文、波状口縁、 口唇部突起
	1025	I-35	II b	4092	VI	深鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	褐色	褐灰色	○	○	-	-	沈線文、波状口縁、 口唇部突起
	1026	I-33	II b	3593	VI	深鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	褐色	褐色	○	○	-	-	沈線文、波状口縁
	1027	47	II b	41	VI	深鉢	口縁部	ミガキ	ナデ	にぶい 褐色	にぶい 褐色	○	○	-	○	沈線文
	1028	F-35	II b	15182	VI	深鉢	口縁部	ナデ	ナデ	橙色	にぶい 黃褐色	○	○	-	-	沈線文

第17表 繩文時代後期・晚期土器観察表(13)

探査番号	出土地名	遺構	層位	層上番号	分類	器種	部位	器形調整		色 調		施 土				備考	
								外面	内面	外面	内面	石英	長石	角閃	金剛石		
	1029	H-31	I	-	VII	深鉢	口縁部	三ガキ	ナデ	黒褐色	褐色	○	○	-	-	ドーナツ状の浮文	
	1030	J-35	IIb	1756	VII	深鉢	口縁部	三ガキ	ミガキ	にぶい 褐色	にぶい 褐色	○	○	-	○	櫛石、波線文、 ドーナツ状の浮文	
	1031	J-34	IIb	1738	VII	深鉢	口縁部	三ガキ	ナデ	にぶい 褐色	にぶい 褐色	○	○	-	-	ドーナツ状の浮文	
	1032	F-20	IIb	15366	VII	深鉢	脚部	三ガキ	ミガキ	明赤褐色	明赤褐色	○	○	-	-	波線文、 ドーナツ状の浮文	
	1033	J-34	IIb	1610	VII	深鉢	脚部	三ガキ	ミガキ	黒褐色	にぶい 褐色	○	○	-	-	ドーナツ状の浮文	
114	1034	F-20	IIb	14435	VII	深鉢	脚部	三ガキ	ミガキ	明黄褐色	明黄褐色	○	○	-	-		
	1035	I-35	IIb	4130	VII	深鉢	脚部	三ガキ	ミガキ	暗灰色	褐色	○	○	-	-		
	1036	I-35	IIb	4134	VII	深鉢	脚部	三ガキ	ミガキ	黑色	褐色	○	○	-	-		
	1037	J-34	IIb	1446	VII	深鉢	口縁部	三ガキ	ミガキ	にぶい 褐色	明灰色	○	○	-	-	波線文	
	1038	J-34	IIb	2656	VII	深鉢	口縁部	三ガキ	ミガキ	明赤褐色	明赤褐色	○	○	-	-	波線文	
	1039	G-20	IIb	-	VII	深鉢	口縁部	ナデ	ナデ	茶褐色	茶褐色	○	○	-	-		
	1040	J-34	IIb	1460	VII	深鉢	口縁部	三ガキ	ミガキ	黑色	褐色	○	○	-	-		
	1041	J-34	IIb	1622	VII	深鉢	口縁部	三ガキ	ミガキ	にぶい 褐色	にぶい 褐色	○	○	-	-	波線文	
	1042	J-34	IIb	4965	VII	深鉢	口縁部	三ガキ	ミガキ	褐色	明灰色	○	○	-	-		
	1043	I-35	IIb	2597	VII	深鉢	口縁部	三ガキ	ミガキ	暗灰色	にぶい 褐色	○	○	-	-	波線文	
	1044	I-33	IIb	4477	VII	深鉢	口縁部	三ガキ	ミガキ	暗灰色	暗灰色	○	○	-	-	波紋口縁、刮目突帯	
	1045	F-18	IIb	15329	VII	深鉢	口縁部	三ガキ	ミガキ	明黄褐色	にぶい 褐色	○	○	-	-		
	1046	J-33	IIb	3585	VII	深鉢	口縁部	ナデ	ナデ	深褐色	深褐色	○	○	-	-	波線文	
	1047	J-35	IIb	1763	VII	深鉢	口縁部	三ガキ	ナデ	にぶい 褐色	にぶい 褐色	○	○	-	-	波線文	
	1048	H-32	IIb	3812	VII	深鉢	口縁部	三ガキ	ミガキ	にぶい 褐色	にぶい 褐色	○	○	-	-	波線文	
	1049	I-35	IIb	4086	VII	深鉢	口縁部	三ガキ	ミガキ	にぶい 褐色	にぶい 褐色	○	○	-	-	波線文	
	1050	G-23	IIb	14355	VII	深鉢	口縁部	三ガキ	ミガキ	赤色	浅黃褐色	○	○	-	-	突帯文、波線文、 赤色顔料	
	1051	I-35	IIb	4196	VII	深鉢	口縁部	三ガキ	ミガキ	にぶい 褐色	淡黃褐色	○	○	-	-	突帯文、赤色顔料	
	1052	J-34	IIb	1623	VII	深鉢	脚部	三ガキ	ミガキ	褐色	明赤褐色	○	○	-	-	波線文	
	1053	J-36	IIb	521	VII	深鉢	口縁部～脚部	ミガキ	ミガキ	にぶい 褐色	にぶい 褐色	○	○	-	○	突帯文	
	1054	L-35	IIb	647	VII	深鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	明褐色	明褐色	○	○	-	-	突帯文	
	1055	L-37	IIb	290	VII	深鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	にぶい 褐色	にぶい 褐色	○	○	-	-	突帯文	
	1056	L-37	IIb	758	VII	深鉢	口縁部	ナデ	ナデ	褐色	褐色	○	○	-	-	突帯文	
	1057	I-33	IIb	3596	VII	深鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	明黄褐色	褐色	○	○	-	-	波紋口縁	
	1058	G-20	IIb	12952	VII	共生初頭	便	口縁部	三ガキ	ミガキ	深褐色	深褐色	○	○	-	-	波紋口縁
	1059	G-22	S2a3	-	VII	共生初頭	便	口縁部	ミガキ	ミガキ	茶褐色	茶褐色	○	○	-	-	波紋口縁
	1060	G-16	IIb	5179	VII	共生初頭	便	口縁部	ナデ	ナデ	褐色	褐色	○	○	-	-	波紋口縁
	1061	H-23	IIb	9784	VII	共生初頭	便	口縁部	ナデ	ナデ	明黄褐色	明黄褐色	○	○	-	-	波紋口縁
	1062	I-33	IIb	3597	VII	共生初頭	便	口縁部	ミガキ	ミガキ	にぶい 褐色	褐色	○	○	-	-	穿孔あり
	1063	J-34	IIb	1395-	VII	繩文後期末～ 共生初頭	便	脚部～ 脚部	ミガキ	ミガキ	赤色	明赤褐色	○	○	-	-	ドーナツ状の浮文、 赤色顔料
	1064	M-37	IIb	1001	VII	繩文後期末～ 共生初頭	便	脚部	ミガキ	ミガキ	橙色	橙色	○	○	-	-	波線文
	1065	L-M-37	IIb	631	VII	繩文後期末～ 共生初頭	便	脚部	ミガキ	ミガキ	にぶい 褐色	橙色	○	○	-	-	波線文
	1066	H-23	IIb	9406	VII	繩文後期末～ 共生初頭	便	脚部～ 脚部	ミガキ	ミガキ	にぶい 褐色	にぶい 褐色	○	○	-	-	波紋口縁
	1067	I-33	IIb	4498	VII	繩文後期末～ 共生初頭	便	口縁部	ミガキ	ミガキ	にぶい 褐色	にぶい 褐色	○	○	-	-	波線文
	1068	G-23	IIb	14364	VII	繩文後期末～ 共生初頭	便	脚部～ 脚部	ミガキ	ミガキ	にぶい 褐色	にぶい 褐色	○	○	-	-	突帯文、穿孔あり
	1069	G-23	IIb	14357	VII	繩文後期末～ 共生初頭	便	底部	ナデ	ナデ	橙色	灰褐色	○	○	-	-	波線文
	1070	F-16	IIb	17226	VII	繩文後期末～ 共生初頭	便	底部	ミガキ	ミガキ	深褐色	黑色	○	○	-	-	
	1071	I-32	IIb	380	VII	繩文後期末～ 共生初頭	高环	脚部	ミガキ	ミガキ	にぶい 褐色	にぶい 褐色	○	○	-	-	波線文、赤色顔料
	1072	I-34- J-35	IIb	1045- 1755- 4238	VII	繩文後期末～ 共生初頭	高环	脚部	ミガキ	ナデ	にぶい 褐色	にぶい 褐色	○	○	○	-	波線文
	1073	K-34	IIb	2717	VII	繩文後期末～ 共生初頭	高环	脚部	ナデ	ナデ	橙色	橙色	○	○	+	-	

第18表 繩文時代後期土製品観察表(1)

測定番号	測定番号	出土地点	遺構位置	取上面	器種	器皿調整		色調		最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	胎土					備考
						外面	内面	外面	内面				石英	長石	角閃	金雲母	他	
17	27	G-16	SII	-	円盤形土製加工品	ミガキ	ナデ	にぶい 褐色	にぶい 黄褐色	3.4	3.2	1.2	○	○	-	-	○	輝石
	28	G-16	SII	-	円盤形土製加工品	ミガキ	ナデ	褐色	黒色	3.4	3.3	0.9	○	○	-	-	-	
	29	G-16	SII	10599	円盤形土製加工品	ミガキ	ナデ	明黃褐色	にぶい 黄褐色	5.1	5.9	1.9	○	○	-	-	○	輝石
	30	G-16	SII	11574	円盤形土製加工品	ミガキ	ナデ	にぶい 黄褐色	にぶい 黄褐色	5.0	5.0	1.1	○	○	-	-	○	輝石
	31	G-16	SII	12491	円盤形土製加工品	ミガキ	ナデ	褐色	褐灰色	3.2	3.1	1.0	○	○	-	-	○	輝石
	32	G-16	SII	11370	円盤形土製加工品	ミガキ	ナデ	褐色	黒褐色	3.4	3.2	1.0	○	○	-	-	○	輝石
21	66	G-22	SII	-	円盤形土製加工品	ミガキ	ナデ	褐色	褐色	5.5	4.9	0.9	○	○	-	-	○	輝石
40	134	F-14	SQ9	909-8	燒成粘土塊	指輪圧痕	-	淡黃褐色	-	9.5	9.0	5.6	○	○	-	-	-	
49	155	G-19	S6	-	土玉	ナデ	-	褐色	にぶい 褐色	1.8	2.1	1.9	○	○	-	-	○	輝石
	542	G-14	IIc	-	円盤形土製加工品	ケズリ	ナデ	褐灰色	灰黃褐色	7.5	7.7	0.8	○	○	-	-	○	輝石
	543	G-15	IIb	9563	円盤形土製加工品	ミガキ	ナデ	明赤褐色	にぶい 黄褐色	5.6	5.3	1.0	○	○	-	-	○	輝石
	544	E-15	IIb	16398	円盤形土製加工品	ミガキ	ナデ	黒褐色	褐色	5.5	4.0	1.1	○	○	-	-	○	輝石
	545	H-16	IIb	11227	円盤形土製加工品	ミガキ	ミガキ	褐色	黒褐色	5.4	5.4	1.5	○	○	-	-	○	東雲母、沈輝文
	546	F-16	IIb	17598	円盤形土製加工品	ミガキ	ミガキ	にぶい 褐色	褐灰色	5.2	5.5	1.2	○	○	-	○	-	
	547	I-23	IIb	15805	円盤形土製加工品	ミガキ	ミガキ	赤褐色	褐色	5.1	4.2	1.1	○	○	-	○	-	
	548	I-29	IIb	18248	円盤形土製加工品	ミガキ	ナデ	灰褐色	にぶい 黄褐色	5.0	4.9	0.9	○	○	-	○	○	輝石
	549	H-20	IIb	17746	円盤形土製加工品	ミガキ	ナデ	黒褐色	黒褐色	4.7	4.5	1.0	○	○	-	-	○	輝石
	550	H-27	IIb	8866	円盤形土製加工品	ミガキ	ナデ	黒褐色	褐色	4.7	3.6	1.1	○	○	-	-	○	輝石
	551	F-16	IIb	16836	円盤形土製加工品	ミガキ	ミガキ	褐色	褐色	4.6	4.2	1.0	○	○	-	-	○	輝石
81	552	F-16	IIb	17602	円盤形土製加工品	ミガキ	ナデ	黒色	黒褐色	4.4	3.2	1.3	○	○	-	-	○	輝石
	553	F-16	IIb	15964	円盤形土製加工品	ミガキ	ナデ	にぶい 褐色	褐褐色	4.4	5.4	1.1	○	○	-	-	○	輝石
	554	H-16	IIb	10693	円盤形土製加工品	ミガキ	ミガキ	にぶい 褐色	灰褐色	4.4	4.2	1.2	○	○	-	-	-	
	555	H-15	IIb	10486	円盤形土製加工品	ミガキ	ミガキ	褐色	黒褐色	4.3	4.1	1.1	○	○	-	-	○	輝石
	556	23T	-	-	円盤形土製加工品	ミガキ	ナデ	明赤褐色	にぶい 黄褐色	4.3	4.5	1.1	○	○	-	-	-	
	557	G-16	IIb	-	円盤形土製加工品	ミガキ	ミガキ	褐色	灰褐色	4.1	3.7	1.0	○	○	-	○	-	
	558	G-20	IIb	-	円盤形土製加工品	ミガキ	ナデ	にぶい 褐色	灰褐色	4.0	3.8	1.1	○	○	-	-	○	輝石
	559	I-23	IIb	15784	円盤形土製加工品	ミガキ	ナデ	灰褐色	褐灰色	4.0	3.5	1.0	○	○	-	-	○	輝石
	560	F-22	IIb	14387	円盤形土製加工品	ミガキ	ナデ	にぶい 褐色	黒褐色	4.0	3.6	1.1	○	○	○	-	-	
	561	G-16	IIb	-	円盤形土製加工品	ミガキ	ナデ	黒褐色	褐灰色	3.9	3.8	1.3	○	○	-	-	○	輝石
	562	F-19	IIc	17427	円盤形土製加工品	ミガキ	ナデ	赤褐色	明褐色	3.9	4.1	0.8	○	○	-	-	○	輝石

第19表 繩文時代後期土製品観察表(2)

測量番号	測量番号	出土地点	遺構位置	取上面番号	器種	器皿調整		色調		最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	胎土					備考
						外面	内面	外面	内面				石英	長石	角閃	金雲母	他	
	563	G-21	II b	15445	円盤形土製加工品	ミガキ	ナデ	明黄褐色	褐灰色	3.9	3.9	1.5	○	○	-	○	-	
	564	G-22	S2a3	-	円盤形土製加工品	ミガキ	ナデ	黒褐色	灰黃褐色	3.9	3.9	0.8	○	○	-	-	-	
	565	G-21	II b	14073	円盤形土製加工品	ミガキ	ナデ	灰黃褐色	黑褐色	3.9	4.2	0.9	○	○	-	-	-	
	566	F-16	II b	16259	円盤形土製加工品	ミガキ	ナデ	にぶい赤褐色	黑褐色	3.7	3.6	1.0	○	○	-	-	○	輝石
	567	F-15	II b	15228	円盤形土製加工品	ナデ	ナデ	褐色	褐色	3.7	3.5	0.8	○	○	-	-	○	輝石
	568	H-17	II b	5538	円盤形土製加工品	ミガキ	ナデ	にぶい黃褐色	灰黃褐色	3.6	3.2	1.3	○	○	-	-	○	輝石
	569	H-17	II b	17894	円盤形土製加工品	ミガキ	ナデ	灰褐色	褐灰色	3.6	3.5	0.9	○	○	-	-	-	
B1	570	E-15	II b	16994	円盤形土製加工品	ナデ	ナデ	にぶい黃褐色	にぶい褐色	3.6	3.1	1.4	○	○	-	-	-	
	571	G-15	II b	7183	円盤形土製加工品	ミガキ	ナデ	暗褐色	にぶい黃褐色	3.5	3.7	1.0	○	○	-	-	-	
	572	H-23	II b	14828	円盤形土製加工品	ミガキ	ナデ	にぶい赤褐色	灰褐色	3.4	3.6	0.9	○	○	○	-	-	
	573	F-16	II b	17195	円盤形土製加工品	ミガキ	ナデ	にぶい黃褐色	褐灰色	3.4	3.2	1.2	○	○	-	-	○	輝石
	574	G-16	II b	10637	円盤形土製加工品	ミガキ	ナデ	灰黃褐色	褐灰色	3.3	3.3	1.0	○	○	-	○	-	
	575	H-17	II b	11607	円盤形土製加工品	ミガキ	ナデ	にぶい黄褐色	黃灰色	3.5	3.5	1.0	○	○	-	-	○	輝石
	576	G-16	II b	6632	円盤形土製加工品	ナデ	ナデ	にぶい褐色	にぶい黃褐色	3.5	3.7	1.0	○	○	-	-	○	輝石
	577	H-21	II b	-	円盤形土製加工品	ナデ	ナデ	にぶい褐色	褐色	3.5	3.5	1.3	○	○	-	-	-	
	578	H-17	II b	11878	円盤形土製加工品	ミガキ	ナデ	褐色	にぶい褐色	3.2	3.3	1.0	○	○	○	×	-	
	579	H-28	II b	-	円盤形土製加工品	ミガキ	ナデ	にぶい褐色	褐灰色	3.2	2.7	1.1	○	○	-	-	○	輝石
	580	G-21	II b	-	円盤形土製加工品	ミガキ	ミガキ	黒褐色	褐灰色	3.2	3.2	0.8	○	○	-	○	-	
	581	H-17	II b	12293	円盤形土製加工品	ミガキ	ミガキ	にぶい黃褐色	黒色	2.9	2.9	1.3	○	○	-	-	○	輝石
B2	582	G-15	II b	-	円盤形土製加工品	ミガキ	ナデ	にぶい褐色	にぶい黃褐色	2.9	2.5	0.8	○	○	-	-	○	輝石
	583	F-20	II b	-	円盤形土製加工品	ナデ	ナデ	褐色	にぶい黃褐色	2.8	2.9	1.0	○	○	-	-	○	輝石
	584	F-20	II b	-	円盤形土製加工品	ナデ	ナデ	褐色	にぶい褐色	2.8	2.5	1.1	○	○	-	○	-	
	585	H-16	II b	12334	円盤形土製加工品	ミガキ	ナデ	褐色	にぶい黃褐色	2.7	2.8	0.9	○	○	○	×	-	
	586	H-15	II b	5034	円盤形土製加工品	ミガキ	ナデ	黒褐色	灰褐色	2.7	2.7	0.8	○	○	○	×	-	
	587	F-16	II b	1260	円盤形土製加工品	ナデ	ナデ	にぶい褐色	にぶい褐色	2.6	2.3	1.0	○	○	-	-	○	輝石
	588	G-15	II b	4024	円盤形土製加工品	ミガキ	ミガキ	黒色	黒色	2.6	2.2	1.0	○	○	-	-	○	輝石
	589	F-16	II b	-	円盤形土製加工品	ミガキ	ナデ	黒褐色	黒褐色	2.5	2.7	1.2	○	○	-	-	-	
	590	G-15	II b	4039	円盤形土製加工品	ナデ	ナデ	明赤褐色	褐色	2.5	2.3	1.0	○	○	○	-	-	
	591	G-14	II b	6128	円盤形土製加工品	ミガキ	ナデ	褐灰色	灰褐色	2.4	2.5	1.0	○	○	-	-	○	輝石
	592	F-15	II b	16184	土製品	ナデ ₂	指標注記	-	黒褐色	-	6.2	3.3	2.9	○	○	-	-	○

第20表 繩文時代後期石器觀察表(1)

地図 番号	測量 番号	出土 地点	遺構 層位	取上番号	分類	種類	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石材	備考
33	G-16	S11	10597	I.c	石錐	(2.0)	1.5	0.4	(1.0)	ホルンフェルス	先端部欠損	
34	G-16	S11	10916	I.c	石錐	1.8	1.3	0.3	0.4	黒曜石		
25	G-16	S11	11274-1	II.b	石錐	(1.9)	1.5	0.3	(0.8)	安山岩	先端部欠損	
26	G-16	S11	11274-2	II.b	石錐	(1.3)	1.2	0.4	(0.4)	黒曜石	先端部欠損	
27	G-16	S11	SI-10-下ズニ	II.b	石錐	1.7	1.0	0.2	0.3	安山岩		
28	G-16	S11	11539	II.b	石錐	(1.6)	(0.9)	0.2	(0.2)	安山岩	片側欠損	
39	G-16	S11	10640	-	石錐	1.7	1.1	0.4	0.7	黒曜石	未製品	
40	G-16	S11	12640	-	石錐	1.7	1.2	0.4	0.8	黒曜石	未製品	
41	G-16	S11	11732	-	石錐	1.2	1.7	0.3	0.6	黒曜石	未製品	
42	G-16	S11	10636	-	橢形石器	1.8	1.5	1.0	22	黒曜石		
43	G-16	S11	12782	-	石核	2.8	4.2	1.8	25.3	チート		
44	G-16	S11	11756	IV.a	打製石斧	(10.9)	(6.0)	(1.9)	(140.9)	ホルンフェルス	刃部欠損	
45	G-16	S11	12556	I.a	打製石斧	(8.9)	(5.5)	2.0	(91.2)	ホルンフェルス	刃部欠損	
46	G-16	S11	11001	IV.a	打製石斧	(8.4)	(4.2)	(1.6)	(64.2)	ホルンフェルス	刃部欠損	
47	G-16	S11	10598	I.a	打製石斧	(9.2)	(7.1)	(1.6)	(131.9)	ホルンフェルス	刃部欠損	
48	G-16	S11	12652	-	打製石斧	(8.3)	(8.9)	1.5	(177.9)	ホルンフェルス	両端部欠損	
49	G-16	S11	11284	III.a	打製石斧	(8.0)	(6.2)	(1.4)	(77.6)	ホルンフェルス	刃部欠損	
50	G-16	S11	12739	I.a	打製石斧	(6.2)	5.5	1.5	(53.4)	ホルンフェルス	基部欠損	
51	G-16	S11	12762	-	磨製石斧	(12.3)	(5.8)	1.9	(196.3)	ホルンフェルス	刃部欠損, 未製品	
52	G-16	S11	10588	-	磨製石斧	(9.6)	5.4	1.9	(118.2)	ホルンフェルス	基部欠損	
53	G-16	S11	11282	-	磨・敲石	13.0	9.5	6.0	1174.0	安山岩		
54	G-16	S11	10905	-	磨・敲石	(4.9)	9.4	4.1	(258.7)	安山岩	上半欠損	
55	G-16	S11	12497	-	磨・敲石	7.1	6.3	2.2	158.5	安山岩		
56	G-16	S11	10576	-	敲石	3.3	3.4	3.2	49.4	安山岩		
57	G-16	S11	11097	-	敲石	11.3	6.2	4.8	503.0	安山岩		
58	G-16	S11	11561	-	敲石	12.4	5.8	4.1	347.0	ホルンフェルス		
59	G-16	S11	10996	-	石皿	(16.2)	(18.0)	1.2	(2317.0)	凝灰岩	ほぼ欠損	
67	G-22	S12	512-59	I.a	打製石斧	(16.0)	(11.1)	7.6	(255.1)	ホルンフェルス	両端部欠損	
68	G-22	S12	512-80	I.b	打製石斧	14.6	5.9	2.5	241.6	ホルンフェルス		
69	G-22	S12	512-34	I.a	打製石斧	(10.5)	(5.1)	1.9	(127.9)	ホルンフェルス	刃部欠損	
70	G-22	S12	512-64	-	磨製石斧	(5.3)	3.6	1.3	(38.7)	ホルンフェルス	基部欠損	
71	G-22	S12	512-54	-	磨・敲石	6.5	5.5	4.4	237.8	安山岩		
72	G-22	S12	512-104	-	石皿	(17.1)	(12.7)	(6.4)	(1070.0)	凝灰岩	ほぼ欠損	
73	G-22	S12	512-117	-	石皿	(24.2)	(14.4)	(6.7)	(2000.0)	凝灰岩	ほぼ欠損	
74	G-22	S12	512-83	-	石皿	(13.4)	(16.7)	(7.0)	(2410.0)	安山岩	ほぼ欠損	
22	G-22	S12	-	-	石刀	28.6	4.3	1.7	300.0	ホルンフェルス	朱・朱竹面	
23	G-22	S12	17475	-	敲石	(10.4)	8.3	4.0	(472.0)	碧岩	上端欠損	
26	H-14	S11	b	-	打製石斧	(5.3)	(6.4)	1.9	(46.6)	ホルンフェルス	基部欠損	
31	H-14	H-14	SU1	7610	I.a	打製石斧	27.7	12.0	2.7	868.7	碧岩	
95	H-14	SU1	7523	I.a	打製石斧	22.4	7.5	2.3	403.0	ホルンフェルス		
96	H-14	SU1	7521	I.a	打製石斧	18.9	7.4	1.7	325.5	碧岩		
97	H-14	SU1	7605	III.Ca	打製石斧	24.6	9.6	2.4	608.4	ホルンフェルス		
32	H-14	H-14	SU1	7609	IV.a	打製石斧	26.1	11.0	2.5	697.8	碧岩	
99	H-14	H-14	SU1	6568	I.a	打製石斧	(9.7)	(4.7)	0.8	(45.7)	粘板岩	刃部欠損
100	H-14	H-14	SU1	7603	III.Ba	打製石斧	(19.8)	11.6	2.4	(442.3)	ホルンフェルス	刃部欠損
101	H-14	H-14	SU1	7522	III.a	打製石斧	(16.9)	(8.1)	2.3	(259.3)	碧岩	刃部欠損
102	H-14	H-14	SU1	7520	-	打製石斧	21.7	8.8	2.2	419.3	碧岩	未製品
103	H-14	H-14	SU1	7608	III.Ca	打製石斧	22.4	10.6	2.1	399.5	ホルンフェルス	
104	H-14	H-14	SU1	7524	IV.a	打製石斧	21.4	9.5	1.7	321.4	ホルンフェルス	
105	H-14	H-14	SU1	7604	III.Ca	打製石斧	17.8	6.8	2.0	223.7	ホルンフェルス	
106	H-14	H-14	SU1	7519	-	打製石斧	7.1	16.2	1.6	179.3	ホルンフェルス	未製品
107	H-14	H-14	SU1	7611	-	打製石斧	(4.1)	(6.2)	(0.8)	(22.7)	粘板岩	刃部のみ
108	H-14	H-14	SU1	10963	I.a	打製石斧	13.9	8.4	3.0	445.2	ホルンフェルス	
109	H-14	H-14	SU2	10965	-	打製石斧	16.6	6.0	0.8	101.4	碧岩	未製品
110	H-16	SU2	10964	-	打製石斧	5.5	12.9	1.4	151.6	ホルンフェルス	未製品	
121	G-14	S01	S01-1	III.Db	打製石斧	6.0	9.3	1.4	96.5	ホルンフェルス		
122	G-14	S01	S01-93	-	敲石	7.2	7.2	1.9	124.2	ホルンフェルス		
123	G-14	S01	S01-20	-	磨・敲石	(4.8)	(11.4)	5.6	(333.0)	安山岩	上半欠損	
124	G-14	S01	S01-84	-	磨・敲石	(8.3)	(9.6)	5.0	(564.0)	花崗岩	上半欠損	
125	G-14	S01	S01-86	-	磨石	13.0	12.6	4.7	1153.5	安山岩		
126	G-14	S01	S01-80	-	敲石	11.1	5.1	3.5	287.3	花崗岩		
127	G-14	S01	S01-121	-	石皿	(36.7)	(31.3)	(16.2)	(4700.0)	安山岩		
130	F-16	S010	S010-7	III.Aa	打製石斧	13.6	9.5	2.2	298.7	ハリ賀安山岩		
131	F-16	S010	S010-4	III.Aa	打製石斧	11.0	6	1.6	137.4	ハリ賀安山岩		
132	I-27	S02	S02-4	-	敲石	6.0	5.3	4.1	188.7	安山岩		
133	F-14	S03	S03-6	-	剥石製品	(4.6)	6.9	2.6	(30.7)	軽石		
135	F-19	S08	S08-19	IV.a	打製石斧	(12.9)	(7.0)	(1.9)	(212.9)	ホルンフェルス	基部欠損	
136	F-19	S08	S08-14850	-	石皿	(21.8)	(20.1)	(12.5)	(6320.0)	安山岩	ほぼ欠損	
137	F-19	S08	S08-34	-	石皿	(12.0)	(17.6)	(7.6)	(2370.0)	花崗岩	ほぼ欠損	
138	E-13-14	S024	S024-2	-	磨製石斧	(10.5)	4.8	3.2	(205.3)	ハリ賀安山岩	未製品, 熱熱あり	
139	F-14	S025	S025-8	-	敲石	11.6	6.3	5.4	529.0	碧岩		
140	F-20	S06	S06-13	-	敲石	(14.6)	(9.6)	(2.0)	(392.0)	碧岩	ほぼ欠損	
141	F-20	S06	S06-7	-	磨製石斧	(10.3)	(7.3)	1.1	(94.8)	ホルンフェルス	刃部欠損	
142	F-19	S07B	S07B-8	III.a	打製石斧	(16.0)	(7.3)	(2.2)	(309.0)	ホルンフェルス	刃部欠損	
143	F-19	S07A	S07-17	III.Ab	打製石斧	13.6	5.7	1.3	103.1	碧岩		

第21表 繩文時代後期石器觀察表(2)

地図 番号	測量 番号	出土 地点	遺構 層位	取上番号	分類	種種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石材	備考
44	144	F-19	SQ78	SQ7-4	III Ab	打製石斧	10.9	9.9	2.3	(271.8)	ホルンフェルス	基部欠損
	145	F-19	SQ78	SQ7-10	-	石皿	28.9	24.5	12.5	6790.0	凝灰岩	
	146	F-19	SQ7A	SQ7-11	-	石皿	24.3	24.6	12.6	7450.0	花崗岩	
47	147	G-19	SQ1	-	-	敲石	5.4	5.2	3.7	146.5	砂岩	
	148	E-F-14	SQ2	SQ2-3	-	石皿	(29.0)	(23.6)	(10.2)	(7030.0)	凝灰岩	ほぼ欠損
	156	F-G-19	SQ6	SQ6-38	-	打製石斧	(9.2)	(5.6)	0.8	(56.4)	ホルンフェルス	刃部欠損、未製品
	157	F-G-19	SQ6	SQ6-10	I b	打製石斧	17.1	5.7	1.5	165.2	頁岩	
	158	H-17	SQ9	13454	IV b	打製石斧	15.8	7.6	1.7	215.6	ホルンフェルス	
	159	F-G-19	SQ6	SQ6-11	-	打製石斧	13.8	5.2	1.5	77.1	ホルンフェルス	未製品
49	160	H-17	SQ9	13455	-	敲石	12.2	9.8	2.3	307.2	ホルンフェルス	
	161	F-G-19	SQ6	SQ6-21	-	塵・敲石	13.6	10.3	7.2	1437.5	凝灰岩	
	162	F-G-19	SQ6	SQ6-13	-	磨石	(11.8)	(6.5)	6.2	(695.0)	花崗岩	右側縁欠損
	163	H-17	SQ9	13453	-	敲石	11.7	5.9	4.4	406.5	砂岩	
	164	F-G-19	SQ6	SQ6-62	-	塵・敲石	7.9	7.1	3.5	300.0	安山岩	
	165	F-G-19	SQ6	SQ6-12	-	敲石	4.6	3.9	3.4	89.0	砂岩	
	169	F-13・14	SQ23	SQ23-8	IV a	打製石斧	(11.9)	(8.6)	2.2	(167.0)	ホルンフェルス	刃部欠損
	170	F-13・14	SQ23	SQ23-3	IV b	打製石斧	14.8	10.3	2.4	285.8	ホルンフェルス	
52	171	F-13・14	SQ23	SQ23-6	-	石皿	(11.3)	(11.7)	(8.4)	(996.0)	花崗岩	ほぼ欠損
	172	H-17	SQ19	13414	-	石皿	17.9	21.5	16.8	6440.0	凝灰岩	
	53	176	F-14	SQ24	-	塵・敲石	11.6	8.8	4.9	799.5	安山岩	
54	177	H-17	SQ26	12849	-	敲石製盤	(42.8)	37.2	18.9	8400.0	軽石	
	190	F-16	SQ28	SQ28-209下ズミ	I c	石鈸	2.1	1.4	0.3	56	安山岩	片端欠損
	191	F-16	SQ28	SQ28-109下ズミ	I c	石鈸	1.6	1.1	0.3	94	安山岩	先端部欠損
	192	F-16	SQ28	SQ28-205下ズミ	I c	石鈸	1.6	1.1	0.3	95	安山岩	片端欠損
	193	F-16	SQ28	SQ28-43	I c	石鈸	1.5	1.0	0.3	93	黒曜石	
	194	F-16	SQ28	SQ28-201下ズミ	II b	石鈸	1.7	1.1	0.3	95	安山岩	片端欠損
	195	F-16	SQ28	SQ28-4下ズミ	II b	石鈸	2.2	1.3	0.4	58	安山岩	未製品
58	196	F-16	SQ28	SQ28-4	III Aa	打製石斧	14.2	8.2	1.8	168.6	ホルンフェルス	
	197	F-16	SQ28	SQ28-1	IV a	打製石斧	18.5	10.1	0.3	430.6	ホルンフェルス	
	198	F-16	SQ28	-	-	塵・敲石	11.5	9.7	4.2	534.0	安山岩	
	199	F-16	SQ28	SQ28-108	-	塵・敲石	12.3	6.6	4.0	401.0	安山岩	
	200	F-16	SQ28	SQ28-33	-	石皿	(18.0)	(13.1)	(10.9)	(2010.0)	凝灰岩	ほぼ欠損
	201	F-16	SQ28	SQ28-35	-	石皿	(24.3)	(28.0)	(12.1)	(7060.0)	凝灰岩	ほぼ欠損
	210	E-F-14	P90	-	III Da	打製石斧	14.6	(11.9)	2.2	(363.6)	ホルンフェルス	刃部欠損
	211	E-F-14	P90	P90-2	III Db	打製石斧	12.4	11.8	1.9	219.5	ホルンフェルス	
60	212	F-15	P172	-	IV a	打製石斧	15.6	5.9	1.7	196.3	ホルンフェルス	
	213	E-F-14	P90	P90-4	IV a	打製石斧	11.6	5.4	1.8	115.8	ホルンフェルス	
	214	E-F-14	P90	P90-5	-	打製石斧	13.0	5.9	1.7	169.1	ホルンフェルス	未製品
	215	E-F-14	P90	P90-3	-	磨製石斧	(12.4)	5.2	2.7	(276.6)	ホルンフェルス	基部欠損、敲石に転用
	216	F-14	P91	P91-2	-	塵・敲石	11.1	7.3	3.1	435.5	凝灰岩	
	217	H-20	P104	P104-16	-	塵・敲石	12.3	8.8	4.0	588.0	凝灰岩	
	218	F-15	P173	P173-1	-	塵・敲石	11.6	8.0	6.4	831.5	安山岩	
61	219	E-F-14	P90	-	-	磨石	8.6	8.0	3.7	347.5	安山岩	
	220	F-20	P91	P91-11	-	磨石	7.2	6.9	2.7	175.1	凝灰岩	
	221	F-14	P91	P91-7	-	磨石	10.6	8.2	4.7	633.0	凝灰岩	
	222	G-20	P210	-	-	敲石	13.9	5.3	2.8	331.0	砂岩	
	223	G-19	P268	P268-15	-	石皿	22.6	19.7	14.4	3600.0	凝灰岩	
	224	F-14	P91	P91-9	-	石皿	16.0	13.9	14.7	2090.0	花崗岩	ほぼ欠損、部分
	225	F-14	P268	P268-1	-	石皿	(9.2)	(12.4)	(9.4)	(1890.0)	砂岩	ほぼ欠損
	593	I-35	II b	4177	I a	石鈸	(1.9)	(1.3)	0.3	(8.8)	水晶	片端欠損
	594	H-23	II b	1960	I a	石鈸	1.7	1.5	0.3	66	安山岩	
	595	I-33	II b	4491	I a	石鈸	1.3	1.3	0.2	62	安山岩	
	596	G-13	II b	5279	I b	石鈸	2.4	1.9	0.5	18	頁岩	
	597	F-14	II b	14214	I b	石鈸	2.1	1.7	0.3	68	安山岩	
	598	H-23	II b	9387	I b	石鈸	2.0	1.5	0.4	98	ホルンフェルス	
	599	F-15	II b	16463	I b	石鈸	2.0	1.4	0.3	97	ホルンフェルス	
	600	I-33	II b	4466	I b	石鈸	2.0	(1.2)	0.4	(95)	水晶	片端欠損
	601	I-37	II b	3481	I b	石鈸	1.9	1.6	0.5	13	黒曜石	
	602	K-34	II b	967	I b	石鈸	1.8	1.6	0.3	96	黒曜石	
	603	J-35	II b	1115	I b	石鈸	1.9	(1.4)	0.3	(96)	安山岩	片端欠損
	604	F-20	II b	15172	I b	石鈸	1.9	(1.3)	0.3	(94)	安山岩	片端欠損
	605	I-33	II b	4681	I b	石鈸	1.6	1.6	0.3	95	玉髓	
	606	H-16	II b	11040	I b	石鈸	1.8	1.2	0.3	66	ホルンフェルス	
	607	I-33	II b	4679	I b	石鈸	(1.6)	(1.3)	0.3	(95)	安山岩	先端部及び片端欠損
	608	I-35	II b	4588	I b	石鈸	1.6	(1.3)	0.3	(94)	安山岩	片端欠損
	609	H-16	II b	3763	I b	石鈸	(1.4)	1.5	0.3	(96)	頁岩	先端部欠損
	610	J-34	II b	1039	I b	石鈸	1.5	1.2	0.3	93	安山岩	片端欠損
	611	G-19	II b	14870	I b	石鈸	(1.5)	(1.2)	0.2	(94)	水晶	先端部欠損及び片端欠損
	612	H-21	II b	12703	I b	石鈸	(1.8)	1.1	0.3	(94)	黒曜石	先端部欠損
	613	I-23	II b	11533	I b	石鈸	1.1	1.2	0.2	92	安山岩	
	614	F-16	I	16941	I b	石鈸	1.0	1.1	0.2	92	黒曜石	
	615	H-14	II b	8229	I c	石鈸	(2.1)	1.5	0.3	(98)	チャート	先端部及び片端欠損
	616	G-14	II b	5408	I c	石鈸	1.8	1.6	0.4	98	ホルンフェルス	
	617	E-16	II b	-	I c	石鈸	1.8	1.2	0.3	(96)	安山岩	片端欠損
	618	G-20	II b	14412	I c	石鈸	1.8	1.3	0.3	94	黒曜石	

第22表 繩文時代後期石器觀察表(3)

地図 番号	測量 番号	出土 地点	遺構 層位	取上番号	分類	種種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石材	備考
	619	G-16	II c	11780	I c	石錐	1.7	1.3	0.2	0.4	チャート	
	620	G-19	II b	5685	I c	石錐	(1.6)	1.2	0.2	(0.4)	安山岩	先端欠損
	621	G-22	II b	11873	I c	石錐	(1.5)	1.2	0.3	(0.5)	安山岩	先端欠損
	622	H-15	II b	10498	I c	石錐	1.5	1.3	0.2	0.4	黒曜石	
	623	F-15	II b	16458	I c	石錐	1.5	1.4	0.3	0.4	安山岩	
83	624	H-17	II b	12587	I c	石錐	1.4	1.1	0.3	0.2	黒曜石	
	625	G-16	II b	8560	I c	石錐	1.4	1.0	0.2	(0.2)	黒曜石(岩島)	片側欠損
	626	H-15	II b	9708	I c	石錐	1.6	(1.2)	0.3	(0.5)	黒曜石	片側欠損
	627	G-13	II b	3366	I c	石錐	(1.5)	(1.2)	0.2	(0.2)	黒曜石	片側欠損
	628	H-15	II b	5904	I c	石錐	1.5	1.1	0.2	0.3	黒曜石	
	629	H-17	II b	9164	I c	石錐	1.4	1.0	0.3	0.4	チャート	
	630	H-16	II b	11030	I c	石錐	1.3	1.0	0.3	0.2	黄岩	
	631	H-16	II b	8811	I c	石錐	1.4	(1.2)	0.2	(0.3)	安山岩	片側欠損
	632	G-16	II b	7949	I c	石錐	1.4	1.0	0.2	(0.2)	黒曜石	片側欠損
	633	H-15	II b	5493	I c	石錐	1.3	(1.0)	0.2	(0.3)	黒曜石	片側欠損
	634	H-16	II b	7530	I c	石錐	1.3	(1.0)	0.2	(0.2)	黒曜石	片側欠損
	635	G-16	II b	7954	I c	石錐	(1.0)	1.3	0.2	(0.3)	黒曜石	先端欠損
	636	H-15	II b	5060	I c	石錐	1.0	(1.4)	0.2	(0.2)	黒曜石	先端欠損
	637	G-16	II b	8062	I c	石錐	(1.3)	1.1	0.2	(0.2)	安山岩	先端欠損
	638	H-16	II b	8818	II a	石錐	1.9	(1.2)	0.3	(0.5)	黒曜石	片側欠損
	639	E-14	II b	13529	II b	石錐	2.2	1.4	0.3	0.7	黒曜石	
	640	H-16	II b	4397	II b	石錐	(2.1)	(1.1)	0.2	(0.3)	黒曜石	片側欠損
	641	H-16	II b	6948	II b	石錐	2.1	1.2	0.2	0.5	黒曜石	
	642	H-16	II b	3648	II b	石錐	2.3	1.0	0.4	0.6	流紋岩	
	643	G-13	II b	4263	II b	石錐	(2.0)	(1.3)	0.3	(0.4)	黒曜石	先端部及び片側欠損
	644	F-19	II c	16778	II b	石錐	1.9	1.2	0.3	0.5	チャート	片側欠損
	645	F-16	II c	17792	II b	石錐	2.0	1.1	0.3	0.4	珪質頁岩	片側欠損
	646	G-13	II b	3399	II b	石錐	(1.9)	(1.2)	0.2	(0.3)	安山岩	片側欠損
	647	F-16	II c	17922	II b	石錐	2.0	(1.1)	0.3	(0.6)	ホルンフェルス	片側欠損
84	648	E-14	II b	13545	II b	石錐	1.9	(1.2)	0.2	(0.3)	黒曜石	片側欠損
	649	I-17	II b	12606	II b	石錐	1.8	(1.0)	0.3	(0.3)	黒曜石(岩島)	片側欠損
	650	G-15	II b	5011	II b	石錐	(1.7)	(1.1)	0.2	(0.3)	チャート	片側欠損
	651	F-15	II b	15305	II b	石錐	1.7	1.1	0.3	0.3	チャート	
	652	H-19	II b	12440	II b	石錐	1.7	(1.0)	0.3	(0.4)	安山岩	片側欠損
	653	F-22	II b	14769	II b	石錐	1.6	0.9	0.3	0.3	黒曜石	
	654	G-16	II b	10054	II	石錐	1.9	1.1	0.5	0.8	黒曜石	
	655	H-16	II b	8782	II	石錐	1.9	1.2	0.3	0.9	黒曜石	
	656	G-16	II b	7948	II'	石錐	2.3	1.6	0.4	1.5	黒曜石	
	657	H-29	II b	18019	-	石錐	(1.9)	(1.4)	0.3	(0.6)	黒曜石	両側欠損
	658	F-22	II b	16750	-	石錐	(1.6)	(1.2)	0.3	(0.3)	黒曜石	両側欠損
	659	H-16	II b	11664	-	石錐	1.2	1.3	0.5	0.6	黒曜石	未製品
	660	G-16	II b	8420	-	石錐	1.2	1.3	0.2	0.2	黒曜石(岩島)	未製品
	661	F-15	II b	16062	-	石錐	2.5	1.7	0.4	1.8	黒曜石	未製品
	662	G-16	II b	7085	-	石錐	2.1	1.3	0.4	1.0	チャート	未製品
	663	H-32	II b	4725	-	石錐	(1.4)	1.4	0.3	(0.5)	黒曜石	先端部欠損・未製品
	664	H-16	II b	5139	-	石錐	2.8	1.9	0.8	3.9	チャート	未製品
	665	H-16	II b	8591	-	石錐	2.7	2.0	0.9	3.5	珪質頁岩	未製品
	666	F-16	II c	17901	-	石錐	3.1	2.2	1.2	8.0	玉髓	未製品
	667	F-13	II b	14496	-	石錐	2.3	1.7	0.5	1.7	黒曜石	未製品
	668	F-20	II b	11418	-	ドリル	2.6	1.8	0.3	3.0	安山岩	
	669	H-16	II b	-	-	搬形石錐	3.1	2.3	1.3	7.7	黄岩	
	670	H-16	II b	-	-	スライバー	3.6	5.7	1.3	30.8	安山岩	
	671	H-32	II b	3819	-	スライバー	3.5	5.2	1.3	18.1	水晶	
	672	G-22	II c	18325	-	スライバー	5.7	9.5	1.3	49.8	ホルンフェルス	
	673	I-26	II b	10521	-	スライバー	4.7	10.8	1.0	46.7	ホルンフェルス	
	674	F-15	II c	17864	-	スライバー	5.3	12.8	1.5	88.0	ホルンフェルス	
	675	G-15	II c	10753	-	スライバー	5.1	9.1	1.0	50.2	ホルンフェルス	
	676	F-16	II b	16328	-	スライバー	7.5	14.6	2.1	171.9	ホルンフェルス	
	677	F-20	II b	6776	-	圓形石錐	(3.3)	1.3	0.5	(2.1)	黒曜石	両側欠損
	678	I-17	II b	7454	-	圓形石錐	2.6	1.5	0.9	2.7	黒曜石	
	679	H-15	II b	8368	-	圓形石錐	2.8	1.1	0.4	0.9	黒曜石	
	680	H-20	II b	1871	I a	打製石錐	19.3	6.5	2.2	266	ホルンフェルス	
	681	F-14	II b	13717	I a	打製石錐	14.6	7.1	3.3	424.1	ホルンフェルス	
	682	F-16	II b	17148	I a	打製石錐	7.3	3.9	0.8	22.0	黄岩	
	683	H-27	II b	8912	I a	打製石錐	(8.5)	(6.2)	1.5	(88.8)	ホルンフェルス	刃部欠損
	684	H-22	II b	14058	I a	打製石錐	(12.6)	(7.7)	2.2	(296.3)	ホルンフェルス	刃部欠損
	685	H-16	II b	11290	I a	打製石錐	12.4	5.9	1.8	141.3	ホルンフェルス	
	686	H-14	II b	8213	I a	打製石錐	(11.3)	6.0	1.8	(126.6)	ホルンフェルス	刃部欠損
	687	H-16	II b	10718	I a	打製石錐	14.8	4.4	2.4	200.5	ホルンフェルス	
	688	E-19	II b	14433	I a	打製石錐	13.4	(5.4)	2.5	(245.3)	ホルンフェルス	刃部欠損
	689	H-15	II b	7652	I a	打製石錐	15.0	4.0	1.4	80.4	ホルンフェルス	
	690	G-21	II b	2478	I a	打製石錐	(12.6)	4.7	1.7	(121.7)	ホルンフェルス	基部欠損
	691	F-22	II c	17938	I a	打製石錐	11.9	4.9	2.3	146.3	ホルンフェルス	
	692	F-18	II c	15661	I a	打製石錐	(11.4)	5.4	1.8	(115.8)	ホルンフェルス	刃部欠損
	693	I-17	II b	12370	I a	打製石錐	12.0	4.7	1.3	96.0	ホルンフェルス	

第23表 繩文時代後期石器觀察表(4)

地図 測量 番号	出土 地点	遺構 層位	取上番号	分類	種種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石材	備考	
86	694	F-15	II b	16512	I a	打製石斧	(8.3)	3.1	1.9	(65.2)	ホルンフェルス	刃部欠損
	695	H-20	II b	12457	I a	打製石斧	(12.3)	7.6	1.0	(110.0)	ホルンフェルス	刃部欠損
	696	I-27	II b	10526	I a	打製石斧	(8.6)	(6.3)	2.2	(194.8)	ホルンフェルス	刃部欠損
	697	H-21	II b	14599	I a	打製石斧	(9.0)	(6.0)	(3.2)	(196.8)	ホルンフェルス	刃部欠損
	698	H-17	II c	12532	I a	打製石斧	(9.8)	(5.5)	1.4	(98.6)	ホルンフェルス	刃部欠損
	699	G-16	II c	10170	I a	打製石斧	(10.0)	4.8	1.4	(80.1)	ホルンフェルス	刃部欠損
	700	G-23	II b	14082	I a	打製石斧	9.3	3.9	1.2	54.3	ホルンフェルス	
	701	F-16	II b	16203	I a	打製石斧	(10.1)	4.6	2.2	(124.1)	ホルンフェルス	刃部欠損
	702	I-22	II b	2419	I a	打製石斧	(11.3)	4.6	2.1	(127.3)	ホルンフェルス	刃端部欠損
	703	H-21	II b	16894	I a	打製石斧	9.3	5.0	1.7	75.7	頁岩	
87	704	I-34	II b	4207	I a	打製石斧	(10.9)	3.8	2.7	(121.5)	ホルンフェルス	刃部欠損
	705	G-24	II b	13847	I b	打製石斧	7.3	3.6	1.3	45.9	ホルンフェルス	
	706	H-21	II b	17463	I b	打製石斧	(9.4)	5.3	2.6	(165.3)	ホルンフェルス	基部欠損
	707	H-28	II b	18330	I b	打製石斧	(10.6)	5.1	1.4	(88.0)	ホルンフェルス	基部欠損
	708	H-15	II b	6908	I b	打製石斧	(8.3)	(5.6)	1.9	(99.4)	ホルンフェルス	刃部欠損
	709	F-15	II c	17874	I b	打製石斧	10.3	2.7	10.1	43.1	ホルンフェルス	
	710	H-16	II b	9113	I b	打製石斧	12.2	4.4	2.2	122.4	ホルンフェルス	
	711	F-19	II c	15728	I b	打製石斧	12.1	4.9	2.0	141.0	ホルンフェルス	
	712	H-17	II c	12578	I b	打製石斧	(11.4)	(5.2)	2.6	(167.9)	ホルンフェルス	刃部欠損
	713	F-15	II b	17016	I b	打製石斧	12.2	3.1	1.6	84.3	ホルンフェルス	
	714	H-16	II b	11938	I b	打製石斧	19.2	7.6	1.7	270.0	ホルンフェルス	
	715	H-17	II b	12313	I b	打製石斧	18.4	7.2	1.7	298.1	ホルンフェルス	
	716	G-15	II b	10446	I b	打製石斧	15.9	6.1	2.0	230.6	ホルンフェルス	
	717	F-20	II b	14438	I b	打製石斧	(14.1)	7.4	1.7	(191.4)	ホルンフェルス	基部欠損
	718	I-23	II b	11073	I b	打製石斧	(13.2)	5.5	1.9	(156.9)	ホルンフェルス	基部欠損
	719	J-25	II b	11180	I b	打製石斧	14.5	5.9	1.9	172.3	ホルンフェルス	
	720	H-16	II b	11937	I b	打製石斧	14.9	4.2	2.2	162.0	ホルンフェルス	
	721	H-14	II b	8944	I b	打製石斧	12.6	4.9	2.7	222.9	ホルンフェルス	
	722	G-21	II b	15780	I b	打製石斧	12.2	5.8	1.4	97.8	ホルンフェルス	
	723	E-14	II b	14169	I b	打製石斧	(7.4)	2.7	1.7	(50.1)	ホルンフェルス	刃部欠損
	724	J-23	II b	15397	I b	打製石斧	10.3	3.8	1.7	91.5	ホルンフェルス	
	725	H-16	II b	10013	I b	打製石斧	(9.6)	6.6	2.7	(198.2)	ホルンフェルス	刃部欠損
	726	I-17	II b	11930	I b	打製石斧	(10.6)	(8.2)	1.3	(108.3)	ホルンフェルス	基部欠損
	727	J-17	II b	12888	I b	打製石斧	(8.7)	5.9	3.3	(252.8)	ホルンフェルス	刃部欠損
	728	G-21	II b	16905	I b	打製石斧	(11.8)	7.2	2.4	(188.4)	(ア) 霊安山削	刃部欠損
	729	G-21	II b	17516	I b	打製石斧	(10.8)	5.1	2.1	(162.4)	ホルンフェルス	刃部欠損
	730	H-17	II b	11899	I b	打製石斧	(8.1)	3.4	1.5	(49.5)	ホルンフェルス	基部欠損
	731	H-28	II b	18237	I b	打製石斧	(7.2)	(4.0)	1.4	(56.8)	ホルンフェルス	刃部欠損
	732	G-15	II c	10779	II a	打製石斧	15.2	8.3	2.1	304.6	ホルンフェルス	
	733	F-20	II b	15370	II a	打製石斧	13.8	8.6	1.4	149.7	ホルンフェルス	
	734	H-24	II b	13381	II a	打製石斧	(10.9)	8.2	1.7	(162.7)	ホルンフェルス	基部欠損
	735	H-19	II b	11868	II a	打製石斧	11.8	6.2	1.5	126.8	ホルンフェルス	
	736	F-18	II c	18056	II a	打製石斧	(11.2)	(5.6)	2.1	(136.8)	ホルンフェルス	刃部欠損
	737	F-15	II c	17647	II a	打製石斧	12.3	8.3	1.6	148.0	ホルンフェルス	
	738	I-17	II c	396	II a	打製石斧	(12.3)	9.0	1.7	(153.3)	ホルンフェルス	基部欠損
	739	E-14	II b	14183	II b	打製石斧	12.9	9.6	1.9	234.2	ホルンフェルス	
	740	H-23	II b	14762	II b	打製石斧	(10.3)	10.6	1.3	(188.9)	ホルンフェルス	基部欠損
	741	F-15	II b	17062	II b	打製石斧	15.4	6.4	1.4	150.6	頁岩	
	742	F-15	II b	16493	II b	打製石斧	11.9	5.6	2.1	163.4	ホルンフェルス	
	743	G-15	II b	10435	II b	打製石斧	(11.6)	(6.3)	2.2	(180.6)	ホルンフェルス	刃部欠損
	744	H-15	II b	7627	II b	打製石斧	(8.6)	(6.3)	1.9	(127.3)	ホルンフェルス	刃端部欠損
	745	G-21	II b	17963	III Aa	打製石斧	9.3	7.0	1.2	81.8	ホルンフェルス	
	746	H-15	II b	7716	III Aa	打製石斧	(11.1)	(5.2)	1.3	(111.6)	ホルンフェルス	刃端部欠損
	747	G-16	II b	9880	III Aa	打製石斧	12.1	7.7	1.8	174.0	ホルンフェルス	
	748	G-15	II b	16804	III Aa	打製石斧	13.6	6.9	1.4	110.5	ホルンフェルス	
	749	F-15	II b	16105	III Aa	打製石斧	12.5	6.7	1.6	123.2	ホルンフェルス	
	750	F-20	II b	12691	III Aa	打製石斧	5.6	4.2	1.0	21.1	ホルンフェルス	
	751	H-21	II b	17463	III Aa	打製石斧	12.7	8.9	2.4	189.9	ホルンフェルス	
	752	E-14	II b	14143	III Ab	打製石斧	(12.0)	11.1	1.3	(213.9)	ホルンフェルス	基部欠損
	753	G-19	II b	14603	III Ab	打製石斧	13.8	8.6	2.0	189.6	ホルンフェルス	
	754	H-15	II b	7700	III Ab	打製石斧	12.1	8.4	2.2	190.1	ホルンフェルス	
	755	G-21	II b	14401	III Ab	打製石斧	(10.1)	9.1	1.4	(111.6)	ホルンフェルス	基部欠損
	756	H-19	II b	11867	III Ab	打製石斧	(9.2)	7.6	2.1	(167.2)	ホルンフェルス	基部欠損
	757	H-15	II b	9006	III Ab	打製石斧	12.6	4.5	1.0	65.7	ホルンフェルス	
	758	G-22	II b	11444	III Ba	打製石斧	17.0	10.5	2.3	352.3	ホルンフェルス	
	759	F-15	II b	16805	III Ba	打製石斧	13.3	8.8	1.6	152.2	ホルンフェルス	
	760	G-15	II b	9531	III Ba	打製石斧	13.4	(8.6)	2.1	(219.5)	ホルンフェルス	刃部欠損
	761	I-22	II b	11072	III Ba	打製石斧	(10.3)	8.2	0.9	189.9	ホルンフェルス	基部欠損
	762	H-16	II b	10696	III Ba	打製石斧	(9.8)	5.3	1.6	(80.8)	ホルンフェルス	基部欠損
	763	G-15	II c	11063	III Ca	打製石斧	10.5	4.2	0.9	29.5	ホルンフェルス	
	764	F-19	II b	15362	III Ca	打製石斧	18.7	8.4	1.9	285.5	ホルンフェルス	
	765	J-35	II b	15728	III Ca	打製石斧	19.1	7.9	1.6	251.4	ホルンフェルス	
	766	H-14	II b	8225	III Ca	打製石斧	21.5	10.6	1.7	420.2	ホルンフェルス	
	767	H-14	II b	8235	III Ca	打製石斧	16.2	8.8	2.0	280.0	ホルンフェルス	
	768	H-14	II b	8224	III Ca	打製石斧	17.2	6.2	2.8	273.4	ホルンフェルス	

第24表 繩文時代後期石器觀察表(5)

地図 番号	測量 番号	出土 地点	遺構 層位	取上番号	分類	種種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石材	備考
93	769	G-16	II b	9633	III Cb	打製石斧	13.4	7.3	1.2	111.4	ホルンフェルス	
	770	I-22	II b	2398	III a	打製石斧	(10.0)	(6.3)	2.4	(156.8)	ホルンフェルス	刃部欠損
	771	I-27	II b	10518	III a	打製石斧	(11.6)	7.5	1.7	(162.7)	ホルンフェルス	刃部欠損
	772	I-33	II b	4497	III a	打製石斧	(9.6)	(7.6)	1.4	(78.1)	ホルンフェルス	刃部欠損
	773	H-16	II b	8614	III a	打製石斧	(7.9)	4.1	1.7	(57.8)	ホルンフェルス	刃部欠損
	774	H-16	II b	9910	III a	打製石斧	8.9	10.0	1.4	116.3	ホルンフェルス	
	775	G-14	II b	8951	III a	打製石斧	(13.4)	(9.5)	2.1	(251.0)	ホルンフェルス	刃部欠損
	776	I-35	II b	1085	III a	打製石斧	(10.4)	(8.0)	1.9	(157.1)	ホルンフェルス	刃部欠損
	777	I-24	II b	14594	III b	打製石斧	(17.5)	(7.9)	1.6	(223.7)	ホルンフェルス	刃部欠損
94	778	H-16	II b	10016	III b	打製石斧	(12.9)	7.6	1.9	(201.5)	ホルンフェルス	刃部欠損
	779	H-14	II b	8945	III b	打製石斧	(9.5)	(6.6)	2.1	(153.3)	ホルンフェルス	刃部欠損
	780	F-16	II b	16264	III b	打製石斧	(10.7)	(7.7)	2.2	(189.8)	ハバ 獅安山岩	刃部欠損
	781	E-15	II b	16401	III b	打製石斧	(11.4)	(7.4)	1.8	(141.3)	ハバ 獅安山岩	刃部欠損
	782	I-37	II b	3478	III b	打製石斧	(8.6)	(7.6)	1.3	(62.5)	ホルンフェルス	刃部欠損
	783	F-16	II c	17652	IV b	打製石斧	(9.4)	4.9	1.9	(82.8)	ホルンフェルス	基部欠損、再加工
	784	F-15	II b	16576	IV a	打製石斧	14.2	8.1	1.9	213.9	ホルンフェルス	
	785	G-16	II b	9634	IV a	打製石斧	20.9	13.8	2.8	668.6	ホルンフェルス	
	786	F-15	II b	16577	IV a	打製石斧	(16.1)	(7.8)	2.2	(245.5)	ホルンフェルス	刃部欠損
95	787	G-14	II c	9506	IV a	打製石斧	13.2	6.8	2.0	169.0	ホルンフェルス	
	788	G-16	II b	8068	IV a	打製石斧	12.3	7.9	1.3	117.2	ホルンフェルス	
	789	H-17	II b	12122	IV b	打製石斧	16.7	7.7	2.1	311.5	ホルンフェルス	
	790	I-17	II b	11929	a	打製石斧	8.3	6.5	2.0	120.8	ホルンフェルス	再加工、未製品
	791	G-19	II b	12434	-	打製石斧	(10.1)	8.4	1.4	(114.0)	ホルンフェルス	未製品
	792	H-29	II b	18013	-	打製石斧	(10.5)	6.2	1.4	(91.0)	ホルンフェルス	未製品
	793	F-19	II b	15364	-	打製石斧	14.4	4.9	1.6	179.3	ホルンフェルス	未製品
	794	G-16	II b	8414	-	打製石斧	11.4	(6.2)	1.4	(105.8)	ホルンフェルス	左側縫欠損、未製品
	795	H-15	II b	9942	-	打製石斧	11.3	5.9	1.4	106.0	ホルンフェルス	未製品
96	796	H-15	II b	9800	-	打製石斧	12.6	6.0	0.8	58.5	ホルンフェルス	未製品
	797	F-20	II b	15755	-	磨製石斧	7.8	3.3	2.2	112.4	結晶片岩 緑縞綠色岩	
	798	I-17	II b	12254	-	磨製石斧	(9.3)	4.9	1.7	(123.4)	ホルンフェルス	基部欠損
	799	H-21	II b	14043	-	磨製石斧	(7.5)	(4.2)	1.7	(42.5)	ホルンフェルス	2/3次損
	800	H-15	II b	9042	-	磨製石斧	(6.5)	4.6	1.4	(57.4)	ホルンフェルス	基部欠損
	801	G-15	II b	5471	-	磨製石斧	(5.4)	7.7	1.5	(70.1)	ホルンフェルス	基部欠損
	802	ST	-	48	-	磨製石斧	(5.1)	6.1	1.0	(44.4)	ホルンフェルス	基部欠損
	803	H-16	II b	7476	-	磨製石斧	(2.2)	(4.6)	(0.8)	(9.0)	ホルンフェルス	刃部のみ
	804	G-23	II b	14094	-	磨製石斧	(5.5)	5.6	1.0	(32.6)	ホルンフェルス	基部欠損
97	805	I-34	II b	1586	-	磨製石斧	(4.9)	5.3	2.2	(78.4)	ホルンフェルス	基部欠損
	806	F-15	II b	15473	-	磨製石斧	(3.9)	4.4	1.1	(20.3)	ホルンフェルス	基部欠損
	807	G-20	II b	1922	-	磨製石斧	(7.1)	5.1	3.3	(172.1)	ホルンフェルス	基部欠損
	808	F-19	II b	12414	-	磨製石斧	(7.5)	4.2	1.7	(68.3)	ホルンフェルス	基部欠損
	809	G-15	II b	7797	-	磨製石斧	(7.1)	4.3	1.0	(33.9)	ホルンフェルス	基部欠損
	810	H-27	II b	9734	-	磨製石斧	(5.6)	5.0	3.1	(78.4)	砂岩	基部欠損
	811	G-13	II c	5686	-	磨製石斧	(9.8)	5.8	3.2	(313.9)	ホルンフェルス	左側縫欠損
	812	G-16	II b	7500	-	磨製石斧	(6.3)	4.0	1.8	(44.5)	ホルンフェルス	基部欠損
	813	G-14	II b	6457	-	磨製石斧	(4.9)	(2.9)	(3.0)	(37.4)	ホルンフェルス	刃部のみ
98	814	I-32	II b	1709	-	磨製石斧	(8.9)	(4.5)	(3.6)	(169.3)	ホルンフェルス	刃部欠損
	815	G-23	II b	13866	-	磨製石斧	(9.4)	(4.1)	2.6	(117.2)	ホルンフェルス	刃部欠損
	816	G-13	II b	3348	-	磨製石斧	(5.9)	(4.8)	(2.1)	(72.4)	ホルンフェルス	刃部欠損
	817	G-15	II b	5983	-	磨製石斧	(6.4)	(2.1)	1.5	(27.9)	ホルンフェルス	両側縫欠損、神切法
	818	F-15	II b	16568	-	磨製石斧	14.3	5.2	2.6	235.6	ホルンフェルス	未製品
	819	G-14	II b	8320	-	磨製石斧	(11.9)	4.2	2.2	(157.6)	ホルンフェルス	基部欠損
	820	H-14	II b	5461	-	磨製石斧	(5.3)	(2.7)	1.6	(17.3)	ホルンフェルス	両側縫欠損、神切法
	821	G-15	II b	4914	-	磨製石斧	(5.3)	(4.4)	(2.4)	(75.3)	ホルンフェルス	両側縫欠損
	822	F-21	II b	17930	-	禮器	7.3	8.0	1.7	113.2	ホルンフェルス	
99	823	H-15	II c	10830	-	禮器	7.1	7.7	1.7	99.9	ホルンフェルス	
	824	H-17	II b	12129	-	禮器	7.1	8.0	2.2	127.9	ホルンフェルス	
	825	H-16	II b	10018	-	禮器	8.1	7.0	2.4	174.6	ホルンフェルス	
	826	H-15	II b	5896	-	禮器	7.8	7.2	1.7	94.9	ホルンフェルス	
	827	H-16	II b	9946	-	磨・敲石	16.3	10.8	5.7	1245.5	安山西	
	828	H-15	II b	7658	-	磨・敲石	13.8	11.6	8.8	2222.0	安山西	
	829	G-19	II b	15705	-	磨・敲石	10.2	6.6	3.6	332.5	安山西	
	830	H-16	II b	11037	-	磨・敲石	5.9	5.4	1.9	97.0	砂岩	被熱あり
	831	F-13	II b	14303	-	磨・敲石	11.6	8.9	4.4	784.5	安山西	
99	832	G-21	II b	15008	-	磨・敲石	10.6	9.4	4.5	723.0	砂岩	被熱あり
	833	H-15	II c	8964	-	磨・敲石	15.3	14.5	7.9	2442.0	安山西	
	834	G-16	II b	9632	-	磨・敲石	13.1	(10.5)	5.0	(1120.5)	安山西	左側縫欠損
	835	G-14	II b	6721	-	磨・敲石	10.4	11.0	6.0	904.5	安山西	被熱あり
	836	G-21	II b	14074	-	磨・敲石	11.3	10.7	4.1	763.0	安山西	
	837	G-15	II b	9881	-	磨・敲石	8.4	7.8	5.8	583.0	安山西	
	838	H-19	II b	12438	-	磨・敲石	11.5	9.5	5.6	861.0	安山西	
	839	H-16	II b	12336	-	磨・敲石	11.5	10.2	6.0	862.0	安山西	
	840	G-15	II b	7250	-	磨・敲石	9.8	9.2	4.9	774.0	安山西	被熱あり
	841	G-14	II b	6491	-	磨・敲石	11.6	9.4	5.5	1026.5	安山西	被熱あり
	842	I-22	II b	14592	-	磨・敲石	9.0	6.8	4.2	346.0	砂岩	

第25表 繩文時代後期石器觀察表(6)

地図 番号	測量 番号	出土 地点	遺構 層位	取上番号	分類	器種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石材	備考
	843	F-20	II b	16897	-	磨・敲石	10.1	7.8	2.9	346.5	安山西	
	844	F-15	II b	16656	-	磨・敲石	5.9	5.0	2.3	99.5	砂岩	
99	845	F-15	II b	16182	-	磨・敲石	5.7	5.0	2.5	98.4	砂岩	
	846	H-15	II b	7701	-	磨・敲石	6.1	6.4	3.0	198.0	砂岩	
	847	H-19	II b	11636	-	磨・敲石	6.7	6.4	2.7	175.0	砂岩	
	848	H-16	II b	9944	-	磨・敲石	7.9	7.4	2.7	225.0	安山西	
	849	G-15	II b	9640	-	磨・敲石	10.9	7.7	4.4	505.0	花崗岩	
	850	F-15	II b	16571	-	磨・敲石	8.1	7.7	5.0	401.0	砂岩	
	851	F-16	II b	16840	-	磨・敲石	7.4	7.0	4.1	305.0	安山西	
100	852	E-13	II b	14527	-	磨石	5.7	5.8	3.2	149.5	花崗岩	
	853	G-20	II b	15719	-	敲石	9.7	8.5	4.0	434.0	安山西	
	854	F-14	II b	17306	-	敲石	12.3	9.5	5.6	1021.0	安山西	被熱あり
	855	G-15	II b	11592	-	敲石	11.9	8.3	7.2	1000.0	花崗岩	
	856	G-16	II b	11013	-	敲石	12.6	12.0	10.8	2089.0	花崗岩	
	857	G-16	II b	10415	-	敲石	15.4	11.3	9.0	2184.0	花崗岩	
	858	H-17	II b	12614	-	敲石	13.6	7.8	6.6	1930.5	ホルンフェルス	
	859	G-15	II b	10299	-	敲石	14.6	8.0	6.8	973.5	ホルンフェルス	
	860	H-16	II b	12335	-	敲石	16.3	7.8	6.3	1026.0	ホルンフェルス	
101	861	G-15	II b	7297	-	敲石	12.9	6.6	5.8	713.5	砂岩	
	862	G-15	II b	6569	-	敲石	14.7	6.3	5.1	763.0	ホルンフェルス	
	863	H-14	II b	8300	-	敲石	8.8	7.7	7.2	346.5	花崗岩	
	864	G-21	II b	16903	-	敲石	(8.6)	3.8	3.4	(175.0)	ホルンフェルス	上端欠損
	865	G-14	II b	6492	-	敲石	12.9	5.4	5.0	533.5	砂岩	
	866	G-15	II b	16034	-	敲石	8.6	7.9	5.3	424.0	安山西	
	867	H-16	II b	9119	-	敲石	7.3	7.1	3.3	244.5	砂岩	
	868	E-15	II b	17316	-	敲石	5.5	3.0	1.7	44.0	砂岩	
	869	H-16	II b	12621	-	敲石	11.7	4.2	2.8	244.6	ホルンフェルス	
	870	H-16	II b	11939	-	敲石	7.1	7.6	(4.2)	(293.5)	ホルンフェルス	裏面欠損
	871	H-16	II b	11210	-	敲石	8.5	5.9	3.4	218.9	砂岩	
102	872	H-16	II b	8746	-	敲石	7.9	6.2	4.8	348.5	ホルンフェルス	
	873	H-17	II b	11603	-	敲石	8.2	6.7	2.4	230.6	砂岩	
	874	F-20	II b	1776	-	敲石	10.3	3.2	3.3	163.0	砂岩	
	875	G-15	II b	7244	-	敲石	7.6	4.7	4.0	206.5	安山西	
	876	G-15	II b	7235	-	敲石	4.8	4.8	4.1	98.6	安山西	
	877	E-14	II b	13805	-	敲石	4.9	4.5	4.5	135.0	安山西	
103	878	G-20	II b	1919	-	石皿	(22.3)	(29.0)	15.7	(1300.0)	安山西	ほぼ欠損, 被熱あり
	879	G-16	II b	9212	-	石皿	(27.2)	(30.2)	12.6	(1390.0)	安山西	ほぼ欠損, 被熱あり
	880	F-19	II b	11070	-	石皿	(23.2)	(15.3)	(17.4)	(6550.0)	安山西	ほぼ欠損, 被熱あり
	881	G-15	II b	9526	-	石皿	(17.6)	(29.3)	12.0	(7920.0)	花崗岩	ほぼ欠損, 被熱あり
	882	F-15	II c	17611	-	石皿	(23.5)	(27.4)	14.8	(8900.0)	凝灰岩	ほぼ欠損, 被熱あり
	883	H-17	II b	8861	-	石皿	(32.5)	(28.2)	13.3	(9230.0)	安山西	ほぼ欠損, 被熱あり
104	884	G-23	II b	14571	-	石皿	(21.8)	(22.6)	15.2	(7780.0)	安山西	ほぼ欠損, 被熱あり
	885	F-20	II b	14436	-	石皿	(20.9)	(16.6)	(11.3)	(5760.0)	花崗岩	ほぼ欠損, 被熱あり
	886	G-23	II b	14573	-	石皿	(17.9)	(18.0)	(10.3)	(2810.0)	安山西	ほぼ欠損, 被熱あり
	887	J-26	II b	11188	-	石皿	(26.2)	(17.3)	10.7	(6740.0)	安山西	ほぼ欠損, 被熱あり
	888	H-15	II c	10803	-	石皿	(21.9)	(15.6)	12.2	(6430.0)	花崗岩	ほぼ欠損, 被熱あり
105	889	G-16	II b	10729	-	石皿	(20.7)	(18.9)	6.5	(2879.0)	安山西	ほぼ欠損
	890	H-16	II c	12862	-	石皿	(29.1)	(16.2)	13.2	(8650.0)	砂岩	ほぼ欠損, 被熱あり
	891	G-23	II b	14572	-	石皿	(35.0)	(21.6)	13.4	(10400.0)	安山西	ほぼ欠損, 被熱あり
	892	F-20	II b	14927	-	石皿	(17.8)	(21.9)	(13.0)	(6400.0)	安山西	ほぼ欠損, 被熱あり
	893	H-15	II c	8983	-	石皿	(24.8)	(21.7)	9.8	(5950.0)	砂岩	ほぼ欠損, 被熱あり
	894	G-15	II c	11729	-	石皿	(29.3)	(21.3)	8.1	(5240.0)	安山西	ほぼ欠損, 被熱あり
	895	F-19	II b	14844	-	石皿	(20.0)	(16.2)	11.4	(4210.0)	安山西	ほぼ欠損, 被熱あり
106	896	G-20	II b	15161	-	石皿	(20.1)	(18.2)	15.9	(5960.0)	凝灰岩	ほぼ欠損
	897	G-16	II b	9286	-	石皿	(21.0)	(13.3)	11.1	(2790.0)	安山西	ほぼ欠損
	898	H-17	-	11111	-	石皿	(18.5)	(13.8)	11.9	(4890.0)	安山西	ほぼ欠損
	899	F-19	II b	14425	-	石皿	(17.5)	(13.2)	(10.9)	(2630.0)	凝灰岩	ほぼ欠損
	900	F-15	II b	12413	-	石皿	(22.8)	(13.5)	15.2	(4800.0)	安山西	ほぼ欠損
	901	F-20	II b	1780	-	石皿	(17.1)	(13.9)	9.7	(2750.0)	安山西	ほぼ欠損
	902	H-15	II c	10831	-	磨石	8.2	9.7	7.6	595.0	花崗岩	
107	903	H-17	II c	9687	-	磨石	7.2	5.5	2.8	146.8	砂岩	
	904	H-15	II b	9711	-	磨石	13.4	13.2	5.6	215.6	砂岩	
	905	F-15	II c	17622	-	用途不明石器	7.5	(5.6)	2.0	(53.0)	凝灰岩	わずかに欠損, 被熱あり
	906	G-14	II b	6201	-	用途不明石器	7.2	(4.2)	1.7	(38.5)	凝灰岩	ほぼ欠損, 被熱あり

第26表 繩文時代後期装飾品觀察表

地図 番号	測量 番号	出土 地点	遺構 層位	取上番号	分類	器種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石材	備考
	907	G-13	II b	5000	-	彫飾	5.5	1.2	1.3	12.1	ヒスイ	
	908	G-16	II b	8538	-	丸玉	1.1	1.1	1.0	2.0	ヒスイ	
107	909	G-20	I	17302	-	丸玉	1.0	1.0	0.7	1.3	ヒスイ	
	910	F-15	II b	16315	-	筒玉	1.7	1.1	0.9	1.4	結晶片岩様緑色岩	
	911	-	-	8150	-	筒玉	1.3	0.7	5.1	0.8	結晶片岩様緑色岩	

(6) 小結

縄文時代の調査では、縄文時代後期中葉から縄文時代晩期末（一部弥生初頭を含む）の遺構と遺物が検出された。遺構と遺物（土器・石器）の検討を行い、場の機能を復元することで小結としたい。

遺構

縄文時代後期では、堅穴住居跡3軒、埋設土器12基、石斧集積遺構2基、集石遺構1基、落とし穴2基、土坑26基、ピットが複数検出されており、多様な機能をもった集落であったことが窺われる。それらの遺構の大半は、東南部九州の縄文時代後期後に特徴的に見られる中岳II式土器の時期に帰属するものと思われる。

当該期の堅穴住居跡の検出例としては、鹿児島県曾於市西原遺跡の堅穴住居跡1軒、肝属郡東田遺跡の堅穴住居跡1軒、宮崎県都城市野添遺跡の堅穴住居跡7軒、同市中村遺跡の堅穴住居跡2軒、宮崎市平畑遺跡の55軒があり、鹿児島県内での検出例は少ない。堅穴住居跡の規模は、西原遺跡で一辶2.65m、東田遺跡で3.2～3.5m、中村遺跡で1.9～2.2m、野添遺跡で2.2～4.7m、平畑遺跡で1.5～7.5mであり、本遺跡のものが一辶3.6～4.2mであることから中規模と言える。平面形は1・2号堅穴住居跡が円形で、他遺跡でも円形が主体的である。3号堅穴住居跡のみ方形である。類例としては西原の隅丸方形が最も類似しているが、併せても2例と少ない。建物内の施設としては、2・3号堅穴住居跡ががを備えているが、1号堅穴住居跡ではがを備えていない。本遺跡同様、他遺跡も明確ながを備えているものと備えていないものを見られる。また、1～3号住居跡は主柱穴を持たないことから、主柱で上屋を支えるような構造ではなかったものと推測される。柱構造については、平畑遺跡で主柱穴を持つものがいくつか見られるが、他遺跡と本遺跡の堅穴住居跡の柱構造は共通している。

埋設土器は中岳II式土器のものが12基検出された。当該期の検出例としては、志布志市稲荷迫遺跡の1基のみである。本遺跡の埋設土器12基及び稲荷迫遺跡の埋設土器1基は、共に正位置で埋設されている。土器の遺存状態は様々で、1～6・9号埋設土器が完形、7・11号埋設土器が胴部のみ、8・10・12号埋設土器が胴部から底部、稲荷迫遺跡は胴部から底部のものである。埋設場所は、11号埋設土器が調査区2の2・3号堅穴住居跡から約20m離れて位置し、1～10・12号埋設土器は調査区1の1号堅穴住居跡から10～35m離れて位置している。子供の理葬か、或いは理葬された後、骨になった人の骨だけを入れた再葬墓の可能性が考えられ、居住域から少し離れて墓域を形成していたものと推測される。

石斧集積遺構は2基検出（1号13点、2号3点）された。中岳II式土器の時期の検出例としては県内初例である。時期が下り縄文時代晩期では、曾於市鳴神遺跡（22点）、柿木段遺跡（4点）、日置市市ノ原遺跡（4点）で検出されている。2基の石斧集積遺構は、調査区1にある1号堅穴住居跡から1号石斧集積遺構で約19m、2号石斧集積遺構が約10m離れて位置している。1号石斧集積遺構は13点が器軸を東西に揃えて埋納されている。それらの石斧は大型の製品や未製品、欠損品等々である。2号石斧集積遺構は若干の乱れが認められるものの、概ね器軸を東西に向けていることから、埋納当初は揃えていたものと推測される。石斧は3点と少なく、未使用の製品や未製品等一樣ではない。なんらかの理由で隠したものか、或いは祭祀を行ったものと推測される。

集石遺構は11基検出された。1号堅穴住居跡の東側に位置する一群（1・3～5・10号）と、1号堅穴住居跡と2・3号堅穴住居跡の間に位置する一群（2・6～9号）に分けられる。いずれも居住域から13m以上離れて位置している。11基の集石遺構の内、掘り込みを持つものが10基で、掘り込みを持たないものが1基である。掘り込みの形状は皿状のもの（1・10号）、たらい状のもの（3号）が共に少なく、ピット状のもの（4～9号）が多かった。集石遺構を構成する礫は、欠損した石器の割合が高く被熱の痕跡があまり認められない。これらの礫や石器は出土位置の検討から、土砂と共に掘り込みに落とし込んでいるか、掘り込みが埋没する過程で落とし込んでいるように見受けられる。また、埋土中からは、焼土や炭化物も殆ど検出されていないことから、縄文時代早期に普遍的に見られる調理施設のようなものではなく、廃棄的な利用がなされていたと思われる。

落とし穴は調査区2の西側の台地端部で2基検出された。1・2号堅穴住居跡からは20m以上離れている一方で、集石遺構・土坑・ピットとは近接している。関連性は不明である。本遺跡の落とし穴の深さは1号落とし穴で137cm、2号落とし穴で116cmであった。いずれも底面に小ピットの痕跡は認められない。

土坑は26基検出された。1号堅穴住居跡から10～20mの距離を保って環状に位置するもの（4・9・10・12・13・15・17～19・22・26・28号）、1号堅穴住居跡と2・3号堅穴住居跡の間で集石遺構やピットと近接して位置するもの（1・5～7・25号）、2・3号堅穴住居跡から10～20m離れて単独で位置するもの（3・8・20号）、調査区1西側で集石遺構や埋設土器と近接して位置するもの（2・23・24・27号）に分けられる。6・20～22・24・28号土坑は集石遺構の特徴と同様に、土砂と共に掘り込みに遺物を落とし込んでいるか、掘り込みが埋没する過程で遺物を落とし込んでいるように見

受けられる。本来は貯蔵として利用されたのかもしれないが、最終的には廃棄的な利用がなされたと考えられる。27号土坑は、縄まで土器が出土し、その後の接合作業により底部から口縁部まで復元できることから、埋設土器の可能性がある。28号土坑からは非日用的な大型の軽石製品が出土しており、祭祀との関連性を窺わせる。このように、土坑の機能は多様であるが、本遺跡においては廃棄的な利用を示すものが多く認められる。このような傾向はピットにおいても認められる。

土器

土器は口縁部の形態的特長や文様から I ~ VII類に分類される。土器の分類基準については第27表に示した。

第27表 縄文時代土器分類表

型式	分類	概要
西平式	I類	磨消縄文で、沈線文を施すもの。
中岳II式	II A類	深鉢形土器。外反し直行する口縁部で、口唇部が平らに面取りされ、口縁部内面に明瞭な段を持つもの。
中岳II式	II B類	深鉢形土器。外反し直行する口縁部で、口唇部が平らに面取りされ、口縁部内面の段が滑らかになるもの。
中岳II式	II C類	深鉢形土器。外反する口縁部で、口唇部が平らに面取りされ、口縁部内面の段がないもの。口縁部が肥厚するもの。
中岳II式	II D類	深鉢形土器。外反する口縁部で、口唇部と口縁部文様帯との境が不明瞭で、口縁部内面の段がないもの。口縁部が肥厚するもの。
中岳II式	II E類	深鉢形土器。外反する口縁部で、口縁部外側の文様帯の段は明瞭であるが、文様帯の幅が間延びし、口唇部は平らなもの。
中岳II式	II F類	深鉢形土器。口唇部がやや丸みを帯び、口縁部文様帯を持たないもの。
中岳II式	II G類	浅鉢形土器。外反し直行する口縁部をもつもの。
中岳II式	II H類	浅鉢形土器。直行する口縁部をもつもの。
中岳II式	II I類	浅鉢形土器。口縁部が口辺から外反するもの。
中岳II式	a	胴部最大径の所で「く」の字状に屈曲するもの。
中岳II式	b	胴部最大径の所で「S」字状に屈曲するもの。
上加世田式	III類	外反し直行する口縁部をもつもので、中岳II式土器よりも器厚が薄い。口縁部文様帯に複数の沈線を施すもの。
黒川式	IV類	浅鉢形土器。胴部最大径の所で「く」の字状に屈曲し、頸部は内傾しながら外する口縁部に至るもの。黒色磨研土器。
刻目突帯文	V類	直行する口縁部で、口縁部や胴部に刻目突帯を巡らせているもの。
組織痕土器	VI類	直行する口縁部で、底部に組織痕が認められる。器面調整には貝殻条痕が施されている。
未命名型式	VII類	口縁部や胴部にドーナツ状の浮文を貼り付けているもので、口縁部に突起を貼り付けた後、頂部上面に刺突を施すものもある。
無刻目突帯文	VIII類	直行する口縁部で、口縁部や胴部に無刻目の突帯を巡らせているもの。

縄文時代後期の土器

本遺跡においては、土器 I類が最も古く、縄文時代後期中葉の西平式土器に相当する。土器 II類は縄文時代後期後半の中岳II式土器に相当する。本遺跡の中でも最も多く見られる土器である。中岳II式土器は全ての調査区において出土しているが、特に調査区 I の西向き緩傾斜下の G・H-14~16にかけて集中する傾向が見られた。これまで、周辺の遺跡において中岳II式土器の底部から口縁部まで復元できる例は少なかったが、今回の調査において 8点もの資料が復元できた。

中岳II式土器は、これまで先学者から時間的な細分が可能であることが指摘されてきたものである。中岳洞穴を標識遺跡とし、河口貞徳氏によって型式設定さ

れ、三万田式土器と御領式土器の間に位置付けられた（河口1980）。その後、桑畠光博氏によって再検討が行われ、3型式に分類した上で編年的位置付けを行い、三万田式土器と御領式土器に並行するものとしている（桑畠1989）。本遺跡出土の中岳II式土器を桑畠氏の型式に当てはめると、中岳II-1型式（土器II A類）→中岳II-2型式（土器II B・C・D類）→中岳II-3型式（土器II E類）の時間的変遷が考えられる。土器F類の口縁部文様帯を持たない粗製の深鉢形土器や、土器G～I類の浅鉢形土器については層位の出土状況から時期差を見出すことはできなかった。今後、他遺跡の良好な資料の増加により時期差が解明されることが望まれる。

次に、土器の血液型とも言うべき胎土について言及したい。本遺跡出土の中岳II式土器の胎土については、基本的に石英・長石を含んでいる。それ以外の特徴的な鉱物を集計し第28表に示した。鉱物の産地を推定するにあたっては、鹿児島県立埋蔵文化財センターの踏査成果を参考した（鹿児島県立埋蔵文化財センター2005）。本遺跡出土中岳II式土器は、金雲母・輝石がそれぞれ2割強、角閃石が2割弱、黒雲母が1割弱含まれている。4つの鉱物全て含まれるものはなかったが、金雲母と角閃石の組み合わせが1割弱、金雲母と輝石で2割強、輝石と角閃石で2割強確認できた。金雲母と角閃石は肝属山地や高隈山系の花崗岩類に由来し、輝石や角閃石は鹿屋市輝北町等に分布する、先加久藤火碎流（東・羽鶴・辻2012）に由来する。これらのことから、本遺跡から約30km圏の交易ないし行動領域が存在していたものと思われる。

縄文時代晩期の土器

土器III類は縄文時代晩期初頭の上加世田式土器、土器IV類は縄文時代晩期中葉の黒川式土器、土器V類は縄文

時代晩期末から弥生時代初頭の刻目突帯文土器、土器VI類は組織痕土器、土器VII類は未命名型式の土器、土器VIII類は無刻目突帯文土器に相当する。土器の分布傾向としては、土器III・IV・VI～VIII類が散発的に出土しており、土器V類は全調査区から出土しているが、調査区4北西側で比較的確実に出土している。土器III・IV・VI～VIII類は散発的な出土であるため、特徴を捉えることができなかったが、土器V類は比較的確実に出土したことから特徴を見出すことができた。土器V類は2条から1条の刻目突帯を持つが、その刻目の方法に5つのパターンが認められた。

- ① 幅広の刻目のもので、幅広の棒を押し当てたものか櫛状工具を転がしたように見えるもの。
- ② 指を押し当てて刻目にしているもの。
- ③ 櫛状工具により細い刻目を施したもの。
- ④ 爪形の刻目が見られるもの。爪を押し当てたものと工具によって爪形施したものがある。
- ⑤ ヘラ状工具で刻目を施したもの。ヘラ状工具で突帯を切るようにして刻目を施すものとヘラ状工具を突帯に押し当てた後、工具を寝かせて刻目をV字形に広げるものがある。

これらの刻目の方法の違いが時期差なのか、それとも系統差なのか、或いは個人差なのかが今後の課題として残った。

次に、本遺跡出土の刻目突帯文土器の胎土の特徴だが、基本的に石英・長石を含んでいる。それ以外の特徴的な鉱物を集計し第29表に示した。石英・長石が全ての個体で観察できるのに対し、角閃石が1割、金雲母・輝石が1割に満たなかった。いずれも肝属山地や高隈山系、鹿屋市輝北町等、大隅半島で産出する鉱物で、遺跡から約30km圏の交易ないし行動領域が窺える。

第28表 中岳II式土器の胎土（金雲母・輝石・角閃石）

金雲母		輝石		角閃石		黒雲母		金雲母・角閃石		金雲母・輝石		輝石・角閃石	
有り	無し	有り	無し	有り	無し	有り	無し	有り	無し	有り	無し	有り	無し
86	271	83	274	65	292	3	354	18	339	1	356	2	355
24.1%	75.9%	23.2%	76.8%	18.2%	81.8%	0.8%	99.2%	5.0%	95.0%	23.2%	76.8%	23.2%	76.8%

※n=357点

※鉱物の分類は肉眼鑑定による

第29表 刻目突帯文土器の胎土（金雲母・輝石・角閃石）

金雲母		輝石		角閃石	
有り	無し	有り	無し	有り	無し
2	86	3	85	9	79
2.3%	97.7%	3.4%	96.6%	10.2%	89.8%

※n=88点

※鉱物の分類は肉眼鑑定による

石器

石器の分類基準については第30表に示した。石器はⅡ層及び遺構内から出土した。Ⅱ層からは縄文時代後期から縄文時代晚期の土器が出土しており、石器についても両時代のものが混在している可能性があるが、遺構や土器の出土状況から、殆どが中岳Ⅱ式土器の時期に帰属するものと思われる。

本遺跡出土石器は3712点を数える。石器組成は第31表に示した。剥片・碎片・石核等の石器製作に係わるものが4割強を占める。それに統いて、磨・敲打石類・石皿等の調理具が3割強を占める。製品では土掘り具としての打製石斧が2割弱を占める。狩猟具の石礫が1割弱古める。石材は、大隅半島で採取可能なホルンフェルスが5割弱と最も多く、続いて安山岩が2割弱を占める。両石材製の石器に残された自然面から、河原で採取した原石を使用ないし加工したものと思われる。統いて黒曜石が1割強を占める。不純物を含み、光を通す特徴を持つことから、三船産か日東産と思われる。原産地は本遺跡から約36～84km離れているが、石鐵や楔形石器、異形石器等の小型剥片石器の製作を目的として供給している。

石器

113点の内、形態分類できたものは72点である。内訳については第32表に示した。I c類が4割、I b類が3割弱、II b類が2割強を占める。その他は1割に満たない。石材には、多様なものが用いられているが、黒曜石と安山岩が3割以上で、他の石材に比べ偏る傾向が認められる。黒曜石（三船産か日東産）、黒曜石（鹿島産）、頁岩、チャート、玉髓のものについては、剥片、碎片、石核が出土していることから、石核で遺跡内に搬入され、剥片剥離から製品製作まで行われていた可能性が考えられる。それ以外の石材については、完形品で遺跡内に搬入されたか、剥片なし未製品で搬入された後に仕上げられたと考えられる。

打製石斧

724点の内、形態分類できたものは195点である。内訳については第33表に示した。I a類が2割弱、I b類が1割半ば、III類が1割強、その他は、1割に満たない。石材は、大隅半島で採取可能なホルンフェルスが9割弱と圧倒的に多く、その他は、1割に満たない。器体に残される自然面がローリングしていることから、河原で採取した原石を使用したものと思われる。未分類としたものの中には欠損品、未製品等が529点、打製石斧製作に係わる調整剥片が897点出土していることから、遺跡内において打製石斧製作が行われていたと考えられる。

石刀

2号堅穴住居跡の床面から天附型の石刀が1点出土した。鹿児島県内の石刀・石棒を第117図・第118図に、天附型石刀の出土例は第34表に示した。天附型の石刀は九州各地で出土しており、特に中九州と南九州に集中している。本遺跡出土のものは、櫛原文様と呼ばれるものであるが、木の葉文を基調とした文様とはやや異なり弧状である。両端に漆が塗られ、一部赤色顔料も観察される^①。中央部には彫られている痕跡がないので、何か巻かれていた可能性もある。ほぼ全面に製作時に付いたと思われる擦痕が認められるが、使用による痕跡は認められない。また、刃部は形成されていない。天附型で、櫛原文様の付けられている石刀で完形のものはほとんど無く、西日本では初めての例である。また、中岳Ⅱ式の時期（縄文時代後期後半）の住居から出土しており、時期が確定できる数少ない資料で貴重なものである^②。

装飾品

丸玉2点、垂飾1点、管玉1点、勾玉1点が出土している。全て完形品で、遺構外からの出土である。特筆すべきは使用された石材で、丸玉2点と垂飾1点には新潟県糸魚川産のヒスイが使用されていた。本遺跡内で製作された痕跡が認められなかったことから、製品そのものが搬入されたと考えられる。管玉と勾玉は結晶片岩様綠色岩（クロム白雲母）製である。大坪志子氏の研究によると、原産地は九州中部の変成岩帯と推測しており、クロム白雲母製品は九州中にほぼ満遍なく分布する中で、玉生産は各地の中核遺跡で行われたとしている（大坪2007）。鹿児島県内では上加世田遺跡が多量の玉類を出土する遺跡として知られている。本遺跡で玉類が製作された痕跡がないことを考慮すると、上加世田遺跡のような中核遺跡を中継して搬入されたものと考えられる。

場の機能について

既述した遺構と遺物の成果から、本遺跡の場の機能の検討を行いたい。

縄文時代後期中葉は遺物・遺構共に希薄で主たる活動域は調査区外にあったものと推測される。縄文時代後期後半になると中岳Ⅱ式土器の文化を持った人々が集落を形成する。生業は、大隅半島で産出する胎土を使用し土器製作を行っていた他、石鐵や打製石斧を製作し、狩猟や植物質食料の採取を行っていたものと考えられる。採取で得た植物質食料は、付近の河原で採取した礫を素材とした磨石や石皿を使って製粉加工し消費していたものと考えられる。他地域との交流も行われており、実用的な道具を作るための原料である黒曜石や装飾品（玉類）も交易を通じて獲得したものと考えられる。

第30表 縄文時代石器分類表

器種分類		概要
剥片石器	石鏽	両側縁からの押圧剥離により、先端部を作出し、器体を薄く仕上げたもの。
	I類	ほぼ正三角形状を呈するもの（長幅比1.50以下）。
	a	基部に抉りのないもの。
	b	基部に浅い抉りがあるもの。
	c	基部に深い抉りがあるもの。
	II類	二等辺三角形状を呈するもの（長幅比1.51以上）。
	a	基部に浅い抉りがあるもの。
	b	基部に深い抉りがあるもの。
	III類	基部が丸みをおびるもの。
	IV類	五角形状を呈するもの。
	ドリル	先端部を錐状に加工したもの。
	楔形石器	縁辺にそれぞれ対となる潰れ状の剥離が認められるもの。
	スクレイパー	連続的な二次加工により刃部を作出したもの。
	異形石器	連続的な二次加工により整形しているが、用途不明の石器。
剥片	二次加工剥片	二次加工を施すもので、刃部が認められないもの。
	石核	石核から剥離されたもの。
	碎片	剥片剥離及び二次加工、欠損で生じたもの。
	石核	剥片剥離が行われたもの。
礫石器	打製石斧	大型の剥片ないし、礫片・扁平な礫を素材とし、縁辺からの剥離調整により刃部を作出したもの。
	I類	短冊形のもの。
	a	打ち欠いて仕上げているもの。
	b	打ち欠き加工で成形し、部分的に簡易な研磨を施すもの。
	II類	撥形のもの。
	a	打ち欠いて仕上げているもの。
	b	打ち欠き加工で成形し、部分的に簡易な研磨を施すもの。
	III類	有肩のもの。
	A	刃部が丸みを帯びるもの。
	B	刃部が平らになるもの。
	C	刃部が尖るもの。
	D	刃部が平らで、器体の長さよりも幅が広いもの（長幅比1.00以下）。
	a	打ち欠いて仕上げているもの。
	b	打ち欠き加工で成形し、部分的に簡易な研磨を施すもの。
IV類	側縁の抉りが片側に偏るものの。	
	a	打ち欠いて仕上げているもの。
	b	打ち欠き加工で成形し、部分的に簡易な研磨を施すもの。
磨製石斧	面的に研磨が行われているもので、概ね厚みがあり、刃部は蛤の形を呈する。	
	礫器	礫片ないし礫の縁辺に刃部を作出したもの。
磨石・敲石	磨面のみ認められるもの、敲打痕のみ認められるもの、磨面と敲打痕が複合して認められるものとがある。	
	石皿	磨面・凹面が認められるもの。脚付きのものもある。
砥石	擦痕及び筋状の凹が認められるもの。	
	石製品	上記の石器に該当せず、利器としての用途が不明なもの。

第31表 石器組成

石材 器種	石頭	ドリル	楔形 石器	スク レイ バー	異形 石器	剥片	碎片	石核	打製 石斧	磨製 石斧	礫器	磨・ 敲石	石皿	砸石	輕石 製品	用途不明 石器	石刀	碧玉	勾玉	丸玉	垂飾	総計
ホルン フェルス	6	0	0	5	0	842	9	0	656	35	7	217	3	7	0	0	1	0	0	0	0	1788
安山岩	26	1	0	1	0	19	7	0	8	1	0	414	135	5	0	0	0	0	0	0	0	617
黒曜石	50	0	1	0	3	164	209	18	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	445
砂岩	0	0	0	0	0	19	0	0	7	3	1	212	15	14	0	0	0	0	0	0	0	271
頁岩	6	0	1	0	0	85	8	1	35	3	0	13	0	4	0	0	0	0	0	0	0	156
花崗岩	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	67	44	7	0	0	0	0	0	0	0	118
凝灰岩	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	17	38	0	0	1	0	0	0	0	0	57
チャート	9	0	0	0	0	32	11	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	53
粘板岩	0	0	0	0	0	25	0	0	9	1	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	37
石英	0	0	0	0	0	22	6	3	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	32
黒曜石 (縁島)	4	0	0	0	0	8	14	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	27
玉髓	3	0	0	0	0	8	2	7	0	0	0	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	23
シルト質 頁岩	1	0	0	0	0	19	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	20
水晶	3	0	0	1	0	8	5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	17
ハリ質 安山岩	0	0	0	0	0	2	0	0	8	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	11
流紋岩	1	0	0	0	0	7	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	9
軽石	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	9	0	0	0	0	0	0	9
珪質頁岩	2	0	0	0	0	1	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	5
黑色 安山岩	1	0	0	0	0	0	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4
ヒスイ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	1	3	
不明	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	3
輝石 安山岩	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	2
結晶片岩 緑色岩	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	3
玄武岩	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
黒曜石 (縁島)	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
統計	113	1	2	7	3	1262	278	32	724	45	8	946	237	37	9	2	1	1	1	2	1	3712

第32表 石器分類集計一覧表

石材	分類	I a	I b	I c	II a	II b	III	IV	小計	未分類	総計
黒曜石	0	4	13	1	6	2	1	27	23	50	
安山岩	2	9	9	0	3	0	0	23	3	26	
チャート	0	0	3	0	3	0	0	6	3	9	
ホルンフェルス	0	3	1	0	1	0	0	5	1	6	
頁岩	0	2	2	0	0	0	0	4	2	6	
黒曜石(縁島)	0	0	1	0	1	0	0	2	2	4	
玉髓	0	1	0	0	0	0	0	1	2	3	
水晶	1	1	0	0	0	0	0	2	1	3	
珪質頁岩	0	0	0	0	1	0	0	0	1	1	
シルト質頁岩	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	
黑色安山岩	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	
黒曜石(縁島)	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	
流紋岩	0	0	0	0	1	0	0	1	0	0	
統計	3	20	29	1	16	2	1	72	41	113	

※欠損品のものでも分類に耐えうるものは分類し、集計を行った
 ※未製品及び分類に耐えられない程に欠損したものを未分類とした

第33表 打製石斧分類集計一覧表

石材	I	Ia	I b	II	IIa	IIb	III	IIIa	IIIb	IIIa	IIIAb	IIIaB	IIIbB	IIIaC	IIIbC	IIIaD	IIIbD	IV	IVa	IVb	a	b	小計	未分類	統計	調査 剖片
ホルン フェルス	3	31	28	6	8	14	21	9	4	7	6	6	1	8	1	1	2	2	11	4	1	1	175	481	656	787
頁岩	0	5	1	0	0	1	1	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	12	23	35	65
粘板岩	0	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	7	9	22
ハリ賀安 山岩	0	0	1	0	0	0	1	0	2	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	6	2	8	2
安山岩	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	8	8	3
砂岩	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	7	7	17
凝灰岩	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0
玄武岩	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
計	3	37	30	6	8	15	24	10	6	9	7	6	1	8	1	1	2	2	13	4	1	1	195	529	724	897

*欠損品のものでも分類に耐えうるものは分類し、集計を行った
*未製品及び分類に耐えられない程に欠損したものを未分類とした

えられる。居住域内外においては、石斧の埋納や土製品・軽石製品・石刀が出土しており、作物の豊穣や子孫繁栄を願った祭祀も行われていたと推測される。また、居住域から10～35m離れた所には土器を埋設している。付近には、廐棄や貯蔵を目的とした集石遺構や土坑・ピットを配置していることから、日々の生活の中で行き来するような所に墓域を形成していたものと推測される。

中岳II式土器の文化が終焉すると、縄文時代晚期からは再び遺物・遺構が希薄になり、主たる活動域は調査区外へと移る。縄文時代晩期末から弥生時代初頭の刻目突宍文土器の時代になると調査区4において人間活動の痕跡が認められるが、集落の形成には至っていない。

※1 蛍光X線分析により赤色顔料は朱であることが、ATR-FIR分析により黒色塗膜は漆であることが判明している。顕微鏡と肉眼観察により、石刀に朱を塗布した後に黒色漆を塗布していることが認められている。

※2 國學院大學名譽教授小林達雄氏、國學院大學柄木短期大学教授小林青樹氏ご教授による。

参考文献

- 大坪志子2007「九州地方の石製装身具—後晩期の玉類を中心とした石材同定—」『石川県立埋蔵文化財情報』第17号 財團法人石川県立埋蔵文化財センター
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター第三調査係2005「土器胎土の鉱物を求めて—土器製作推定地のための基礎研究—」『縄文の森から』第3号 鹿児島県立埋蔵文化財センター

遠部慎2001「九州地域(長崎県・佐賀県)の概要と集成」『考古学資料集』17 小林青樹 平成12年度文部科学省科学研究費補助金特定研究A(2)

河口貞徳1980「中岳洞穴」末吉町教育委員会

柴畠光博1989「東南部九州におけるある縄文土器の型式編列—中岳II式土器の再検討—」『鹿児島考古』第23号 鹿児島県考古学会

菅波正人2001「九州地域(福岡県)の概要と集成」『考古学資料集』17 小林青樹 平成12年度文部科学省科学研究費補助金特定研究A(2)

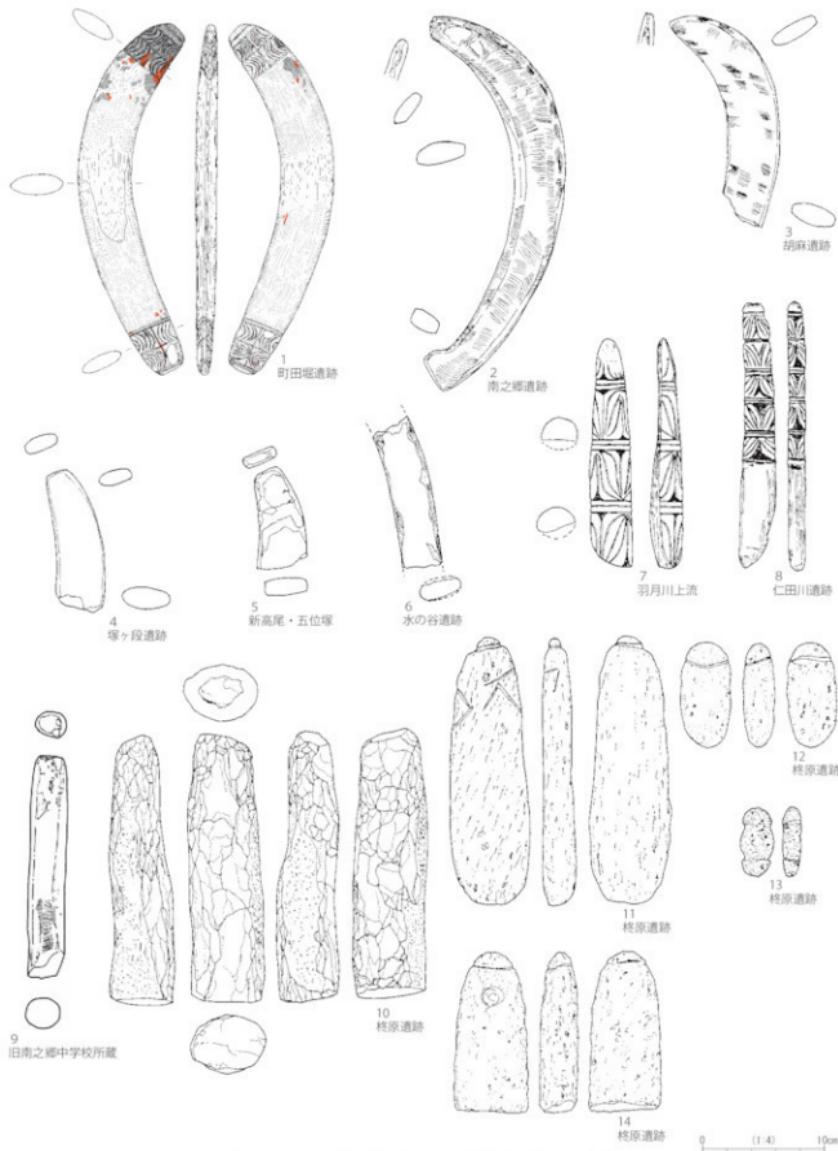
坪根伸也・遠部慎2001「九州地域(大分県)の概要と集成」『考古学資料集』17 小林青樹 平成12年度文部科学省科学研究費補助金特定研究A(2)

繁昌正幸・三塙憲一・寺原徹・森田郁朗2006「市ノ原遺跡第5地点」鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(105)鹿児島県立埋蔵文化財センター

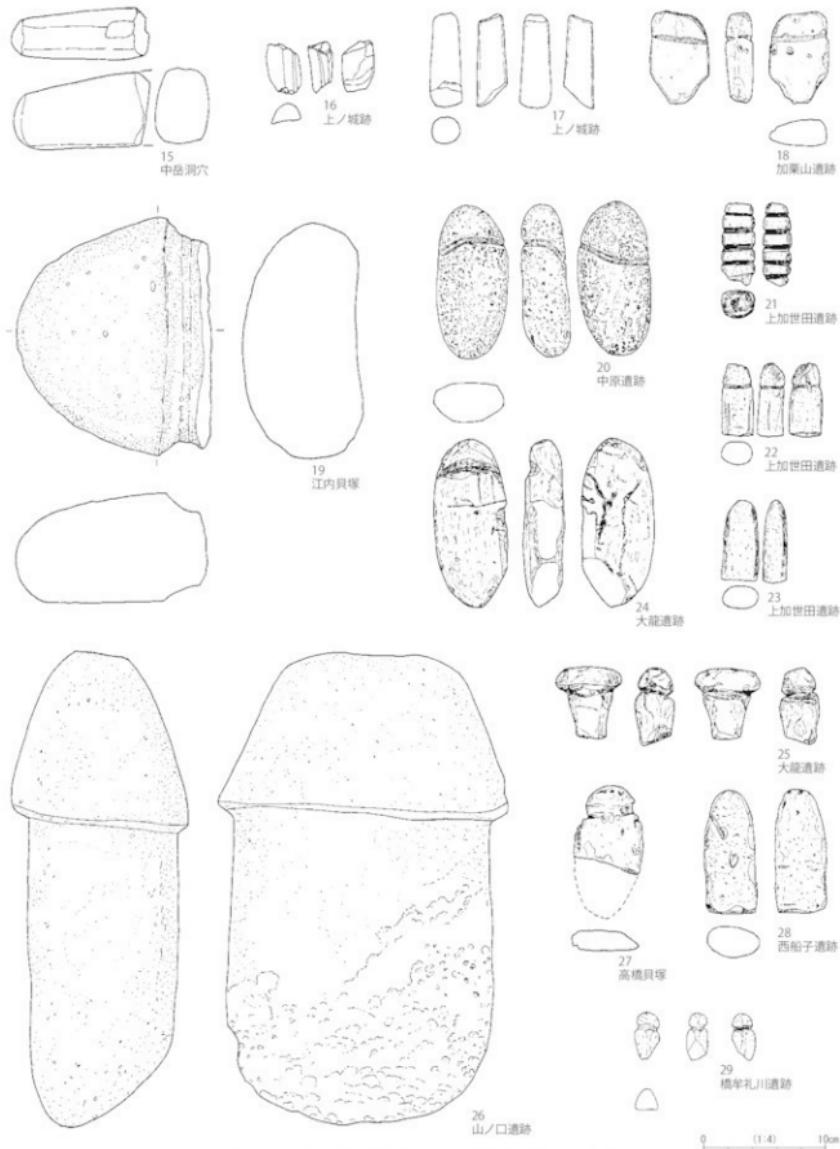
東和幸2001「九州地域(熊本県・宮崎県・鹿児島県)の概要と集成」『考古学資料集』17 小林青樹 平成12年度文部科学省科学研究費補助金特定研究A(2)

東和幸・羽崎敦洋・辻明啓2012「稻荷追遺跡」鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(169)鹿児島県立埋蔵文化財センター

前迫亮一・横手浩二郎2008「西原遺跡、牧ノ原B遺跡、原村I遺跡、原村II遺跡」鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(124)鹿児島県立埋蔵文化財センター



第117図 鹿児島県内出土石刀・石棒（1）(東2001改変)



第118図 鹿児島県内出土石刀・石棒（2）（東2001改変）

第34表 天附型石刀出土地一覧表(菅波、坪根・遠部、東2001改変)

番号	遺跡名	所在地	立地	時期	出土状況	石材	サイズ(cm) 重量(g)	特徴
1	広田遺跡	福岡県糸島郡二丈町大字広田	丘陵裾部	晩期前半	溝	砂岩	長さ(8.2) 幅5.1 厚さ2.3 重さ86.2	両端欠損。
2	権現塚北遺跡	福岡県山門郡瀬高町大字坂田	沖積低台地	晩期前半～後半	包含層	貝岩質	長さ(13.2) 幅3.6 厚さ1.9 重さ120.0	両端欠損。断面砕形の平坦面側を背にして、内湾する。
3	穂石原遺跡	長崎県島原市三会穂石原	丘陵	晩期初頭(?)～刻目突文式	理葬地付近 (出土状況不明)			一端欠損。断面形は橢円形。
4	天附遺跡	熊本県牛深市天附元下須	下須島北端	後期後半 (御領式)	宅地造成中出土		長さ25.6 幅4.1	
5	大明神遺跡	熊本県下益城郡坂南町鶴源宮ノ前		後期(御領式)	採集	軟質粘板岩	長さ27.0 重さ400.0	
6	出土地不明	熊本県河内中学校所蔵				蛇紋岩		
7	太郎追遺跡	熊本県熊本市太郎追町大原	緩傾斜地	後期中半(辛川式)～晩期前半		安山岩	長さ27.5 幅6.5 厚さ3.0	剥離面残す。
8	沖松遺跡	熊本県球磨郡須恵村字沖松	丘陵地	後期(鳥井原式)～晩期(古閑式)				中心部のみ存在。
9	上南部遺跡	熊本県熊本市上南部町村下	河岸段丘上					
10	神園田淵屋敷遺跡2次	熊本県熊本市長嶺町		後期後半 (御領式・天城式)				中心部のみ存在。
11	平畠遺跡	宮崎県宮崎市大字熊野字平畠	緩傾斜地	後期後半～晩期前半	包含層		長さ29.4 幅4.2 厚さ1.7	
12	西都原付近	宮崎県西都市			採集	玄武岩質		
13	西都原付近	宮崎県西都市			採集	玄武岩質		
14	陣内遺跡	宮崎県西臼杵郡高千穂町大字三田井字車迫	小台地上	後期中半～晩期中半	採集	頁岩質	長さ(16.0) 厚さ0.9	
15	南之郷遺跡	鹿児島県曾於市末吉町原北別府	台地上		採集	粘板岩様	長さ30.7 幅4.21 厚さ1.75	グリップエンド状の作り出し。
16	胡麻遺跡	鹿児島県曾於市末吉町五位塚中屋敷					長さ(18.6) 幅4.16 厚さ1.7	一端欠損。
17	塚ヶ段遺跡	鹿児島県曾於市末吉町					長さ(12.1) 幅3.89 厚さ1.9	先端部のみ。
18	新高尾・五位塚	鹿児島県曾於市末吉町					長さ(8.3) 幅3.9 厚さ1.46	先端部のみ。
19	水の谷遺跡	鹿児島県鹿屋市上祓川町	舌状台地	後期終末～晩期前半	包含層	千枚岩	長さ(12.8) 幅3.5 厚さ1.5	両端欠損。
20	町田掘遺跡	鹿児島県鹿屋市串良町細山田	台地	後期後半 (中岳II式)	竪穴住居内床面	ホルンフェルス	長さ28.6 幅4.3 厚さ1.7 重さ300.0	両端部朱塗り後、黒色漆仕上げ。
21	上加世田遺跡	鹿児島県加世田市川口	河岸段丘上	後期後半(上加世田式・入佐式)	採集			
22	諏訪前遺跡	鹿児島県日置市金峰町大野	台地上	後期終末(上加世田式・入佐式)～晩期前半(黒川式)	包含層			一端欠損。
23	大坪遺跡	鹿児島県出水市美原町	沖積平野	後期終末(上加世田式・入佐式)～晩期前半(黒川式)	包含層			一端欠損。敲打整形のみ。

2 弥生時代の調査

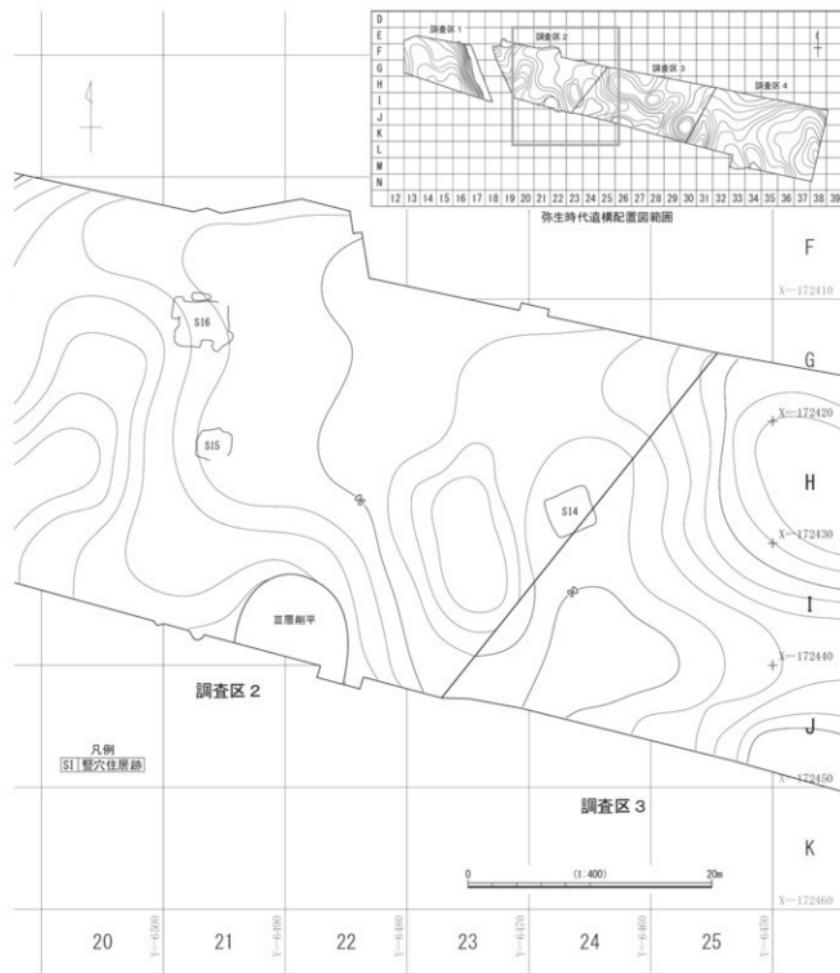
(1) 調査の概要

弥生時代の遺物はⅡ層（黒色土）から出土し、前期の高橋式土器、中期中葉の吉ヶ崎式土器、中期後葉の山ノ口式土器等が出土している。前期の遺物は主に調査区4において出土しているが全体的に遺物量は少ない。

遺構は、調査区2において、山ノ口式土器の時期の堅穴住居跡が3軒検出された。いずれも、埋土の上位に開聞岳起源の暗紫コラの堆積が認められる。

(2) 遺構 (第120図～第122図)

遺構は堅穴住居跡が3軒検出された。



第119図 弥生時代遺構配置図

ア 穫穴住居跡

4号竪穴住居跡（第120図）

H-24区において検出された住居跡で、東西方向3.7m、南北方向3.4mの略方形を呈している。検出面はII層中で、検出面からの深さは0.48mである。南壁側の中央部に底辺0.7m、高さ0.58m、深さ0.2mの略三角形の掘り込みがある。柱穴と思われる痕跡は検出されなかった。遺物は土壌中及び床面直上において数点しか出土していない。埋土のII層には灰褐色の破くしまった火山灰が堆積しているが、分析の結果、開聞岳起源の暗紫コラ（約2000年前）と判明した。

4号住居内で採取された炭化物の¹⁴C年代測定値は2135±20年BPの年代値が得られている。

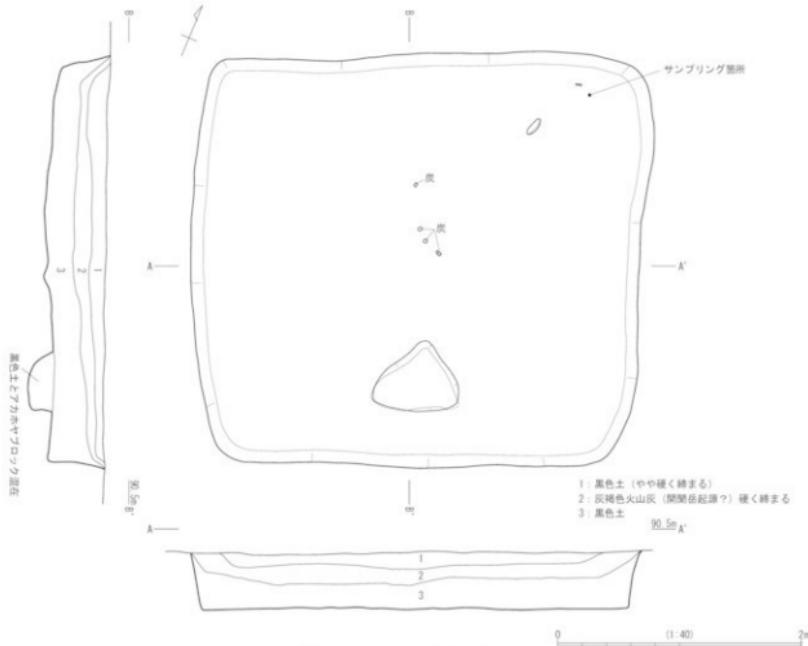
5号竪穴住居跡（第121図）

H-21区において検出された住居跡で、東西方向2.9m、南北方向2.4mの楕円形に近い形状を呈している。検出面はII層中で、検出面からの深さは0.6mである。住居の北西隅及び南東隅に24号・86号地下式横穴墓の堅坑が掘られ現状を保っていない。柱穴と確定で

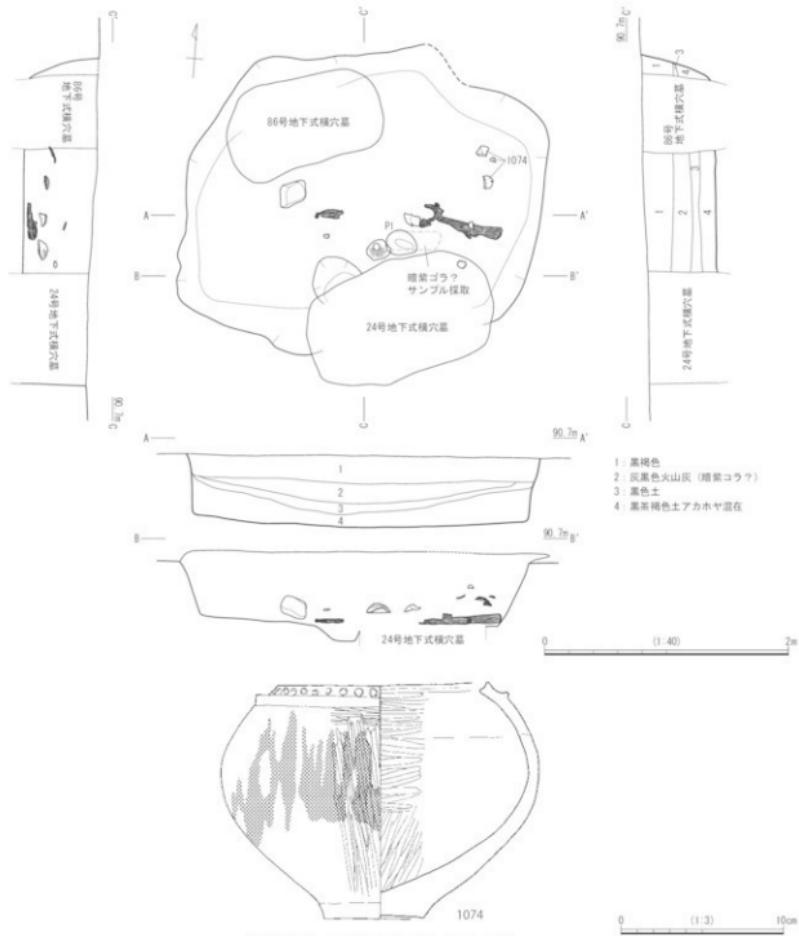
きるピットは認められないが、ほぼ中央に0.27m×0.2mの楕円形で深さ0.6mのピット1基が検出されている。埋土中には炭化物が認められ、床面直上において長さ0.65m、幅0.1m・長さ0.25m、幅0.07mの炭化材が検出される。また、復元で完形になる土器片も床面直上から出土している。1074は無頸壺である。底部径6cm、口縁部径13cm、器高14.3cmを測る。底部はわずかに上底である。球形状に大きく膨らんだ胴部からややしまりながら口縁部へと至る。口唇部はやや凹み、口縁下位に突帯を巡らす。口縁端部と突帯の間に文様帯を設け、径0.5cmの竹管文を施すものである。器面調整は外側の突帯下位は横方向、胴部は縱方向の丁寧なヘラミガキである。内面は上位は横方向、下位は斜め方向のヘラミガキである。また、外側には吹きこぼれと思われる煤の付着が認められる。

この住居跡も埋土中に開聞岳起源の暗紫コラが堆積している。

5号住居から採取された炭化材の分析の結果、炭化材はサクラ属で、¹⁴C年代測定では2115±20年BPの年代値が得られている（第4章6参照）。



第120図 4号竪穴住居跡



第121図 5号竪穴住居跡・出土土器

6号住居跡（第122図）

G-21区において検出されたもので、東西方向5m、南北方向4.5mの張り出しを有する略方形を呈する。検出面はII層中で、検出面からの深さは0.4mである。住居の北西側には幅0.8m、長さ1.8mの張り出しを有し、南東側には幅0.8m、長さ2mの張り出しを斜め方向に配する。また、南西隅では西へ0.3m、南へ0.5m張り出している。北壁中央の外側には幅0.7m、長さ1.6mの土

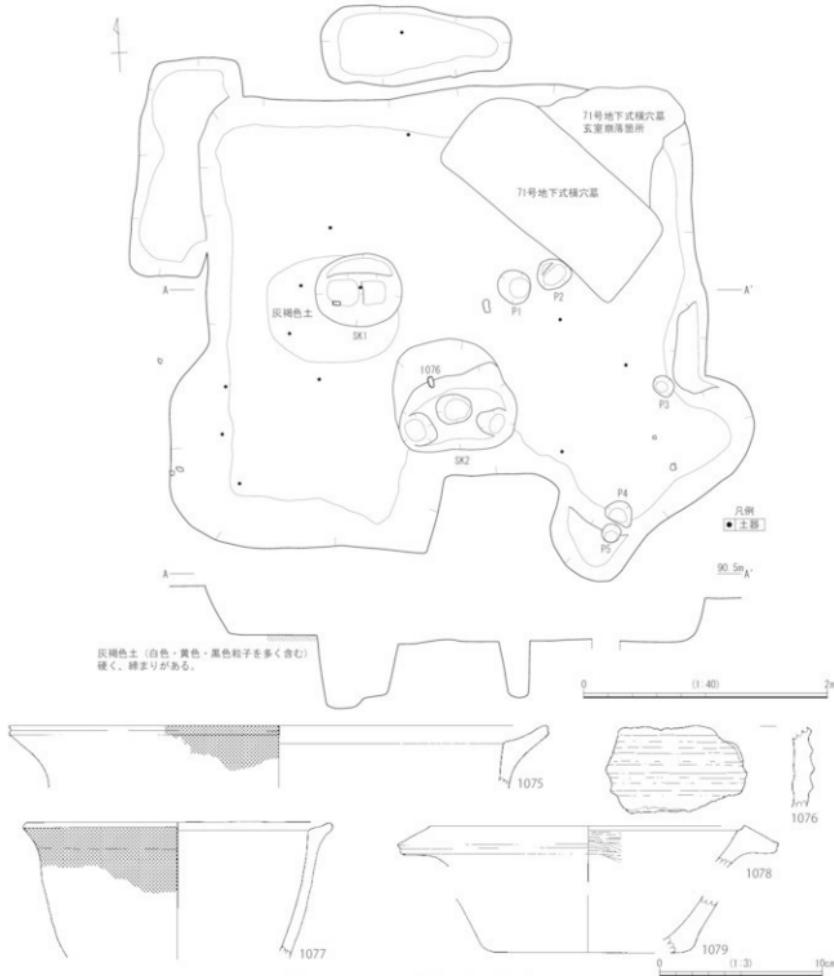
坑が検出される。住居の北東側には71号地下式横穴墓の竪坑が掘られている。住居の床面では幅0.6m、長さ0.7mの楕円形と幅0.9m、長さ1mの不定形の土坑が検出される。

また小ピットも検出されるが、柱穴と認定できるものはない。ただ中央のピット1と土坑1が深さ0.5mを超すもので、2本の柱穴と考えてもよいかもしれない。2本の柱穴を持ち、南壁沿いに土坑を有する点や張り出し

を有することから6号住居跡は、当地方の弥生時代中期の典型的な住居跡と思われる。

住居内の遺物は少なく、國化できたのは5点である。1075は復元口縁径33cmを測る甕形土器。口縁部が「く」の字状に外反し、端部はわずかに凹む。外面には煤の付着が認められる。1076は甕形土器の胴部で、4条の三角形貼り付け突帯を巡らす。1077は口縁部径18.4cmを測

る甕形土器。口縁部はやや短く「く」字状に外反する。胴部は直線的で、底部へ至るものと思われる。胴部上位から口縁部へかけて煤の付着が認められる。1078は壺型土器の口縁部で復元口縁径18.2cmを測る。大きく外反した頸部から口縁部は垂れ下がり気味である。端部はやや凹み、内面上端も凹みが認められる。1079は壺形土器の底部で復元底部径11.6cmを測る。



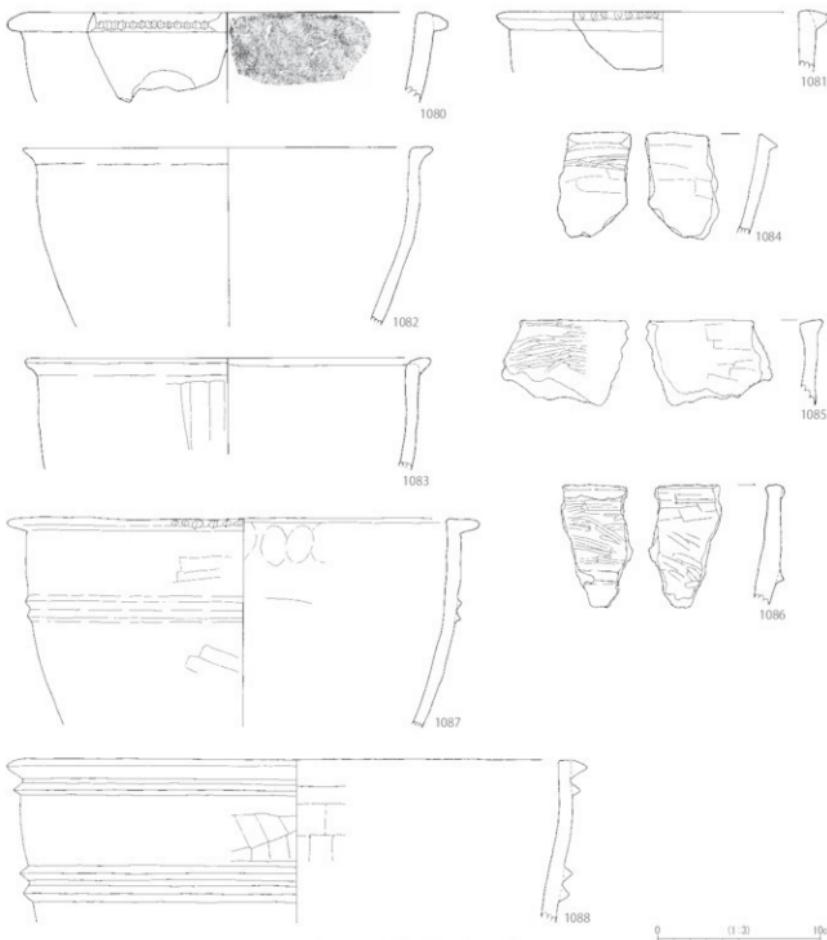
第122図 6号竪穴住居跡・出土土器

(3) 遺物(第123図～第125図)

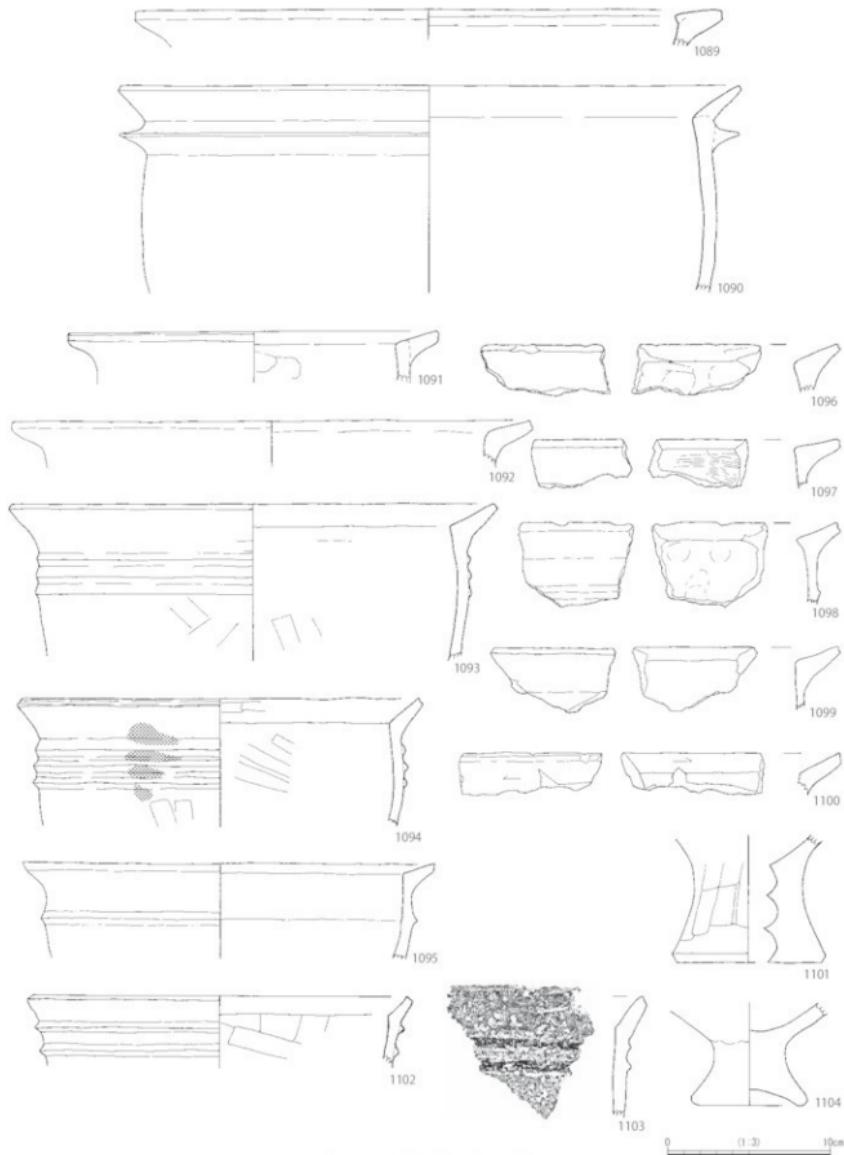
ア 土器

弥生時代の遺物はⅡ層中で出土しており、中期の土器が主である。前期の土器で図化できたのは1080から1086までの7点である。1080は口縁径27cmで、口縁は「逆L」字状に外反し端部は丸く收め、刻み目を有する。1081は口縁径20.2cmで口縁は「逆L」字状に外反し端部には刻み目を有する。1082は口縁径25cmで、口縁は「逆

L」字状に外反する。1083は口径24.6cmで、口縁はやや上方に向て外反する。1084～1086は口縁部でいずれも口縁が短く外反するものである。1087・1088は中期中葉と思われる。1087は口縁径28.8cmで、口縁は「逆L」字状に外反し端部には刻み目を有する。胴部上位には2条の三角突帯を巡らす。1088は口縁径35.6cmで、口縁は「逆L」字状に外反する。口縁下位に1条、胴部上位に2条の三角突帯を巡らす。



第123図 弥生時代の土器(1)



第124図 弥生時代の土器（2）

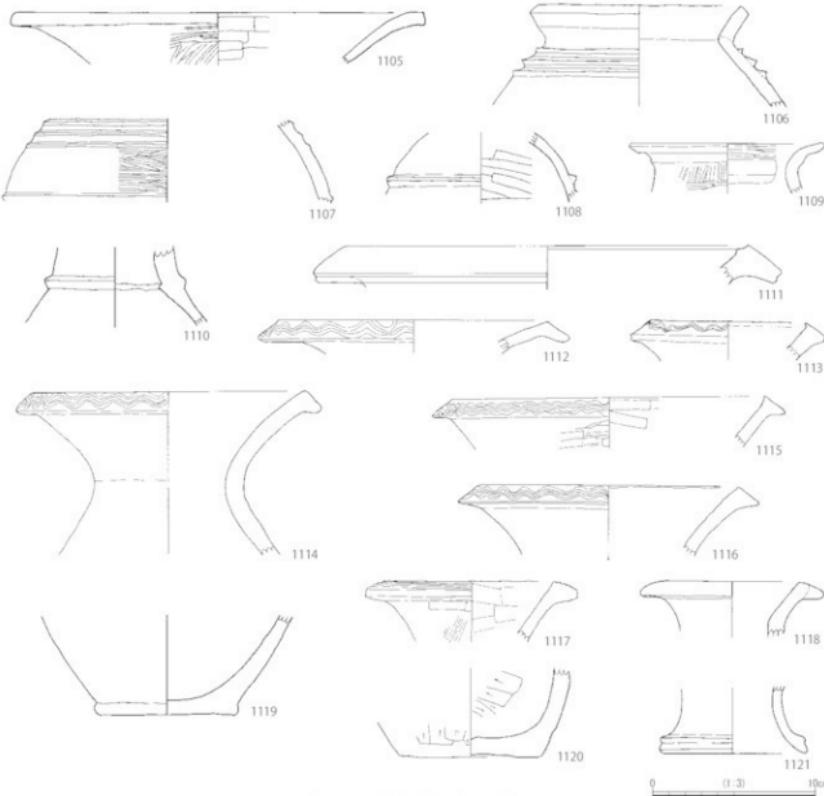
1089・1090は口縁径48cmと51.2cmの大型壺である。1089は口縁が「逆L」字状に外反する。1090は口縁が「く」の字状に外反し、直下に短い突帶を巡らす。1091～1101は中期後葉の壺形土器。1091～1100はいずれも口縁部が「く」の字状に外反するものである。1093・1094は口縁下位に3条の三角突帯を巡らす。1095は胴部上位に1条の三角突帯を巡らす。1101は底部で充実脚台である。1102～1103は後期の壺形土器。

1102・1103は、口縁部が直行気味に外反し、口縁下位に2条の三角突帯を巡らす。1104は充実脚台に近いものであるがわずかに上底を呈する。

1105～1120は壺形土器。1105は口縁径25cmで、口縁が大きく外反するもので、広口壺の形態を呈する。

1106は無頸壺である。口縁は短く外反し、肩部に3

条の三角突帯を巡らす。1107は口縁部を欠損するもので、肩部に3条の三角突帯を巡らす。1108は胴部が球形状に膨らみ、胴部に1条の突帯を巡らす。1109は頸部が直行し、口縁は緩やかに外反する。1110は頸部で、1条の三角突帯を巡らす。1111は口縁部径27.8cmを測る。口縁部はやや厚く「へ」の字状に外反する。口縁内面には小突起を巡らすものである。1112～1116は口縁部に柳描波状文を施すものである。1114は頸部がしまるるものである。1117は凹線文土器である。1118は器形は凹線文土器と同様であるが、口縁部に文様が施されないものである。1119・1120は壺形土器の底部である。いずれも平底である。1121は高环の脚部である。底部径9cmで裾部は、わずかに外開きとなる。底部の上位に三角突帯を巡らす。



第125図 弥生時代の土器（3）

(4) 遺物観察表

第35表 弥生時代土器観察表(1)

種類	番号	出土 地點	通稱 裏番号	更上 番号	分類	器種	部位	表面調整		色 調		胎 土				備 考		
								外面	内面	外面	内面	石英	長石	角閃	金青母	他		
121	1074	H-21	S15	515-8	弥生中期	無縫唇	完形	ミガキ、 ナデ	有褐色	茶褐色	○	○	+	+	-	竹管文, 外面深付着		
	1075	F-21	S16	18070	山口	便	口縁部	ナデ	ナデ	黑褐色	茶褐色	○	○	○	○	-	外面深付着	
122	1076	G-21	S16	17818	山口	便	口縁部	ナデ	暗褐色	茶褐色	○	○	+	-	-			
	1077	G-21	S16	17383	弥生後期	便	口縁部	ナデ	暗褐色	暗褐色	○	○	+	○	-	外周深付着		
	1078	G-21	S16	17390	山口	否	口縁部	ミガキ	ナデ	茶褐色	暗褐色	○	○	+	○	-		
	1079	G-21	S16	17384	山口	否	底部	ナデ	ナデ	褐色	褐色	○	○	+	○	-		
	1080	L-36	IIb	588	高橋	便	口縁部	ナデ	ナデ	灰黃褐色	に高い 黃褐色	○	○	+	+	-	附目	
	1081	L-36	IIb	1- 513	高橋	便	口縁部	ナデ	ナデ	に高い 黃褐色	に高い 黃褐色	○	○	+	○	-	附目	
				607- 608- 611- 752- 753- 844- 848														
123	1082	L-37	IIb	605- 750- 1020	高橋	便	口縁部	ナデ	ナデ	に高い 黃褐色	に高い 黃褐色	○	○	+	+	-		
	1083	L-37	IIb	12901	高橋	便	口縁部	ナデ	ナデ	褐色	に高い 黃褐色	○	○	+	○	-		
	1084	F-22	IIb	-	高橋	便	口縁部	ヘラナデ	ナデ	灰褐色	灰褐色	○	○	○	-	-		
	1085	I-23	IIb	12901	高橋	便	口縁部	ミガキ	ナデ	茶褐色	茶褐色	○	○	+	-	-		
	1086	H-24	IIb	11453	高橋	便	口縁部	ミガキ	ナデ	茶褐色	茶褐色	○	○	+	-	-		
	1087	H-23	IIb	9389- 9782- 9783	吉ヶ崎	便	口縁部	ナデ	ナデ	ナデ, 指痕直近	茶褐色	に高い 褐色	○	○	+	○	○	輝石, 刻目, 三角突帯
	1088	G-22- H-21	IIb	1973- 14384	吉ヶ崎	便	口縁部 ~脚部	ナデ	ナデ	に高い 黃褐色	に高い 黃褐色	○	○	+	-	○	輝石, 口縁部直下に三 角突帯, 脚部に二条三 角突帯	
	1089	G-22	IIb	2440	山口 (大型)	便	口縁部	ナデ	ナデ	に高い 褐色	に高い 褐色	○	○	+	○	-		
	1090	G-22	IIb	11068	山口 (大型)	便	口縁部	ナデ	ナデ	に高い 褐色	に高い 褐色	○	○	+	○	-	口縁部直下に三角突 帯	
	1091	F-22	IIb	17830	山口	便	口縁部	ナデ	ナデ	に高い 褐色	に高い 黃褐色	○	○	+	+	-		
	1092	H-23	IIb	9396	山口	便	口縁部	ナデ	ナデ	茶褐色	茶褐色	○	○	+	○	-		
	1093	F-13	IIb	13038	山口	便	口縁部	ナデ	ナデ	茶褐色	茶褐色	○	○	○	○	-	三角突帯	
	1094	F-13	IIb	13594	山口	便	口縁部	ナデ	ナデ	茶褐色	茶褐色	○	○	○	○	-	三角突帯, 外面深付着	
	1095	F-22	IIb	12975	山口	便	口縁部	ナデ	ナデ	褐色	に高い 褐色	○	○	+	○	-	三角突帯	
	1096	G-21	IIb	2459	山口	便	口縁部	ナデ	ナデ	茶褐色	茶褐色	○	○	+	○	-		
124	1097	F-20	IIb	12704	山口	便	口縁部	ナデ	ナデ	茶褐色	茶褐色	○	○	+	○	-		
	1098	F-20	IIb	14731	山口	便	口縁部	ナデ	ナデ	茶褐色	茶褐色	○	○	○	○	-	三角突帯	
	1099	F-21	IIb	-	山口	便	口縁部	ナデ	ナデ	茶褐色	茶褐色	○	○	+	○	-		
	1100	F-13	IIb	13065	山口	便	口縁部	ナデ	ナデ	茶褐色	茶褐色	○	○	○	○	-		
	1101	G-21	IIb	2461	山口	便	底部	ナデ	ナデ	に高い 褐色	茶褐色	○	○	+	○	-		
	1102	F-13	IIb	13294- 13922	萬村	便	口縁部	ナデ	ナデ	褐色	に高い 褐色	○	○	+	○	-	三角突帯	
	1103	F-21	IIb	11517	萬村	便	口縁部	ナデ	ナデ	ケズリ、 ナデ	茶褐色	○	○	+	+	-	三角突帯	
	1104	F-13	IIb	13010	山口	便	脚部~ 底部	ナデ	ナデ	赤褐色	褐色	○	○	+	○	-		
	1105	H-26	IIb	8920	山口	広口壺	口縁部	ミガキ	ナデ	に高い 褐色	に高い 黃褐色	○	○	+	+	-		
	1106	F-22	IIb	12711	山口	否	口縁部 ~脚部	ナデ	ナデ	に高い 褐色	に高い 褐色	○	○	+	+	-	三角突帯	
	1107	F-15	IIb	15235	山口	否	脚部	ミガキ	脚部	明赤褐色	明黄褐色	○	○	+	○	○	輝石, 三角突帯	
	1108	E-13	IIb	13206	山口	否	脚部	ナデ	ナデ	茶褐色	茶褐色	○	○	+	○	-	黄褐	
	1109	H-17	P78	-	山口	否	脚部	ナデ	ナデ	茶褐色	に高い 褐色	○	○	+	+	-	輝石	
	1110	F-14	IIb	13153	山口	否	脚部	ミガキ	ナデ	ナデ	茶褐色	茶褐色	○	○	+	○	-	三角突帯
	1111	G-21	IIb	14467	山口	否	口縁部	ミガキ	ナデ	茶褐色	茶褐色	○	○	+	○	-		
	1112	F-13	IIb	13066- 13770	弥生中期	否	口縁部	ナデ	ナデ	褐色	褐色	○	○	+	○	-	波状文	
	1113	E-13	IIb	13220	弥生中期	否	口縁部	ナデ	ナデ	褐色	褐色	○	○	+	○	-	波状文	
	1114	F-13 -14	IIb	13109- 13471- 13622	弥生中期	否	口縁部 ~脚部	ナデ	ナデ	褐色	褐色	○	○	+	○	-	波状文	
	1115	E-14	IIb	13247	弥生中期	否	口縁部	ミガキ	ナデ	茶褐色	茶褐色	○	○	+	○	-	波状文	

第36表 弥生時代土器観察表(2)

図号 番号	出土 地名	遺構 番号	測上 番号	分類	器種	部位	器形調整		色 調		施 土				備考
							外面	内面	外面	内面	石英	長石	角閃	金剛石	
125	1116	F-14	II b	13667	弥生中期	壺	口縁部	ナデ	明褐色	○	○	-	○	-	波状文
	1117	G-13	II b	3584	弥生中期	壺	口縁部	ミガキ	ナデ	明黄色	○	○	-	○	凹線文
	1118	F-15	II b	15042	弥生中期	壺	口縁部	ナデ	橙色	橙色	○	○	-	○	-
	1119	G-22	II b	2185	弥生中期	壺	胴部～ 底部	ナデ	褐色	褐色	○	○	-	-	-
	1120	F-14	II b	13115	弥生中期	壺	底部	ナデ, ケズリ	ナデ	黃褐色	○	○	-	-	-
	1121	F-19	II b	11485	弥生中期	高杯	底部	ナデ, しわり	ナデ	明褐色	橙色	○	○	-	-

(5) 小結

弥生時代では、堅穴住居跡3軒が検出されている。しかしながら、住居内からは遺物が少ない。3軒共に住居内埋土の上位に約2000年前の開間岳起源の暗紫コラが堆積しており、それ以前の住居跡であることは確実である。また、5号住居内の炭化木による放射性炭素年代測定では2115±20年B.P.の年代値がてており、弥生時代中期の礎跡に入るものと思われる。5号住居から出土した無頭甌は竹管文が施されるものであるが、その出自は不明であるが、須久式土器の広口甌の底部から胴部までの部分と類似しており鹿児島県内の山ノ口式の時期と考えられよう。大隅地方で弥生中期の集落遺跡を見てみると、鹿屋バイパス関係では、王子遺跡(鹿屋市王子町)で、堅穴住居跡27軒、掘立柱建物跡14棟、土坑4基等があり、遺物も矢羽根透かしを有する高环や円線文土器等瀬戸内との関連のあるものや鉄製品等が出土している。中ノ丸遺跡(鹿屋市大浦町)では堅穴住居跡3軒、円形周溝2基。中ノ原遺跡(鹿屋市大浦町)では堅穴住居跡3軒。前畠遺跡(鹿屋市郷之原町)では堅穴住居跡3軒、掘立柱建物跡8棟、円形周溝1基。また、東九州自動車道関係では十三塚遺跡(鹿屋市串良町)で堅穴住居跡8軒、円形周溝1基。田原迫ノ上遺跡(鹿屋市串良町)で堅穴住居跡31軒、掘立柱建物跡40棟、円形周溝11基、方形周溝墓1基。牧山遺跡(鹿屋市串良町)で堅穴住居跡4軒、永吉天神段遺跡(曾於郡大崎町)で堅穴住居跡14軒、掘立柱建物跡20棟、円形周溝3基、円形周溝墓1基、土坑墓24基。荒園遺跡(曾於郡大崎町)で堅穴住居跡5軒等が調査されている。大崎町下堀遺跡でも堅穴住居跡5軒が調査されている。

町田堀遺跡での土器については、前期・中期・後期の土器が出土している。

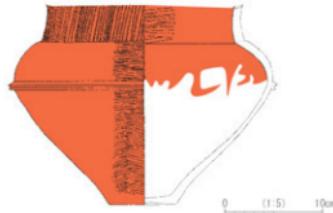
前期の遺物は主に調査区4からの出土で、出土量も7点と少ない。口縁部が短く「逆L字」状に外反し刻み目を有するものと刻み目のないものがある。高橋式に比定できよう。

中期では、1087と1088は口縁部が「逆L字」状に外反し口縁部直下及び胴部に三角突帯を巡らすもので、中期中葉の吉ヶ崎式に比定できよう。1089～1100の斐形土

器は口縁部が「く」字状に外反するもので山ノ口式土器で中期後葉と考えられる。1102と1103は口縁部の外反が弱くなるもので後期の高付式と思われる。1105～1121の壺形土器及び高环は中期後葉の山ノ口式土器と思われるが、柳描波状文を施すものは後期に入る可能性がある。1117の凹線文土器は瀬戸内との関係を窺わせるものである。



町田堀跡 5号堅穴住居跡出土土器



尾ヶ原跡(金峰町) 須久式土器

第126図 5号堅穴住居跡出土土器・須久式土器比較

参考文献

- 鹿児島県教育委員会 1985 「王子遺跡」鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(34)
- 鹿児島県教育委員会 1989 「概要編・櫻木田下遺跡・中ノ丸遺跡・川ノ上遺跡・中ノ原遺跡」鹿児島県埋蔵文化財調査調査報告書(48)
- 鹿児島県教育委員会 1990 「前畠遺跡」鹿児島県埋蔵文化財調査報告書(52)
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター 2011 「石縫遺跡・十三塚遺跡」鹿児島県立埋蔵文化財調査報告書(164)

公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書（7）
東九州自動車道建設（志布志IC～鹿屋串良JCT）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

町田堀遺跡

第1分冊

発行年月 2016年3月

編集・発行 鹿児島県教育委員会

公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター
〒899-4318 鹿児島県霧島市国分上野原綱文の森2番1号
TEL 0995-70-0574 FAX 0995-70-0576

印 刷 株式会社 松井ビ・テ・オ・印刷
〒321-0904 栃木県宇都宮市陽東5-9-21
TEL 028-662-2511 FAX 028-662-4278

